
不可侵区域

初瀬こより

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不可侵区域

【NZコード】

N4031P

【作者名】

初瀬こじり

【あらすじ】

祖父の実家である資産家一族の屋敷で暮らすことになった中学三年生の綾峰結恵。一族の絶対である本家人間として認識されたことになった彼女だが、広大な屋敷や一族の人間たちには結恵の想像しえない秘密が隠されていた。

引きこもり系伝奇ファンタジー。

序章（前書き）

この作品は少し前に書いたもので今以上に未熟さが際立ちますが、よろしければおつきあい下さい。内容は誤字脱字以外以前掲載していたものと変わりません。

その日、村はその年一番の騒ぎになつた。

「草次郎坊ちゃんが帰つてきたつてよ！」

「天狗様に攫われたつて聞いていたが、無事だつたのか？」

「いやーよかつたじゃねえか」

「でも一体今までどこにいたんだろうなあ？」

裕福な豪商の次男として生まれた彼は幼さゆえにまだ自分の身に何が起きたのか把握しきれなまま、両親に抱きしめられていた。ただ、確信するその事だけは伝えなくてはならないと本能的にわかつた。

「……父様、母様」

「ああ良かつた、良かつた」

「本当に。さあ、しばらくはゆっくり休みなさい」

「聞いて。父様、母様」

彼が少し語気を強めると、両親は喜びの声を静めて彼を見た。

「どうしたの？」

「どこか具合でも悪いのか？」

彼は生れてこの方を見せたこともないような大人びた表情で静かに厳かに告げた。

「明後日、戦が始まる」

「そ、草次郎？ 何を言つているんだ？」

「だから、村の人達も一緒に逃げるんだ。そうしないと皆、火に呑まれてしまう」

「ふ、不吉なことを言つんじゃない！」

父に叱られても彼は言葉を止めなかつた。

「早く逃げるんだ！ 隣国の大殿様はこの辺りの村を焼く気なんだ！」
彼の強い聲音に両親は不安げに顔を見合させた。

そして明後日。

彼の言葉通り、隣国との戦は唐突に始まり、国境にある村は丸ごと焼かれた。

天狗に攫われ異界から帰ってきた子供は不思議を見る術を持って帰ってきたのだと、誰もが知った。

始まり

学校の校門など比べ物にならない精巧な細工の施された巨大な門を車に乗つたままぐぐり、その地へ足を踏み入れた。

車窓からどこまでも続く敷地内の片隅に、オレンジ色の金木犀が見える。それからしばらく幾つもの豪邸と言つていい家を超えて緩い坂道を上ればイタリアアルネサンス風の、今まで見てきた豪邸もかすむほどの広大な洋館の前へと辿り着く。

車は石畳のポーチの前で止まり、運転手が扉を開けてくれる。車を降り、その西洋の宮殿のような洋館を見上げた。これは既に数度目の経験なのだがたつた一度では到底慣れない浮世離れした光景だ。

「……いつ拝見しても凄いお屋敷です」

思わずそんな感嘆の声を上げると、隣に立った萌黄色の和服を纏つた上品な老婦人、血の繋がつた実の大叔母は微笑んだ。

「気に入つて頂けるといいのだけれど。ここが貴女のおじい様も過ごした綾峰家。今日からは貴女のお家よ」

「はい」

到底信じられない。緊張して手が汗ばんでいる。

「さあ、結恵さんのお部屋に案内するわ。遠いところをお疲れでしょう」

「きよ、恐縮です」

慌てて頭を下げると大叔母が戸惑うように眉を下げる。

「まあ。そんな他人行儀はしないでちょうどいい。貴女は私にとっても実の孫同然なのだから」

「ありがとうございます」

そつは言つてもこの緊張はそう簡単には納まらない。自分で望んだこととは言え、ここは日本どころか世界屈指の巨大複合企業、チ

トセグループの経営者一族の住む家なのだから。

綾峰結恵、

あやみねゆえ
中学二年生。この十五年間、そんな華麗なる一族とは

全く縁なく生きてきた。

そもそも自分がそのチトセグループと血縁があるということすら知らなかつた。半年前、祖父が亡くなるまでは 。

父にその手紙を見せられたのは春先の日曜日のことだつた。

亡くなつた祖父の初七日を終えた後もしばらくは弔問客だ、税理士だ、友人だと人の出入りがあつて居心地の悪かつた家がようやく元の静けさを取り戻し、生まれてから十五年間一緒に暮らしてきた家族の喪失感が浮き彫りになつた頃。

私はあれほどまでに確固たる自身という者を確立していた人を知らない。知識が豊富で頭の回転も早く自信家で、家族思いで時々子供っぽいところもあつた最愛の祖父。何もかも知つていただろうに、私の屁理屈を受け入れてくれた懐の深いおじいちゃん。

自分で決めた事は、貫き通しなさい。

そう言われて育つた。

祖母は物心つく前に他界し、祖父と両親、そして私の四人家族だつた。

祖父は厳しさと柔軟さを兼ね備えた人で、私にとつては怖いおじいちゃんであると同時に頼りがいのある人だつた。その祖父も年を重ねることに見るからに体が弱つていき、身の周りの整理を始めてそれから一年後、あらかた身辺整理が終わつたところで老衰で亡くなつた。

実に祖父らしい、潔い最期だつたと多くの人達に言われた。

その祖父は自分が死んだら開けるようにと遺産に関するものとはまた別に手紙を遺していた。そこには祖母と駆け落ち同然で実家を出てきて以来、一度も連絡を取つていないという祖父の実家に関する

ることなどが書かれていた。

祖父は自分の出自に関する一切を、生前一度たりとも実の子供にすら話さなかつた。墓まで持つて行く気だらうと、父は常々祖父の頑固な性質を笑つていたが、まさか祖父の最後の最後にその復讐に遭うとは思いもしなかつただらう。

手紙は私、父、母。それぞれ個人にあてた生前の感謝などを記した手紙の他にもう一通、家族皆へ向けたものがあつた。

『我が愚息、愛嫁、愛孫へ。

早速だがこの手紙の内容を要約すると、これは私が一度として口にすることはなかつた私が出てきた家について書かれている。私の実家は綾峰家の本家にあたる家だ。どの綾峰かと言われば、旧千歳財閥、現在のチトセグループ経営者一族だ。私はその家の長男として生まれたが、妻と結婚するため家を出た。

両親、親族は私達の結婚に反対したが私の妹だけは唯一陰ながら私の味方をしてくれ、家を出る際にも随分世話になつた。四十年ほど連絡はとらずにいたが、両親の死をきっかけにまた細々とだが交流を持つようになつた。だがお前たちはそのことを知らないだらう。それ故私が死んだことを妹は知らないと思つ。

どうか妹に私が死んだことを伝えてやつてほしい。そしてその重責を負わせたことを幾重にも詫びていたと伝えてほしい。妹の名は綾峰桂子。現在の綾峰家当主だ。綾峰義将の身内と言えば話はすぐにつきあつた。

通る。連絡先は

『

それが祖父の遺した手紙だつた。読み終わつた父の顔を見ると、父は疲れた風に肩を落とした。

「嫌だなあ」

そしてぼそり、と呟いた。

「何で親父、そんな面倒くさそうな家に生まれたんだ……嫌だなあ。肩こりそうなのは会社でたくさんだつて言うのに

「とても実の親の実家に対する意見とは思えない』『意見で』私の軽口に父は肩を竦める。

「だつて結婚。お父さんはこの間人事部長になつたばかりで一番気苦労が多いんだぞ？ この合併吸収の『時世』に

父は一年前の人事異動で見事それなりに大きな企業の人事部長に就任した。そしてそれから数ヶ月後、突如別企業とお父さんの会社は合併した。それによつてとにかく人事部はより一層面倒になつたらしい。

ちなみに父の勤め先はチトセグループとは関係ない。日本の企業の六割はチトセグループ関連と言われる中、偶然にしてはうまく出来すぎている気がするから、祖父がうまくチトセグループを切り離させたのかもしない。

「あなた。子供に仕事の愚痴をこぼすのはやめてちょうどいい」

母にたしなめられ、父はスマンスマンと言つて話を切り替える。

「とにかくそんなご立派な家の人のお迎えするなんて、接待、ゴルフ以上に肩がこるじゃないか。お父さんは家でくらいは猫を外していたいんだよ」

「父親として威儀もへつたくれもない言い分だね、お父さん。娘は悲しいよ」

そんなふざけ半分、真剣半分のやり取りをした後、父は祖父の遺言を忠実に守つた。

そして、チトセグループ元会長の妻にして綾峰本家当主は黒塗りの高級外車でごく一般的な我が家にやつてきた。

黒服の屈強な男二名を両脇に従え、黒紋付きを纏つた穏やかながらも凛とした雰囲気をたたえた老婦人。私にとつて大姉母にあたる人物との初めての対面だった。

「綾峰義将の妹、綾峰桂子と申します」

深々と頭を下げる初対面の血縁者に父は恐縮しきり、母は粗相のないようにと緊張しきり、私は可能な限り『大人受けのいい子供』を演じた。仮間に通し、線香を上げ、大人の会話がひとしきり交わ

されるのを黙つて見届けた後、大叔母は私を見て微笑んだ。

「兄から貴女の事はよく聞かされました。こつしてお会いできて嬉しいわ。どうぞよろしくお願ひ致しますね、結恵さん」

そうして差し延ばされた手を握り、にっこりと笑つた。

「こつ、こちらこそお会いできて光榮です。じ多忙なことは重々承知しておりますが、お時間があればぜひ祖父の若い頃のお話など聞かせて頂きたいです」

そこから、私の家と綾峰家の繫がりは確かなものとなつていく。

祖父から私の事は多く聞いていたという大叔母。

本当にその通りで、余計なことを話す手間が大きく省けた。

それでも私に「実の祖母だと思つてくれたら嬉しい」と言つてくれた。私を否定しないでくれた。

綾峰という家との繫がりが嬉しかつた。

けれどそれ以上に、この人の存在は胸が痛むほど嬉しかつた。

それからは既に隠居しているという大叔母から我が家に足を運んでくれたり、外でお茶をしたり、あるいは綾峰邸に招かれたりもするようになつた。

密かに、静かに、私の胸の内にあつた小さな希望がより確固たる形を成していくた。

これを希望と呼んでいいのかはわからなかつたけれど。希望と呼ぶにはあまりに留い願いだつたけれど。

それから更にしばらく後、父は海外支社への辞令を言い渡された。

「できれば結恵も連れて行きたいんだけどね」

「一生懸命受験勉強をしていたのはわかっているし、やつぱり一人日本に残すのは心配だし……私が残つたほうがいいわね」

難しい顔をして話し合つ両親に、私は笑つて言った。

「私はもう大丈夫だよ。だからお母さんはお父さんに着いて行つてあげてよ。お父さん一人じゃ私も心配で心配で。お父さんの家事才

ンチは天才レベルだからね」

両親が何を心配しているのか、そんなことはよくわかつていたからこそ笑顔で送り出そうと決めていた。そしてこれを機に、私は自分で生きる力を身につけようと思つた。

私なりに生き抜く術を身につけようと決めたんだ。

「では叔母さん、結恵が御厄介になります」

「ふつつかな娘ではありますが何卒よろしくお願ひ致します」

深々と頭を下げる両親に、大叔母は穏やかに笑つた。

「何を仰るの。結恵さんは私にとつても孫同然。一緒に暮らせるなんてそんな嬉しいことはないわ」

両親が海外へ行く日から、私は綾峰本家の世話になることになつた。

「これからお世話になります」

大叔母はつい最近初めて会つたばかりの私を善意で受け入れてくれた。

生まれてからずつと、この地位にいた人。

きつと下心を持つて近づいてくる人間も少なくなかつたろうに。本当に、祖父みたいに懐の深い人。自分が嫌になるくらいに。だけどだからこそ、私は祖父にも大叔母にも憧れるんだ。私にはない強さを持った人達に。

「結恵さん？」

大叔母の声に、意識は近い過去から今へと呼び戻される。

「どうかなさつて？」

「い、いえ。今日から本当に私がこんなに立派なお家で暮らすのだと思うと不思議な感じがして……」

そう言つて苦笑すると、大叔母は安心させるように微笑んでくれた。

「すぐに慣れますよ」

運転手が大きな扉の隣にあるベルを押すと、内側から扉が開かれ、

大勢の使用人らしい人達に出迎えられた。

「お帰りなさいませ、奥様。お嬢様」

深々と頭を下げる人達。

呼ばれ慣れない『お嬢様』という呼称。

「ただいま戻りました。後程改めて紹介致しますが、こちらが兄の孫の結恵さんです」

毅然とした女主人といった風情で大叔母は出迎えにあたつた人達に私を紹介した。

「……綾峰、結恵です」

使用人達の向こうに見える大きな吹き抜けになつた階段。

赤い絨毯の敷かれた床。

天井高くから吊るされたシャンデリア。

高い天井に広い廊下。

……ここに私の望んだものがある。

「これからよろしくお願ひします」

緊張を胸の奥に押し込み、軽く一礼した。

今日からここが、私の家だ。

これが私の欲しいものへの一步だ。

綾峰家の子供たち

綾峰家敷地内の緩い丘陵は幼い頃からの彼らの遊び場だった。

「ねえねえ。桂子様のところに義将様の孫が来るのって今日でしょ？ もう着いたかな。ねえ鷹久は何か聞いてない？」

木陰になつた芝生の上で、柔らかな髪を耳の後ろでそれぞれに結つた少女、四葉は緩いクセ毛の少年を見上げた。

「四葉は最近そればつかだな。けど本来の本家直系かあ。どんな子？ 倣会つしたことないんだよな。な、鷹櫻」

「ああ」

共に落ち着いた雰囲気を纏いながら、穏やかと冷ややかに分かれること一人は顎き合づ。

「お前らだけじゃねえよ。俺らもだつつの。親父らがうつせーんだもん。そもそも本家屋敷は俺らじや簡単に入れねーし。二ノ峰家のお前らですら会えないってどんだけだよ」

小柄な少年、律が苛々とした調子で毒づく。

「そんなに苛つくなよ。相変わらずカルシウム不足かあ？」

その横で意地悪げに笑うのは律の双子の弟、令だ。

「おめーは何でそんなに呑氣なんだよ。少しほ軽んじられてるつてことに憤れ！ 兄として恥ずかしいぜ」

そうして全く見た目も性格も違う双子の兄弟は木陰で暴れだす。それを見ていた色素の薄い髪を背に流した少女、薰子は本から顔を上げず、呆れたように言つ。

「近いうちにお披露目があるわよ」

それを聞いて四葉は勢いよく薰子を見た。

「本当？ 薫子ちゃん、何でそんなこと知つてるの？ あたし達は聞いてないよ。ね、律令」

「ひとまとめで呼ぶな！」

律は心底不快げに怒鳴る。

「そりそり。律なんかと一緒にされちゃ不本意極まりない」

「今はケラケラと笑う。

「んだと、オイ。てめ、お兄様を敬えつつつてんだろ！？」

「いやー俺よりちっこい奴をお兄様つて言つてもなあ」「そうしてまた双子は暴れ出す。

「つるさいわね」

薰子は眉を顰め、そんな様子を眺めながら鷹久は言った。
「いつになるかはともかく、近いうちに俺らにもお披露目があるさ」「何で鷹久も知ってるの？」

四葉にシャツをつかまれて鷹久は苦笑する。

「例の『結恵様』つていうのは俺らと同一年くらいらしいから、仲良くしなさいってなお達しがあると思つよ」

「『結恵様』つていくつなの？」

「何だよ、全然情報まわつてねえのな」

不満げに律が声を上げた。

「大人たちの噂じや薰子と鷹槻とタメらしいぜ。来年高校だと」「じゃああたしの後輩だあ」

四葉がにこにこと嬉しそうな声を上げる。

それを見て今は軽く笑う。

「どう見ても四葉のが後輩だとは思つけどなあ

「確かに」

律の視線の先の四葉はどう見ても小学生。

小柄な身長と童顔、幼い物言い。何とかさば読んでも中学生だ。
「うーつ。確かにあたしは背が低いよー。でも律にだけは言われる筋合ひないもんつ」

「んだとおつ！？」

律が立ち上がり、四葉と睨みあう。

その光景はどう見ても小学生のケンカだ。つまりこうる彼、律も四葉同様幼い外見をもつ。

綾峰律と今は二卵生双生児で今年中学一年。だが律は小学生時代

から未だ成長期に入れず、声変わりもまだ済ませていない。その上、女顔と言つて通りそうな容貌から小学生に見られるることは数知れず。それに対し、双子の弟の令は背も高く、髪を染めたりしているからか高校生に見られることが多いから余計に律は気に入らない。

「背が低い、子供、という言葉は彼にとつては地雷だ。

「万年小学生に言われたかねえんだよ」

「つるさいなあ、人のこと言えるの？」

令はすでに飽きたらしく、他の三人へと視線を向けた。

「あつちの一人はうるさすぎるくらいだつてのに、お前らは間逆に落ち着き払つてるよなあ」

鷹久は持参のペットボトルから口を離して令を見た。

「世の中なるようにしかならないからな。世の流れに逆らわず生きるのが楽に生きるコツさ」

「相変わらずじじくせえなー」

「お前らといふと否応なく大人にならざるをえなかつたんだよ。な、弟よ」

鷹久に背中を叩かれ、ほんやりと本家屋敷　或いはそれよりずっと奥を見ていた鷹櫻が振り返る。

「痛え」

一つ年上の兄に、鷹櫻は文句を込めた眼差しを送るが当の鷹久は悪氣なく笑つている。

「そりや悪かつた。それより『結恵様』は最低でも三年は本家屋敷にいるらしい。その間の世話役はお前と薰子なんだから、ちゃんと仲良くするんだぞ」

「その『結恵様』も嫌だろうな」

いつの間にかケン力を終えた律がぼそりと呟く。

「何が嫌なのよ？律」

聞き捨てならぬとばかりに薰子が冷やかな視線を向ける、律はつと歯を見せて笑つた。

「老け顔一人に挟まれちゃ、疲れるだろうよつてハナシ」

老け顔といつ単語に薰子の細い眉がつり上がる。

「……それは童顔の僻みかしら？」

「老け顔を僻みやしねえさ」

途端、薰子が読んでいた本を律の顔めがけて放り投げる。
「老け顔じやなくて、大人っぽいとおっしゃい！」

そうして顔を抑える律を仁王立ちになつて見下ろした。

薰子は今年中学三年だが、年齢より落ち着いた物腰と雰囲気、端麗な容姿が実年齢より三つ、四つ上に見せる。四葉、律とは逆に何かと年長の扱いをされるのが彼女のコンプレックスだった。

「鷹櫻！ あなたも何か言いなさいな」

「……他人を貶めてもお前の背が伸びるわけじやないんだからやめておけ。律」

「なあつ！－」

綾峰鷹櫻は薰子と並んで歩けばそれこそ中学生には見えない大人びた整つた容姿と冷たげで落ち着いた雰囲気の持ち主だ。そしてその冷たげな雰囲気に違わず、その口から飛び出す言葉、特に害意を向けてきた相手に返すものは氷のように冷やかなものが多い。

「あーあー鷹櫻。たとえ本当のことでも、もつ少し言い方つて物があるだろ。ごめんな、律」

「謝つてんのかソレ！？」

鷹久は鷹櫻の兄で、この場では最年長の高校一年生。穏やかでいかにも良家の子息という立ち居振る舞いだが、その穏やかな言葉の端々にはどうも刺と毒がたっぷりある。

この場の全員がこの綾峰家敷地内に暮らす、綾峰姓を名乗るチトセグループ経営者一族の一員だ。

「あ！ 皆様、お揃いでいらしたんですね！」

各々に過ごす木陰に、本家屋敷の使用人らしい若い男が息を上げて駆け寄ってくる。この様子だと随分走り回っていたのだろう。

「どうかしたの？」

薰子の言葉に使用人は背筋を伸ばし、六人の顔をゆっくりと見回

した。

「桂子様からのお言葉です。明日十一時、本家屋敷前庭にて義将様のお孫様を皆様に『ご紹介したいとのことです。出来る限り『ご参加頂く』ようにと申し付かつて参りました』

「なら桂子様に伝えてくれる?』『喜んで全員参加させて頂きます』つて

真っ先に人畜無害そうな笑みで答えたのは鷹久だ。

「え、はい。えーと皆様も……『ご参加、で?』

使用人は勝手に答えられたようにしか見えない他の五人を見回す。

五人はお互いの顔を見やつてから頷いた。

「二ノ峰家戸主次男、鷹楓、参加させて頂く」

「四ノ峰家戸主長女、四葉。参加します」

「四ノ峰分家長男、律。参加する」

「一四ノ峰分家次男、令も参加で」

「五ノ峰家戸主長女、薰子。参加させて頂く旨、桂子様に宜しくお伝えを」

「はい。では皆様ご参加で。桂子様もお嬢様もお喜びになられると存じます。皆様のお越し、本家使用人一同お待ちいたしております。では」

使用人は安堵の表情を浮かべて緩やかな丘陵になつた芝生から小道へと戻つていく。

それが見えなくなつてから、鷹久が軽く笑みを零す。

「思つたより早いお披露目だな」

「あたし達を探したーつてことは、メインは大人じゃなくてあたし達つてことだよね?』

「それぞれ家にも連絡が行つてゐるだろ?が、一応各自に確認を取つたあたりを見るとそうだう?』

鷹楓は本家屋敷を見ながら呟く。

「明日十一時つてことは昼食付きか。やりいつ! 本家のメシは美味しいんだよな」

「いやしいわよ、律。食事でなく、あくまでお披露目がメインなんだから」

「そーだぞ、バカ兄貴。健全な青少年として食事も大事だが、かわいい女の子を見るのが先だろ」

「てめつ……今バカつて」

「仲良くなれるかな?」

再び不穏なものが流れ始めたところを四葉の高めの声が遮った。しばらくの間、四葉以外の五人に妙に静かな空気が流れる。その視線は全て四葉へと向けられている。

最初にその沈黙を破ったのは鷹機だった。

「……向こう次第だろ。『様付け』を当然と思つようなら四葉の言うような仲良くは無理だろうし、向こうが四葉みたいに望むんならなれる可能性はある」

「そつかあ。『結恵様』はどーなんだろ? あたしは仲良くなりたいなあ。せつかく年の近い女の子なんだもん」

「うえ。様付け当然なんて高慢な女嫌だ」

心底嫌そうな顔で律が息を吐く。

「つーか四葉。綾峰暮らしが十六年でそんなすぐ分かるような質問しちゃマズイだろー」

けられると令が笑う。

「うるさいな。令は年下のくせにナマイキつ。枯れたサヤインゲンみたいな髪の色しちやつて!…」

「何だそれ!? 枯れたサヤインゲンってどんなんだよ」

「あーそれはきっと、初等部時代に理科の授業でサヤインゲンの栽培をしたはいいが、クラスで一人だけ枯らしてしまった四葉の悲しい経験がものを言つてるんだよ。あの生命途絶えましたっていう色は、確かに今の令の色抜いたり染めたりして痛みまくつた髪によく似てるな」

どちらに対してもフォローともつかない言葉を鷹久がさわやかな笑顔で言つ。

唸然と目を丸くして固まる一人に、律が吹き出す。

「枯れサヤインゲン…つ。アハハハハ！！ だつせー、カツコつけ
てそんな妙な色に頭染めるから」

「妙じゃねえだろー！？ この金とアッシュショープラウンとの具合がい
いんだろうが」

「何だ、それ色入れる時に失敗したんじゃなかつたのか。わざとだ
つたのか」

鷹櫻の本氣の一言に、今度こそ律が地面を叩いて大笑いする。

「だよな、そう思つよな？ あはははははは」

「律つ。てめえ笑いすぎだつたの…！」

ケンカを再発させる兄弟の隣で、話題に飽きた四葉が薰子の腕を
引く。

「ねえ薰子ちゃん。あたしあ腹すいたし、そろそろ帰らない？ 風
も冷たくなつてきたし」

「そうね。じゃあそろそろ帰りましょつか？」

「じゃあ俺らも。鷹櫻？」

「……え？」

遠くを見ていた鷹櫻が一瞬驚いたような声をあげて顔を上げる。

「俺ら帰るけど、お前はまだここにいる？」

「いや……俺も帰る」

鷹櫻も立ち上がりジーンズについた芝生を掃う。

「おーいそこの双子。俺らは帰るぞ？」

「だめだねえ、全然聞いてないよー。ああなつちやうと手がつけら
れないから先帰ろつ」

彼らとは従兄弟同士の四葉がそう言つのならそつなのだろう。

鷹久は声をかけるのをやめ、小道へと降りて行く。

「呼ばれたのつて私達だけかしら？ 同世代とこいつ」とで

薰子が零すように言つ。

「どうかな。子供は俺達以外にもいるから」

「俺達だけだつたとしても、桂子ばあさんや他の連中の判断次第じ

やこれから正式に一族の前でお披露目があるだらつ。それから

「それから、最奥に」

鷹櫻の言葉をためらいなく四葉が続ける。

「逃亡者の血を、最奥に」

先程までの幼い言動も雰囲気も消え失せ、不思議に静かな聲音で告げる。

湿つた重苦しい沈黙が広がる。

「義将様はどこまでお話しになつたのかしら?」

「さあ。けど知つてこの家に来させる親も、来る子供も相当醉狂だとは思うね」

鷹久が苦笑して答える。その田がどいか諦めを含んだ色に染まる。

「俺は早く、ここを出たいな」

その弦きに答える者はいない。

けれど、誰もが胸の内で思うのは同じこと。

「ここは淀んでる。ずっと昔から変わらずに」

「百年先も、八百年先も、千年先もきっとじずっと変わらない

……」

鷹櫻と四葉の抑揚のない声が、空に吸い込まれた。

明治時代の終わりに建てられたという綾峰本家屋敷は一階建て。それに地下があるそうだが、そこは使用人が使う場所なので出来るだけ行かないようにと言われた。そんな話を聞きながらステンドグラスが見下ろす吹き抜け階段を昇り、一階の一室の前で大叔母は立ち止まつた。

「今日からここが結恵さんのお部屋です。何か不都合があつたらいつでも言いにいらつしゃい。私の部屋はこの階の南西にありますから。内線もありますから、詳しい事は三波さんに聞いて頂戴。詳しい事はまた午後のお茶の時にでもお話ししましょう」

「はいっ」

「では三波さん、結恵さんのことをよろしくお願ひしますね」

「承知致しました。奥様」

大叔母様の足音が遠ざかっていくのを聞いてから部屋の扉が閉じられる。

バルコニー付きの部屋は二十畳ほど。

まず目についたのはクイーンサイズのベッド。それとは別に小花柄の長椅子。カーテンも同じ柄。木製のデスクと椅子。本棚、ガラス扉のチェスト、クローゼットなどなど。アイボリーカラーの壁には水彩画らしい風景画が飾られている。ベッドの横のサイドテーブルには柔らかな色調のランプ。

（眩暈がしそう……）

この部屋だけで、今まで住んでいた家のリビングサイズはある。

「お嬢様？」

「……」

「結恵様？」

「はっ、はいっ」

私のことかと慌てて振り向くと、二十代後半かそれくらいの彼女はにっこりと微笑んだ。

「私、みなみしよう三波祥子と申します。今日よりお嬢様付きの使用者となりましたので、何なりとお申し付け下さい」

「私付き？」

「はい」

三波さんは笑顔で小さく頷いた。

（……今度は貴族になつた気分だ）

使用者……今の時代の日本にあつたのか。少しの事じや動じないようになると自分に言い聞かせ、今日ここまで来たのだ。だがそんなことは全くの無駄だったらしい。

わかつてはいたが、世界が違すぎる。

心臓がうるさいほどにその存在を主張する。……でも、決めたの

だ。

私はここに生きていいく。そして、そして。
きつく瞼を閉じて、三波さんを振り返った。

「あ、あのー」

「はい」

三波さんは笑顔を崩さず答えてくれた。

私は一回深呼吸して、彼女の目をしつかりと見据えて口を開いた。
「ご迷惑をおかけするかと思いますが、どうぞこれからよろしくお願
いします」

「はい。こちらこそよろしくお願い致します。かわいらしいお嬢様
がいらっしゃると奥様から伺い、今日と言う日をとても楽しみにして
おりました。何かありましたら、遠慮なく仰って下さいましゅね？」
三波さんの笑顔は人を安心させる。

ゆっくりと、安心させるように言葉を紡いでくれるところのもある
のだろう。

「はい。ありがとうございます」

正直、そう簡単に受け入れてもらえるとは思つていなかつた。

使用人達にしか会つていないが、私はこの家を捨てた祖父の孫で、
それもごく一般家庭育ちで本来ならばこんな大層な家など全く縁
のないはずだったのだから。

これから会う親族が皆好意的な人達だなどと楽観視はしていない。
けど、こうして大叔母や三波さんのような人がいてくれることは
心強い。

少なくとも私はこの家で、一人じゃない。

こんなことを思つているようじゃまだまだだと思いながらも、や
はり好意的に思つてくれる存在はありがたかった。

それから三波さんに屋敷と敷地内の簡単な地図を持つてきてもら
い、午後のお茶までの時間をつぶすことにした。

シモンズ社のものらしい寝心地のいいベッドに寝転がり、地図を

見た。

敷地内北側にこの本家のお屋敷。それからさつき車で入ってきた表門からは奥に向かうにつれていくつかの屋敷がある。

遠目で見た限り、この本家屋敷と変わらないくらい古い洋館、日本家屋。それから近代的な洋館などがあった。

門の近くから順に五ノ峰家、四ノ峰家、三ノ峰家、二ノ峰家、その他に分家と記載されている。

「分家……？」

それぞれの屋敷には注釈が書かれており、その五ノ峰家は戸主、綾峰誠一郎となっている。他の家も皆、戸主は綾峰姓となっている。「呼称みたいなものかな。皆、綾峰だし」

詳しい説明は追い追い聞いていくとしよう。

「あ、そろそろお茶の準備をしないと」

せつかく大叔母からお誘い頂いたのに遅れるわけにはいかない。ベッドから起き上がり、クローゼットの中を漁ると、そこには自宅から送った服の他に大叔母から贈られた服が何着かある。その中に濃いブラウンの飾りレースがついたベージュのワンピースがある。「うん、これにしよう」

別に着替えて来いとは言われなかつたが、何だか今着ているパークーとデニムのスカートが場違いな気がしてならなかつたから丁度いい。

袖を通してみると今まで着たこともない上質な生地と縫製に感激する。こんなに上等な服が似合つものだらうかと考えながら部屋を後にした。

「まあかわいらしく！ よくお似合いだわ」

三波さんに案内されてテラスに面したサロンに行くと、大叔母は両手を合わせて喜んでくれた。

「ありがとうございます」

落ち着かなくて何度も椅子に座り直してしまつ。そうしている間

にもメイドが薔薇模様のティーカップに良い香りのするお茶を注いでくれる。

「いい香り」

「ダージリンでござります。ストレートで飲まれるのがよろしいかと思いましてミルクは用意致しませんでしたが、お持ちしましょうか?」

「いいえ。ストレートで頂きます」

そう答えるとメイドは一礼し、カートを押してサロモンを出て行つた。

「おじいちゃんも紅茶が好きでした」

「昔から兄は紅茶好きでしたけど、結恵さんのおじい様となつてからも変わらなかつたのね。随分好き嫌いの激しい人でしたけれど、紅茶に関しては特にうるさくなかったかしら?」

「あ、はい。いつもたくさんのおじいさんの紅茶をストックしていく、飲む時は必ず自分で淹れていました」

「ふふっ。本当にここにいた時から変わらなかつたのね。若い頃から兄は紅茶だけは人に任せず、自分で淹れていたんですよ」

「このお屋敷にいた時からですか?」

自分で淹れなくたつて全て使用人任せに出来たろうに。

「両親はそれをよくは思つていませんでしたが、私は兄が淹れた紅茶を飲むのが大好きで。兄が淹れた紅茶ほど美味しい紅茶を私は知りません」

「私も、です」

祖父が淹れてくれる紅茶は私の好物の一つだつた。

「結恵さんにとって、兄は良いおじい様でしたか?」

大叔母はまっすぐに私を見てきた。

「はい。とても良い祖父でした。祖父は私の憧れで、一生の目標です」

思つがままに口にすると、大叔母は嬉しそうに口元を綻ばせた。

「そうですか。生前兄から家族の話を伺つた際にも思いましたが、

やはり兄は幸せに過ぐせたのですね。本当に良かった」

優しい声色と目元には、祖父への愛情が滲み出ている。

「Jの人は本当に祖父のことを大切に思つてくれたんだ。

「……あの、祖父は大叔母様にとつてはどのようなお兄さんでしたか？ 私は晩年の祖父しか知らないので、若い頃の祖父のお話も伺いたいです」

そう言つと大叔母は嬉しそうに目を細めた。

「そうですね……では私の昔話に付き合つてくださいるかしら？ 兄は私より十歳も年が離れていて……」

それからお茶をしながら祖父の昔話をいくつも聞いた。

大叔母の話す祖父はやはり私の知らない祖父だつたけれど、根底は変わつていないうに感じて、つい声を上げて笑つてしまつたりした。

小一時間ほどそんな話をして過ぐし、いつの間にか緊張はほぐれていた。

「あらいけない。つい私つたらおしゃべりが過ぎてしまつて。ごめんなさいね。結恵さんのこの家でのことをお話しなければならないのに」

「いえ。私の知らない祖父の話をたくさん聞けてとても嬉しかったです」

「そう。良かつたわ」

笑うと田元に皺ができるとても可愛らしい雰囲気になる人だ。

「そうそう。お勉強のことだけれど、結恵さんの通つてらした塾は遠くなつてしまふし、家庭教師をつけるのがいいと思うのだけれどどうかしら？」

実家からこの家までは車で一時間半ほど。とてもじやないが通える距離ではない。

「はい。お願ひします」

「ええ。では学校のことですけれど……」

つい顔が強張つた。けれど大叔母は私の胸の内を読んだかのよう

に、安心させるように穏やかな声で続けた。

「綾峰の子供は多くが幼稚園から大学院までの私立校に通っている。古くから交流のある家の経営で、そこなら私も安心して結恵さんを預けられると思うのだけれどどうかしら?」

そして大叔母から続けられた学校名は国内の誰もが知る有名私立校だった。偏差値、学費、設備、あらゆる水準が国内最高クラスと言われる良家の子女御用達学校。

「わ、私なんか、とてもじゃないですがそんな立派な学校……」

思わず俯いてしまう。確かにそこも受験したいとは思っていた。

幼稚園からのHスカレーター式で、高校からの外部入学はほとんどないというし、おまけに内申書などの問題もある。だからせめて記念受験できればと思つてはいたが。

「そんなに自分を卑下してはならないわ」

大叔母は優しくそう言った。

「結恵さんが一生懸命お勉強なさつているということは貴女の『両親からもよく伺っています。もし本当に嫌だと仰るのなら無理強いはできませんが、そうでなければ考えて頂けると嬉しいわ』

大叔母は優しく微笑んでいた。

ぎゅっと膝の上で両手を握り締める。

願つてもない言葉。迷うな、迷うな……！

「出来れば私も通いたいです。けど、今の私の学力では到底授業についていけるとは思えません。ですから高校から……せめてあと半年必要な勉強をしてそれだけの学力がついたのなら、高校から緑櫻学院に通いたいです」

「わかりました。では最高の家庭教師を呼びましょう」

大叔母は頬もしく答えてくれた。

「……お世話をおかげします」

「『両親や兄の代わりにここにいる間は私が結恵さんのことをするのですから、そんなことは気にしなくてよろしいのよ？ 私も好きでさせて頂いているのだから。そうですね……せめてここにいる間

だけでも出来れば大叔母様ではなく『おばあちゃん』と呼んで頂けると嬉しいわ』

「そつ、そんなとんでもないです！」

『いくらお世話になるからって、おばあちゃんだなんてそんな馴れ馴れしく呼べる立場の人だと到底思えない。』

けれど大叔母は言った。

「けれどそのほうが家族のようでしょう？ 大叔母様だなんて何がか他人行儀で寂しいわ」

そう言つた大叔母様が少し寂しげに見えて、つい頷いてしまう。「で、では、おばあ様でどうでしょうか？」

祖母ではないのだから本当はおばあ様というのも変なのだろうけれど、これが私なりの精一杯だ。

「まだ少し固い気もしますけれど…… そうですね。ではそこから徐々に慣れていくて下さると嬉しいわ。今日から私達は家族なのですから、どうかそんなに緊張なさらないで？」

当たり前と言えば当たり前だけれど、気づかれていたんだ。

「この家は少々変わったところもあるから戸惑うこともあるかもしれませんけれど、何も遠慮はいりません。言いたいことがあつたら何でも仰つて頂戴？」

この人は、知つていても色眼鏡をかけたりしないで私を見てくれる。ほんのついこの間会つたばかりの私を家族だと言ってくれる。

「ありがとうございます」

嬉しくて嬉しくて、頬が弛みきっていた。

それから明日の十一時に私と同世代の親族を紹介してくれるという話になり、そのまま夕食まで一人で話し込んでいた。

祖父の若い頃の話。

他の親戚達の話。

温室にある蘭の話。

様々な話をして、初めての綾峰本家の夜を迎えた。

ベッドに入つても目が冴えてしまつて眠れない。柔らかく温かな羽毛布団もマットレスもこれ以上なく心地いいのに、興奮してしまつて眠れる気がしない。

どうしようか散々迷つた末、厨房に行つてホットミルクでも飲むことにした。

厨房には深夜にも関わらずシェフがいて、明日の料理の仕込みをしていた。

眠れないと話すると快くホットミルクを作ってくれ、私は温まつた体で部屋へと戻つた。

……戻つてこりつもりだつたのだが。

「ここはどこ？」

階段すら見当たらない。

この辺りはなぜか人気もなく、灯りも灯つていない。

「誰かあー……」

夜なので小声で呼んでみるけれど、返事はない。仕方なくあちこちうろうろしていると一室から細い明かりが漏れていた。

地獄に仮の気持ちで細く空いた扉に掛け寄ると、その風圧で扉が開く。

「……通路？」

空いた扉の向こうには部屋ではなく、廊下が続いていた。

明かりはその向こうから漏れてくる。

心細さに負け、私はその廊下へと足を踏み出した。知らず、綾峰家の最奥へと。

最奥の住人

その廊下には等間隔に壁に備え付けられたランプの明かりが灯っている。床は絨毯。人ひとり通れるくらいの狭い廊下。

けれどそれはどこまでも一本道に続いている。果てなど見えないここはどこに繋がっているんだろう。しばらく歩き始めてようやくそう思った。

窓の感じからしてあの部屋のあつた辺りはこの屋敷の北辺だ。と言つ事は、東西に伸びたこの屋敷の奥なのだと思うのだが。

ふと、眼前に入ってきたものを見て足が止まった。

まっすぐ平坦に続いていた一本道の廊下の先が下り階段になつてゐる。

「……地下？」

地下は使用人のテリトリーだから、私達は軽々しく足を踏み入れてはいけないのだと言われた。

けど今の私は別に軽々しく足を踏み入れるわけじゃない。純粹に道に迷つて、手助けが欲しいのだ。……情けない話ではあるが。

それに地下ならさつきも厨房に行つている。

道に迷つた以上は誰かに聞くしかない。こつ広い家だと自分の部屋へ戻るどころか、他に人を見つけることすら出来ないのだから。そう思い、地下への階段へと足を踏み出す。

いつの間にか絨毯はなくなり、石造りの階段にスリッパの足音が間抜けに響く。滑つて転ばないように注意しながら先へと進む。いつの間にか明かりが壁の上部と足元、二か所になつていた。転ばないようにという気遣いだらう。

パタパタと石造りの廊下に響く足音。

仄かな明かりに浮かぶ、自分の影。

何だか今までの場所と空気が違つ氣がする。

言葉にするのは難しい。けれどこの先は何だが、うすら寒い。怖

い、のだろうか。

何だろう。体中の血がざわめくような、この感じは。それにしてもよくよく考えれば、本当に私はここに来ても良かつたのだろうか。居候一日にしていきなり人の家を散策するなどマナー違反な気がする。

気がすると言つか絶対にそうだ。せっかく大叔母は私を家族と呼んでくれたのに、いきなり私は礼儀に反した行動を取るのか。

「……」

私はここには来なかつた。

そう自己暗示をかけて来た道を引き返そうとした時。

「帰るのか？」

唐突な声が石造りの廊下に響いた。あまりの唐突さに心臓が飛び上がり、背筋が凍りつく。

「ひつ！ だつ、誰！？」

今まで誰もいなかつたはずなのに。

ふいに、昔聞いたり読んだ話が急激によみがえつてくる。お城の地下に住む幽霊。

オペラ座に住む怪人、ファンタム。

金田一耕助のハツ墓村では村の旧家の屋敷の地下へ降りると鍾乳洞に繋がっていて、そこには行方不明だつた男の死体が……。

「嫌ーつ！！」

腹の底から悲鳴を上げてそのまま走り出さつとするが、腕を冷たいかにつかまれた。

「まあ待てつて」

その冷たさが恐怖を増長させる。

「ごめんなさいごめんなさい！ 勝手に入つてすみませんでした！ だから勘弁して下さいっ！」

実は思つていた。

古い由緒ある洋館。

これで嵐の晚だつたりした日には『出そづ』とか。密かに思つたり

していたのだ。

別に私は特別怖がりなほうではないつもりだが、目の前にしてしまつたらやはり怖い。腕を取る冷たい何かから必死に離れようと足搔くけれど、一向に腕が解放される気配はない。

ああ、このまま氣絶できたらどれだけ幸せだろう。

でもこのまま氣絶したら、もう一度と目が覚めない気がする……。

「じょ、冗談じゃない！ 私はまだやることがあるんだからっ」「

今にも頭がショートしそうな中、力任せにその冷たい何かを引っ張る。

「悪靈だらうと怪人だらうと、私の野望の邪魔する奴は馬に蹴られて死んじまえっ！」

「え」

掴んでくるその冷たい何かを空いた片手で取り、そしてがむしやらにかけていた力を一点集中。

「どつか行けーっ！」

「え、おい」

その声と共に腰を落とす。石畳に重いものが叩きつけられる音。氣付いた時には冷たい何かは私の腕から離れていた。

代わりに私の手がその冷たい何かの正体、人の腕を掴んでいた。

「……人？」

思わず目を凝らすと、私の手が掴んだ腕の先には確かに人の形をしたものが仰向けに転がっている。人の形をした……と言づか、人そのものだ。間違いない。

その仰向けに転がった『人』と田が合つ。

「……気は済んだか？」

私が投げ飛ばした人は笑顔だけれど青筋を浮かべ、そう訊いてきた。

「す、済みました……じゃなくてごめんなさいっ！」

慌ててその転がったその人へ手を差し出すと、その人は眉間にたっぷり皺を寄せて私の手を取つて立ち上がった。それから手を放す

と、いててと言いながら思い切り石畳にぶつけた背中をさすつた。

「初対面で随分なご挨拶だなあ。最近流行りの挨拶の仕方か？」

その人は全然笑っていない目で、口元だけを笑みの形に歪めて私を見た。その笑っていない目つきに鳥肌が立ちそうになり、慌てて頭を下げる。

「ほ、本当にごめんなさい！」

そつと目線だけを上げると、視界に入つたその人は驚いたことに私より若干年上かという頃の男の人だった。それも随分と整つた顔立ちをしている。

真っ黒な髪に真っ白な肌、睫毛の長いアーモンドみたいな形の目。かわいい、綺麗、かつこいい、そのどれにも当てはまらないけれど不思議に人目を惹く。

「お前、名前は？　どこの家の誰？」

その人はじつと踏み出すように私を見てきた。

「綾峰結恵です」

「ユエね。で、どこの家の？」

何だか会話がうまく噛み合っていない気がするのは私だけだろうか。

「だから、綾峰の結恵です」

「綾峰は分かつてんだって。だからどの綾峰だつて聞いてるんだよ。若干呆れを含んだ声が嫌がらせの謎かけのようなことを聞いてくる。

その尊大な態度にこちらも苛立つ。

「綾峰は綾峰です。綾峰結恵！」

「だーかーらー」

その人は腕組みしていい加減うんざりした様子で言つてきた。

「本家、二ノ峰、三ノ峰、四ノ峰、五ノ峰。どの家の関係者だつて聞いてるんだよ」

「にのみね、さんのみね……」

それは確か三波さんにもらつた地図に書かれていた言葉だ。

と詠うことは田の前の彼が聞いているのは、私がどこの家に住んでいるのかどこにとか。

「私は今日から本家でお世話になることになった綾峰結恵です」

「……本家？」

彼の目が丸くなる。

「結ぶに恵みつて書く名前は、コトヒつて読むのか？」

「……そうですけど？」

何でそんなことを知ってるんだと不信感を隠すことなくその人を見上げる。だけど彼はそんな視線などまるで気にせず一人で納得している。

「あーそうか、あれでコトヒつて読むのか。なるほど」

「ああ、あの」

「そう言えば年齢も聞いてた通りっぽいし、外見的特徴も一致するな。ふーん」

今度は悪意や害意ではなく、好奇心剥き出しでじぶじぶとそこには私を見てきた。

「綾峰コトヒ。十五歳。肩より長い髪に160センチくらいの背丈」

「あの……」

「べーそう言えばうちの家系っぽい顔立ちだな。田とか口の感じとか」

全く聞いていない。聞こえてないのか聞く気がないのか知らないが。

だけどこれでは埒が明かないと腹の底から声を出した。

「あのつー……」

「……あ、何？」

「あの、失礼ですがあなたのお名前を伺つてもよろしいでしょうか？」

棒読みに尋ねると、彼は私のほうを向いてから口を開いた。

「千歳」

「千歳？」

「そう。俺の名前は綾峰千歳」

一いつと笑つて彼、千歳はそう言つた。

「千歳つて、千歳飴の千歳？」

「ああ。それで千歳」

「千歳財閥の千歳……」

そう呟くと、千歳は目を細めた。

「随分久しぶりに聞く名だな」

「じゃあ、あなたの名前つて千歳財閥から取つたの？」

綾峰家の経営する複合企業名がチトセグループ。戦後の財閥解体までは千歳財閥を名乗っていたはずだ。

だけど千歳は笑つて簡単に否定した。いつの間にか怒りも収まつたらしく含みない笑顔で。

「違う違う。俺の千歳つて名前の由来は長生きしますよーにみたいな意味で千歳」

「ああ、なるほど。縁起のいいお名前で」

「結うに恵みもなかなかに縁起もいいし、いい名前だぞ？」

それは揶揄など感じさせない、純粹な褒め言葉。

「ありがとうございます」

「ああ」

千歳はにつっこつと笑つた。

初対面の険悪な雰囲気は一体どこへいったのかといつまでもに穏やかな笑顔。

(何か不思議な人)

妙に上機嫌になつた千歳は一人言葉を転がしていた。

「そうかーお前が本家に引き取られたつていう奴かあ。早く会いたかつたんだよな、義将の孫」

「……え？」

唐突に飛び出した祖父の名前に思考が停止する。

千歳は何を驚いてるんだという顔で私を見た。

「お前、義将の孫なんだろー？」

「そう……ですけど」

自分の祖父をその当人より遙かに年少の、それも自分と大して年の変わらないような相手に呼び捨てにされるのはあまり気分が良くない。だけど千歳はそんなことはお構いなしに続ける。

「桂子が大喜びしてたぞ？ 義将が見つかった時。お前がここに来るつてのも随分喜んでたし」

「今度は大叔母を呼び捨て……。

「あの、ここでは年長者を呼び捨てにする習慣もあるんですか？」

「あ？」

「だつてあなたはどう見ても私とそう変わらない年齢なのに、祖父やおばあ……大叔母様のことまで呼び捨てにしているし」

仮にも大叔母はこの家で最も権力ある人間なのに。お茶の時に言つていた、変わつた風習もあるというのにはこうこうことなのだろうか。

千歳は薄く笑つた。

「ふうん。お前は義将や桂子のこと、好きみたいだな」「当たり前です」

即答すると千歳は楽しげに声をあげて笑つた。

「そうか。ならあいつらは幸せだな」

毒気が抜かれるような笑顔でそう言つ。

「……あの、私の質問にはまだ答えてもらつてないんですけど」

「ああ、年長者を呼び捨て云々？」

「そうです」

「おかしい？」

「少なくとも私は年長者には敬意を払えと言わってきたので違和感はあります」

「ふうん」

千歳は少し考へるよひに、壁のランプを見つめた。

それからしばらくして唐突に口を開いた。

「腹、減つたな」

「……は？」

「俺そろそろ自分の部屋に戻るけど、お前も来る？　こないだベルギー土産のチョコもらつたんだ」

ベルギー土産？

チョコ？

私は一体今まで何の会話をしていたのだったか。チョコが出てくるような会話をしていただろうか。

そうして私がひとり頭を抱えて「どうがどうしようが、千歳は勝手に話を進める。

「俺の場所はここから少し歩いたところにあるんだ。どうする？　この場所は少し変わった場所だし。今さっきお前が俺にぶつけた質問も含めてそういうのを道中少し教えてやるひつか？」

「え。いやでも、時間も時間なんで」

さすがに親戚とは言え、初対面の男の部屋に行くのは……。そんな私の考えを読んだように、千歳は声を上げて笑いだした。

「言つとくけど、俺がお前に手を出すことはまずないから。お前に手を出す労力があるならネッシーを探しにネス湖まで行くから安心しそう？」

「……それは私に対する挑戦と受け取つても？」

既に悪戯だつたと証言されたネッシーを探しに行くほうが大事だとは随分失礼な話だ。一体私はどれだけつまらない女なのか。

「いやいや、ただ安心させてやろうと思つて言つただけだって。ほら、じつちだ」

千歳は憤る私を置いてさくさく薄暗い階段を下つて行つた。

「ここでついて行かないという選択もできるが、ここで退くのは何だか悔しい気がする。どうしようもなく悔しい気がする。

「来ないのかー？」

数段下から千歳の声がかかる。

「つ行く！ 行きますっ！」

そんな私の返答に、千歳が子供相手に遊んでいる時のような笑み

を浮かべていたことなど、私は知らない。

階段を十数段降りると、また平坦な石造りの通路が続いていた。一本道の石造りの廊下は綺麗に舗装されている。石造りと言ひトイメージとしてはカビ臭そう、苔が生えてそういうものがあるがこの廊下はそうじやない。カビ臭くもなければ、苔も生えていない。

それは日常的に人が使つてゐるからだ。

今まで歩いてきた距離を考えると廊下といつ範疇は超えているが。廊下ではなく回廊なのだろうか。

「ここは何なんですか？」

数歩前を歩く千歳に声をかける。

「ここって、どこを指す？」

千歳は振り返らずに答えた。

「この階段に廊下を含めた道です」

「あー これな」

表情は見えないが声は明るい。特に聞いていけない話ではないらしい。

「秘密基地みたいだろー？」

「秘密基地なら楽しいですけれど、何も知らずに歩くのは正直不気味です」

「率直な返答だなあ」

つまらなそうに千歳は言つ。

「秘密基地じゃないが一応秘密の通路。この回廊を使う奴は限られてるんだ。あからさまに隠し通路になつたりはしてないけど普通の奴はここへは立ち入らない。この場所の存在を知つていても入つてはいけないことになつていいし」

「あなたはいいんですか？」

「俺はいいの。後は……」

千歳は少し考える風に上向いてから続けた。

「本家屋敷の主の桂子はもちろん、上級使用人の一部に……」

「おばあ様も？」

こんな場所のことなど聞いていない。やはり昨日今日の居候には話せないようなことなのだろうか。

「本家人間は基本的に全員入つていいことになつてるんだよ。使用者は別だけど。あとは許可さえあれば一族は誰でも入れる」「許可？ それって誰が出すんですか？」

「そりやもちろん俺。この先にあるのは俺の部屋だもん」「あんたがっ！？」

驚きすぎて、つい普段の言葉遣いに戻ってしまった。一応この家に来てから注意していたのに迂闊だった。

千歳は私に振り返り、いたずらっぽく笑った。

「ようやく素が出たな」

「……失礼しました」

「別に？ て言うかお前さ、何で大して年も変わらなそうな俺相手にまで敬語使うんだ？ 俺は最初から敬語なんて使ってないのに」「何でつて言われても……」

気まずくなつて目を逸らしてしまう。世話になつているという立場だから。

本来こんな名家の人間と関わることができるように立派な育ちじゃないから。

どれもそれらしい理由だけど、違う。私が敬語を使つていた理由は、距離を取るため。一定以上に近づかない、近づかれないため。そのほうがやりやすいから。……楽だから。

無意識に左腕に右手の爪を立てていた。

「眉間に皺寄つてる」

降りかかった声に顔を上げると、千歳が人差し指で自分の眉間に指差していた。

慌てて私も両手を眉間に当てた。

「眉間に皺寄せるならもつと年いつてからでもいいと思ひやつ？」
そう言って軽く首を傾げる。

「眉間の皺は残りやすいから氣をつけろー？ 先代なんてくつきり

はつきり痕がついてたからな

「先代？」

「桂子の旦那。綾峰本家の元当主。何年か前に死んだんだけど、眉間の皺がすっかり癖になつててさ。ま、婿養子つてやつだから気苦労もなくはなかつたろうしな」

千歳は苦笑し、それから私を見た。
「だからお前は笑つとけ。どうせ見るなら眉間の皺より笑い皺のほうが気分がいい」

「皺になること前提なわけ？」

「人間が老いて皺ができるのは自然の摂理。ゆるやかな流れに従つて生きてきた証。いいことだ」

そんなことを言つて千歳は満面の笑みを作る。
本当に変な人だ。

「何それ。私はコラーゲンでも何でもいっぱい摂つて、年食つてもぜーつたい皺なんか作らない！」

「じゃあまずは眉間の皺寄せからやめることを推奨するな」

言われて力ヶと顔が熱くなる。眉間に当たた両手に力がこもる。
「結局そこに話を持つていくか……！」

上目づかいに睨むと、千歳は口元だけで笑つた。

「一つ嫌な奴！」

「何だよ、今頃氣づいたのかー？」

「ああ言えばこう言ひう。

「あーもうつー。やめた、あんたなんかに敬語使うのー。」「はいはい。どうぞご自由に」

怒る私がおかしくてしようがないとでも言わんばかりの態度で、千歳はまた先へと歩み出した。私も肩を怒らせて千歳の後を追う。道中説明してくれるとか何とか言つていたが、千歳はずつと肩を震わせて忍び笑いをしていて、私はそれに腹を立てて黙り通していった。

そうして着いたのは、真鍮製のノブのついた木製の扉。階上で

えられた私の部屋の扉とそう変わらない。

ということはこの扉も相当古いのか。そんなことを考えていると、鍵はかかっていなかつたらしく千歳はそのままドアノブを回して扉を開けた。

「どーぞ。お客様」

ドアノブを握ったまま、千歳笑顔を向けてきた。

「……入つた途端にドアを閉めて閉じ込めたりするんじゃないでしょうね？」

「何でお前の考え方ってそんなにひねくれてるんだ？」

「私がひねくれてるんじゃなくて、あんたが怪しさの塊だから。絶対に世の九割九分の人間はあんたを警戒する！」

「お前……初対面の奴をぶん投げるわ、無礼発言するわ、敬語使えばいいってもんじゃないぞ」

渋い顔をして千歳は先に扉の奥へと進んだ。

入つてすぐの壁にあるらしいスイッチを押すと、急に薄暗い廊下にまで光が射し込んできた。

「ほら、入れー？」

「……おじゃまします」

色々と文句を言いたいが、どこから言つていいのかわからなくなつて大人しく室内へと足を踏み入れた。

そこは私が使わせてもらう事になつた部屋よりも更に広い。学校の教室二つ分くらいはあるそうだ。

「広っ！」

この屋敷は一体どれだけ広いんだと改めて思う。けれどそれ以外は割と現代的で普通……だと思つ。同世代の男の部屋なんて入つたことないからわからないが。

床はフローリング。置かれている家具はモノトーンを基調にしていて、ベッドにソファに机に金属製のラックにパソコンにテレビに、とごく一般的なものだと思う。ただテレビは私が見た中で最大サイズだが。

その上、部屋の隅には簡易性のキッチンに小型冷蔵庫、更に扉があつてどこかへ繋がつてることがわかる。

「今、茶でも入れてやるからソファ座つてろよ」

千歳は鼻歌を歌いながら隅のキッチンでお湯を沸かし始めた。
「白茶はくちゃでいい？」

「白茶つて何？　どんなの？」

「中国茶の一種。福建省の特産品なんだ。俺の今一番のお気に入り」

鳳凰の描かれた茶筒を片手に千歳は笑つた。

「お茶うけにチヨコつても変か。よし、チヨコはなしにしよう。

それともチヨコ食いたい？」

「いや、あんたがチヨコ食べたいって言つたんじゃ……」

私は一言も食べたいなんて言つた覚えはない。

「そう言えば腹減つたんだつた。よし、じゃあせめてドラ焼きにしよう。結恵ーそっちの棚に箱あるから取つてー」

そしてやはり私も呼び捨てにされるのか。

ドラ焼きなら中国茶に合つのかも疑問だが、いい加減些細な事を逐一口にするのはやめるのが賢明だと思つた。

何と言つか、千歳は千歳の時間の中を生きている。きっとその時間に他人を入れる気はさらさらないのだね。

「箱、箱……と。ねえ、箱が三つあるんだけど」

「んー煎餅、ドラ焼き、千菓子。あ、ドラ焼きやめた。千菓子取つて」

「はいはい」

つまりは究極のマイペースだ。

「あ、品名杯がない。結恵ー」

「ヒンメイハイつて何！？」

「中国茶飲むための杯。そこの棚のやつ、どれでもいいから取つてシックな雰囲気の部屋に似つかわしくない、昭和的な形のヤカンから顔を上げずに手だけをこちらに向け、来い来いとするように振

つ
た。

「いや、ありすぎてわかんないんだけど！　コーヒー・カッ普とかもあるんだけど、ここ！」

1

「三つな。あー青磁のやつは」ないだひとつ翻つちやつたんだよな
「だから聞いてるー?」

「聞いてる聞いてる。もう何でもいいや。とりあえずそれっぽいも

「ルノーブル」

「えーと茶壺を温めて、それからー」

全く聞いていない……無視してゐるのではなく、耳にすら入つてい

「いや、うるさい！」

「それから茶海を温めて、茶壺の湯きりを…」

「人の話を聞けーつ！」

第一回 あらわす

す」とお盆のよがなものに置かれた道具とほめこじて、いた千歳は声を張り上げて私を見た。

「話しかけるとわからなくなるだろ。俺だつて中国茶の淹れ方は覚

「田つ二二二か」

卷之三

「誰が死ねなくてもいいのかね。」いやあもつ半頬がせりぱつだ

せいかく見三のいし顔を拗ねた子供のよハにじかめ、千歳はふハ

わからぬ。本当にどこまでもわからない。こんなにわけのわか

らない人間に会つたのは生まれて初めてだ。

各杯いやなくていいよ
せん作法も何も跳形もなくくじけやく

唇を尖らせて、がっかりしたように肩を落とす。

「だからその品名杯つてのが見つからなーいって。……これでいい?」

手近なところにあつた、白磁に朱で芍薬が描かれた碗を二つ渡す。ところが千歳は不満そうに私を見た。

「あとひとつ」

「は？ だつてちゃんと一客出したりじゃない」「言つたら、三つって」

そう言えば言つていた気がする。聞いたけどそのまま耳から耳へ抜けて行つた氣もするが。

「何で三つ？ あんたひとりで一つ使うの？」

「んなわけないだろ。変なこと言う奴だな」

「変なこと言つてるのはあんたでしょ！？」

「なぜ私が変人扱いされなければならないのか。

とにかくあと一客、一客出せばこいつのこのムカつく口も閉じるわけだ。乱暴に棚を開けて、先程と同じ芍薬柄の碗を手渡す。

「ご満足頂けて！？」

「それなりに。アリガト」

千歳は打つて変わつて嬉しそうな笑みを見せ、手早く椀に残ったヤカンのお湯を注ぎ始めた。

変人な上に百面相。

掴みどころがないなんてものじゃない。千歳は視覚に捉えることすら困難だ。

「何か疲れた……」

「あれ？ 僕、ソファに座つてろつて言つたら」「…………あんたが呼んだんじゃないよ」

もうこの噛みあわない会話、本当に疲れた。とりあえずお言葉に甘えてソファに座らせてもらおつ。

黒いソファに腰を下ろして辺りを見回す。やっぱり黒のラックには古びた本や遮光瓶、タツノオトシゴの剥製までがみっしりと詰め込まれている。入りきらない本やバインダーは本とラックの隙間を縫うように横向きに入れられている。

本のタイトルを見てみると『タチマモリと常世信仰』、『テロメ

アと老化／不老不死への夢／』、『世界の人魚／人魚が美女とは限らない』、『ギルガメシュ叙事詩』、『武田信玄の謎』、『世界怪異百選』、『カブトムシ大百科』など。

学術書の他に、内容的には面白そうだけれどくだらなそうな本やら何やらと、随分バラエティに富んでいる。

更に別のほうに目を向けると大きな机の上に置かれた地球儀型の時計が目に入った。ガラスでできた地球の部分半分が時計になつていて時刻がわかるというそれは既に深夜一時を示している。

「ねえ、この時計、時間合ってる？」

「何で合っていない時計をわざわざ置くと思うんだよ」

「あんたみたいなタイプはわざと合つてない時計を置いておく気がしてならない」

「失礼な奴だな。俺はどれだけひねくれてるんだよ」

千歳は呆れきつた顔で私の前にある小さなガラスのローテーブルの上に『ごく薄い褐色のお茶が入ったお椀と、千菓子の入った箱の蓋を開けて置いた。

「……いい香り」

華やかな香りではないけれど、お茶らしい香りだ。

「どーぞ飲め」

こんな勧められ方をされるのも生まれて初めての経験だ。

「イタダキマス」

棒読みにそう言って、湯気の立つ碗を取つた。

一口飲むと香ばしい香りと味が広がる。渋くもないし、後味もすつきりしていて私好みだ。

「美味しい」

「だろー？」

千歳は嬉しそうに向かいに座つて身を乗り出してきた。

「こないだ渋谷に行つた奴が買ってきただんだ」

「渋谷のお土産が中国茶?」

つい眉をひそめる。

お茶は美味しいけどその選択が分からぬ。

「何でも中国茶の専門店があるらしくてさ」

「へえ」

「そんで美味かつたから、せっかくだし中国茶淹れるセット全部買って来いつて言つて買つて来させたんだー」

片手で碗を持った千歳はとても楽しそうだ。

「いや、それくらい自分で買つてきなよ」

ここはけつこう都心から離れた場所だから渋谷まで行くのは面倒だらうけれど、この家ならリムジンでも何でもあるだひつ。このお坊ちやまめ。

ふと千歳の手元を見ると、千歳の碗の他にもう一密ローテーブルの上に置かれていることに気付いた。

「ねえ、その一客は誰のなの？」

「ん？ そりやもう一人の奴の」

「もう一人つて……私達以外誰もいないんだけど」

まさか既にこの部屋にいますだと、田に見えない誰かがいますとかでは……。

「おーい。顔、青いぞ」

「べ、別につ！」

「何が『別に』？ ま、こいけど。そろそろだと思つんだけじな」

本当にどうでもよわざうに千歳は時計を見た。

「そろそろつて……何？」

「んー今日のこれくらいの時間つて言つといたんだけじ……お」

千歳は座つたまま上体だけを後ろに逸らして背後の壁を見た。私もそちらを見ると、何もないはずの壁がカタカタと震えている。

「じ、地震？」

「いや、入口その一」

その言葉と同時に、震えている壁の一部分がまるでからくり屋敷のようにぐるんと回り、外と室内を繋げる。開いた壁の向こうには先程まで通つてきた回廊のような薄暗闇が広がつてゐる。

「おい遅いぞー」

「特に細かく時間指定された覚えはない」

「低く抑揚の少ない声が外から聞こえ、回転扉の要領で誰かが室内へと入ってきた。

多分千歳と同い年くらい、十七、八歳くらいの男。表情らしい表情がなく、言葉の割に淡白な声音から感情はまるで窺えない。

だが彼も千歳に負けず劣らず整った顔立ちをしていた。鋭利な印象の切れ長の目に薄い唇の日本的な美形だ。

美形その一は私を見て、ほんの少しだけ目を丸くした。

「……女？」

「男ではないらしいぞ。それより座れよ。ほら、こないだお前が買ってきてくれた白茶淹れたんだ」

「ん」

その人は小さく頷いて、私と千歳の間に座つた。

「結恵、こいつ多分お前の世話役になるとと思つから覚えとけ」

「世話役？」

「……『結恵』？」

その人とお互いの顔を凝視し合つ。

見れば見るほど美形だ……千歳といい彼といい、綾峰は美形の血筋なのか。資産家な上に美形とは、格差社会をはつきりと目の当たりにさせられた気分だ。

「お前にらめつこ大会？」

千菓子をかじりながら、頬杖をついて千歳は私と彼とを交互に見た。

「とりあえず自己紹介でもすれば？　あ、お前そういうの一ガテだけ。俺がしてやるーか」

「冗談。お前に紹介されるのだけは世界中の他の誰にされるのよりも嫌だ」

小悪魔じみた笑みを浮かべた千歳を見て、彼は嫌そうに顔を歪めた。

「俺はお前の中じゃ世界最下位か

「いや、銀河系最下位」

さりりと言つてのけて、その人は私を見た。

「一ノ峰家戸主次男、綾峰鷹櫻。どうせ今日の昼食の席でも会う事になるとと思つけど一応言つておく。ドウゾヨロシク」

「にのみねけ……の、タカツキさん？」

私のたどたどしい言葉に鷹櫻は無表情に頷いた。

「え、と。ごめんなさい、私まだこの家に不慣れで。二ノ峰家とか三ノ峰家っていう意味がよく分からなくて」

「ああ。それじゃあこの敷地内には二ノ峰から五ノ峰っていう家があることは？」

「それは存じています」

「……俺は二ノ峰なんで、敬語はいらないんですけど」

感情らしい感情を感じさせない声で鷹櫻は言った。

「え。で、でも」

この人だつて今私は敬語を使ったのに、私ひとり偉そうにタメ口つて言うのは出来ない……というか居心地悪い。そういう決まりがあつたとしても、根っからの一般人育ちの私にはまだ無理だ。

「いいんじゃね？」

どう言つたものかと言葉に詰まつた私と口を閉ざした鷹櫻の間に割つて入つたのは千歳だつた。

「ここはうるさい奴もいないし。結恵は別にタメ口でいいんだろ？」「うん。申し訳ないけど私は小市民だから、初対面の人 gegenüberが使つてゐるのに自分だけ使わないのは無理」

「だつてさ、鷹櫻」

「ならやめる」

存外あつさりと鷹櫻は承諾してくれた。

「様付けもしないほうがいいか？」

「様つ！？」

「結恵様つて」

真顔で鷹櫻は言つ。

悪い冗談だ。

「え、いやあの私達、親戚……ですよね？」

「だから敬語はいらない。……一応遠いけど、親戚関係になる」

「じゃあ

「二ノ家はそういう所だから

間髪入れずに鷹櫻は返してきた。

「二ノ家はよそからすると妙な決まり事が多い。それは不文律だつたり、慣例として文書に残っていたり色々だけど」

「はあ」

「その中で最も重きを置かれるのが、本家絶対主義とでも言えばいいのか。とにかくそういうのがある」

「……二ノ峰家、とかは本家ではないの？」

てっきり同じ敷地内に居を構えているくらいだから本家と同等の扱いだと思つたけれど。

「違うな。いわゆる分家つて奴だ。他にも分家は多くあるが、その中でも最も古くに本家から分かれた四つの家を二ノ峰から五ノ峰つて呼んでいる。まあ屋号みたいなものだと思ってくれればいい」

屋号。その家の苗字以外の通称か。

「だから本家は二ノ峰つて呼ばれることもあつたらしいけれど今は皆、本家つて呼んでいる。今本家と言つたら桂子ばあさんとお前だけだけど」

「何だ、桂子『様』じゃなくていいのかー？」

千歳が茶々を入れる。けど鷹櫻は全く氣にも留めない。千歳の扱いに慣れてるんだな。

「うるせー大人たちもいないんだからいいだろ。話を戻すけど、この敷地内の本家つていうのは例えるなら王家だな」

「お、王家？」

随分話が大きくなつてきた。だが鷹櫻の表情も声も真剣そのものだ。

「ああ。それも絶対王制の、だ」

絶対王制。その名の通り、王が絶対的権力を持つこと。通常は法

によつて制限される王の権限が、全く制限されていないということだ。貴族、議会、民衆……国王以外のあらゆるものに左右されない、絶対的な王の権力。

絶対王制の例として挙げるならフランスのブルボン王朝だらう。そのブルボン王朝期の国王、ルイ十四世の言葉は今なお残されている。

朕ちんは国家なり。

自身を国家と称した国王。もつともその子孫、かの有名なマリー・アントワネットの夫、ルイ十六世の代でフランス王室の財政は破綻する。そしてそれをひとつ契機としてフランス革命は起こり、ブルボン王朝最後の国王ルイ十六世の処刑によつて王制は廃止された。それが三百年以上も昔の話だ。

現代に絶対王制など通用するわけもない。それが実行されているか否かはともかく、まがりなりにも人類皆平等を謳う現代社会で。一人の人間が絶対的権力をを持つことなどたとえ国内で受け入れられても、世界的に受け入れられない。それなのに。

「ここでは本家は絶対。本家人間には最大限の敬意を払うが当然、それがこの家の法なんだよ」

何を考えているのか読めない無表情で、鷹櫻は言つ。

「そんな……今時？」

「だからここは特殊なんだ。それに違和感を持つ奴は少ない。生まれてからずっとそなんだから当然と言えば当然だが」

鷹櫻は白茶を一気に飲み干し、空になつた碗を静かにローテーブルに置いた。

「言つなれば、この綾峰家は一つの国家だ」

鷹櫻の口調も声音も軽い。なのにその内容の重みはそれにそぐわない。

古くから続く名家。その圧倒的財力。世界の政財界への影響力。まだ綾峰家をよく知らない私でも、この国における綾峰の強さを知つてゐる。

けど、国家とまでいくものなのか。それも絶対王制の。そんなことが本当にこの現代社会でまかり通るものなのか。

「国家の三要素って知ってるか？」

黙り込んだ私に、明るい声で千歳が話しかけてきた。

「法學的、政治学的見地からすると国家は三つの要素から成り立つ。これを備えていると国際法では国家として認めてくれるそうだ。その一つが領土。その『国』を物理的に存在させる一定区画。この敷地内は十分その役割を果たしている」

確かに。

綾峰一族の居住地。言い換えればここは綾峰家の領土だ。

「二つ目」

千歳は更に中指を立てた。

「それは人民。どんな立派な統治者がいて、どんな広大な領土があるとも、人がいなければそれは国じゃない。この二つ目の条件も満たしている。本家から五ノ峰までの五家。さらにそれぞれの家の分家もいくらかこの敷地内には住んでいる。それら全員が綾峰であり、永遠に綾峰の人間で在り続ける」

いつの間にか冷めていった聲音に、その強い色の瞳に氣圧される。その瞳から、表情からもたらされるものはどこまでも冷たい。

「三つ目」

そして薬指が立てられる。

「最後の条件は、権力」

冷え切った声が冷めた表情を通して告げる。

「平たく言えば、他者を支配する力。屈服させ強制する力……そんなものだろ。綾峰本家には権力がある。その有効範囲は綾峰家内部だけじゃない。もちろん、外部に対しても」

その聲音があまりに冷たく無機質で、全身が凍りつくような錯覚に陥った。

怖い、と思つた。

その言葉の重みが怖い。それを告げてくる存在が怖い。

体中の血が、細胞のひとつひとつが、強く強く内側でざわめく。

その権力の有効範囲は、外部とはどこまでのことだ。私は、私が思っていた以上の場所へ踏み込んでしまったのだとこの時初めて、本当の意味で気付くことが出来た。

無意識に体が震える。綾峰本家といつ名の重さが今更のしかかつてくる。

覚悟は決めていた。

強い地位はそれに比例した重みを持つ。だけどころへ来る前の私はまだ、本当の意味ではそれを分かっていなかった。だけどその地位ゆえの負荷があることは覚悟して、それがどんなものでも絶対に手に入れると思った。私が私を貫くために。迷うことなく、私の意志を貫くために。

けれど初めてそれを怖いと思った。自身を貫き通すことが。正しいことの意味もまだ理解できない自分が、強さがなければ自分の意思もまともに口にすることも出来ない程度の自分が、それだけの力を持つことが。

「結恵」

名前を呼ばれ、ぎこちなく顔を上げると口に何かを放り込まれた。それは口中でさらりと溶け、舌の上に爽やかな甘みを広げていった。それがローテーブルの上に置かれた干菓子だと気付き、改めてそれを口の中に放り込んだ張本人を見た。

千歳は無邪気に笑っていた。

「甘くて美味しいだろ?」

その笑顔に、先程までの冷たさは微塵も残されていない。口に広がる甘さとその笑顔に、自然と震えは納まつていった。

首を縦に振ると彼は満足そうにちらに笑つた。

「和三盆の甘さつていいよな。チヨコとかもいいんだけど、たまにこうこううさつぱりした甘いものが食いたくなるんだ。なんか和んで

明るく屈託ない声でそう言つ。

それを見て、安堵すると同時に思つ。

あの冷たい目をしていたのはいつたい誰だったのか。あの冷たい声を発したのは……ここにいる彼は、一体誰なのか。

綾峰千歳。彼はこの不思議な家の何なのだろう……。

「千歳は……」

茶碗を両手で握りしめて、千歳を見上げた。

千歳は干菓子を頬張りながら首を傾げる。

「んー？」

呑気ともれる声と仕草にもとぼけるという様子はなく、これら私が何を聞いてもあるがままに受け入れるといった風に感じられた。だから包み隠さず疑問を口にする。

「千歳は……何？」

人に対して「何」という聞き方もないだろうと思うが、その時は本当にそれしか思い浮かばなかつた。そして一つの疑問から、次々と新たな疑問が生まれる。

「何でこんな地下に部屋があるの？　あの回廊を通るのに許可を出せるほど高い地位にいるの？　何でおじいちゃんや大叔母様を呼び捨てにできるの？　何で何で……」

まくし立てるような私の言葉を受け止めながら真っ直ぐに私の目を見てくる千歳に、少しづつ頭が冷めてくる。

「……ごめん。部外者が変なこと聞いて。忘れて」

千歳を異端者のように感じた罪悪感の分も、恐怖を感じていた分も含めて深く頭を下げた。

千歳と鷹櫻の視線を感じる。

「部外者って誰のことだ？」

先に口を開いたのは千歳ではなく鷹櫻だった。その声は抑揚少なく淡々としたもの。

「もうお前は関係者だ、綾峰結恵」

淡々とした、けれど抗い難い強い響きを持った声が降つてくる。

「……残念だけど鷹櫻の言つとおり」

溜め息がちに千歳も言つ。その声に顔を上げると鷹櫻は相変わらず表情らしい表情はなく、千歳はどうか疲れたように頬杖をついていた。

「部外者でもそうでなくとも、別に今しがたのことは気にしてないから結恵も気にしなくてもいいさ。まあ持つて当然の疑問だ。俺もさつき会つた時に答えるつて言つておきながら答えるのすっかり忘れてたし」

千歳は鷹櫻の空いた茶碗に急須から新たに茶を注ぎながら言つた。
「けど結恵はもう紛れもなく、この綾峰つて『国』の関係者だ」「私が？」だつて私は単なる居候でおじいちゃんとは立場が違う。
育ちだつてあんた達みたいに立派なものじゃないし」「そんなことは関係ない」

ぱつりと鷹櫻が言つた。その鋭い瞳と目が合つ。

「さつき千歳は本家を王家と言つた。そしてお前はその家の血族だ。お前のじいさん、綾峰義将は綾峰の当主となるはずだつた人物なんだからな」

確かに大叔母が当主を務めている時点でそうではないかと思つてしまつた。家を継ぐのは男という意識が今より強かつた時代なら尚更。祖父はやはり絶対的地位を約束されていたんだ。

けどだからこそ。

「だつたら、そんな大層な地位にいながら家を出たおじいちゃんの孫の私がそう易々とこの家に受け入れられるものなの？ それもおじいちゃんは駆け落ちしたんだよ？」

それは家の意思に反したといつ事。國家にも例えられるこの家の意思に。

「絶対王制つて言つたろ？」

千歳が視線を寄こして言つ。

ガラスのテーブルと陶器の急須が当たり、小さく音がする。

「駆け落ちした義将の話を出したけど、あれは本当に家の中の話だ。」

本家の中の義将の両親、近い親族、側近達なんかだけが義将の意志を認めずに反対した。本家以外の家に義将の意思を止める権限なんて持たされてない」

「その時の人間で生きてるのは、桂子ばあさんや当時の下つ端使用人くらいのものだしな」

新たに注がれた白茶を一口飲み、鷹櫻は言つたがそれから急に顔をしかめた。

「……千歳、渋い苦い」

何のことだと思っていると、向かいで千歳がカラカラと笑つた。

「あー悪い。余ったやつを入れといただけだから、出すきたかも」

「お前、時間気をつけろって言つたろ！？ 渋い茶は嫌いなんだよ

「悪かつたつて。そんな泣きそつた顔すんなよ」

「泣きそうじやねえ！」

千歳は笑いながら鷹櫻の背を叩き、鷹櫻は碗を持ったまま憤慨する。

さつきまでの重苦しい空気はどこへ行つたのか。

そんな私の視線に気づいた鷹櫻が千歳の手を強引に退けて一つ咳払いして仕切りなおした。

「とにかく、義将じいさんのことはもう関係ない。……ま、色々言う奴はいるだろうけどそんなことはこの家じや全く意味のないことだ。結局のところ、当主の桂子ばあさんとその兄貴の孫であるお前に逆らえる人間なんていやしないんだから。社会でどれだけデカイ顔してふんぞり返つた大人であろうと、ここでの物を言つのは血だから

ら

「血？」

鷹櫻は頷き続けた。

「綾峰本家の血。本来の当主のはずだった義将じいさんの直系に逆らえる奴はない。よそじや奇妙なことかもしれないがこの家じやそれが普通。年齢も経歴も何も関係ない。問われるのはその血だけだから、と千歳はソファの背もたれによりかかって高い天井を見

上げた。

「こここの連中は思つてゐる。桂子や結恵にその『氣』があろうどなかろうとこの家の次の当主候補……いや、次の王つて言つたほうがわかりやすいか。それは綾峰結恵だつて、そう思つてゐる」「はあ！？」

見事に声が裏返つた。だがそんなことは氣にしていられない。

「なつ、おかしいでしょ、それ。まだ顔も中身も知らないような相手を？ 確かなのは私がおじいちゃんの孫で大叔母様と血が繋がつてゐることだけなのに、他の誰かが本家を継ぐとかそういう発想はないわけ？」「ないな」「ない」

千歳と鷹槻が同時に言い切る。いつぞ私のほつがたじろぐ程の自信を持つて。

「義将が出てかなきや、實際この家の跡取りだつたのは結恵だろ？」「そうだけど、私はお父さんたちが海外に行つてゐる間だけお世話にならぬ居候だよ！？」

「お前が何て言おうと他の連中はもうそいつものとして意識してゐる。お前がこの家に来る前から。きのつも俺、他の奴らとそういう話したし」「他の奴らって誰！？」

「ん……トモダチ？」

鷹槻は無表情に首をかしげながら答える。

「『トモダチ？』つて何……何で疑問形？」「いや。一応親戚だけど、親戚の中でもまた別と言つか」「わけわかんないんだけど」

「親戚多すぎてひとくくりに親戚つて言つるものなんか変な感じなんだよな。デカイ家だから親戚同士と言つてもやつぱり派閥とかあるわけだ。ガキ同士でも」

「親戚同士で、派閥？」

本当にどの幕府でどこの時代のどの王室だ。

「結恵、眉間に皺。取れなくなるぞー」

いやに呑気な声を上げる千歳が腹立たしい。

「つるさいなあ……だってもう、わかんないことだらけなんだから仕方ないじゃない！」

つい声を荒げて当たってしまう。

「親戚同士で派閥とか絶対王制とか血とか……わけわからなによー。一体私にどうしろってのよ！？」

覚悟はしていたのに。

欲しいものがあるから、それを得るためにうつて。

だから覚悟はしていた。していただがこんな大事だなんて想像もしなかつた。

唇を噛みしめて俯くと、場違いな程に穏やかで明るい声がした。
「どうするも何も、結恵がどうしたいかは他人に決められることじやないだろ？」

顔を上げると、千歳が不思議そうに私を見ていた。

「確かにここは変な家だけど、だからってお前のペースを崩す必要はない」

鷹櫻も淡々と、取り繕つでもなくただ自分の意見を述べる。

「他人にどう評価されようと、自分の行動を決定するのは自分しかいない。自分の行動に責任を持てるのも自分しかいない。だから好きにすればいいだろ」

真実だから、慰めでも氣休めでもないから、その言葉が染み渡る。膝の上で両手を握り締める。

「……それでも、いいの？ 私は私の意思を通してもいいの？」

それが正しいことだとは限らなかつた。他人に巻かれることは一番楽な道だつた。誰も個人の正義なんて必要としていない。誰も私の意見なんて必要としていない。必要なのは集団の意見。

「自分の行動に責任持てるなら、自分の意思通したつてかまわないだろ？」

何でもないことのように千歳は言った。

「むしろ自分の意思を通したいんだつたらこれ以上最適の立場はないぞ？ な、鷹櫻？」

千歳に目を向けられて鷹櫻も頷く。

「王の意思がこの家の意思になるからな。お前が何かしたいと言えば一族の財力権力惜しみなく使われて、それは叶えられる」

「……そこまでじゃなくてもいいけど」

「謙虚だなあ」

千歳が苦笑する。

「なあ結恵」

「何？」

形のいい手が伸びてきて頭の上に置かれた。

「せつかくの立場だ。憂うよりも最大限に利用してやればいい。迷つたら鷹櫻でも桂子でも俺でも。誰かに意見を聞け。そして自分で決める。結恵は結恵以外の誰でもない。誰にも結恵の意思を損なう権利なんてない。この綾峰でも、外でも」

柔らかに紡がれる言葉。

両目が痛いくらい熱くて、氣を抜いたら涙が零れそうだった。くしゃりと頭を撫でられてそのまま泣き出しだくなる。他人の前で泣くのなんて大嫌いなのに、誰の前でも泣くものかつて決めていたのに。

「……ありがとう」

それだけ言葉にするのが精いっぱいだった。

「うん。まあ面倒くさいことも多いだろうけど、好きにじゅよ」

「……うん」

頷くと、髪をかきまわすように頭を撫でられた。

「……変な奴が来たら嫌だと思つてたけど、お前は合格ライン」

ふいに鷹櫻がそんなことを言つ。

千歳にぐしゃぐしゃにされた頭を撫でつけながら、謎の言葉を口にした鷹櫻を見た。

彼はまっすぐに私を見て続けた。

「俺、さつき千歳が言つたとおり多分世話役だから。あともう一人いるけど。そいつもさつき言つたトモダチ。同じ年だからほぼ間違いなく俺らが結恵の世話役につけられる」

「……ごめん。 同い年つて誰と誰が？」

「俺ともう一人。 結恵と同じ年」

あくまでも淡々とそう言つた。

同い年……。

「スミマセン、鷹櫻……は、おいくつ？」

「十五歳。今、中三」

表情一つ変えず鷹櫻は答えた。

「……冗談？」

「戸籍謄本でも用意すれば満足か？」

心なしか鷹櫻の聲音に苛立ちが混じる。

言葉に詰まるが、千歳がテーブルをバンバン叩きながら笑いだした。

「鷹櫻～やつぱお前ビーヴ見ても十五には見えないって！ 詐欺だ、詐欺！ アハハハハハ！」

「おい、ちょっとお前は黙つてろ！」

「え、本当に？ 本当に同じ年？」

「だからそういうてるだろうが！」

今日初めて見る勢いで怒鳴られ、肩を竦める。

「う、うわ。すごく大人っぽいし落ち着いてるし、私が見てきた同級生男子つて何だったの！？ それともお金持ちだと皆そんなに落ち着いてるの！？」

「鷹櫻は老けてるんだよ。顔も性格も」

「老けてるって言つたな！」

「そいやつて怒鳴り散らしてると年相応なのになあ

鷹櫻の怒りなど柳に風。千歳はひとり、うんうんと納得している。

「じゃあ千歳も実は私と同じ年とか……？」

口元が引きつったままに千歳を見る。

千歳は鷹櫻と顔を見合させた。そしてにっこり笑顔で振りむいてこう言った。

「俺は見たまま十七歳……」

「バツイチ子持ち」

にこやかな千歳の言葉を鷹櫻がうまく繋げてみせた。

「え？」

一瞬、時間が止まつた氣がする。千歳がにこやかな表情のまま、鷹櫻が無表情のまま、私が「え」の形で口を開いたまま。

最奥を後に

「冗談……だよね？ それこそ……？」
語尾が震えているのが自分でもわかる。

いくらなんでも信じ難いのだが、いやでも最近は年齢的にあってもおかしくない出来事で、だけど千歳はそういうタイプには見えなくて……。

「おい。瞳孔開いたままになりそうだけど」
冷静に鷹櫻が言つてくる。

「だだ、大丈夫、閉じる。閉ざすから」
自分でも何を言つているのかよくわからない。

こいついう時は深呼吸だ。これでもかというくらいに息を吸い、力いっぱい息を吐き出す。そんな作業を三回ほど繰り返してから改めて鷹櫻と千歳を見た。

「で。変な冗談はやめてよ」

「いや、冗談でなく」

相変わらず憎いほど淡々と鷹櫻は言つてのけた。

そのまま卒倒しそうになつたが、最後の望みをかけて千歳を見た。

「千歳サン……マジですか？」

「あはは」

花のような笑顔が今は哀しい。

別に悪いわけではない。昔なら十七で結婚して子供がいたって普通じゃないか。

若年層の結婚の負の面ばかりがニュースや新聞では取りざたされることが多いが、皆が皆、そうなわけじゃない。お互い相手の人生を考えて想い合い、新しい命を育て……そんな夫婦だつていいる。だから悪いわけではない。

そう。悪いと言つているわけじゃなのだが意外といつか、何とうか、頭が酷く混乱している。

「何？」

じつと見つめていると、千歳が居心地悪そうに身じろいだ。

「いや、奥様とお子様はお元気かなーとか……」

すると千歳の笑顔がわずかに翳つた。

「死んじゃったよ。だいぶ前」

その目は本当に悲しげで、嘘なんて一片も感じられない。聞くべきではなかつたと痛感させられる。

「ごめん。私……」

「いいつて。第一結婚より鷹櫻だろ？ つたく。余計なこと言いやがつて。それに俺は厳密にはバツイチじゃないつて。先立たれただけで」

「あーそりなんだ」

「何だよ、さつきの渋い白茶の仕返しか？ ガキだよなあ」

今までで一番大人びた表情を浮かべて千歳は息を吐いた。

「さて。そろそろ丑の刻だ。いい加減ガキ共はベッドに帰つたほうがいいぞ」

千歳の目線の先には、午前一時を指そうとしている地球儀型の時計。

「あ。うん……ごめん。遅くまでお邪魔して」

「いいつて。それより説明してやれなかつたな。鷹櫻、明日昼食会だつて？」

「ああ。敷地内のガキは全員呼ばれてると思つ」

「そつか。大人たちへのお披露目はまだ先なら平氣だ」

千歳はまだ頑垂れる私を見て苦笑し、力なく垂れた右手を取つて何かを握らせてきた。手のひらを開くとそこには赤い包みの一口サイズの直方体。

顔を上げると千歳がにっこり笑つていた。

「さつき言つたら？ ベルギー土産だつて言つチヨコ。美味しいから一個やるよ。それ食つて歯を磨いて、早く寝ろ？」

「……うん」

優しい言葉をかけてもらつても罪悪感は拭いきれない。掴みどころのない千歳が見せた、本当に寂しげで悲しげな目が忘れられない。いくら親しく接してくれるからといって、なぜ会つたばかりの人になんかに踏み込んだことを聞いてしまつたのだろう。礼を欠くにもほどがある。

「じゃあ途中までは鷹櫻に送つてもらえな？ 鷹櫻、結恵のこと頼むな」

「ん」

「じゃあな。結恵」

「うん……」

まだ俯き加減の私の頭上で、千歳と鷹櫻が呆れたように顔を見合わせた。

「おい。嫌な」と言つたのは俺なんだから、結恵が気にする必要ないと思つ

「そうね。悪いのは鷹櫻だつて。だから結恵は気にしなくていいんだ。むしろ鷹櫻には一回くらい殊勝な態度を見せてもらいたいもんだ」

「ドーモスイマセン（テシタ）」

「……全然殊勝じゃないっての」

軽く笑つて、千歳は私の両頬をつまみ上げて顔を上げさせた。

「ほら、どうせなら笑い皺にしろつて言つたるー？」

「うひや」

顔が伸びる。かなり伸びている。

抗議の目線を投げかけると、千歳は勢いよく両頬をつまんでいた手を離した。頬は「ぐ」とのように弾みをつけて元の形に戻る。

「いつ痛あ

頬をさすりながら涙目で千歳を見た。

千歳は笑つてゐる。どこまでも無邪気に。

「じゃあな。またいつでも来いよ。俺は大抵ここにいるから。出来れば大人たちのお披露目のためにもつかい来いよ

「……来てもいいの？」

「ああ。結恵は本家だからめんどくさい決まり事は問題ないし、そもそも俺がいって言つてんだからなー」

「じゃあ、また来る

「ああ。待ってる」

につりこりと笑い、千歳は言った。

「じゃあ千歳……つと。渡し忘れ

鷹櫻はジーンズのポケットから何かを取り出し、千歳に放り投げた。

それは円柱形の筒に、カラフルな丸がたくさん描かれているお菓子の箱だ。

「マーブルチョコ？」

尋ねると千歳は更に嬉しそうに答えてくれた。

「そ。いやーたまに食べなくなるんだ。サンキューな。鷹櫻」「ん

鷹櫻は言葉少なに、初めに彼が来た壁を手で押した。それはやはりカラクリ屋敷の「とくくるり」と回り、薄暗い回廊へと繋がっている。

「じゃあな。一人とも」

「ああ」

「結恵も」

「うん。あ、お茶と干菓子ありがとう」

お茶と干菓子に関するお礼は予想外だったのか、千歳は一瞬目を丸くしてから笑いだした。

「どーいたしまして。結恵はその老け顔とは違うなあ。俺が茶を淹れてやつたつて礼なんて言つたこともないんだぞ?」

「うるせえな」

鷹櫻はわざらわしげに言つて、石造りの回廊へと足を踏み出し私を振り返った。

「来ないのか?」

「あ、行く」

鷹櫻の淡白な言葉に答え、私も部屋を出る。

「それじゃあおやすみ、千歳」

「おやすみ。一人ともいい夢をくむりと扉が閉まるまで、千歳は手を振つていてくれた。ゴトンという重い音と共に完全に中の光が遮断されてから鷹櫻は前へと歩き始めた。私もその後を追う。鷹櫻は無言で前を歩いていた。けれど置いていかれることはなく、身長差などを考えれば多分私に歩くペースを合わせてくれているのだろう。

千歳といい、鷹櫻といい、この一人は何と言つか話しやすい。波長が合うといふか、同じ空気といふか一緒に過ごしていて楽でいられる。初対面の人間には多少なりとも緊張して地を出せない私には珍しく、この一人とは普通にしゃべることができた。

千歳はあの独特的マイペースが。鷹櫻は無関心なようで気遣つてくれるところが無意識に緊張をほぐしてくれて。

(いい人達なんだよな、きっと)

そんなことを思いながらペタペタと相変わらず間抜けなスリッパの音を立てながら、造り自体は来た時に通つた道とほとんど変わらない回廊を歩く。

前を歩く鷹櫻の足元を見ると、彼はスニーカーだった。確かに室内でも靴を脱いだりしていなかつたから千歳の部屋は土足厳禁と言うわけではないらしい。歐米だったら珍しいことでもないが、日本ではあまり見ない光景だ。

地上の屋敷では土足禁止で大叔母含め室内履きを履いていたが同じ敷地内、家屋内にあっても千歳の部屋に限つては別なのか。本当に覚えなければならないことは山積みだ。

先程の千歳と鷹櫻との会話からも、この家が私の今まで十五年間の常識などこれっぽちも通用しない家だということがよくわかつた。その上派閥。自分の置かれた立場。

(絶対王制……か)

綾峰という家の歴史は以前大叔母から少し聞いたことがあるし、自分で調べたこともあるので少しは知っている。

綾峰家というのは元は地方の豪商だったといふ。安土桃山時代。織田信長、豊臣秀吉が南蛮貿易を推奨する波にもいち早く乗り出し、以来常に時代の波に乗り綾峰家は時の有力者達の御用も受けるほどの大商家となつたらしい。

その後、徳川幕府をはじめ各地の有力な諸大名の確かな信頼を得て、動乱の時代・幕末から明治時代にかけても確実な道を迷うことなく歩みその地位、財力、そして商人の命でもある信用は国内有数のものとなつていたと言つ。そして宮内省御用達、爵位拝命など様々な名譽を経て、千歳財閥と名乗るよつになつた綾峰家の隆盛は留まるところを知らなかつたそうだ。

それが第二次大戦で日本は敗戦。連合国軍最高司令官総司令部から財閥解体の指令があり、千歳財閥といふ名は消え、綾峰本家について統括されていた事業も分散され個々に行われるようになつたようを見られたが、綾峰家の繋がりと言うのはそう脆弱なものではなかつたらしい。それからまた時を経て、旧千歳財閥はチトセグループとして名乗りを上げた。

それからは国内外のあらゆる事業での成功、バブル崩壊すらまるで予想していたかのように最善の経済対策が整えられていたため、その損害はよそに比べれば無いも同然だつた。過去にも同様に1923年の関東大震災、1929年の世界恐慌でも被害を最小限に留めてきた。

綾峰家は確実に時勢を読み取り、一度としてこの隆盛を衰えさせたことのない世界的にも伝説のような家なのだと言つ。

こうして改めて考えてみれば綾峰家が絶対的地位、財力、権力を誇ることは間違いない。それだけ規模が大きな家だ。歴史上、血生臭い事件なく平穀無事に現代まで続いてきた王家などない。政争のひとつふたつ、王位継承争い、そんなものあつて当然だ。

ではこの綾峰家ではどうなのだらう。この国で未だ絶対王制を敷く、この家では。

間違いなく現代社会の上流に位置する綾峰家の人们たちは、自分たちより上の『王家』を認めるものなのか？

血と言つていたけれど今は古い時代じゃない。古い家は自分たちの血縁を重視する傾向にはあるようだけれど、一度は家を出た人们の子孫をその『血』として認めるものだろうか……。

考えれば考えるほどとてもそうは思えなくなる。

今更になつて、なぜ自分がこの家に来ることができるようになつたのか疑問に思う。大叔母は善人で、祖父の孫の私を可愛がってくれている。それはいい。けど他の人们は私という存在をそもそも容易く容認できるものなのか？

思い切り頭を搔き鳶りたい衝動に駆られたが目の前にいる鷹櫻の存在を思い出し、何とか思い止まつた。危うく初対面で変人というイメージが植え付けられるところだつた。

そうやつて気を抜いたためか、スリッパの中で足が滑つた。そして滑つた足ごとそのまま私の体は前のめりに倒れた。

「ーっ！」

ベチつというスリッパの音以上に間抜けな音が回廊に響く。数歩先を歩いていた鷹櫻は何事かと振り返つた。

転んだ瞬間、地面に両手をついたので顔面をぶつけるという失態は避けられた。ついで両手は多少擦りむけたが。

「おい、大丈夫か？」

呆れ混じりの鷹櫻の声が降つてくる。

「大丈夫……」

心配してくれるのはありがたいがやはり恥ずかしい。十五にもなつて私は一体何をやつているんだろうか。慌てて立ち上がり、熱を持った両手の擦り傷に息を吹きかける。

「痛あ」

特に強くついた右の掌は血が滲んでいた。

薄暗い回廊の中。

白い掌。

滲み出る赤い鮮血。

高く、心地よく鳴り響く心臓。

あの廊下に足を踏み入れてからずっと感じていたざわめき。

ルビーのように鮮やかな赤。

珠のよしに滲み出た、赤い赤い血液。

「血が……」

掌を眺めながら、無意識にそつ口にする。

心臓の音が、体中を巡る血液が、私を形作る細胞のひとかけまでが、何かを訴えかけてくる。何か何か、何か……。

思考が闇に消えかける寸前、唐突に赤は私の目の前から消えた。いつの間にか掌は鷹櫻の手によつて、まるで私から隠すよしに握られていた。

「鷹つ……」

鷹櫻の顔に焦燥にも似た表情を見る。

こんな顔もするのか、と呑気に思つてゐる間に鷹櫻は私の手を引き、足早に先へと歩き始めた。私が何度も石畳に足を取られかけようと、決して止まることなく。

それはまるで何かから逃げるよし。

長い長い回廊を進み、階段を昇る。そしてまた平坦な道を歩き、階段があれば昇る。その繰り返し。

そうしてようやく行き止まりへと突き当たつた。

鷹櫻は私の手を握つたまま片手で石の壁を押した。それは重い音を立てて、千歳の部屋の扉のよしに回つた。

歩み出た先には暗闇の中に小さな明かりがぽつぽつと見える。芝生を踏みしめる感触。

多分ここは本家の奥庭だ。そしてあの小さな明かりは庭先を飾る外灯だ。

冷たい夜風にさらされ、ようやくあの閉塞的な石造りの回廊から

外に出たのだと実感する。

それから背後でまたあの重たい石のこする音を聞き、鷹櫻が壁に見せかけた扉を閉めたのだと気付いた。

いつの間にか手は放されていた。

「誰にも言つな」

私が何を言つより先、鷹櫻が有無を言わせぬ口調でそう言った。驚いて鷹櫻を見ると、細い月の明かりに照らされた彼の顔はやつぱり綺麗で、けどどこか落ち着かない様子がはつきりと伝わってきた。

「……鷹櫻？」

「桂子ばあさんにも、昼食会で会つ奴にも、使用人にも、他の誰にも言つくな」

「言つなって……何、を？」

頭の中では何となく答えが出ているのに聞かずにはいられなかつた。

「鷹櫻の目が一層鋭くなる。そして今まで一番低い声で言った。

「血について」

右の掌に滲んだ血は既に止まっていた。

「どういう、意味？」

鷹櫻の鋭い黒い瞳が月の光で褐色に映つた。だがその鋭さはさらには増す。

「『当たり』の可能性があるから」

低く押し殺したような声がそう言つた。

「当たり？」

その言葉に疑問を感じている間もなく鷹櫻はさりと続けた。

「昼食会では俺とお前は初対面だというフリをする。お前もそうしろ。そのほうが色々と便利だ。それから……今日俺と千歳と会つたことも絶対に誰にも言つな」

「千歳も？」

「絶対にだ。お前は面倒事は嫌う性質に見えるがどうだ？」

鷹櫻の強い視線に射られる。

ここまで流されるままだつた自分が、その強い視線に呼応するよう叩き起^こされる。

一度目を伏せ、まっすぐに鷹櫻を見上げた。

「鷹櫻の言つとおり、面倒事は大嫌い」

鷹櫻は領^くき、壁にもたれかかった。

「出来るだけ早く千歳に会いに行つたほうがいい」

「会つたことを言つなつて言つたばかりの口が言う？」

「他人に公言して会う事と、秘密裏に会う事じや意味が違う」

しつとした顔で鷹櫻は言つた。そして鋭い視線を向けてくる。

「ここで自分の目的とそのための敵・味方の判別を誤るな」

その言葉の一瞬言葉に詰まる。

だがその言葉は私がここに来た理由と繋がつてゐる。

「わかつた」

「頼もしい限りの返事だな」

鷹櫻は壁から身を起^こし、都心より星の多い空を見上げて伸びをした。

その姿を見ていると、ふと疑問が湧き上がつてきた。

「鷹櫻と千歳は私の味方？」

瞬間、強い風が吹き抜ける。

巻き上げられた髪を押さえながらも鷹櫻から視線を外さない。黒髪をなぶられながら鷹櫻はある淡白で抑揚の少ない口調で、けれど確かな強さを持つて答えた。

「俺はお前の目的を知らないから断言は出来ない」
けど、と鷹櫻は続ける。

「進んでお前の敵になりたいとは思わない」
曖昧だが本心だと分かる言葉に思わず口元が弛む。

「そつか」

「千歳は絶対にお前の味方だと思つていい。あいつは俺の味方だし、お前の味方でもある」

意図をくみ取りにくいその言葉に思わず眉を顰めた。

「それって私と鷹櫻の利害が一致しなくても？」

「そうだ」

「一片の迷いもない答えが返つてくる。

「千歳は俺の思いも、お前の思いも最大限に尊重してくれる」

その言い方に、初めて千歳は鷹櫻より年長なんだと意識させられた。

「千歳もさつき言ってたる。迷つたら千歳に相談するといい。あいつは信用していい」

「大叔母様は？」

あの人こそこの家で一番に頼るべき人だと思つていたのに。

「桂子ばあさんも信用していいだろうな。けど当面、少なくとももう一度千歳に会うまでは余計なことは言わないほうがいい。ばあさんに心配かけたくないのなら」

「……私は本当にこの家のこと、何も知らないんだね」

「いきなり来たばかりの奴がこの家のこと把握出来たら怖えよ。それくらいここは奇怪な家だ」

「知りたいような、知りたくないような」

「怖いもの知らず」

ぽつり漏らし、鷹櫻はまた歩き出した。

「ちょっと、待つた！ 置いてかないでよ、迷うのよこの家！」

「わかってる。ほらーい。この壁も隠し扉になつてゐる。階段下に繫がつてゐるからここから入つて見つからないように部屋に戻れ」

「コソ、と鷹櫻はどう見てもただの壁にしか見えない部分を叩いた。

「……ありがとう。でも何でこの家、こんなに隠し通路とか多いわけ？」

「そういう家だから。ほら、開いたからとつとと入れ」

有無を言わさず開いた扉に放り込まれあつという間に壁、もとい扉は閉められ、そのまま私一人が屋敷の中に入れられた。

女子に対し少々乱暴すぎやしないかだと、なぜ鷹櫻はこんなに

隠し通路に精通してゐるのかなど、言いたい事はまだあつたけれど、言われたとおりそのまま大人しく部屋へ戻ることにした。確かにこの家のことなどまだ知らない私にとって、鷹櫻はお釈迦様の蜘蛛の糸並みにすがりたい存在だ。自分で全てを判断できる材料が揃うまでは誰かを頼つたほうがいいんだろう。

そしてまるで泥棒のようにこそこそと誰にも見つからないように私室へと戻り、両手の擦り傷に軽く軟膏を塗り、再びベッドに入つたのはもう午前三時半にならうかという頃だった。

数時間のうちにあつた不思議で変な一人の親戚。
分からぬことだけの家。

今日の昼食会。

そして何より、血。

この家が最も重視するという血。

あの全身がざわめくような感覚。

まるで自分が自分じゃない生き物になつたようだった、と今にならう。

不安と不安に似た恐怖を感じながらきつく瞼を閉じた。千歳も鷹櫻も、大叔母もいるから大丈夫だと聞かせて。

そして眠りについたのは遮光カーテンの隙間から薄い光が差し込み始めた頃だった。

昼食会

ほとんど眠れず迎えた、昼食会といつも同世代の親戚へのお披露目兼親睦会。

今日は気候も良いのでガーデンパーティースタイルで行うと大母から朝食の席で聞いた。

ペールピンクのワンピースにオフホワイトのカーディガンを羽織つてスウェードのブーツを履いた自分の姿を鏡に映して、変なところはないかとしつこいほどに見てみる。変なところ、と言つたらこういう服を着なれていない私自身ながらこの際それには目を瞑ろう。

慣れればそのうち似合つくなる。多分。いや、なつてみせる。チエストの上に置いた写真立てに向かい、息を吐く。

小学生の時の家族旅行の写真には両親と私、そして在りし日の祖父の姿。

「それじゃあ行つてくるよ、おじいちゃん。おじいちゃんの実家なんだから、ちゃんと見守つてよね」

写真の中の祖父は変わらずいかにもひと癖あるという顔で笑っていた。

綾峰本家前庭、午前十一時半。

煉瓦の敷かれた広いテラスには十数人程度の私と同世代の男女が集まっている。その中には鷹槻の姿もあった。危うく声をかけそうになつたが、会つたことは言つなど言われていたのを思い出して素知らぬふりで目を逸らす。

当の鷹槻は私になどまるで関心がないと言わんばかりに周りの人間と話していたが、他の人間はそうでもないらしい。不躾ではない

ものの視線はあちこちから投げかけられる。

居心地悪さに俯いていると隣でパンパンと乾いた音が響いた。それが大叔母の手を叩いた音だと知り、自然背筋が伸びる。他の人間も緊張したように顔を強張らせた。

けれど大叔母はどこまでも柔らかな笑顔を浮かべている。

「皆さん、今日は急なお話であったにも関わらずお越し下さって有難う。それでは早速ですが紹介します。私の新たな家族となつた結恵さんです」

大叔母に促され、私は一步前に出た。

目の前には綾峰姓を有する幾人もの十代の男女。

今まで私が見てきた同年代とは明らかに違つた空気を纏い、私と言ふ存在を推し量ろうとするよつに見てくる。小さく震える体を抑え込み、彼らを見据える。

「綾峰結恵です。昨日よりこちらでお世話になることが決まりました。まだ慣れぬことも多いので、迷惑をおかけすることもあるとは思いますが、どうぞよろしくお願ひします」

僅かに震えた声で挨拶し、頭を下げる機械的な拍手が起こつた。軽く安堵の息を吐くと大叔母がそれぞれ私に自己紹介をするようにな、と目の前の親戚たちに言った。

まばらに立つてゐる誰から声を発するのかと思えば、少し外れた所にいた一人が迷わず私の前へと歩み出た。そのうちの一人は鷹槐だ。

「はじめまして。結恵様」

にっこりと笑いかけてきたのは、少しきせのある茶髪の優しげな雰囲気の少年。

「二ノ峰家戸主長男、鷹久と申します。今、高校二年です」

二ノ峰家戸主長男ということは、この人は鷹槐の兄なのか。

「仲良くして頂けると嬉しいです」

そう言つて鷹久は右手を差し伸べてきた。すぐに握手を求められたのだと気付き、その手を握り返すにつっこりと微笑んだ。鷹槐と

違つて警戒心を解く雰囲気の人だ。

「どうぞよろしくお願ひ致します」

「はい。こちらこそよろしくお願ひします」

鷹久が軽くおじぎするのに合わせて頭を下げる。

そして顔を上げると、今度は鷹楓が口を開いた。

「二ノ峰家戸主次男、鷹楓。中学三年です。……どうぞよろしくお願いします」

無表情、淡々とした抑揚の少ないしゃべり方。無愛想を繪にかいたような人間性は人前であつても健在らしい。同じ兄弟でも鷹久とは真逆の雰囲気だ。だが、それでこそ数時間前に出会つたのは確かに彼なのだと、夢ではなかつたのだと確認できて嬉しくもあるが。軽く頭を下げ合つて、鷹楓はそのまま外れのほうへと戻つて行つた。ついその後ろ姿を目で追つてしまつと、それからすぐに別の人物が愛想よく声を上げる。

「お初にお目にかかります、結恵様。二ノ峰分家長女……」

そういうえば二ノ峰とかも分家と聞いていたが、そこから更に分家もあるのだったか。ややこしいことこの上ないが、血筋を重視する家というのはこういうものなのかもしれない。一応の形式通りの挨拶を交わしながら、そんなことを思う。

二ノ峰、二ノ峰分家、三ノ峰……数字の順通りといふ慣例でもあるのか、挨拶は滞ることなくその順番通りに行われていつた。

それにしてもこれだけの人間を全員覚えるのは大変な努力を要しそうだ。嘆かわしいことに私は人の顔と名前を覚えるのは得意ではないのだ。

早速最初のほうに挨拶を受けた人間の名前がかすみ始めた頃、小さな影が目の前に現れた。

つややかで真っ直ぐな黒髪をそれぞれの耳の後ろで結つていて、大きな黒目がちな瞳が可愛らしい。この中で最年少だろうか。小学四、五年生くらいに見える。

「初めてまして、結恵様。私は四ノ峰家戸主長女、四葉です。高校一

年生なので結恵様より一つ年上になります。お友達になれたら嬉しいです」

「そうはきはきとした聲音で言つて、四葉は私の右手を握つてぶんぶんと握手してきた。

その姿はどう見ても小学生にしか見えないのだが、彼女は今間違いなく一つ年上と、高校一年生と言つた。

これはもしやサプライズではないかとか、一族ぐるみで騙されているんじゃないかだとか頭の中はひどく混乱していたが、こういう場でそろそろ戸惑いを表に出すべきではないだろうと思い直し、取り繕つように笑顔を作つた。

「え、えっと。こちらこそお友達になれたら嬉しいです」「本当に?」

首を傾げ、目を輝かせて四葉は詰め寄つてきた。

「わあ嬉しい。それじゃあ私の事は四葉つて呼び捨てに……」「おい、四葉!」

不機嫌な声に遮られ、四葉はそちらを振り向く。

声の先にはこちらも小学生くらいの少年が立つていた。さりげらの黒髪に大きな吊り目のかわららしい容姿の子だ。

「後にしろよ、まだ俺達も挨拶終わつてねえんだから」

「はあい……それじゃあ結恵様、また後でお話しましよう?」

にこりと笑顔を残して四葉は小走りに鷹槻達のほうへと行つてしまつた。

彼女が鷹槻の言つていたトモダチなのだろうか?

呆然としていると、四葉よりは背の高い先程の不機嫌な声の主が一步前へ出てきた。

「初めてまして。四ノ峰分家長男、律。中学一年です。先程はうちの四葉が御無礼を働き申し訳ありません」

「いえ。気にしてないので……」

と言つたか、彼もやはり小学生にしか見えないように中学生なのか。私より低い身長にかわいらしい顔立ち、声も高めで黙つていれば女

の子でも通りそうなのに。四ノ峰というのは童顔家系なのだろうか。そんな私の思考を読んだかのように律の顔がわずかに不機嫌そうに歪んだ。それでも一礼を忘れないのは口頃の羨の賜物なのかもしれない。

鷹櫻は実年齢より年上に見えて、四葉と律は実年齢より幼く見える。変わった家だ。おかげで鷹櫻とあの二人のことは忘れられそうもないが。律を見送つてすぐに私の前に歩み出たのは金のメッシュが入ったアッシュブルーワンの髪の少年。

ああ、一応名家と言われる家にもこういう奇抜な髪色はいるのか。ついそんなことを思つてしまつ。だが彼の顔立ちは人好きのしそうな柔和ものだ。この髪色させなければ万人受けするだろつ。

「初めまして、結恵様。四ノ峰分家次男、令です。さつきのちびっここの律とは似てませんが一応双子の兄弟です。本家にお嬢さんがいらっしゃると聞いて楽しみにしていたんですが想像よりずっとお可愛らしい方で嬉しいです。今後ともぜひよろしくお願ひします」

そんなことをすらすらと述べて、令は手を握つてきた。この万人受けの顔がなければただの調子のいい男で片づけられそうだが、生まれながらの才能なのか。そう悪印象は受けないから不思議だ。これを普通の男がしたら絶対に悪印象と警戒心で固まつて終わりだろうに。

双子の兄のほうは小学生に見えたが、こちらの弟のほうは加工された髪色と中学生にしては高めの身長から高校生に見える。双子だといつから余計に極端だ。

「あ、ありがとうございます。どうぞよろしくお願ひします」

一応社交辞令として答えると令はにっこりと笑い、そしてどこからか携帯電話を取り出した。

「ところで結恵様、携帯はお持ちですか？ よかつたらアドレス交換なんか……ぶつ」

令は笑顔を張り付けたまま、地面に垂直に倒れ込んだ。背後から押し倒されたかの如く、顔面から地面へと。

「貴方は何をしているの」

高らかな声が惨めに煉瓦タイルの地面に這いつぶばつた令へとかかる。

令の安否を尋ねるより先、その声の主に目を奪われた。

おそらくは令を蹴り飛ばした、長く形のいい脚とピンヒールのブーツの右足が空中で静止している。その足を下ろすとカシンとヒルが鳴った。

色素の薄い緩いウェーブのかかったロングヘアをなびかせ、両手を腰に当てて仁王立ちした少女というよりは女性という印象のその人物。細い眉をひそめ、切れ長の瞳を据わらせてはいるがモデルか何かのように美人だ。

「い、痛えよ薰子」

「お黙りなさい。恥知らず」

薰子と呼ばれた女性は令の手を容赦なくヒールで踏みつけ、私と大叔母の前へと歩いてきた。そしてさらりと髪を揺らして頭を下げた。

「御前にて失礼を致しました。どうかご容赦下さいませ。桂子様、結恵様」

まるで貴族の令嬢のように気高い雰囲気。古風な言葉遣い。これが真正のお嬢様というものなのか。名前までがお嬢様の響きを持っている。

圧倒される私の隣で大叔母が目を細める。

「いいえ。けれど薰子さん、ほどほどにして差し上げてね。せっかくの良い日に流血沙汰は見たくはないわ」

「はい。失礼を致しまして申し訳ございません」

ゆつくりと顔を上げた薰子と田が合つ。

「お初にお目にかかります。五ノ峰家戸主長女、薰子と申します。結恵様と同じく今年十五になりました。どうぞ今後ともよろしくお見知りおき下さいませ」

そうしてまた優雅な仕草で礼をする。

その姿も溜め息が漏れそうなほど優雅だが、それよりも氣になることがひとつ。

(今、今年十五つて言つた?)

「あの、失礼ですけれど薫子さん、学年は……?」

「中等部の三年に在籍しております」

一瞬薫子の笑顔が凍りついた。だが私の頭も凍りつく。

(これで同一年……)

十五歳でこの姿、この落ち着き。やはり育ちが違うのかと軽く衝撃を受けていたところに明るい声が割って入った。

「すみません、結恵様。こいつ老けてて」

いつの間にか復活した令が片手で鼻を押さえながら、もじもじと

薫子を指差す。

「指を差さないつ

薫子の回し蹴りが令を再び地面へと反した。

令は無言でのたうち回り、薫子は何事もなかつたかのようにソロヒトヒコソとスカートについた皺を伸ばしていた。

そしてのたうち回る令を引きずつていく小さな影。律だ。

「……愚弟がお見苦しいところをお見せして申し訳ありません」

ペコリと一礼して令を引きずりながら去つていく。

「律、貴方も兄ならしつかりと弟の手綱を握つておきなさいな!」

「うるせえな、老け顔」

律の小さな咳きに薫子の目がさらに吊り上がつた。

「あ、貴方といい令と言い……つ」

薫子は今にもが噴火しそうな勢いだ。これは放つておいていいのだろうか……止める勇気も自信もないが。

すると薫子と律令兄弟の間に人影が割つて入つた。

「まあまあ薫子。落ち着こう」

穏やかな顔立ちと柔らかな声。鷹久だ。

「鷹久! そこをお退きなさい」

綺麗な顔を憤怒に歪めて薫子は怒鳴る。

「いやね、薰子。お前の怒りはよくわかるから。ナビ後にしよう。

結恵様もびっくりしてるからね」

そこで薰子はハツとしたように私を見て深く頭を下げた。

「し、失礼致しました」

「いえあの、お気になさうか……」

だから怒りを納めてくだることは恐ろしくて口にはできないので、それだけ言うのが精いっぱいだ。

「そうだよー薰子ちゃん。あんまり怒つてばっかじゃダメだよってお兄にも言われたでしょ？」

呑気な高い声が薰子をじさまるようになに言つた。勇氣あるその声の主はある童顔の少女、四葉だった。彼女は鷹槻の隣で困つたように眉を下げていた。隣の鷹槻はと言えば、まったく興味なさそうに今にも寝そうな顔をしている。

この嫌でも覚えてしまつた彼らが鷹槻のトモダチだと言つのなら、類は友を呼ぶという言葉がぴつたりだ。

「よつ四葉！ 標葉さんには黙つていよー？」

「んー後でお菓子買つてくれるならいいよ

「いい年して菓子に釣られてんじやねえよ、四葉」

律が毒づく。

「何よう。律だつてお兄の本をボロボロにじちやつた時、あたしのことお菓子で買収しようとしたくせに」

「あ、あれは！」

「ふつ！ だつせえ律

「令ー てめえ！」

「あーお前ら、いい加減にしろよ。鷹槻、お前も何か言え。本当にお見苦しくて申し訳ありません。桂子様、結恵様」

鷹久が申し訳なさそうに頭を下げる。彼はこの中で一人常識人のかどうも彼らをまとめ慣れていくように見える。だとしたら苦労しているのだろうと思わざるをえなかつた。

「いえ。皆さんお元気でよろしいことだわ

そんな彼らを前にして、大母はどこまでも寛容な人だ。

「さあさあ。それでは昼食に致しましょう。立食形式ですので好きに召しあがつて下さいね」

朗らかに大母が控えた使用人に目配せすると、屋敷内から次々とワゴンに乗った料理が運ばれてきた。目の前ではテキパキとテーブルが整えられていき、シミ一つない白いテーブルクロスの上を様々な料理が彩つていく。

軽く感動していると使用人からグラスが渡された。

「ありがとうございます」

そこに黄色と赤褐色の液体が注がれる。りんごジュースと紅茶のセパレートティーだ。

全員にグラスがいきわたつたところで大母が軽くグラスを掲げて声を上げた。

「それでは新たな家族と皆さん幸いを祈つて。乾杯」

乾杯、と声が上がつてそれぞれグラスのセパレートティーに口をつける。

一瞬遅れて私もグラスに口をつけた。

それから大母は「私がいては皆さん緊張するようですから」と私に耳打ちして何人かの使用人と共に屋敷へと戻つて行つた。確かにそのほうが周りの人たちとは馴染みやすいのかもしれない。かもしけないが……。

「結恵様はどういった食べ物がお好きですか？」

「お取りしますよ」

「結恵様、甘いものはお好きですか？ あちらにシトロンタルトが

……

……やはりいきなり様付け待遇は慣れない。高級店に入ったと思えば大人相手ならまだ何とか割り切れるが、同世代にというこの状況ばかりは。それも明らかに自分より育ちのいい人々にこんな風に接されるなんて。

二ノ峰家以下も序列はあるようだが本家は本当に別格らしい。

千歳と鷹櫻が言った絶対王制という言葉がよみがえつてくる。

そこでようやく、この昼食会の場に千歳の姿がないことに気付いた。軽く周囲を見回してみてもあの不思議と田を惹く容姿の彼はない。

(同世代、だよね？ 鷹櫻のお兄さんと同じか一個上だし。千歳は欠席なのかな)

鷹櫻に聞けば分かるだろうか。

だが知らないフリをしろと言われているし、鷹櫻はある強烈な個性の人々と食事を満喫していた。

出来あがった輪の中に入つていくのは苦手だし、今度千歳に直接聞けばいいか。案外タベは遅かつたから寝坊したのかもしれない。

「結恵様？」

「はつ、はい」

突然呼ばれて声が上ずつた。……情けない。

「さつき言ったとおり、お話しに来ました」

そう言って無邪気な笑みを浮かべていたのは四葉だった。

「四葉、さん」

「嫌ですね～お友達になつたんですから、四葉でいいですよ？」

四葉はかわいらしく首を傾げてこじらると笑つ。

「えつと」

そつは言われても、自分は様付けされてるのに相手を呼び捨てるというのはどうにも抵抗がある。

それに周りの視線が痛いのは氣のせいだらうか……否、多分氣のせいじやない。派閥とやらの影響だらうか。

四葉は私の困惑を読み取つたかのよつに微笑み、その小さな右手を差し伸べてきた。

「あちらでお話しませんか？ ベンチもありますから」

四葉の指差した先には木製のベンチが置かれている。

敵・味方の判別を誤るな。

タベ鷹櫻に言われた言葉。

敵、と言われても所詮は子供。所詮は身内の問題。常識的に考えたらそう大層なものだとは思えない。だがここで私の常識は通用しない。

(敵と、味方)

鷹櫻は進んで私の敵になるつもりはないといった。

その鷹櫻と親しいらしい千歳は絶対的に私の味方だと言った。

そしてこの子、四葉は鷹櫻といった。多分彼女は鷹櫻の言っていた、

彼のトモダチと呼べる親戚の一人。

周囲の視線が無言の圧力をかけてくる。

選べ、と。

本家の肩書を得た私に、どの派閥に属するのか選べ、と。

ここで曖昧なことをして、この家に来た目的を泡に返すわけにはいかない。他の名前も覚えられない、媚を売つてくる親戚たちを信頼するのは今はまだ無理だ。彼らが私を望むとしたら、それは私の後ろの『本家』。あくまで私を踏み台に本家に近づきたいだけ。

四葉達もそうでないとは言い切れないけれど、けど千歳と鷹櫻は信頼出来る。まだほんの数時間程度の付き合いだけど、それは確かに。

だ。

家の事を教えてくれた。忠告もくれた。

それで十分だ。

何より私が彼らと過ごすのが心地いい。

「……じゃあ、あっちでお話しましょうか？」

声にならないざわめきが空気を支配する。

四葉はにつこりと笑つて私の手を取つた。あの幼い言動は何だったのかと思うほど大人びた笑みを浮かべて。

「では、参りましょう」

私の手を引き、四葉は少し離れたベンチへと歩き出した。追い風に押されるように私も前に踏み出す。

「何であんな連中が……」

「まだあの人、この家に来たばかりで何も知らないからよ

「まだこれからだ。あんな連中と合つようなら、むしろ邪魔なだけだ」

そんな剣呑な声が風に乗つて微かに聞こえてきた。
ちくりちくりと刺さるようだ。

「驚いた？」

手を引いたまま振り向いた四葉は、いたずらっ子のような顔をして私を見上げてきた。

「ヤだよね、ここの人達。派閥とか権力とか大好きなの。本家にいると特にそういうのは面倒くさいだろうけど、自分がしっかりしてればすぐに収まるから大丈夫だよ」

小さな手が私の手をしっかりと握つてくる。

「後悔した？　あたし達を選んだこと」

大きな瞳がじっと私を見上げてくる。どこか冷え冷えとした一片の嘘も通じない、そんな瞳で。

私はゆっくりと首を横に振つた。

「むしろ人生ベストストリーに入る好判断をしたと思つていてるところ」
そう答えると、四葉は声を上げて笑いだした。

「あははは。結恵様つておもしろーい。あたし結恵様好きい」

「ありがとう。えつと、出来ればその、結恵様とか敬語もやめてもらえると。様付けとか慣れないから、呼び捨てとか」

四葉は大きな目を一層大きく見開いた。

「いいの？　様付けしなくて？」

「ここじゃそれが当たり前なのかもしれないけど、私はおとといまで本当に一般人育ちだから。友達になつてくれるんだつたら尚さら、様付けとか嫌だなって」

綾峰本家の結恵としてなら割り切れる。

けど友達として一個人の私として付き合つてくれるのなら、そんな距離を置いた付き合いは嫌だ。今日、親戚だという色々な人達に会つて余計にそう思う。

距離を取りたい相手。

近づきたい相手。

千歳や鷹櫻のように、呼び捨てで私個人を見ててくれた人達。

そうして接してほしいと、この不思議な家の中でも特に強烈な彼女達には思う。近づきたいと、距離を置きたくないと思つ。

「結恵、でいいの？」

「うん」

呼び捨てで抵抗があるとすれば、彼女がどう見ても年下にしか見えないからだ。

その四葉は本当に子供のようになじみの邪氣のない笑顔で言った。

「じゃあそつするー。皆、同じじや綾峰でしょ？だから下の名前で呼ぶんだよ」

「ああ、そう言えばそうだよね」

綾峰さん、綾峰君だと誰だ誰だか分からぬ。

「親戚同士でもあんまり仲良くないと屋号で呼んだり呼ばれたりするんだけど、友達同士だと名前で呼ぶの。年も近いから呼び捨てであたし年齢的にはお姉さんなのに」

四葉は溜め息がちに言った。

言つてることはわかるが、やはりどう見ても小学生にしか見えないのが微笑ましいといつが、可愛いといつが。

「精神的にも四葉は『お姉さん』じゃねえだろー？」

茶化すような声をかけてきたのはあの金メッシュの派手な頭。確かに、今。

四葉は両手に腰を当てて、眉を吊り上げた。

「何ソレ。どういう意味い？」

「そのまんまの意味だろ」

令から少し離れたところでサンドゥイッチをお皿につぱこに持っているのは四葉に続く童顔、律。律はじっと私を見た。

「……アンタ、じつち来んの？」

「いや、の意味するのが場所的な意味合いでないのはすぐわかつた。

四葉の言ったベンチの側。律の近くには鷹櫻にその兄の鷹久、そして薰子がいた。

鷹櫻以外が視線を私に向けてくる。

攻撃的でも値踏みするようでもなく、ただ私の動向を傍観するようだ。

この綾峰家の敷地内……どういう意識を持つて集団を成しているのかは分からぬが、彼らに属するのかどうかをただ見ている。きっと彼らは私を拒みもしなければ、去っても追うことはないだろ。

彼らは他の子供達とは違い、本家というもののへの執着をそれほど持ち合わせていないように見えた。絶対的な力に追従するのではなく、隙あらば利用しようという野心すら感じる。

きっと私にはここが一番合つてる。

そう思い、一步踏み出す。

「綾峰結恵です。よろしく」

そして一番に。

「様付け敬語、しないでくれると嬉しいんだけど」

令と薰子が目を丸くし、律は「物好き」と言い、鷹久は笑い、鷹櫻は相変わらず興味なさそうに私を見た。

昼食会の終わった日の夜、私は密かにあの石造りの回廊を通りて千歳の部屋へと向かつた。ドアをノックしてから室内に入ると、お線香の香りに似ているけど煙臭くない、独特的の甘辛い香りが漂つていた。

「いらっしゃい」

明るい声と無邪気な笑顔が当たり前のように迎えてくれる。

千歳はソファに座つて大きなファイルに目を通していろいろだつた。そのそばに黒い円柱形の物体が置かれている。それが香りの発生元らしい。

「それ何？ 変わった香り」

その黒い円柱形を指差すと、千歳は手のひら大のサイズのそれを軽く持ち上げて見せた。そこからは黒いコードが部屋の隅のコンセントまで伸びている。

「香炉。お香をセラミックヒーターであつたため薰らせるタイプ」「直接火をつけるんじゃなくて？」

お香と言つたら直接火をつけて煙が香るものだと思つていたが。そんな私の考えを読み取つたように千歳は笑い、少し手を伸ばして床の上に置いてあつたハマグリの貝を取つて一枚に割つた。中には黒い丸薬らしきものがいくつか入つている。

「練り香って言って、間接的に熱を与えて薰らせる種類のお香。源氏物語なんかに出てくる薫物つてのはこれのことだよ。平安時代なんかはこれが一般的だつたんだそうだ」

源氏物語 자체はきちんと読んだことはないが、あの時代に香りが重視されていたらしいことは知つていてる。

「それ、平安時代のなの？」

「まさか。だいたい当時と同じ材料、製法だけどこれは俺の手作りハマグリを合わせて千歳はすごいだろーと言わんばかりに自慢げ

に笑う。

「自分で作れるものなんだ？」

「うん。材料さえあれば子供だって作れる。手作りキットとかも売ってるし、当時のレシピも残ってる。それを参考にして作ってみたんだよ。黒方くろはなって言つて主にめでたい時に焚くやつ」

「へえ。何かおめでたいことでもあつたの？」

私が問いかけると、千歳は首を傾げて黙つてしまつた。
しばらくそうしていたかと思うと、すつきりした表情で手を叩いた。

「あ、結恵がうちに来た。ほら、めでたい！」

そんな取つてつけたように言われたつてあまり嬉しくない。
私が脱力していると千歳は床にファイルを捨てるように置き、立ち上がつて向かいのソファに座るように促してきた。

「とりあえず座れよ

「どーも」

遠慮なくソファに座ると千歳はこいつと笑つて「何か食う?」
と聞いてきた。

それを辞退して、ここまで持つて來た疑問をまずぶつける。

「ねえ、何であんたは昼食会に来なかつたの？」

「んーだつてアレは俺が行く席じゃなかつたし」

千歳は簡易キッチンでマグカップにココアの粉とお湯とミルクを

注いで持つてきて、そのうち一つを私の前に置いた。

「それより結恵は鷹櫻のところを選んだんだつて?」

「何で知つてるの?」

「鷹櫻に聞いた。メールつて便利な。文明の利器つてやつだなー」

からから笑いながら千歳はマグカップに口をつけた。

「昼食会は敷地内の十代の奴らが呼ばれたつて聞いたけど、どうだつた?」

「鷹櫻とその仲間たちが面白いことがよくわかつた」

率直に述べると千歳は一瞬置き、声を上げて笑いだした。

「あいつらはこの家でもかなり変わってるからな。俺は鷹櫻以外は直接会つたことないけど」

何とはなしに千歳はそう言つた。

けれどその言葉が今一番の疑問をより確かなものとした。

「千歳つてこの家でどういう立場なの？」

「どういつつて？」

「最初に千歳、私にどこの家の奴だつて聞いたよね？ それと同じこと、私も千歳に聞きたい」

千歳は笑みの形は崩さぬまま私を見た。

「十代が集まる席だつたんだよね、昼食会。そこにも来なかつた。鷹櫻以外には会つたことはないつて言つた。けどこの家全体の事情には鷹櫻よりも詳しそうだし。千歳はこの家の何なの？」

「うまく言葉がまとまらない。疑問が多くすぎてどこから聞いていいのかも、何を聞くべきなのかもわからなくなりそうだ。」

ただ一番に浮かぶのは、千歳がこの家にとつてどういう存在なのかということ。

昼食会という短い時間だつたが、綾峰家の側面に触れていくらか分かつたことはある。

それは、綾峰家の序列は絶対だと言つ事。

本家の絶対的意識は聞いた通り。後は家格とでも言えばいいのか。二ノ峰を屋号とする鷹櫻達兄弟に対し、二ノ峰分家以下他の家に属する人間は不満があつたとしてもそれを口にする事は許されず口先だけでも敬うつということ。

鷹櫻達がこの家の子供達の派閥の中で一風変わつてゐること、それを快く思わない者達は少なくないこと。だがあの強い個性の一派の頂点は鷹櫻・鷹久の二ノ峰家の兄弟である以上、この家で彼らに意見できるのは本家の人間だけだということ。

ほんの数時間でくだらないほどに封建的な家風を垣間見た。

そしてそれをくだらない、と強く認識してゐるのは彼らに不満を持つ他の派閥の子供達ではなく鷹櫻や四葉達であるということを。

「……ここは確かに他人の目の届かない場所だけど、千歳と鷹櫻は同等のように見えた。それによく考えたら、この部屋だって本家屋敷の一部だよね？」

じつと千歳を見つめると、彼はマグカップを置いて重く息を吐いた。

「全てに目を閉じて静かに穏やかにここで時間を感じると、目を開いて全て見ることで奇怪な現実に巻き込まれる時間を過ごすの、どっちがいい？」

千歳の質問は抽象的だった。だが何となくの意味はとれる。だから迷わず答えた。

「もう半分目を開いたようなもの。奇怪な現実の存在を知ったからには無視して過ごすなんて氣色悪くて無理」

その答えに、千歳はもう一度息を吐いて膝の上で両手を組んだ。

「口達者」

「おじいちゃんに言われた。自分で決めたことは貫き通せって。片足突っ込んだからには中途半端も曖昧も嫌。気分が悪い」

「その上頑固」

頑固さはじいさんの遺伝子だよな、と言つて千歳はソファの背もたれに肘をついた。そして無感情な瞳が長めの前髪の間からまつすぐに見てくる。

「どの家に属するかつて言われたら、一応俺も本家に属することになるかな」

やはり。口に出しそうになつたが、黙つて先の言葉を待つ。

「けど俺は少しばかり特殊。本家に属してはいても、それが表沙汰にされることはない。そんな存在」

「え……？」

無感情な声が紡ぐ言葉がいまいち理解できない。

この家は本家の絶対王制だと言つたの張本人が、その本家に属する自分の存在は表沙汰にされないと言つ。

私の戸惑う様子を見て千歳は薄く笑い、背もたれに寄りかかった。

「だから十代限定の昼食会に出席することもない。鷹櫻も言つたんじゃないかな？俺に会つたことは誰にも言つなかつて」

「……言われた」

確かに言われた。

俺と千歳に会つたことも誰にも言つたな。

低く押し殺した、けれど強い声で。

絶対にだ。

確かに言われた。暗にそれを口にしたら面倒事になる、とも。鷹櫻と私が会つていたら面倒だと言つのはおそらくお互いの立場的な問題。本家である私が二ノ峰の鷹櫻を巣鳳していると周囲に思われないため。そうなると自然、本家は二ノ峰家を擁護しているような形になるだろうから。

では千歳は？

本家に属するのに表に出ない存在。

接触したことを口外すべきでない存在。

「今日の昼食会の参加者で俺がここにいることを知つているのは、鷹櫻と結婚くらいのものだろうな。あとは……四ノ峰のチビ共も悔れないらしいからもしかすると薄々感づいてはいるかもな」「それじゃあ……他の人達は千歳がここにいることを知らないの？」
そんなことあるわけない。

一人の人間の存在をこの狭い社会で隠し通せるわけ、そんなわけがない。

だが千歳はそんな私の思考を容赦なく切り捨てる。

「俺は本来ここにいるべきじゃないんだよ。宵闇の太陽、灼熱の雪、千年万年尽きない命。それくらい俺は不自然にここにいる」歌うように、そんな詩的な言葉を他人事のように紡ぐ。

「……意味わかんないよ」

俯いて、何とかそれだけを言葉にした。本当は何となくわかるつているのに。

夜に太陽は浮かばない。

灼熱の雪は存在しない。

尽きない命は有り得ない。

そんなこの世の道理に反する程に、千歳は「……」とがおかしな存在だと呟つことなのか。

「……でも昨日、千歳は言つたよね？ 私がこの家の跡取り候補だつて他の親戚の人たちは思つてゐる。だつたら条件は千歳も同じ……」ううん、ずっとこの家にいた分だけ千歳のほうが立場は上でしょ？ それなのに何で？」

「「」が綾峰だから」

千歳の言葉は短く穏やかで、残酷な程に簡潔なものだった。

綾峰だから。

全てはその言葉で片づけられる。「」が特殊な場所、綾峰という家だからといふ理由で、私が見てきた常識なんて何ひとつ通用しなくなる。私からしたら不条理でしかないことがまかり通る。「おかしいよ、そんなの……」

嫌だ。ものすごく嫌だ。

そんな簡潔な言葉で千歳の存在が否定されていくようだ。当の千歳は気にもしていらないのかもしれない。こんなことを感じるのは、ここでは私だけなのかもしれないが、

だけど嫌なんだ。

千歳は私の目の前にちゃんといる。食べて笑つて、言葉をくれる。当たり前のように存在しているはずの彼なのに、「」に存在することが不自然だといふ事実がどうしようもなく嫌だ。

「……」

言葉にもならない。ただ悔しい。何が悔しいのかもよくわからなければ、悔しくて仕方ない。この悔しさを伝える術がないことも、自分が無力なことも悔しい。他にももっとたくさんある気がするがわからない。

言葉にならない。形にならない。

どうしていいのかわからない。

「 結婚」

優しい声が降つてくる。

その声が本当に穏やかで泣きたくなつた。けれどそんな顔、絶対に見られたくないて俯いた。

そうすると頭に手を置かれた。子供にするよつこ、安心させるようになつた。

瞬間、一滴だけ涙が零れ落ちた。

気を抜いたらそのまま泣き喚いてしまいそうになる。

千歳の前では小さな子供のようになつてしまつ。そんな自分を抑え込んで、強く強く思いを言葉にする。

「……千歳はここにいる」

今にも涙が溢れ出しそうな顔を上げ、千歳を見据える。

「私の前にいる。不自然なんかじやない。千歳はここにいるから、触れられるから、言葉をくれるから。ちゃんといる。不自然なんかじやない。おかしいことなんかない。絶対ない！」

自分でも何を言つているのかわからない。

でも伝えたかった。

まるでどうでもいいことのように、自分の存在を不自然と言い切る彼に。

千歳は私の頭に手を置いたまま少し目を丸くした。

「私はここの常識なんか知らないから、今日の前にあるものが『自然』なの。だから千歳がいることが当たり前で、一緒にお茶してお菓子を食べて、しゃべって……全部全部、ここに千歳がいるから出来ることで……」

ああ、もう。本当に何を言つているのか分からぬ。

「私は千歳に会えて嬉しい。あなたの変なところもマイペースすぎるとこころも好き。だから自分で自分が不自然だなんて言わないで」

そんな悲しくなること言わないで。それが当たり前のようになつた。

勝手な自分の意見を押しつけて、何をやつているんだらう。

千歳は黙つて私を見下ろしていた。困ったのか呆れたのかわからぬが、不思議そうな顔をして。やがて口を開いた千歳の声には困惑にも似た感情が滲んでいた。

「それってさ」

鬱陶しい奴と思われたかもしれない。それか子供だと物知らずだとか。

そんなことを考えていると知らずまた俯いてしまつ。

けれど千歳の行動なんて、私ことさにはこれっぽちも測れやしなかつた。

「もしかして告白?」

千歳の困惑を滲ませた聲音が、どこか楽しげなものへと変わつて顔を上げると、千歳はあの無邪氣な子供のような笑みを浮かべていた。私を見ていた。

「……は?」

「だつて今、好きつて言つたら?」

楽しげな千歳の言葉が頭の中で何度も何度もリピートされる。そしてつい先ほどまで勢いのままに口にした言葉を何度も何度も再生させる。

好き?

好き、好きつて……言つてい、た。確かに言つた!

そう認識した途端、体中の血液が顔に集まつたように熱くなる。「違つ、そういうんじゃなくて! 好きつて言つたのはだからほらアレ! 普通に友達とかそういう……」

「何だ、男心弄んだのかよ。ひつでー」

笑いをかみ殺すように千歳は体を震わせる。

「そつ、そんなこと微塵も思つてないくせに!」

「なんことないつて。あー傷ついたなあ。何かついでに貶されてた気もするけど、すごい嬉しかったのになあ

白々しい!

「う、嘘つけえ！」

「嘘じやないって。マジだよマジ。神仏に誓つて真実」

真っ赤になつて訴える私の言葉なんて柳に風。だけど頭に置かれた手だけは相変わらず優しい。

「本当に嬉しいよ」

そう言って穏やかに目を細める。その表情にからかいの色はない。ただ優しい。

そんな顔をされるとこれ以上何も言えなくなる。
滅茶苦茶だつた心が静かに落ち着いていく。顔は相変わらず熱いけれども。

「結恵はいい子だな」

「いい子なんかじゃないよ」

本当に子供に対してのような物言いについて唇を尖らせる。

「何だ、拗ねた？」

「拗ねてない」

ぷいと横を向くと、また千歳はおかしそうに笑った。

大人の余裕のようなその態度がまた腹が立つ。

「あーもう！一歳しか違わないんだから大人ぶらないでよー。」「十代で一歳差つてでかくない？」

「全つ然！」

力を込めて言うと千歳は声を上げて笑った。

絶対にからかわれている！

少し早くに生まれたからって、こんなに露骨に子供扱いすることないだろうに。確かに高校生から見たら中学生なんてまだまだ子供だろうが。

……あれ？

「そう言えば千歳つて高校行つてるの？」

「ん、何？ 急に？」

「いや、ふと思つただけ」

どうにも千歳はこの地下にいるイメージが強くて、ここ以外にい

る彼は想像できない。会つてまだ一日しか経つてないのにそんなことを思うのも変な話だが。

「んー俺は高校行つてないよ」

欠伸をしながら千歳は答えた。大したことじやない、と言わんばかりに。

それは千歳が『不自然な存在』だから？

そう聞こうとして慌てて口を噤む。

別に高校に行つていないこと自体に偏見はない。学校という場所へ行かなくても勉強は出来るし、勉強することだけが生きる道じやない。

けれど千歳の場合は、それは彼のこの家の立場からなのかと思つてしまつ。この家の主である大叔母が本人の自由意思を奪うようなことをするとはとても思えないが……。

(……そう言えば)

大叔母には娘が一人、孫が一人いると一度耳にしたことがある。大叔母はあまり進んで話したがらないことだつたが使用人の誰かがそんなことを言つていた。

綾峰本家当主夫妻の一人娘はあまり素行のよろしくない、いわゆる不良だつたそうだ。十代のうちから通常なら警察沙汰になるようなことに何度も関わり、実家の権力、財力を使って放蕩の限りを尽くしたらしい。日常生活や異性関係、そんないくつかが重なつて厳格な大叔母は一度はその実の娘と絶縁したと言う。だが今は亡き大叔母の夫、元当主は密かに娘にお金を手渡したりなどして生活の手助けをしていた。それから後に娘は誰の子とも知れぬ子供を出産し、大叔父の説得もあつて大叔母も折れ、娘は綾峰家へ戻ることを許されたのだそうだ。

だがその孫も成長するにつれ素行不良が目立ち始める。何が原因かは詳しく知らないが数年前、やはり過ぎた素行不良が原因で母子共々再び絶縁されたといつ。

本来ならばその孫がこの家を継ぐ予定だつたのだと若い使用人が

口を滑らせる形で話してくれた。そしてその孫は、私よりいくつか年上の男だとも聞けた。

思わず千歳を見た。

私より一一つ年上の男。

バツイチ……十七では結婚はできないから正確には違うのだろうが、子供を産ませた相手がいたという、古い世代の人間からしたら受け入れがたい事実。

本家でありますながら表沙汰にされない存在。
もしかして千歳が……。

「結一恵つ」

明るすぎるほどに明るい声がかかり、我に返る。
千歳が笑っていた。

唇だけで。その瞳はどこまでも鋭い。

「あ……」

思わず言葉に詰まってしまう。

千歳は軽く笑って、手つかずの私の前に置かれたマグカップを見た。

「もう冷めちゃつたろ？ それ」

「え、ああ、ごめん。せっかく出してくれたのに」

「いいよ。新しく淹れ直してくれる」

千歳は軽やかに立ち上がりてマグカップを持ち、簡易キッチンのほうへと向かつた。

その背に、これ以上詮索するなどいう無言の意思を見た気がした。
確かに詮索されて気分が良い人間なんていないだろう。

千歳は話しやすい。だからつい踏み込みすぎた。誰にだつて踏み込まれたくない部分はあるのに。

（私、昨日と同じことしている……）

自分の学習能力のなさに心底嫌気がさす。

甘辛いはずのお香は辛さばかりが鼻に残る。

「結一恵、砂糖いる？」

簡易キッチンから声がした。その声音からは何の頬着も感じない。マイナスな感情を引きずらない。引きずらせない。

……千歳は大人だ。

湯気の立つたマグカップが再び私の前に置かれる。

「砂糖入れたけど、足りなかつたら自分で足して」

そう言つてショガーポットも持ってきた。

「うん。ありがとう」

「どーいたしまして。それで今度は俺にも話聞かせてくれよ。昼食会はどうだった?」

「緊張した」

「そりゃ『ご苦労さま。でも飯は美味かつたろ?』

何事もなかつたように千歳は笑みを湛えている。私の後悔なんて吹き飛ばすような明るい声で、表情で。しつこく気に病まなくていいから、と言われたような気になつてしまつのは血口肯定が過ぎるだろうか。

マグカップ片手に千歳は、お香の香りとココアの甘い香りは最高に合わない失敗だったなどと言つている。

マグカップの温かさが、白い湯気が罪悪感を包み込んでくれる。

「……鷹櫻に前もつて、タベ会つたことは誰にも言つた、知らないフリしておけつて言われたからその通りにしてたんだけどさ」

「うん」

少し楽しげに聞こえた相槌に、いつもの調子で舌が回り出す。

「私はうつかり話しかけたりしないようにすぐ氣を遣つたのに、鷹櫻は今にも寝そうにボケーっとしていて何かこいつちまで氣が抜けた」

それを聞いた千歳はおかしそうに笑つた。

「あいつはそういう奴なんだよ。二度の飯より睡眠が好きつて。前にすっげー真面目な顔して『三年寝太郎になりたい』とか言つてたし

「うわ、似合わない! けど言こう

「タベは遅かつたしな。家の奴に叩き起にされたて昼食会に行つたんだろうよ。家に誰もいなかつたらアイツも昼食会は欠席だつたな、絶対」

「お兄さんのはうはしつかりしている感じなのに」「

甘い口口アに口をつけて、愚痴を零すように咳く。

「タイプは違うけど皆も美形だつたな。特に鷹櫻と薰子と千歳は揃つて並ばれたらモデルみたいだし」

「俺も?」

意外そつに千歳は聞き返していく。

「何だ、無自覚？ 身長はモデルには少し足りないかもだけど、顔と雰囲氣で十分カバーしてゐるじやない、千歳は」

千歳は身長は平均的だと思う。鷹櫻よりは確實に低いし田算で170センチくらいか。身長だけを見たらモデルになるには足りないが、その圧倒的な存在感はどんなモデルや俳優にも負けないとと思う。「でもびっくりしたな。鷹櫻もだけど薰子も私と同じ年つて。それに四葉と律もここだけの話、小学生かと思つたらひとつ上とひとつ下なだけで。大人っぽい家系なのかと思つたら極度の童顔まで何でもありだよね、この家」

「へえ」

千歳が興味深そうな声を上げる。

「そんな童顔なのか?」

「そりゃあもう…」

思わず言葉に力が入る。

「かわいい子供がいるつて思つたら私より一個上だつて言つんだもの。本当にびっくりした。それで次に出てきた子も小学生みたいになつて思つていたら中一だつて言つし。出来るだけ感情を顔に出さないようにつて意気込んでいたんだけど、驚きすぎてそんな意気込みもすっかり忘れたくらい」

一気に今日の昼間見た不思議を口にすると、千歳がここにこと私を見ていた。

「……何？」

「いや。呼び捨てるくらい仲良くなつたんだなーって」

「また子供扱い……」

だがどう足搔いても千歳は私より大人だつてことは認めざるを得ない。気恥ずかしくなつてマグカップで顔を隠すようになる。

妙に格式ばつたところがなくて取つ付きやすいから。鷹櫻とその仲間たち

「変わり者ばつからしいからな。類は友を呼ぶつてやつか」

「私から見たら千歳も十分変わり者だけね。確かに類は友を呼んでる。……ああ、だから千歳と鷹櫻は仲がいいのか」

その仮説に納得がいつて手を叩くと、千歳は一瞬渋い顔をして言った。

「それ、ケンカ売つてるのかー？」

「別に売つてないよ。素直に感想を述べただけで」

にこつと笑つてそう言つてやる。

「……その発言だけで十分売つてるよな」

呆れたように千歳は自分のマグカップにシュガーポットから砂糖を小さじ一杯突っ込んだ。

そしてカチヤカチヤと陶器と金属のぶつかり合つ音を立てながら、先を促してきた。

「で、その変わり者共とはどうだつたつて？」

「えつと、挨拶をしたら」

頭の中で昼食会での記憶を再生させながら、それを言葉にしていつた。

はぐれ者たちの昼食会

強烈な個性の持ち主である綾峰家の人々に「よろしく」と様付け敬語はやめてくれと言つて。

彼らは料理の置いてあるテーブルから少しばずれたところに、固まつているというにはそれぞれ好きに過ごしていた。

六人の視線を浴びて心臓は大きく音を立てる。そのどこか張りつめた空氣を破つたのは四葉だつた。片手で私と手を繋ぎ、もう片方の手を突き出してピースをして。

「ほら！ 結恵つちと仲良くなれたよ」

胸を張つて四葉は言つ。

「結恵つち……？」

ある意味「お嬢様」以上に慣れない呼称に四葉を見ると、まるで小動物のように大きな目が潤んで見上げてきた。

「ダメ？ 結恵つちって呼んじゃ」

その弱々しい声音に何だか幼児虐待している気分になつてきた。実際は年上だと分かつてゐるのに、視覚情報といつのはこつも厄介なものなのか。

「つうん、別にいいよ」

ひきつった笑顔で答えると四葉の顔がぱつと明るくなつた。

「ほらあ。あたしと結恵つちはもう仲良し！ やーっぱりあたしは正しかつたあ！」

四葉の言葉の意味が理解できず他の五人に目をやるとあの田つきの悪い童顔、律がそっぽを向いて呟いた。

「別に正しいとか正しくねえとかの話じやなかつただろ、それ」

可愛い顔しているのに何て可愛げのない態度だろう。いや、見ようによつてはこれは可愛いとも言うのかもしれないが。

「まあ、四葉と言つよりも鷹櫻が言つたことが正しかつた証明にはなつたわね」

初対面の印象としては最も強烈だったお嬢様、薰子が上品に膝の上のハンカチにサンドウイッチを置いて言つた。

鷹櫻が？

何を言つたのかと、思わず彼に視線をやつた。だが鷹櫻はジューースを片手にあからさまに興味のなさそつた顔を上げた。

「そんなこと言つたか？」

「言つただる。自分の発言には責任持ちなさいつていつも言つてるだろうが」

無気力な鷹櫻の頭を鷹久が軽く叩いた。それから鷹久は私のほうを向いて済まなさそうな顔で軽く笑つた。

「コイツいつもこんな感じなんだ。一応本人に悪気はないから怒らないでやってくれると嬉しいんだけど」

「あ、別に怒つてないですから」

慌てて顔の前で手を振ると鷹久は苦笑する。「本家のお嬢様に敬語で話すことはあつても、敬語を使われるとは思わなかつたな」

「公私問わず、私達に敬語を使う必要はありませんよ？」

薰子が長い睫毛を瞬かせ小首を傾げて言つた。

そこに茶々が入る。

「てか薰子。俺らも今は敬語ナシでいいつて言われたじゃんかよ。場合によつちやお前、本家の意向に逆らつたーつて見なされるぞ」金メッシュの髪が笑うたびに揺れる。

「私は貴方と違つて礼儀を重んじる傾向にあるの。今」

出来の悪い子供に言つて聞かせるように薰子は言つたが今はさうこ笑う。

「単に柔軟性が低いだけじゃねーのー？」

「……つるさいわ」

田にも止まらぬ速さで今はその場に撃沈する。どうやら薰子が令の顎に拳を叩きこんだらしい。

見かけによらず随分好戦的なお嬢様だ……何か格闘技でもやっているんだろうか。護身というより、明らかに先制攻撃を目的としたような類の。

「薫子……やつきも注意されたばつかだろ?」

鷹久は呆れかえったように息を吐いた。

「標葉がいねえとすぐこれだ」

わざとらしく律が溜め息を吐くと、薫子の瞳が鋭く光ると同時にあたりに鈍い音が響く。

それが薫子の右ストレートとそれをガードした律の腕だと気付くには少し時間がかかった。

「ハン。お前の攻撃なんて単調すぎて今はともかく俺には通じねえよ」

「……兄弟揃つて口が減らないわね。それから『標葉』じゃなくて、

『標葉さん』でしょ?」

「標葉がいいつて言つたんだからいいんだよ」

「改めなさいな」

「俺がお前の言う事聞くと思うか?」

「全く思わないわ」

それから演武のよう、と言つていいほど律は綺麗に薫子の攻撃を流して行つた。律のほうが強いのかと口を開けて軽く感動していると突然カーディガンの袖口を引かれた。

「結恵つち、すつじい田え輝いてる」

四葉が楽しげに話しかけてきてようやく我に返る。

「え、や。『じめんなさい、見事だなーと思つてたらつい夢中に』

「別に謝ることじゃないよ。薫子ちゃんはあれで凄く手が早いのね。で、今はそれをどうにか出来るほどちゃんと護身術とか習つてなくて、律は格闘バカだから薫子ちゃん相手でも負けないんだよ

「格闘バカなんだ?」

あんなに可愛い外見に似合わず、とは口にはしない。

「格闘技は一通りやってたつて記憶してるよ? 空手、合氣道、柔

道、ボクシング、剣道、少林寺拳法、居合、ムエタイ、テコンドー、鎖鎌、それからあ……」

「ガキの頃からほほ毎日何かしら習つてたからな。筋金入りだ」

からからと鷹久は笑う。

「笑い事じやねえよ」

額を押さえながら涙目になつて令が言ひ。

「薫子といい律といい、どいつもこいつも俺で新技練習しようつとむんだから嫌になる。俺はサンドバッグじやねえつつの」

頃垂れる令にも鷹久は笑みを崩さない。

「律も凝り性だからなあ。一時期は鷹槐に毎日決闘だとか言つててたし」

「鷹槐に？」

思わず呼び捨てしてしまつたけれど、誰も気にはしていないみたいだつた。

「こいつも昔、キックボクシングを軽くやつてたことがあるから」「へえ」

何だか意外だ。今はこんなにやる氣なもんつなの。

実際自分に話題を向けられた今、鷹槐はものすゞく面倒くさそうな表情をしている。

ちらりと鷹槐を見ると、話しかけるなと言わんばかりに顔を逸らした。

……どこまでも無氣力な奴め。

「護身術の延長だったんだ。俺よりやる氣ないのに、けつこういいところまでいかれて兄としては悔しかつたな」

「鷹槐は昔から適当にやつても何でもできちゃうもんねえ」

それは腹が立つな。当の鷹槐はそんなことお構いなしに欠伸しているけれど。別にいいがどこまでやる氣ないのか、こいつは。

周りに一切興味を示さずに船をこじき出した鷹槐を見ていると、鷹久が声をかけてきた。

「ところでもう一度改めて自己紹介したほうがいいかな?」

「え。あ、はい。出来れば」

何となくは覚えたけれど、これだけ人数がいると混乱しそうになるからそのほうがいいだろう。

鷹久は笑顔で頷いて、まだ打つて流してを続いている薰子と律に声をかけた。

「お前ら、いつまでも遊んでないでこっち来ーい。もつかい自己紹介！」

鷹久の呼び声に一人はびたりと動きを停止させてこちらを見た。

「もつかい？ サッキやつたる？」

律が早速不満げに声を上げる。それから私を見てあからさまな溜め息を吐いた。

「これくらいの人数、一回で覚えるよ」

案の定可愛げのないセリフを吐いた律の頭を背後から薰子が叩く。「だったら貴方は覚えられたって言うの？ あれだけの人数が一度に似たり寄つたりな挨拶をしたのよ。まともに覚えられる人間のほうが少ないわよ。自分が出来ない事を他人に求めるのはおやめなさい

「つてーな、おい！」

頭を押されて睨みつける律など視界にも入れず、薰子が右手を差し出してきた。

「薰子です。さつきも言ったとおり貴女と同い年だから学院での世話役を務めさせて頂くことになると思います。何かわからないことがあつたら遠慮なく仰って」

律や令に向けていた剣呑な雰囲気とは打つて変わったように柔らかな笑顔で。

「あ、ありがとうございます。どうぞよろしく。えっと、薰子……さん

彼女の右手を取つて握手すると、薰子は柔らかな笑みを浮かべた。

「薰子で結構よ。私も結恵と呼ばせて頂くから。こちらこそよろしく

そう言つて軽く首を傾げる姿は大輪の薔薇のように綺麗で無駄に

緊張してしまつ。テレビでもそつそつお目にかかるほどの美人で、とても同年代とは思えない上品な物腰と言葉遣い。

現実にこんな人がいるとは。それも一応とは言え親戚だなんてまだ信じ難い。

「次、あたしー！」

大きく拳手したのはある意味、薫子とは正反対の四葉。

「あたしも四葉でいいからね。今日は来てないけど上にお兄ちゃんが一人いるよ。でー 薫子ちゃんと付き合つてるの」

「よ、四葉つ！..」

薫子が綺麗な顔を頬を真っ赤にして四葉に詰め寄つた。

「あはは。薰子ちゃんが照れてるう」

「お黙りなさいつ」

真っ赤になつて慌てる姿を見ると、やはり彼女の年頃の少女なんだと初めて思つた。

「四葉……のお兄さんてどんな人？」

つい「さん付け」しそうになつたところを堪えて尋ねると、四葉はにつこりと微笑んだ。

「んつとね、あたしより六歳年上の大学生だよ。ちょっとぼーっとしてるところもあるけど、でもすごく優しい人なんだ」

「シバさんつて言ってマジにいい人だよ。俺たちも昔はよく遊んでもらつたんだ」

鷹久が真っ赤になつた薫子に水の入つたグラスを渡しながら言つ。律が何かしら皮肉を言つんじやないかと思つたけど、意外にも彼も鷹久の言葉に頷いている。

どうやらその標葉さんという人は本当にいい人らしい。

「あ、でもね」

思い出したように声をあげ、耳打ちするように小さく言つてきた。

「本当は内緒なの。このこと知つてるのはここにいるあたし達だから、結恵つちも内緒にしてね？」

「内緒？」

「……標葉さんは四ノ峰で、私は五ノ峰だから」

私が疑問を口にするより早く、俯き加減に薰子が口を開いた。

「ここでは家の序列がとても重視されるの。四と五は隣り合つた数字だけれど、ここでその差はとても大きい」

乾いた声がそう告げる。その表情は酷く悔しそうで、それでいて寂しげだった。

けれどもう一度顔を上げた彼女は一番最初の印象と違わない、凛とした強い瞳をしていた。

「だから私は綾峰のこの封建的な制度を壊してやりたい。私が標葉さんといることを、誰にも文句なんて言えないように。そのためには貴女を利用することがあるかもしれない」

ああ、そうか。

彼らが他の子供達と違つて見える理由。

他の子供達は、ただ本家の威光にあやからうとしているようにしか見えないのに、薰子たちは違つて見えた。

今まで流されるように生きてきた私が彼らに惹かれる理由。

薰子も他の皆も、自身を確立している。

誰にも何にも侵されることのない、自分をしつかりと持つていて。近づきたいと思ったのはきっと彼らのようになりたいと思つていた自分がいたから。誰にも侵されることのない自分になりたいと思つたからだ。

「……私も、私の目的のためにこの家に来た。だからいいよ。利用できる時は利用してくれれば。私もきっとそうすると思うから。でも出来れば協力が必要だつて言つなら協力させてほしい。一方的に利用されるんではなくこちらからも助力させてほしい」

薰子の大きな瞳が一層大きくなる。

「わ、私に出来ることはまだほとんどないけど、出来ることはする。だからどうしてもつて時以外は一言言つてほしい。それで最大限に協力できればって……思うから。私じゃダメだつて判断したなら利用でいいけど。だけど最初から利用されるだけの関係だつて言うな

らいらない」

そんな考え、ここじゃ甘いのかもしれないけれど。でも利害関係だけというのも嫌なんだ。

そんな関係慣れきっているけれど、でも出来ることなら対等な関係を築きたい。こつして素で話すことを許される相手となじ尚更。利用してされて、という関係も私には必要だ。けど、どうせならそれだけじゃないほうがいい。

それはきっと、私が他人を利用しようとしているから。矛盾した考えだけれど、だからこそ『対等な』利害関係でありたいと思うんだ。「……変わっているのね」

薫子はまだ目を大きく見開いていた。

「下手すると損しそうだけど、ある意味フェア。ある意味自信家」そう呟いたのは鷹櫻だった。

興味なさそうにしていたはずなのに、いつの間にか私を見ていた。「フェアなだけの人間より自信家で、自信家よりはフェア。俺は嫌いじゃない」

淡々とした彼特有の抑揚の少ない落ち着いた声音がそう告げる。嫌いじゃない、か。

特別好かれたい、嫌われたくないとか考えていたわけじゃないがそれでもやはり嬉しい。

はつきり物を言う鷹櫻みたいな奴なら尚更に。

胸の内が少し温かくなつた。

そして鷹櫻は無感情に私を見て口を開いた。

「『ハジメマシテ』。二ノ峰の鷹櫻。俺も薫子と同じで世話役になると思うからヨロシク」

そしてやはり『初めまして』なのか。

鷹櫻の言つてたトモダチの前でも言つてはけないのか。そう思いながらも顔には出さないようにする。

「……初めまして。よろしく」

理由は後で聞けばいい。

郷に入つては郷に従え、だ。

悔しいけれど私はまだ右も左も分からぬような状態だ。長い物に巻かれたほうがいいに決まっている。今は、まだ。

「お。珍しくちゃんと挨拶できたな、鷹槻。偉いぞ」

鷹久が豪快に鷹槻の頭を撫でた。

「やめろっての。それより鷹久。お前が言い出したんだから自分こそちゃんと自己紹介しろよ」

鷹槻は鬱陶しそうに鷹久の手を払つた。

鷹久はそんな弟の態度に慣れているのか、気にする様子もなく「そうだな」と手を打つた。それから薰子同様、笑顔で右手を差し出してきた。

「俺は鷹槻の兄の鷹久。この中では最年長。でも誰も年上扱いしてくれないから呼び捨てでいいよ。俺は何て呼んだらいい?」

「あ、どうぞ」「自由に」

「俺も敬語は使わないから、敬語じゃなくてタメ口にしてくれると嬉しいんだけど」

「は、はい。努力しま……する」

ああ、変な日本語に……。年上を相手に敬語を使わないというのは今までの人生の中ではなかつたからどうにも慣れない。

「じゃあ結婚ちゃん、でいいかな? いきなり呼び捨ては抵抗あるから。慣れてきたら呼び捨てになるかもだけど」

「はい……じゃなくて、うん。それでよろしく」

首を縦に振ると背後から呆れたような声がかかった。

「努力しまする、つて何時代の何語だよ?」

この小生意気な声。振り返るとそこには予想に違わず律が立っていた。

私より低い身長なのに見下ろすような態度で強い意志を宿した目がまっすぐに見てくる。

「俺は律。たつた二文字だ、忘れるなよ」

可愛い顔から可愛げの欠片もない言葉を吐き、さらに律は続けた。

「俺もお前の事はせいぜい利用させてもらひ。言つておくが俺は他人に利用されてやる気なんかさらさらねえ。俺を利用したいつ言うならせいぜい知恵と自分を磨け」

私より年下とは思えないような強さを持つた声でそう言つて、律は私から田線を外した。

「おい律、もうちょっとと言い方あるだろ？」「

律の頭の上に、シルバーのバンブルをつけた腕が置かれた。

「人の頭上に乗るんじゃねえ、令」

舌打ちして律がその腕をどける。腕を退けられてバランスを崩した令は不満そうに口を尖らせた。

「何だよ。お前の頭が俺の腕置きにいい高さにあるのがいけないんだろーが」

「てめえが無駄にだけだ！ その軽い頭をかち割つて低くしてやるうか！？」

「いや俺はフツーだろ。律がちつこすぎるだけで」

「ちつこくねえ！」

そう怒鳴る律は毛を逆立てた猫のようだ。

はいはい、とそれを軽く受け流すと令は私に向きなおつて笑つた。「はぐれ者の群れによつこむー。で、俺は令ね。呼び捨てでいいから。俺は何て呼んだらいい？」

「好きでいいよ」

「じゃあ年上だし敬称をつけよつ。結恵ひやんつて呼ばせてもらひうわ。よろしくー」

大きな右手に手を取られ、握手する。

金メッシュの派手な髪に全身を飾るじついシルバーーアクセ。それに似合わない人好きのする顔立ち。
不思議な人だ。

そう思つていると令はその柔らかな笑顔を崩さずに小さく口を開いた。

「俺も、せつかくの縁はフル活用させてもらひから」

律よりずつと穏やかな物言いなのに……いや、だからこそ体温度が数度下がったように感じた。

彼もまたこの集団の一人、やはりただチャラいだけじゃない。殴られたり蹴られたりしていた姿やその雰囲気からは想像もつかない、彼の本性を垣間見た気がした。

「……こちらこそ、これからよろしく」

だが私だって彼らに呑まれるだけのつもりは毛頭ない。対等な立場でいる。

その意味を込めて、力を込めて令の手を握り返した。

ひと癖もふた癖もありそうな、自らをはぐれ者と称する人達。秋晴れだった空に、いつの間にか灰色の雲が現れ始めていた。

「とにかく変わった人達だなっていうのが第一印象」
一田記憶の再生を止め、口コアを一口飲んで千歳を見上げた。
「けど何て言うか、流されない強さみたいなものがあつて凄いなって思った」

「へえ」

楽しげに相槌を打ちながら千歳はソファに寄りかかった。

「鷹槻から聞いてはいたが面白そうな奴らだな」

「うん。かなりだよ」

笑つてマグカップをテーブルの上に置く。

「他人達とは雰囲気が違つた。何て言つんだひつ……鷹槻達は生命力が強そつていうか、自尊心が強そつ……意思が強そつ、そんな感じ」

「うちの大半は流されるままに生きてるからな。そういう奴らは少數派だから面白いだろ?」

「面白いね。自分たちを『はぐれ者』って言つあたり、自覚はあるんだなって思つたけど」

令は自分たちを『はぐれ者の群れ』と言つた。

確かに綾峰の封建的体制からは外れているように感じる。薰子の話からも律と令の言葉からも、この家の絶対王制を受け入れているようには到底思えなかつた。

「現状に満足してこの家の古い体制を疑問に感じない奴が多い中で、よくそんな道を選ぼうと思えたものだ。拍手でも送りたい気分だな」
本当に手を叩きながら、千歳はくつくつと笑つ。

「面倒な道だと知りながらその道を選び進む。なかなか骨のあるガキ共だ」

「それ、褒め言葉なの?」

下手をすると皮肉に聞こえそつだが。

だが千歳は笑顔のまま、至つて真剣な眼差しを向けてくる。

「もちろん。古い中で新しい事を成すには氣概がいる。それは楽な道じやない。だからその樂でない道を選んだガキ共に我が身内ながら心から賛辞を送るよ」

「本家の千歳がそんなこと言つちやつていいの？」

「それを言つたら結恵だつて本家だろ？ 僕は本家つて言つてもい

ないも同然。せいぜい傍観して楽しませてもらつよ」

そう意地悪く言つて千歳は天使のように笑つた。

「つてわけで続き続き」

子供のようにせがむ彼に溜め息を吐きながら、私は話の続きを始めた。

「それから空が曇つてきて、雨が降りそうになつて」

「なかなか気丈だねえ」

令は半ば感心したような声を上げた。

「それはどうも」

握手した右手を握りつぶす氣満々で握つて皮肉に笑つてやる。

「いやーホント、すごいすごい。すごいからスママセン。手え痛いんでもう少しお手柔らかにしてくれると」

「いや全然お手柔らかに握つてるから」

そう言いながらも全力で令の手を握り締める。爪を立てて。令の笑みが引きつる。

「あのほんとごめんなさい。威嚇するようなこと言つて申し訳なかつたのでマジで離して下さー」

「いえいえ。全然気にしてないんで」

「言葉とは裏腹に手の力がどんどん強くなつてゐる氣がするんですけどー」

「氣のせい氣のせい」

笑顔で更に力を込める私と、引きつっても笑顔を絶やさない令。見兼ねたように鷹久が声をかけてきた。

「えーと結恵ちゃん、こいつがちょっと挑戦的でムカツク」と言ったのはちやんと謝らせるから離してあげて？」

「いえ、本当に氣にしてませんから」

「じゃあ離して下サイ。マジで」

泣き笑いに近い顔で言つてきた令を見て、渋々力いっぱい握りしめていた手を離した。

令は解放されるなり右手を引つ込んで爪の痕がついた手に息を吹きかけた。

「痛ててて

「舐められるだけのつもりはないから、どうぞそのつもりで」

力を込めすぎて筋がつりそうな右手をぶらぶらと振りながら律と令を見た。

短気なチビとチャラ男だと思つて油断していたら、きっと利用されるだけで終わる。ならば先にこちらも強気なところを見せておかなければ。

令は顔の前で止まれの合図のように左手を突き出した。

「や、結恵ちゃんの心意気はよくわかった。すいやせんでした。流されるままだけのお嬢ちゃんなら利用するだけしてやるうつと思つてたけど、敬意を持つて接させてもらいます」

「それはありがたいわ

「律も。いいだろ？」

令は離れたところで傍観していた律に声をかけた。

「……まあ及第点か。かなりギリで」

「律う

情けない声を出す令は無視して律は挑むような視線を私に向けてきた。

「バカでも鈍いわけでもなさそつだし、自分で考えられる程度の脳みそはあるみたいだしな」

律は高めの声音でそんなことを言いながら私の前まで歩いてきた。

そして少し私より低い位置にある双眸が真っ直ぐに見上げてきて、まだ華奢な右手を差し出してきた。

「一応認めてやるよ。利害関係が一致しそうな時はこいつもてめえに付き合つてやる」

「どこまでも偉そうことで。……でもま、よひしく」

律の右手を握ると、肩の力が抜けた。

「よかつたよかつた」

「だなー」

四葉と鷹久が呑氣に笑い合つ。

「律、令。あなた達はもう少し礼儀をわきまえなさい」「つせーよ、薫子。てめえだつて似たよくなこと言つてたろうが」

「そうや。同罪だよ、同罪」

「あなた達と一緒にしないでちょうどいい」

律令は薫子と火花を散らし始める。

随分短気な人達だ。そう思いながらベンチ横の芝生に座つていた鷹櫻にこつそりと近づく。

「……これが鷹櫻の『トモダチ』？」

小声で尋ねると鷹櫻はだるそつに私を見上げた。

「そうなる

「なかなか個性豊かな面々で」

「まあ退屈はしねえよ。で、これで一応こいつらは結恵の味方だと思つていい」

腕を「キキキ」と鳴らしながら回して鷹櫻は言った。

そして顔は律達に向けながら声のトーンを極力下げた。

「けどまだ、タベのこととは言つなよ

タベのこと。それは千歳のことか。

「わかつた」

わからないけれど、一応了承しておく。

それから小さく尋ねる。

「あんたに会つたつてことも言つべきじゃない?」

「ああ」

短い答え。

それ以上ここでは話してくれる気はさうせりなさそうだ。

「次にあいつの所で会つた時に話す。いつになるかはわからんねえけど」

ど

あいつの所は千歳の所、だろ?」

「じゃあそれまで私達はさつき初めて顔を合わせたってことだ」

「ああ」

そして鷹槻は私を見てきた。

「律令にびびるようなそれまでの奴だと思つたけど、意外にやるよな。お前」

「それ、褒め言葉?」

「純然たる褒め言葉」

そう聞こえないのは彼の淡々とした聲音のせいか。
律や薫子と違つて鷹槻は感情の起伏に欠ける。けれど無駄な嘘が
なくていい。そう思つと急に氣分が晴れてきた。

「ここに来る前に腹はくくつてきた」

苦笑して灰色の雲に覆われてきた空を見上げる。

「私もあんた達が傲慢なだけの人間だつたら適当なお付き合いで済まそつと思つてたけど、思つていた以上にあんた達は面倒そう。さつすがおじいちゃんの生まれ育つた場所!」

「お互に仲良くなつていけそつてことか」

「うん、そう」

「ぐんと頷くと鷹槻は僅かに口元を弛めた。

あ、笑つた。人形のように整つているけれど無機質な印象の顔は、笑うと急に生気に満ちた人間のものになつた。

軽く見惚れていた私の前に右手が伸びてくる。

「ヨロシク」

「あ、よ、よろしく」

右手を握り返して手を離す頃にはもう元の無表情に戻っていた。

(何だか偶然希少生物を見かけたみたいな気分)

それとも鷹櫻は予想に反して意外と笑うのだろうか。タベは全く見ることがなかつたが。

するとふいに誰かが声を上げた。

「あ、雨」

ぽつり、ぽつり。

灰色の空から細かい雨が降り始めた。

「こりや本降りになるかな」

鷹久が空を見上げると、使用人の一人が声を上げた。

「皆さま、濡れますのでどうぞお屋敷のほうまでいらして下さい」その声に従つてその場にいた人間は揃つて前庭に面した部屋へと駆け込んだ。そして最後の一人が室内に入ると同時に、雨がバケツをひっくり返したように地面を叩きつけた。

「危機一髪だつたね」

「通り雨っぽいな」

窓から空を見上げて四葉と令が言つ。

すると広い室内の扉が開かれた。

「あらあら。雨が降つてきたの？」

柔らかな声と共に、大叔母が室内へと入つてくる。

皆その声に打たれたように頭を下げるの、私も慌てて頭を下げた。

「挨拶はよろしいからそれよりも皆さん、濡れませんでした?」「はい、大丈夫です」

何ノ峰だつたか、多分序列は上のほうだつた氣がする人がそう言うと、他の人たちもその声に続いて頷く。

「そうですか。それは良かつたわ。けれど残念ですがこれでは昼食会はお開きですね。随分強い雨ですので車を出させましょう」

大叔母が指示を出し使用人數名がそれを伝えに部屋を出て行く。

「……敷地内を車で移動」

あまりにスケールの大きな話に呆然としていると、鷹久が小さく笑つた。

「田舎だからだだつ広くてね。」こから薫子の家までだと直線距離で六百メートルくらいあるんじやないかな」

「そうね。今朝も車で送つてもうつたし、それくらいあるかしら」「はあ……世界が違うわ」

この綾峰家の居住地は東京の郊外にある。

東京と言つても縁豊かで夜には多くの星が臨める場所だ。なので地価も都心よりはずつと安く、ここまで来る時に何件か見かけたよその民家も大きな物が多かつた。

だがそう言つた事を差し引いてもこの敷地は広い。常識はずれに広い。遊園地か小さな町くらいのサイズはある。大富豪一族の住居区なのだからそれくらいあつてもいいのだろうが、自分がその敷地に暮らしているという事実がどうにも信じ難い。

「すぐに慣れるわ」

薫子が安心させるように笑つてそう言つてくれる。

「慣れるまでは戸惑うこともあるでしょうけれど、そういう時は遠慮なく言つてくれれば力になるわ」

「……薫子さん」

優しい人だと地味に感動していると薫子の顔が引きつった。

「あの、薫子さんてやめてくれないかしら？ 一応私達は同じ年なのだけど」

「え、ごめんなさい。大人っぽいからつい敬語使わなきゃいけない気になつて」

まずい、せつかくの『機嫌を損ねかけて』いる。

「老けてるつて素直に言つていいんだぜ？」

追い打ちをかけるように律が皮肉つた笑顔でそう言つてきた。薫子の眉と右手がぴくりと持ちあがる。

「か、薫子さ……じゃなくて薫子ストップ！ 落ち着くつー」

「そうだ、落ち着け。桂子様もいるんだぞ」

鷹久がこつそりと耳打ちすると薫子はハツとしたように手を納めたが、代わりに強く律を睨みつけた。美人は睨み顔も凄い迫力だ。

「……後で覚えてらっしゃい」

「やなこつた」

舌を出した姿は可愛らしいのに、その表情には可憐げの欠片もない。

薫子の拳がふるふると震えていたが、辛うじてそれ以上にならないようすに抑え込んでいた。これが大叔母の前でなかつたならばさつきの見事な格闘劇がまた見れたんだろう。

怒りの納まつた薫子に肩を撫でおろしていると、ポンと背中を叩かれた。振り返ると四葉が笑っていた。

「薫子ちゃんの喋り方は薫子ちゃんのおばあちゃん譲りなの。一応本人は頑張つて標準学生っぽくしたいらしいんだけど、長年の習慣でなかなか消えないんだよねえ」

「ああ、おばあちゃん譲り。道理で」

あの喋り方が一層彼女を年齢より上に見せているのは間違いない。今時ああいう喋り方をする中学生は日本中探してもそうはないだらう。

「で、薫子ちゃんて若く見られる分には構わないんだけど、一個でも年齢より上に見られるのって我慢ならないみたいだから気をつけね」

「……了解」

実年齢なんて言われなければ絶対にわからないだろうと思いつながら答える。

四葉はここにこと背後を振り仰いだ。

「鷹楓はそんなに怒んないのにね」

彼女の視線の先にはやっぱり実年齢と外見年齢の一一致しない鷹楓の姿。腕を組んで壁を背にもたれかかっていた鷹楓はどうでもよさそうに答えた。

「別に他意がないならどうでも。あるなりじつも他意を以て感じ

るけど」

無表情のままなのに、絶対零度の響きを持つて聞こえるのが怖い。

「昨日は律に倍返ししてたよな」

令が朗らかに笑いながら、鷹槻の肩を叩いた。

「だつてアイツのは他意満々だろ。て言つた悪意だろ、あれは」

「悪意つてか単なるねた……っ！」

へらへらと笑う令が一瞬で視界から消え失せる。何が起きたのか理解できずに目を見張ると、不機嫌な高めの声がした。

「別に妬んでねえよ」

不機嫌そのものの表情で律はいつの間にか地面に這いつくばっている令を見下ろした。

「おー見事な足払い。一瞬だつたなあ」

鷹久が呑気に拍手を送りながら言つ。

「あ、足払い……」

「うん、そう。あの一瞬でスパーーンと」

鷹久は笑いながら手刀を右から左へと真横に滑らせて見せた。それからこつそりと耳打ちしてきた。

「律と四葉は年齢より下の扱いすると怒るから気をつけて」

二人には聞こえないように言つて、鷹久は人の好さそうな笑みを浮かべた。善人そうだがやはりこの人も読めない感じだ。

そうこうしていると部屋の扉が開かれた。

「皆様、お待たせ致しました。お車の準備が整いました」

「それでは皆さん、今日は有難う。結恵さん?」

「……はいっ！」

大叔母に呼ばれ、人混みをかき分けてその隣へと小走りで向かう。

「貴女からもお礼を言つてあげて下さるかしら?」

「あ、はい」

言われるがままに頭を下げる。

「今日はお越し下さり、どうも有り難うございました」

「これでいいのだろうか?」

「…」いついう時にどう言つたらいいかなんて分からなければそれで良かつたらしく、他の人達からも頭を下げられる。「お招き有難うございました」だとかそんな挨拶が返つてくる。

そんな相手の名前がさっぱり思い出せない自分に胸の内で軽く溜め息を吐きながら、彼らが退室して行くのを大叔母の隣で見送った。そうおやつてあらかた見送つたところで突然四葉がジャケットを引いてきた。

眉を下げる、大きな瞳を子犬のように潤ませてじっと見上げてくる姿はとても可愛らしい。そしてどう見ても高校生には見えない。

「え……ど、四葉？ どうしたの？」

「まだおしゃべりしたりないなあつて」

四葉はジャケットを片手で引いたまま寂しげに俯いた。相手は年上の高校生だと分かりながらも、その姿はどうにも胸に訴えかけてくるものがある。

「あら。結恵さんは四葉さんと仲良くなつたの？」

大叔母が嬉しそうな声を上げた。

「あ、はい」

「お友達になつて頂いたんです。結恵様はとてもお心の広い方で」

四葉は顔を上げ、につこりとひまわりのようになつて笑つた。

大叔母はそんな様子をにこにこと見ていた。

「まあ。そうでしたの」

「はい。先程も一緒に食事致しました。少しですがお話をさせて頂けてとても楽しかつたです」

四葉は少しばかり舌足らずな声でかつ三割増しほど可愛らしく、いたいけな子供のように微笑む。確かに可愛らしいし保護欲を誘う事は確かなのだが、どこか違和感があるのは氣のせいじゃないと思う。

けれど大叔母は氣にする様子もなく嬉しそうにする。

「まあまあ。良かったわ。結恵さんが少しでもこの家に馴染んでくれたようで」

「はい、お陰さまで」

「四葉さん。それに皆さんも少しうまつて行かれない？ 結恵さんも年寄りの相手ばかりで退屈してうつしゃると思ひの」

「そんな、退屈だなんて滅相も……」

「そこではたと氣付く。皆さん……？」

「そんなご迷惑でしょうか」

鷹久がやんわりと笑う。

「私共のような者がいつまでも本家にお邪魔するわけには、薰子もしおらしく首を振る。

「何を仰るの？ そんなこと仰らないで。皆さんも私にとつては大切な身内なのですから。それに結恵さんのお友達なら私には家族として歓迎する義務がありますもの」

大叔母はにつこりと笑い、壁際に控えた使用人たちに目をやった。
「お茶の用意をして頂戴。もう午後のお茶の時間だわ。さあ。こちらよりもサロンのほうがよろしいでしょ。そちらに準備をさせますからせめでお茶くらしして行って」

「それでは……お言葉に甘えて」

令が気色悪いほど控え目に答える。

「もう少しあ邪魔致します」

鷹楓と律が頭を下げる。

「勿体ないほどのお気遣い痛み入ります、桂子様」

四葉が満面の笑みでお礼を言つ。

「いいえ。それよりも皆さん、これからも結恵さんのことによろしくお願いしますね」

「はい」

仲がいいのか悪いのか測りかねる六人の声が、この時ばかりはぴたりと重なつた。

シンプルなデザインのシャンテリアが優しい色調の壁紙を照らす
本家屋敷サロン。

ボウウインドウに叩きつける雨の音も弱まり、もつ小雨程度にな
つてきた。

「それでは失礼致します」

若い使用人は一礼してカートを引き静かに扉を閉めて退室した。

その足音が遠ざかるにつれ、室内の空気が緩んでいくのを肌で感じ
た。

「あー疲れた」

足を投げ出し、背もたれに寄りかかって最初に声を上げたのは律。

「四葉は相変わらず人をたぶらかすのが上手だなあ」

「それ褒めてないでしょ？ 鷹久」

「褒めてる褒めてる」

令が言つてケラケラと笑う。

「まさかこの年で本家屋敷のサロンに招かれるとは思わなかつたわ」

「俺らの年で正式な招待を受けたのなんて前代未聞じゃないのか」

薰子と鷹槻はそんな会話を交わしながらお茶に手をつけた。

私はそんな六人をじつと見て、あの前庭に面した部屋から今まで
ずっと思つていた事を口にした。

「……なんか私、早速利用された？」

各々テーブルについた六人の視線が一斉に集まる。

「まさか」

律が愛らしく微笑む。この可愛らしさが彼の場合曲者だ。案の定、

その笑顔が一転して悪魔の笑顔になる。

「この程度で利用なんて言われたらいこの先困るぜ」

やはり。

「何だかおばあ様を騙したようで良心が痛む」

重苦しい息を吐くと、意外そうに鷹久が言った。

「何だ。結恵ちゃん、気付いてなかつたの？ 桂子様もあれは演技だよ。まだ他の家の連中の耳があつたから」

「え？」

「私達の考えなんてお見通しよ。の方も伊達に本家で七十年も過ごされているわけじやないわ」

「え？ え？」

鷹久も薰子も何を言つているのだ。

それを説明してくれたのは鷹槻だった。

「桂子ばあさんも、基本的に考え方は俺らと近いからな。立場上それを表には出せないけど。端的に言えば、あの人は俺達の一番の庇護者」

「はあっ！？」

つい声を荒げてしまう。

「わ、私そんなこと一言も聞いて……」

「だから表に出せないって言つたる？」

けろりと律に言われ、脱力して椅子に深く座り込んだ。

「狐と狸の化かし合い……」

「お、いい例えだ」

思わず出た言葉に、令と四葉が楽しげに笑い合う。

「ここで化かし合いは田常茶飯事、慣れるしかないわ」

隣の椅子で優雅に紅茶を飲んでいた薰子にぽんと背中を叩かれる。

「がんばる……」

額に手を置いて力なく答えた。

「なあ。それよりお前もう半魚見たか？」

律が向かいのテーブルからずいっと身を乗り出し、真剣そのものの表情で尋ねてきた。

「は、ハンギヨ？」

頭の中でどう言つ字を書くのか変換できず困惑していると、鷹久が説明してくれた。

「半分魚つて書いて半魚。半魚人のことなんだけれど、敷地内の子供の伝説みたいなものなんだ」

「伝説？」

それにしたって何だつて魚の伝説なんだろう？
それも半魚人。伝説なら龍とかユニークーンとか、もつと子供向けで見栄えもするものを持つてくれればいいだろうに。

そんな私の頭を読んだかのように、律が高らかに言った。

「言つておくが、綾峰本家の半魚伝説は俺らよりずっと昔の世代から代々伝わる伝説だ！　一過性の都市伝説なんかと一緒にするなよ

？」

「はあ……」

そうは言われても胡散臭い。

だつて半魚。そもそもこの屋敷の庭に池はないし魚なんて飼えないだろう。いや、この屋敷ならばどんなサイズの水槽も置くことは可能か。それに半分人なら水がなくてもいいのかもしない。

そう意識半分に思いながらテーブルの上のプレートに置かれたフイナンシェを口にした。

「なんかお前、全然信じてねえだろ？」

律が目を据わらせて不満げに言つ。

「いや、信じてる。信じてますつて。本家に妖怪……じゃなくて人面魚？　うん、超信じてる」

「人面魚じゃなくて半魚だ！」

どつちだつて似たようなものだろう。

「はいはい。じゃあ人面魚じゃなくて妖怪だ」

「お前、そんなこと言つていいいのかよ？」

律が腕を組んで私を見てきた。

「だつてどう考へてもそうじゃん」

「まあそれはそうだけどな。仕方ない。ここは新入りに俺が綾峰の半魚伝説を教えてやらないこともない」

「そんなの本当にあるの？」

律の隣に座っていた鷹久に聞くと彼は苦笑した。

「あるんだよ。これが本当に」

「恥ずかしいけれど小さい頃は本気で怯えたものだわ。大人達が興が乗つてくると身振り手振りつけて脅かしてくるのよ
薰子があと小さく溜め息を吐く。

「そんなに怖いの？」

「伝説って言うよりは怪談だよな、ガキには」
令が笑つて四葉を見る。四葉もマドレーヌをかじりながら二二
くと頷いた。

「へえ」

「今晚寝れなくなつても責任は取らないけどな！ それでもいいな
ら話してやるぜ？」

上から目線で律がにっこり笑う。生意氣だと思いながらも彼の容姿
は可愛い。可愛いものは生意氣でも何でも可愛く見えてくるから不
思議だ。

「はい。じゃあ教えて下サイ」

殊勝な態度が気に入つたのか、律は上機嫌に口の端を吊り上げた。
「半魚伝説の始まりは、もう五百年も前。応仁の乱から幾ばくか経
つた戦国時代のことだ」

戦国時代、綾峰家の遠い先祖。

当時既にとある地方の豪商として名を馳せた綾峰家の子供が神隠
しに遭つた。数日間、家人や村人達の必死の搜索が続いたが子供の
行方は依然として知れなかつた。誰もが子供は帰つてこない、と諦
めた頃。突然子供が帰つてきた。

神隠しからの生還を喜ぶ家人や村人たちに子供は幼子らしからぬ
厳かな雰囲気を纏い、こう告げたという。

直に戦が始まるとからすぐに逃げるようにな、と。

そして実際に子供の予言通り、戦が始まつた。誰も予想がつかな
かつた寝耳に水の戦が。それによつて家人達は子供が神隠しにあつ

たことによつて、予知能力のよつなものを天狗か何かから授かつてきたのではと考えた。

その後も子供の先を見る力は確かだつた。その力を活用して綾峰家は戦国の世を生き抜き、商家としてより一層の繁栄を遂げたと言つ。

「……すみません、半魚人どろか魚一匹出でこないんですけど」「話は最後まで聞け！」

話の腰を折るなど律に叱られ、渋々と黙つて話の続きを待つた。

「とにかく、綾峰家はその子供の先を見る力によつて戦国の混乱を逆手に取つて衰えるところを知らずに繁栄していつたんだそうだ。だが」「」

子供は成長しても、先を見通す力は衰えることを知らなかつた。その異形いぎょうから授かつた力を以て、家を栄えさせていた。

だが異形から授かつた力ゆえか。子供は成長するにすれ、次第に自身の肉体までも異形の者へと変じていつた。気付けば子供は半身が鱗に覆われ、その身は魚の物となつていたと言つ。

誰もが不気味がつたが子供の予知は変わらず健在で、最早綾峰家は子供の存在なしでは考えられなかつた。家人は異形と化した子供を屋敷に隠し人目から遠ざけた。それからも屋敷に隠された子供は家のため幾つも予言をしたと言つ。

そうして綾峰家が繁栄するにつれ、子供は見たこともない奇妙な魚へと变じていきやがて頭を残した体全てが怪魚のそれとなつた。しかしその異形の子供のおかげで綾峰家は今日まで衰えることなく來た。

そのため綾峰家では今も尚、その半魚となつた先祖を生き神として祀つてゐるといふ。

「……五百年も前の先祖が生き神？ 生き神つて生きているから生

き神つて言つんぢやないの？」

「それを今から話してやるよ」

律の笑みが仄暗いものとなる。

「ありがたい予言を授けてくれる半魚。綾峰家は何としてもその予言を少しでも長く授かるうとしたんだ。そして知つてしまつ。惡夢のような事実を」

半魚が四十を越え、その顔に年輪が刻まれ家人の誰しもがいつまで予言を得られるのかと不安を感じ始めた。

いかに異形と言えどその顔は通常の人間と変わらず老いて行く。人生五十年の世の四十過ぎ。異形の子供といえど人並みに寿命を迎えるのではないか？

四十年近くも予言に頼つてきた者達はどうにかならないものかと頭を抱えたと言う。

そんなある晩、半魚の元へ予言を聞きに行つた当時の当主がいつまで経つても戻つて来ない。どうしたのかと疑問に思つた家人が半魚のいる間へと足を踏み入れると半魚は笑つていた。どうしたことか、その容貌は神隠しに遭つた幼い頃のものへと若返つていた。

一体何があつたのかと尋ねる家人に、幼い子供の頭に魚の体の半魚は告げた。

『私は永遠にこの家を守ろう。そのための方法をたつた今、見つけた』

その小さな口からは赤いものが滴つていた。家人は更に半魚のそば、あちこちに散らばる『それら』に気付いてしまう。

それは人の腕。脚。ばらばらに食い散らかされたかのよつな、血にまみれた人の身体の欠片。

半魚が見つけた永遠に家を守る方法。

若返りの法。

それは自らと同じ血を流す者の血肉を口にすることだった。

「だけど誰かを犠牲にすることで家は安泰となる。そして家人達は決めたんだ。数十年に一度、一族の者を半魚に選ばせその糧とし若返らせることによって永遠に綾峰のもとへ留め置こうといつと……」

律は淡々と言葉を紡ぐ。

「その風習は今も続ぐ。綾峰が世界大恐慌でもバブル崩壊でも物ともしなかつたのは、この半魚があらかじめ予言を与えていたからだと言うもつぱらの噂だ」

サロン内はすっかり静まり返っていた。

薰子の横顔は青い。

「一族にとつて不都合な者などから選ばれた人間は半魚の糧となる。奇怪な魚の体と人間の頭を持ち、人語を話す、綾峰家の最奥に祀られる生き神の……」

その律の声は雨音に溶けていった。

今まで食べたあらゆるものが消化不良を起こした気がする。

「……しょ、食事中にそんな話しないでよ！」

怖い云々より、氣色悪いのが先に立つて涙目になつて律を睨む。

「全くだわ」

薰子が口元にハンカチを当てて忌々しげに言つ。

「そんなグロテスクな部分まで詳細に話必要はないでしょ」「せつかくだから怪談調に話したほうが盛り上がるかと思つて」

けろりと言い放つ律に、更に非難の声を浴びせる。

「何がせつかくなのかさっぱりわからないわ！」

「グロイ！ 本当にグロイ！ ホラーじゃない！」

薰子と二人、涙目で叫ぶが当の律はどこ吹く風だ。

「久々に聞いたけど俺、しばらく肉いたくない……」

令がテーブルに突つ伏して咳く。

「律……最後のほうは演出過剰。俺も胸やけしてきた」

鷹久も胃を押さえて言つ。そんな様に律は不満げに声を上げる。

「何だよ、どいつもこいつも。せつかく俺が綾峰家半魚伝説を眠くて退屈にならないように話してやったのに」

「眠くて退屈でいいから、気分悪くなるような話しないでよー。」

令じやないが、私もしばらく肉や魚は見たくない。

もくもくと焼き菓子を頬張り続ける四葉がつらやましい。鷹櫻も平然としている。確かにこれくらい氣にもしなそしだが。彼といい、千歳といいマイペースぶりはこの家隨一か。

……千歳。

心臓がその存在を全身へ主張する。
どくん、どくんと規則的な音を以て。

綾峰家の最奥。

不都合な一族の人間。

頭の中で幾つものパズルのピースが嫌な具合に噛み合ひ、いびつな形を作り出す。

まさかそんなわけない。

そんなことあるはずがない。

「ちなみに、数十年に一度といつ数十年単位はそろそろだそうだ」律が胸を張つて言ひ。

「や、やめなさいってば！」

薰子の悲鳴が遠くで聞こえる。

なぜ彼はあんな地下にいる？

なぜ本家人間でありながら、その存在は表に出ない？思わず鷹櫻に視線をやると、鷹櫻はふいと目を逸らした。そんな何気ない行動すら不安を煽る。

まさか。

まさか。

この家で最も重視される、血。

最奥で感じたあの血のぞわめき。

鷹櫻に誰にも言つたと言われた、血。

千歳は綾峰家の生き神の糧……？

じゃあ私は……？

鳴り響く心臓の音。

窓の向こうで小さくなっていく雨音。小刻みに震える指先。
荒唐無稽だと分かっているのに、この不吉な考えは止まることを
知らない。

顔を伏せ震えを堪える私を鷹観が見ていた。

地下の語り部

昼間聞いた伝説もとい怪談を話し終え、私は黙つて俯いた。話したことで頭から背筋まで凍りつくような不安がリアルに蘇ってきた。少し時間をおいてしょせん子供用の作り話と思えるようになつたのに、口にすることで妙なリアリティを感じるようになつてしまつ。五百年間、綾峰が没落したことのない理由づけにぴたりと合つ趣味の悪い話に。

千歳は小さく零した。

「半魚伝説か」

顔を上げると千歳は考え込むように口元に手手くたんをあてていた。
「いつからそんな話になつたんだ……ベースは件と人魚伝説つてと
こか。誰だよ悪趣味な改ざんしたの」

「……千歳は何か知つてるの？ その伝説」

千歳は私を見てあつさりと言つた。

「そりや知つてるさ。俺は一応本家だつて言つたろー？」

「そうだ、よね。……ねえ千歳、その伝説つて本当なの！？」

掴みからんばかりの勢いで身を乗り出した私に千歳は若干驚いたように身を引く。そしてその整つた顔が人の悪い笑みを浮かべた。
「さては結済。その半魚伝説が怖くて寝れないんだろ？」
「なつ……そんなわけないでしょ！ 怖いんじやなくて氣色悪くて
真偽を確かめずにいられなかつただけ！」

まさか千歳が半魚の生贊なのではと思つていたなんて間違つても
言えない。この様子じゃ自らからかつて下さいつて言つよつなもの
だ。

「ふーん？」

千歳は私の言葉など全く信じていらない様子で口元は楽しげに吊り
上げられている。

「とにかく！ その伝説とやらを千歳はどれだけ知つてゐるの…？」

「半魚伝説 자체は今初めて聞いたけど、その元になつた神隠しにあつた子供の話なら全部知つてる」

「え。……全部？」

「うん。全部」

につこりと千歳は後光が差しそうな笑顔で答えた。

「半魚伝説つてのはだいぶ脚色されてるな。この家に半魚はいないから安心しろー？」

その声や表情に嘘や誤魔化しのようなものは一切感じられない。

そんな千歳の姿を見て、ようやく自分がどれだけ馬鹿げたことを考えていたのかがわかった。

「何だ……心配して損した」

気が抜けてつい口走ってしまったそんな言葉。それを千歳は耳聴く拾う。

「へえ、やつぱり怖かっただのか」

「ちーがーうつ！ そうじやなくて……」

千歳が、そう言いかけて口を噤む。

「……何でもない」

「件つていう妖怪を知つてるか？」

相変わらず千歳の言葉は唐突だ。

「クダン？」

「そう、人偏に牛つて書いて件。文字通り牛の体に人の頭を持つ妖怪。生まれて数日間で死ぬんだけど、その数日の間に決して外れない予言をするんだそうだ」

「予言……」

決して外れない予言。それは。

千歳は笑つて頷く。

「多分、その半魚伝説のベースはそれだらうな。飢饉や豊作の予言、日露戦争を予言した奴なんかもいるらしい」

そう言って千歳は立ち上がり、壁に並んだラックから古びた一冊の本を取り出した。そして差し出した本の表紙には『日本妖怪事典』

の文字。

「子供の本?」

思わず眉をひそめて千歳を見上げる。

すると千歳は少し不満そうに口を尖らせた。

「失礼な。一応学術書だつて。著者は名の通つた民俗学者だぞ」

「妖怪つて子供の専売特許だと思つてた」

「そりや逆だ。子供がきやいきやい楽しめるのは研究者達が各地の伝説なんかを研究としてまとめて、それを子供でも楽しめるように分かりやすくしてくれたからだろ?」

「ああ、そういう見方もあるか」

「そうそう。分かつたら見る」

千歳の形いい指先が押さえて開かれたページ。

「……嫌がらせ?」

自分でも分かるほど、眉間にしわを寄せて千歳を見る。

開かれたページには横書きされた文章に古めかしい画風の絵。すぐ下に天保年間の瓦版のものだと説明がある。

真っ黒い牛の体。その首の先には人間の男の頭。けれど耳の少し上から牛の角らしいものが生えている。
はつきり言つて氣色悪い。

「それが件」

千歳は笑顔で私の抗議を受け流した。

「予言する化け物」

「……本当にこんなのがいたの?」

「さあ? 僕は見たことないけど」

にこにこと千歳は笑顔で言つ。その笑顔を前にすると怒つていて
自分がバカラしく思えてくる。

「結恵は本当にいると思う? 件」

「突然変異でもこれはないとと思うけど。人為的に掛け合わせたって
無理でしょ。もしさいたらマスクミが殺到するだろ?」

「だよな」

くつくつと笑つて千歳は本を閉じた。そして私を見やつた。

「なら半魚もそうじやね？ 半牛ど二コアソス的には大して変わらないんだし」

「確かに」

「結恵は現実見れる子なのになーんでそんな面白い作り話を信じちゃつたんだろうなあ」

「信じてないってば！」

笑いを押し殺す千歳を怒鳴りつけて、自分でも何でこんなことを信じていたのかと恥ずかしくなつてきた。

「この家つて私の常識が通じないから……これだけの敷地があれば魚一匹隠すくらい訳無いだらうし」

ぶつくさとぼやく私の前で、千歳は呟いた。

「確かに訳無い」

「……千歳？」

千歳の顔からは笑みが消え、十七という年齢よりずっと大人びた表情をしていた。

「この家に半魚はいない」

「……うん」

「半身に鱗が生え、怪魚となつた者もいない」

千歳の深い色の瞳から目が離せない。口元に手を指一本動かせない。

「人肉を食ひ散らかす者もいない」

まだだ。

全身の血がざわめく。

「いるのは、人の血をすする化け物だけ」

千歳の言葉ひとつひとつに呼応するように、体中の無数の血管を流れる血がその存在を主張する。

「人の姿をした忌むべき化け物がいるだけ」

千歳がまっすぐに私を見る。その表情にも聲音にも一切の感情はない。

全身が総毛立つ。

「ち、千歳が、生き神の生贊……なの？」

千歳は答えない。それでも私は続ける。

「生き神……じゃなくて化け物に血を与えるのは千歳なの？」

今は怖いばかりの整った表情は一切揺らがない。

「血が……私の中で血管一本一本がはつきりわかるくらいに存在を主張するの。タベも変で……鷹櫻に出来るだけ早く千歳に会いに行つたほうがいいって言われた」

何か、何か言ってよ。

「千歳。私は何？ 千歳と私と化け物って何か関係があるの？」

気付けば歯の根も噛み合わないほどに体は震えていた。

聞かないほうがよかつたのかもしれないと思つ。

けれど聞かなければいけないことだと思った。千歳に嫌な思いをさせても、それでも……。

「ごめん、変なこと聞いて。でも知りたい。ちゃんとこの家のことを知りたい」

大叔母は私を家族だと黙ってくれた。

私はこの家で生きるつて決めた。

見ないふりはしないと言つたのも私だ。

一度強く目をつぶり、正座して深く頭を下げた。

「どうか教えて下さい。神隠しに遭つたつていう先祖のこと、血のことも」

長い沈黙の後、頭の上で溜め息を吐く氣配がした。

「そんな頭下げなくたつていいのに」

目を開けて頭を上げると、千歳が困った風に眉を下げていた。

そこには感情の窺えない、怖いとすら感じる人物ではなく紛れもない千歳。マイペースで変なところ凝り性で、でも優しい人。「いずれ話すつもりではいたんだ。この家のこと全て。それが本家に生きる奴の義務だから」

微かに笑つて千歳は言つ。

「桂子はもちろん知つていいし、義将も知つていたことだ」「おじいちゃんも？」

当然と言えば当然なのが、どうしても祖父がこの家の人物だという意識は薄い。そのため今までそこまで考えは回らなかつた。千歳は頷いて続けた。

「仮にも跡取りだったからな」

「そつ、か」

「もちろん、この家に化け物がいることも知つていた。綾峰の先祖が神隠しに遭つたということも知つていた。血のことも知つていた」血という単語について過剰反応してしまう。

千歳は大丈夫だ、と言つて頭を撫でてくれた。

「結恵が怯える必要はない。血は……当たりなんだろうけれど」そう言つた千歳は複雑そうに薄く笑つた。

当たりという単語に聞き覚えがあつた。

タベ鷹櫻に言われたんだ。当たりの可能性があるから、ときつといい意味でない。それだけは分かつた。だから半魚伝説とやらの生贊のことかと思ったのに、千歳はあの話のほとんどが嘘だと言う。

だけど千歳の表情を見るに、あの話の真偽がどうであれ実際に良い意味ではないのだろう。

その意味まではわからないが、知らないということに対する恐怖はじわじわと広がつてくる。

「当たりって、何? 鷹櫻も言つてた。私は当たりの可能性があるつて……」

息が苦しい。

「私は、何……?」

呼吸を繰り返しても楽になれない。

恐怖と不安は止まることなく押し寄せてくる。

「……っ」

「結恵?」

何でもないと伝えるため首を横に振る。

けれど無意識に胸を押さえた私に気付いた千歳は立ち上がりて何かを持つて近づいてきた。

「これ、口に当てる息をし」

言われるがまま、千歳が手渡してきた紙袋を口に当てる呼吸する。そのまま千歳にソファに横になるよう言わるがままに横になる。相変わらず息苦しくて不安はあつたけれど、ずっと手を握つていてくれる千歳を見たらそれが少しづつ和らいでいくのを感じた。

千歳が済まなさそうに私の前髪を払つた。

「じめんな。まだ慣れない環境だつていうのに急に妙な話をしたりしたから驚いて過呼吸を起こしたんだな。本当に悪かった。俺の配慮が足りなかつた」

本当に申し訳なさそうに言つ千歳を見ているのが辛くて、私は一度袋を口から外した。

「千歳のせいじゃないよ。前から、時々あつたの」

千歳は意外そうに少しだけ目を見張つた。

彼でも驚くことはあるのか、と思うと少し笑えた。

「考えすぎたり不安が強くなつたりすると、家にいる時にもなつてたんだ。最近はあまりなかつたから少し驚いただけ。……過換気症候群つて医者で言われた」

「そうか」

「ごめん、驚かせて……。少しすれば納まるから」

「いいから袋、口に当てるおけ」

言われてまた袋を口に当てる。

大叔母には事前に話していたが千歳は知らなかつたのか。何となく私の情報は既に知つているのだと思つていたが。

千歳はずつと私の手を握つてくれた。お互い少し冷たかつた手が、ずっと握り合つてることで温かくなつていく。子供の頃、風邪をひいた時に両親や祖父に同じようにしてもらつたことを思い出したからか随分と安心して、いつもよりずつと早く呼吸は楽にな

つてきていつの間にか不安も消えていった。

千歳が大丈夫だと言つてくれたんだから大丈夫だ。鷹櫻だつて言つていた。千歳は私達の味方だつて。

千歳は不思議だ。

話していると、そばにいるとしても安心する。小さな子供が親のそばに行くみたいに、千歳のそばにいたくなる。その居心地の良さと優しさに甘えたくなる。

一緒にいると泣き出したくなるほどに、優しくて温かい。きのう初めて会つたばかりなのに不思議だ。

血の繋がつた相手だからなのか、彼特有の不思議な空氣のおかげなのかはわからない。

でも思う。

もつと千歳といたい。

そばにいたいと、そう強く思う。

ただ手を繋いでもらつて横になつていた。まだ僅かに残つたお香の香りが鼻腔をくすぐる。

何だか落ち着く香りだ。日本の香りは沈静作用があると聞いたことがある気がするからそのせいかもしれない。

「……もつ平氣」

紙袋を外して上体を起こす。随分楽になつて呼吸も落ち着いてきた。

「そうか？」

「うん。ありがとう」

千歳はまだ少し心配そうな顔をしていた。

そんなに驚かせたのかと申し訳ない気持ちになる。

「本当に大丈夫だよ」

片手を繋いだままソファから降りて床に座った。

「ごめん。驚かせて」

「驚いたと言うか……」じつちが悪かつたから

千歳は伏し目がちに言つた。

「別に千歳は悪くないよ。それより話、続きを聞かせてよ」

これ以上千歳にこんな顔をさせたくないくて、努めて明るく言つ。

「このままじや気になつて夜もおちおち寝てられないし」

「今日はもうやめたほうがよくなきか？」

千歳は意外に過保護だ。

一応既に子持ちらしいから、そのせいかもしけないが保護者っぽいところがある。

「大丈夫。このまま中途半端に話を切られちゃつたほうが気になつて精神衛生上よくないよ」

「まあ、そうなのか……？」

千歳は難しい顔をして黙つた。

こんな顔もするのか。いつも楽しそうな顔をしているのに。それ

か、私が見たのは別人のように冷たい表情か。

「……それにはら！　さつきベースは件か人魚かとか言ってたじやない？　何、半魚じやなくて人魚も何か言い伝えとかあるの？」

「あー人魚な。人魚も予言するとか色々逸話があるからそれも混じつてるんだと思う」

千歳はベースになつた話くらいならいいかと思つたのか、軽く息を吐いてから話し始めた。

「土地によつて違うけど、人魚は吉兆、凶兆とか」

「日本にも人魚つっていたの？ 私も子供の頃、人魚姫読んでもらつて泣いたつけ」

王子様に恋をして声を引き換えに陸に上がつた人魚姫。最後、海の泡になる人魚姫は子供心に悲しいものがあった。

「それってアンデルセン童話の？」

「うん、そう。幼稚園の紙芝居で先生が読んでくれたんだけど、先生がまた上手く読む人でさ。最後はクラス全員号泣して大騒ぎだつたな」

「確かにその人魚姫つて若くて美人で健気で歌が上手いんだつたよな

？」

「そうだよ。他にもあるの？ 人魚の話。人魚はジュゴン説なら知つてるけど」

千歳は気まずそうに目を逸らした。

「……何？」

「いや。まだ結婚は夢を見ていていい年頃だ、うん」

「ちょっと。人魚姫で泣いたのつて幼稚園の頃だからね？ 今はむしろ、そんなボンクラ王子のために命を無駄にしなくても、くらいしか思わないから」

我ながら十年程度で随分すれてしまつたとは思うが。
千歳はちらりと私を見た。

「夢を壊されたとか言うなよ？」

「は？ 言わないよ」

「怒るなよ？」

「怒らないつて」

「……泣くなよ？」

「だから泣かないってば」

一体なぜそんなに念押ししてくるのか。

千歳は諦めたようにさつきの『日本妖怪事典』を片手に取った。そして繋いでいた手を外してページをめくり出す。

ずっと繋いでいたから少し寂しく感じた。

当の千歳は特に気にする様子もなくページをめぐりながら話を続けた。

「人魚はヨーロッパのほうがポピュラーか。ローレライとか聞いたことないか?」

「んーと、名前くらいは」

「ローレライって言つのはドイツのライン川にある岩山の名前なんだけど、伝説だとそのローレライっていう若くて美人な人魚がライン川を渡る船の人間に歌を歌うんだそうだ。けどその歌があまりにも上手くて船の奴らは聞き惚れて舵を取り誤つて川底に沈んでしまうんだと。他にギリシア神話にも出てくるセイレンっていうのは海で似たようなことをしている。海で歌つて船を難破させるんだそうだ」

「へえ。人魚姫とは随分イメージ違う」

聞いた限り、ローレライには健気で薄幸という人魚姫のイメージは見当たらない。

「あとはアイルランドのメロウ。女は美人らしいけど男はブサイクなんだと」

「何それ」

不細工な男の人魚を想像してしまいつい吹き出す。

「それこそ人魚というより半魚つて呼んだらしいのに」

「まあ見た目は置いといて、こいつが出てくると嵐が起きたって言って船乗り達が嫌がつたらしい」

「そりやあ嫌がるね」

船に乗っている時だつたら遭難、悪くすれば難破するかもしだいし。

「そういうわけで基本的に人魚にはいいイメージっていうのは少ない」

「あ、確かに」

「アンデルセン童話の美人で歌が上手い人魚って言うのはヨーロッパの人魚の特徴だろうが、最後幸せにならないのも悪いイメージが強いからかもな」

「なるほど」

バラバラと乾いた紙をめくる音を聞きながら相槌を打つ。その音が止み、あつたあつたと千歳は私の前に本を広げて差し出した。

「これが和製人魚」

受け取った本を見て絶句する。

「……半魚つ！」

「イメージはその瓦版の挿絵だったんだらうなあ

千歳は苦笑して言う。

渡された本には、鬼の角のようなものを生やした女の首から下が魚になつている絵が描かれていた。こちらも瓦版のものと注釈してある。

「文化二年、今から一百年前に越中えつちゆう……今の富山県に人魚が出て漁船を悩ませたから鉄砲で仕留めたって書いてあるんだ」

千歳は横から覗き込み、瓦版の内容らしいものを現代訳してくれた。

「全長が約十メートル五十。髪の長さは約五メートルってところか。両方の腹に目が三つずつついていて、金色の角が一本生えている。下腹は赤く、鳴き声は約四キロ先まで響く」

「ば……化け物じやない」

人魚姫のイメージが音を立てて瓦解していく。じつして絵を田の当たりにすると少しショックだ。

「んーでも外見はいかついけど、最後のほうに書かれてる。この人魚を一目見ると災難を逃れ、長生きして一生幸せになれるって」

「幸せどころかこんな姿を目撃しただけで一生もののトラウマだと思つんだけど」

「違ひない」

間髪入れず言つた私の言葉に千歳は声を上げて笑つた。

「これが半魚の姿のモーテルで、話は件がモーテルになつたわけね」

「た、多分」

千歳は笑い過ぎて苦しそうな息を整えながら答えた。

「他にも日本各地で人魚は目撃されている。祟つたり、絵姿が魔除けになつたり、予言を受けて津波を逃れたり」

「じゃあ、どつちかと言つと人魚の話のほうが半魚話のベースとして強め?」

「かもな。人魚って意外とポピュラーで偽物のミイラなんかが多く輸出されていた時期もある。『実際にいそう』な感じがしたんだろ。人魚のミイラが有形民俗文化財に指定されている市もあるって言うし」

「美人の人魚ならともかく、半魚風人魚のミイラのどこに需要があつて輸出なんてされてたの? それとも半魚風人魚が美人認定される国でもあつたの?」

真顔でそう言つと再び千歳は笑い出した。どこでツボにはまつてしまつたのか、おなかを抱えて涙まで浮かべて笑い転げている。この笑い上戸め。

しばらくまともに息もできないくらい笑い続けてからよつやく千歳は涙の浮かぶ目をこすつた。

「そりやあ俺も美人の人魚のほうがほしいけど……」

そう言つた千歳のあらゆる行動が停止する。目をこすつたまま、ぴくりとも動かない。

「……千歳?」

恐る恐る声をかけると千歳は一切の笑いをおさめて私の腕を取つた。

「結婚。悪いけどちよつとあつち行つてみる」

「へ？」

千歳に引っ張られ、入口や隠し扉とは別のドアの前へと来た。

「しばらくここで大人しくしてろ？ 灯りは点けてもいいけど絶対ここから出でてくるなよ。出来るだけ物音も立てるな。寝てもいいから」

そうして真っ暗な部屋の中へ放り込まれる。パチンと音がして部屋が明るく照らされると同時に千歳はそのまま外に出てドアを閉めた。

「え？ ち、千歳！」

ドアノブは回るのにドアはピクリとも動かない。千歳が押さえているのか。

「ちょっと何なの？ どうしたの？」

「後でだ。客が来る」

短いがそれ以上反論する気力を削がれる程に強い力を持つた声に、私は渋々ドアから離れた。

突然押し掛けたのは私だし、客があるならば追い返したつていいところを話に付き合つてくれただけでも温情だ。

これ以上はただの我ままになつてしまふ。そう思つて室内を改めて見ると、十畳ほどの部屋にクラシックな木製のベッドとサイドテーブルが置いてあつた。

この部屋の外にもベッドはあつたが、こちらのベッドのほうが大きくて部屋の印象も寝室らしく落ち着いている。こちらのパイプベッドには毛布が丸まつていたのに対し、こちらのベッドはあまり使われている様子がなく布団も枕もホテルのようにきれいに整つている。

あちらが仮眠用でこちらが本来の寝室というところだらうか。となると普段千歳はあるの仮眠用ベッドしか使っていないのか。

(……って、人様の私生活を推察するなんて悪趣味だ)

雑念を振り払うように頭を振つてそのまま膝を抱えて座り込んだ。物音を立てるなと言われたのだからこのまま動かないようになしき

れば。

それにしても表に出ないはずの存在の千歳の客とは一体誰なのだろう。

大叔母だろうか。それとも使用人。鷹櫻……だつたら私が隠れる理由はない。

考えているうちにについつい好奇心が芽を出す。

話を聞くとは言われなかつた。言われなかつたが、聞くのはやつぱり失礼だろう。

だがもしかしたら、この家でも特別な千歳に何か深く関わるようなことが聞けるかもしれないし。いや、それこそ千歳本人に聞けばいいだけで盗み聞きなんて礼を欠くにも程がある。

一人で座り込んだまま葛藤し続けていると、壁の向こうで千歳の声がした。

「入つていいぞ」

壁際にいるから声が拾えるんだ。今から動いたら物音が外に漏れるかもしれないし、動くわけにもいかない。

「遅くに前触れもなしに失礼致します」

千歳の声に続いて聞こえてきたのは落ち着いた、威厳に満ちた大人の男性の声だ。

「別にいいさ。とりあえず座れよ」

対して千歳は声音も口調も軽い。

相手はその千歳に丁寧な口調を使わなければならぬ誰か。使用者といふ雰囲^{かずのり}気ではない。……本家以外の親族か。

「よく来たな、和典」

「はい。失礼致します」

和典……やはり呼び捨てか。

この家で一番の権力を握つ大**叔母**を呼び捨てにするくらいなのだから、他の誰を呼び捨てにしていてもおかしくはないが。

「で、要件は?」

「はい。もちろん……私の前に桂子様がおいでに?」

和典という人の声が訝しげなものに変わる。

「ああ、そのカップな」

千歳の言葉で気付く。

テーブルの上に置きっぱなしにした私の分のココアだ。
どうしよう。バレたらまずいんじゃないのか。

体を強張らせて成り行きを見守つていると、千歳が軽い調子で言った。

「そつちは砂糖抜き。こつちは砂糖入り。両方飲みたかつたから両方用意したんだ。お前も飲む？」

「いえ、私は結構です」

その声からは怪しむ様子はない。

どうやらこの人は千歳のマイペースで常識で捕えられない行動を知つているらしい。

運が良かつた。

「ところで本日伺つた要件ですが」

「ん、ああ」

「敷地内の子供らへの披露日の席については滞りなく終了」したそうです

「私の事か。ここにいるといふのに何だか気まずい。

「それは何より。お前のところの子供達も出席したのか？」

「はい。先程長女から報告を受けておりました」

報告？

「逃亡者の血はあまり好ましくない者達と親しくなさつておいでだつたとか」

逃亡者の血？

好ましくない者達？

何の話だ……？

「桂子様も彼らを本家屋敷へ招待したとか
やはり好ましくない者達というのは鷹櫻達のことだ。
と言う事は、逃亡者の血は私。

逃亡者。

その単語を頭の中で反芻すると共に、一人の人物の顔が鮮明に蘇る。

駆け落ちした、跡取り。

それは……『逃亡者』は祖父？

心臓が外にまで響くんじゃないかといつ程に鳴っている。

「和典。その呼び方はあまり気分のいいものじゃない」

子供を窘めるように千歳が言つ。

「は。失礼致しました。結恵様は一ノ峰の長男を筆頭とする者達と親しくなさつたご様子」

「うん。いいんじゃね？」

「千歳様」

和典の声が咎めるようなものになる。

「そのように軽々しく」

「お前たちが重々しく考えすぎなだけだって」

溜め息がちに千歳は言つ。

「子供には好きにやらせてやれ。でないとこの家の大人達みたく歪ゆがむぞ？」

「私どもは歪みですか？」

「歪みだろう」

苦笑するような千歳の声が小さく聞こえた。

和典は重々しく息を吐く。

「そのような事を……ですから貴方にはこのような場所にいて頂かなければならぬのです」

「いて頂かなければならぬ…………？」

「けつこう快適だし別に俺は構わないけどな」

「千歳様。私どもとて好き好んで貴方をここに隔離しているわけではないのです」

……隔離。

この人が千歳を

？

「本来ならば、敷地内の者達には家格年齢を問わず貴方に会わせても良いと考えております。ですが貴方がそのようなお考えでは子供

らに示しがつきません」

「んー和典は考え方古いよな。いや、お前に限つたことではないけど」

「こうして綾峰家は代々続いて参りましたので」

千歳の呆れがちな言葉にもきつぱりと言い切る。それから声を「」と低くして呟くように呟つ。

「……私どもからすれば、『空み』は逃亡者です。裏切り逃げ出した者」

祖父が裏切り……？

思わず声を上げて部屋を飛び出しそうになつたのを何とか堪えた。ここで出て行つたらせつかく千歳が隠れさせてくれた意味がなくなる。手を強く握りしめ、小さく身を固めた。

「和典、俺や桂子は義将を裏切つたとは思つていない。一度とそついう言い方はするな」

怒氣の混じる強い声で千歳が呟つた。初めて聞く千歳の強い言ひ方に怒りよりも驚きが勝る。

「本家は絶対なんだろ？　ならば当主である桂子の意向に逆らつお前は反逆者か？」

「……申し訳ありません。言葉が過ぎました」

和典の声が怯むように弱々しいものとなる。

「ですがこれ以上は他の者達の不安は募るばかり」

「……」

「せめて結恵様が義将様のよつて『当たり』であらわれるなら、皆が安心することでしょう」

当たり……祖父は当たりだったのか。私と同じよつて。和典の言葉に対し千歳は冷めた声で返した。

「俺は『はずれ』であることを祈るよ」

「千歳様つ」

「当たりであつたなら、お前は義将の孫を代わりにこの家に縛りつけようとする気だろ」

「それでなければ綾峰家が……」

「そうでなければ続かないなら、それまでだつたと言つ事だ」

「何の感情も映さない言葉。

冷たさも、温かさもない、乾いた言葉。

「それがあるべき姿。この家は歪んでいる。それに気が付いた者が歪み。歪みに従う者が正道。……奇妙なことだ」

「立ち位置によって変わるもののが正道。綾峰家の正道は外界には歪みでしようが、綾峰に生きる者には正道です」

「一体正しいことって何なんだろうな」

心から疑問に思つよう、千歳は呟いた。

「貴方でも分かりませんか？」

「分からぬ」

迷いなくはつきりと。

「俺はお前たちが思つてゐるほど立派なものじやない」

「千歳様」

咎めるような声に、千歳は寂しげに言つた。

「あいつが死んで、俺が生き続けるよつになつてからずっとと考えている。一体何が間違つていたのか、……全て俺が間違つているのか」あいつ?

「そのよつな」とを申しては、リク様が悲しまれます

リク?

「……そうだな」

小さくそう言つてから微笑する気配。

「悪い。話を中断させたな」

「いえ。では続きを」

「ああ」

死んでしまつた『あいつ』。

それは千歳の亡くなつた恋人?

リクというのはその人の名前？

何だか嫌だ。

聞きたくない、考えたくない。千歳の好きだつた人なんて考えたくない。

好きだつたじやないかもなんて、過去形じやないかもしれない。
あんな寂しげな千歳の声なんて聞いたことない。千歳は今もその人が好き？

……何で私はこんなことを考えているんだろう。

千歳がすごく遠くに感じる。さっきまであんなに近くに感じたのに。扉一枚向こうにはちゃんといふのに。

嫌だ、私。

何でこんなことを考えるんだろう。

何でこんなに千歳に想われているというその人が嫌なんだろう。

嫌な人間なのは、私じやないか。

何これ、何これ。

これじゃあまるで、私が千歳の大切な人に嫉妬しているみたいだ。
まるで、私が千歳を好きみたいじやないか。

小さく小さく体を丸めて、必死にそんな考えに蓋をする。

私にそんなこと思う資格なんかない。

私みたいな薄汚い人間に誰かを好きになる資格なんてない。
だから駄目だ。好きになつたら駄目だ。

今ならまだ間に合うから。好きじやない。そうじやない。

ただここへ来て一番最初に近づいた年の近い人で、優しくしてくれたから勘違いしているだけだ。そうに決まつていて。

「……では、今日のところはこれで失礼致します」

「ああ、報告じこ苦労な」

「いえ。これも三ノ峰戸主の務めですので」

小さく扉が閉まる音がして部屋に静けさが戻る。

あの人は帰つたのか。

三ノ峰と言つていた。あの人気が三ノ峰の戸主なのか。

向とはなしにかづつ思つた。

貧弱な子供の決意

足音が去つて行つてしばらくして突然ドアが開いた。

「そんなところにいたのか。冷えたら？」

ドアの横で小さくなつて座つている私と目線を合わせるようになしやがみ込み、千歳は首を傾げた。

「ん……大丈夫」

何となく千歳の顔を見れないままに乾いた口を開いた。

「私も、そろそろ戻るね」

「全部聞いたか？」

相変わらず千歳は人の話なんて聞こいつともしない。故意になのかそうではないのかはわからない。

顔を上げられず黙つていると、優しく頭に手が置かれた。

「ごめんな。口が悪い奴で」

その手が優しくて温かくて泣きそうで嫌になる。

「……千歳」

「ん？」

「私は嫌な人間だよ」

千歳の手を頭から払つて、俯く。

「私はおばあ様があんなに良くしてくれのに、この家の権威を利
用することしか考えていらない、最悪な人間なんだよ」

吐き捨てるようにそう言つて。

「この家に来たのは綾峰の財力と地位と権力が欲しかつたから。あ
のまま普通に暮らしていくんじゃ到底手に入らなかつただろう力が
欲しかつたから。そのためにここに来た」

千歳は何も言わない。

「一体どんな顔をしているのか見ることもできない。
でも、嫌ってくれればいい。」

「そしてもう私になんて優しくしてくれなくなればいい。」

そうでないと、好きになつてしまふから。

もつともつと好きになつてしまふから。

こんなに優しい人を、こんなに汚く最悪な私が好きになつてしまふから。

だから嫌つて、疎んで、突き放してくれればいい。

姑息で最悪な私は、自分からなんて離れやしないから。

「そこら辺の俗物連中よりずっとずっと汚いの。あんなに優しいおばあ様に取り入つてやろうとしてる。おじいちゃんの孫だつて立場を利用して、この家の力を手に入れたいだけ」

ああ、口にして分かる。

本当に私は最悪だ。

性悪にも程がある。

昔から口ばかり、悪知恵ばかり回る。

「……力が欲しいんだ？」

そう言つた千歳の声は信じられないくらい穏やかだった。反射的に顔を上げようとしたのを抑え込む。

「つそう。私は力が欲しい。誰にも侵されない力が欲しい。だから私は

私は

「何でそう思うんだ？」

どこまでもその声は優しい。

少しでも体の力を抜いたらそのまま崩れ落ちてしまいそうなほど

に。

「何で？」

もう一度尋ねてくる千歳の声に、両手をぐつと握り締めて答える。

「私が私のために生きるために

「そうか」

静かな声が降つてくる。

さすがに呆れただろうか。自己中心的な子供だと。
いくら優しい千歳だってさすがに呆れただろう。

そう望んだはずなのに、そう思つと視界が涙で滲んだ。

……もう行こう。そしてもうここへ来るのはよそう。

千歳がこのことを誰かに話せばこの家にいられなくなるだろうか。
きっと大叔母は既に気づいているのだろうが。

でも他の家人間は黙つていらないだろう。こんな子供が家の地位財産を狙つているなんて知つて、それでも置いておこうなんて言つような醉狂な人間がこれだけ大きな家にいるとは思えない。

千歳の顔は見ないまま、立ち上がってドアノブに手をかける。

「それじゃあ帰るね」

「昨日もさー」

私の言葉など聞こえていないかのように軽い調子で千歳は言った。
「自分で自分の責任が取れるなら自分の意思を貫き通していいに決まつてるって言つたら?」

しゃがみ込んだまま、千歳は私を見上げて続けた。

「自分のために生きていに決まつてる。自分の人生なんだから」「思わず千歳を見ると、彼はいつもと変わらない表情をしていた。私と目が合うと千歳は小さく笑つて立ち上がつた。

「だけこの世界で自分の意思を貫き通すのは難しいよな。これも最初会つた時に言つたけど、せっかくの立場なんだから最大限に利用してやればいい。この面倒くさいことこの上ない家にいるつてことは、それだけの物を得るだけの代償になり得る」

この人は他人を蔑むとか嫌うとかないのか?

「結恵が結恵の思うままにしたいって言うなら俺はそれを止めない」「何でこの人はこんな矮小で卑劣なだけの子供に優しく言葉をくれる?」

「だから自分で自分を傷つけるようなことばかり言わなくていいんだ。泣いてしまうほど嫌なことを言わなくていいんだ」

眼尻に溜まつていた涙がすっと流れ落ちた。涙は千歳の手の上に落ちる。

「何でそんなこと言うのさ……私は最低な人間だよ」

「本当に最低な人間だったら、まず自己申告はしないだろうな」

千歳は笑つて私の両手を握り、額に自分の額を寄せた。

「結恵は悪役になりきれないタイプだ」

そう言つて小さく笑う。

それを否定するように声を荒げた。

「そんなことない。私は最低だ。汚くてずるくて、酷い人間だ。自分のことしか考えてないような最悪な」

「結恵は言つほど汚くもするくも酷くもないよ
『ぐぐ』く柔らかな聲音でそんなことを言つ。

「千歳はここに来る前の私を知らないから……！」

「うん、知らない」

「だつたら」

「でもここにいる結恵は知つてゐる」

「ここでは猫を被つてゐただけ！」

「そりが」

「どんなことを言つても柳に風。

優しい言葉も気配も、これっぽちも変わらない。

ああ、好きだ。

この人のことが好きだ。

こんなに優しい人を想つなんてそんな資格、私みたいな人間にあ
るわけないのに。

「……千歳」

「ん？」

千歳は額を外して私の顔を覗き込んできた。

「私は友達を売つたんだよ」

友達を売るなんて最低！

今も鮮明に思い出せるあの時の彼女らの表情が、言葉が胸に突き

刺さる。

「それでも私は、言つほど汚くもするくも酷くもない？」

千歳は屈んで私と目線の高さを合わせた。

「結恵は友達を売つて喜ぶような人間じゃないよ」

「まだそんなことつ！」

「だつて喜んでたらそんな顔しないだろ？」

まつすぐな千歳の視線に、両目から涙が溢れ出していたことに気づく。

「……違つ」

「何が？」

「私は酷いんだよ」

「結恵が思つてこるより酷くないよ」

「酷いよ」

「何でそう思う？」

静かな声がそう尋ねてくる。

私の思いと反比例するように、千歳の声はどんどん静かになっていく。

それが何だかとても腹立たしかった。だからむきになつて叫ぶ。「だつて、言われたもん！ 私は友達を売つた、酷くて最低な人間だつて！」

「売つたのか？」

「売つたよ……」

両膝から床に崩れ落ちる。

「私が迷つたから……」

涙が止まることなく溢れてくる。

疼くような痛みが一年前の記憶をはつきりと呼び起しやせる。

「私は……最悪なんだよ……」

一年前。中学一年の夏。

蝉の声がうるさくて、強い日差しが鬱陶しい日の帰り道。

「ねー結恵、帰り寄つてこ」

「あ、うん」

数人の友人に誘われ、私は楽しげに喋る友人達の後を黙つてつい

て行った。

今日の言い訳はどうじょうか？

もう言い訳も限界な氣がする。

「うん。気がするじゃない。絶対にそうだ。

今度ダメだつたら……。

考えたら体が震えた。それでも足は止められない。楽しげな友人たちの後を追う。

するとそのうちの一人が振り返って言った。

「ねー結恵。結恵はうちらの友達だよね？」

彼女はねじ曲がったような笑みを浮かべた。

「う、うん。当たり前だよ……」

「じゃあ今日こそは結恵もうちらと友達って証拠、見せてね？」

無邪気なようで強い口調。それは寒気がするほどに。

気付けば前を歩いていた全員が私を見ていた。貼り付けたような顔で笑いながら。

「結恵はうちらの友達だもんね？」

「そつそう。友達はイチレンタクシヨーでしょ？」

「ねー結恵？」

くすくすくす。

笑い声が強い口差しと蝉の声に溶けていく。

「う、ん」

無理矢理作つた笑顔で答えると、彼女たちは満足そうにまた笑つてしまふ。どうしよう。どうしよう。

心臓が今にも飛び出してきそうなくらいに鳴つて、私の周りだけ酸素が薄くなつてしまつたかのように息苦しかつた。

それから私達は通学路にあるドラッグストアに立ち寄つた。店内はクーラーが効いていてずっと口差しに照りつけられた身には心地よかつた。けれど心臓の音と薄い酸素は変わらない。むしろ酷くなつていい。

色々とリッピングロスへと伸びて、すっと制服のポケットへとしろしながら歩く。そしてそのうちの一人の子が笑って私達に『合図』する。

その手がリップグロスへと伸びて、すっと制服のポケットへとし
まわれる。

数人がそれに続く。

他の客も店員も、誰も気づいていない。

ここが死角になるつて学校では評判になつていたから。

これが私達の友達の『証拠』。

万引きして、そのスリルを共有し合つたつことで『友達』だと
いうもの。

それが出来ないものは友達じゃない、異端者。

「ほら、結恵もー」

一人に小突かれて我に返る。

今の今まで、何とか誤魔化して免除されてきた。けどもつ無理だ。
心臓が怖いほどに鳴り、酸素はどんどん薄くなつていぐ。

「結恵ー やんないの？」

冷やかな声に、震える手をかわいらしい化粧品の並ぶ棚へと伸ば
す。

万引きって犯罪なんだよね？

窃盗罪になるんだよね？

そうしたら私、犯罪者だよね？

心臓は早鐘のように胸を打ちつけるように鳴り響く。

「ちょっと、早くしなつて。気づかれるじやん

「結恵え？」

わかってる。

大人の言う正しいことが、私達の世界の正しいことは限らない
ことくらいわかってる。

ここでやらなかつたら友達が離れていつてしまつ。学校での居場所がなくなつてしまつ。

やうなきや、やうなきや……

でも……。

瞬間、私の周りから酸素が消えた。とつとつ心臓が胸を突き破つてきただかのようだった。

それからはよく覚えていない。

伸ばした手は鈍い衝撃を感じた。

耳に入ってきたのは雪崩のように物が落ちる音。それから少し遠くで知らない悲鳴が上がった。

数人が慌てて立ち去つて行く足音を聞きながら、一度そこで私の意識は途切れた。

目を開けるとそこはドラッグストアの休憩室だった。

白衣を着た、いかにも医師らしい男性が目を開けた私に笑いかけた。

「大丈夫かい？」

「私……どうしたんですか？」

「君は過呼吸を起こしたんだね。それが酷くなつて失神したらしい。息が苦しくなつたり動悸はなかつたかい？ あとはその原因になるようなストレスは？」

「ありました……」

まだぼんやりとする頭で答えると、ドラッグストアのエプロンをつけた中年の女性が医者らしい人の隣から顔を出した。

「もう起き上がるかしら？」

その女性が手伝ってくれ、今まで寝ていたソファから上体を起こした。

「あなたには少しお話を聞かせてもらつ事になるけれど……」

「店長。彼女の場合は強要されたのではないかと医師としては。過度のストレスの原因はそれでしょう。それに彼女の持ち物からは商品は見つからなかつたのでしょうか？」

「いえ。この子を疑つてはいるわけでなく念のためですよ」

何の話だか話についていけずにはいるど、店長だといふ女性は穏やかに笑つた。

「あなたのおかげでこことのところの万引き犯が分かつたわ」
その言葉に一気に背筋が凍る。

「あ、あの、私……」

「ああ、大丈夫。わかっているわ。あなたはそんなことしていいつて。平気で盗めるような子だつたらあそこで倒れたりはしないものね」

また、酸素が薄くなる。

「今、あなたが倒れた時に逃げ出した子たちとその親御さんに話を聞いてるのよ。本当に被害額が酷かつたから……あなたがあのまま物を盗んで帰つて行つていたら、被害はますます大きくなるところだつたわ」

優しく言つ店長の言葉が、今は地獄からの言葉のようだ。

「一応あなたのほうにも連絡してあるからもうじき親御さんが見えるわ。事情はこちから説明するからそしたら帰つていいからね」

ドアの向こうから怒鳴り声が聞こえてきた。

それに身を竦ませ自分のしたことの結果へ体を震わせると、何を

勘違いしたのか店長はそつと肩に手を置いてきた。

「警察の方にも来てもらつてるの。大丈夫、あなたは違いますって伝えてあるから」

……じゃあ、ドアの向こうで怒鳴られているのは。

「つ、はあつ、はあつ……」

「どうしたの！？」

「また過呼吸だ……店長、紙袋を」

「は、はい！」

店長が部屋を出していくのにドアが開けると別室との仕切りが消え、部屋が一時的に繋がつた。

警察官らしい人と、彼女らとその親が見えた。

一人が私と皿が合うと親や警察を無視して叫んだ。

「あんなわざとらしい演技までして友達を売るなんて最低！」

「あんたなんか友達じゃない！」

「嫌だったからってこんなことしなくてもいいじゃない！」

「こんな汚い奴だなんて思わなかつたし！ 酷すぎ！」

次々と投げかけられる言葉に、目の前が真っ暗になつた。

全部終わつた。

最低で汚くて酷い私は、絶望を皿の前にしながらそんなことを思つた。

「やめないか？」「

「ドアを閉めろ！」

警官や店の人によつて部屋は再び遮断されたが、それでも彼女たちの声が嫌でも聞こえてきた。

それから親が迎えに来て、店員から事情を説明されて家に帰つた。そんなことがあつて私は学校へ行かなくなつた。

当初は行こうとする過呼吸を起こしてしまつて行くことが出来なかつたと言うのが正しかつたが、次第に自分の意志で行くことをやめた。

休んでいる間中、携帯電話に誰からかもわからない無言電話や悪戯メールが毎日のように来た。

それが誰からのものかなんて、考えるまでもなかつた。

そこで私が嫌だと思っていたからこんなことになつた。けど嫌だと思わないことは不可能だつたらう。

その時思つた。

一生こうして何も言えずに過ごすのか、と。

一生じゃなくてもいい、いづれは自分の意思を言葉にできぬひつにならうとそう思つた。

でもどうすればいい？

長いものには巻かれなければいけない社会。

大人になればなるほど柵しがらみの増えるこの世界で。

……ああ、簡単だ。

弱い者は皆長いものに巻かれるのなら、私がその長いものになればいいんだ。

絶対的な地位と後ろ盾を持てばいい。

幼い私はそう単純に思った。

今はまだ無理でも、大人になつた時には必ず地位も権力も手に入る。

高級官僚でも政治家でも何でもいい。

派閥でも何でもうまく生き抜いて、確固たる権力を持つ。
だからそれまでは今までよりずっと強かにぎりく生きなければ。
どんな手段を使おうと冷たい人間にならうと、自分を隠してうまく生き抜いてやる。

嫌がらせの電話が鳴り響く携帯を叩き割つて、その時仄暗い復讐にも似た決意をした。

社会的な力を手に入れると。

たくさん勉強していくか必ず地位を手に入れると。

それが私の十四歳の夏の、昏いばかりの決意だった。

脆弱な子供／探る子供

「私、学校行かないで家で勉強するから。どうせ荒れてて授業になんかならないし。私立高なら内申より実力主義のところも多いし、私はそういうところに進学するから問題ないよ」

十四歳の秋、私はそう家族の前で宣言した。

戸惑う家族の中で、おじいちゃんだけが不敵に言った。

「自分で決めたことなら、貫き通しなさい」

「うん、そうする」

本当は学校に行くのが怖かつただけなんて、おじいちゃんじゃなくとも分かつたろうに。強がっているだけなんて分かつていただろうに。おじいちゃんも、お父さんもお母さんもそれに気付かないふりをしてくれた。

それからずつと、私は学校に関するあらゆるものを見抜けてきた。塾で勉強している。模試で結果も出している。

なら問題なんてないだろう？

そうしてどんどん、私は汚くて酷くて、最悪な人間になつていった。

自分でも分かるほど嫌な人間に。元友人達などよりもほど嫌な人間になつていった。

それでもこういう方法でしか自分を保てなかつた。

それからおじいちゃんが亡くなり綾峰家との繋がりができ、非現実的な逃げ道は現実的なものとなつた。

汚い私。

それを最初に打ち明けたのは大叔母だつた。

私はやつぱり小心者なんだ。優しくしてくれる大叔母を利用することができるない偽善者。

祖父から既に私の話を聞いていた大叔母はそれでも私を受け入れてくれた。

強がる私を受け入れてくれた。

それから、この人と家族だけは裏切らないと決めた。私を信じてくれる人たちを裏切ることだけは絶対にしないと。

それが汚い私のせめてものけじめだ。

どれだけ酷い人間になつても、自分を信じてくれる人達だけは裏切らない。絶対に。

家族と大叔母。祖父が亡くなっているから既に三人。

それ以上なんて、現れないと思っていた。

なのに。

「何で千歳は、そういうことばかり言うのを……」

「そういうつて？」

千歳は小さく首を傾げる。

「何で私のこと、汚い人間だつて罵らないの！？ 今言つたでしょ

！？ 私は友達だつた人間を売つたんだよ！？」

「だつてそれ、別に結恵は友達売つてないじゃん」

本当に軽く言う。

その上欠伸までして言つた。

「て言うか俺、結恵の元友達なんてどうでもいいし。俺は身内以外にはけつこうどうでもいいからさ。他人なんてどこでくたばろうが知つたことじやないよ。ましてそれが俺の大事な身内を泣かせるような奴らなら」

「でも……」

「汚い汚いつて結恵は言つけどさ。本当に汚い人間は自分を汚いなんて言わないぞ？ まあ、結恵が自分を汚い人間だつて思いたいならそれでもいいけど」

そういうわけじゃない。

汚い自分なんて好きなわけではない。

だけど汚くなれば私は生きていけない。

私は弱くて、あまりに弱すぎて、汚く生きる以外の生き方なんて想像もつかない。

言葉にできずに唇を噛みしめる。口を開いたらそのまま声を上げて泣き出しあはうのは目に見えているから、血が出るほど強く噛みしめた。

そんな私の今の顔はきっと物凄く不細工だろう。体を震わせて感情の爆発を抑える私を見て、案の定千歳は笑った。

「我慢しないで泣け？」

必死でかぶりを振るも、今にも涙腺は決壊しそうだ。

千歳は少し考えるようにしてから私の頭を撫でてくれた。

「……今までよく頑張つた。だから、少し息を抜け」

そんな言葉。

そして涙腺が破壊される。

私のちつぽけな意地もプライドも全て、木端微塵に破壊された。そのまま私は声を上げて泣いた。千歳にすがりつくようにして、

大声で泣いた。

何がそんなに悲しいのかなんて自分でもわからなかつた。ただただ涙が溢れるばかりで。ずっとずっと張りつめていたものが緩んだ、そんな気がした。

千歳は小さな子供みたいに泣きわめく私の背と頭をなでてくれながら、ずっとそばにいてくれた。

「結恵はまだ十五歳なんだから、まだまだいっぱい悩んでいっぱい泣いていっぱい笑つて、それで年食つてばあさんになつた時、あんなこともあつたなつて思えるような人生過ごせ」

「……つうん」

「化けて出るような後悔のないよつて、やりたいようなやるといい

「うーん」「うーん」

「結恵の好きに生きる。義将も桂子もお前の両親も……俺も、それでお前が少しでも幸せに過ごすことを祈るよ」

「……うーん」

その後もずっと泣き続けた。どこからこんなに水分が出るんだろうとこくらべて泣き続けた。

そうして泣き疲れて夢心地に千歳の声を聞いた気がする。

次に会うのは正式な場でだ、と。

その時には全部話す、と。

そして、結恵には拒否する権利があるから、と小さく付け足すよう

に言った。

それが夢だったのか現実だったのかはあまりに記憶が曖昧ではつきりとはしないが。

「今日は千客万来だ」

「結恵が来たのか？……って、何で寝てるんだ？」て言つかそいつ、泣いてたのか？」

鷹櫻は眉根を寄せ、瞼を腫らしてベッドで寝入っている結恵を見下ろした。

「人魚姫や人生論なんかについて話したりしてね」

「人魚姫？」

鷹櫻はますます分からないという顔をした。

「まあいい。……」といつから聞いたか？」「

「血のことか？」

「ああ。当たりみたいだからさ、コイツ」

「結恵はどうも義将に似ちゃつたらしい」

千歳は小さく笑つて結恵の布団をかけ直してやり、鷹櫻を連れて部屋を出た。

「そういう半魚伝説つてお前も聞いた？」

「ああ、律が話した時に俺もいたから」

鷹櫻は興味なさげに答えてソファに座つた。

「何か食つか？」

「「」の間のチョコ。まだある？」

「あれ俺の秘蔵なのになあ。お前は本当に遠慮がない」

千歳は不満そうに言いながらも鷹櫻の前にチヨコ入った箱を置いた。

鷹櫻は遠慮なくそのうちの一ツを取り、包みを剥きながら言った。

「最奥へ意識を向けながらも、真実への田くらましつてところだ。最奥はこの家の絶対。けど真実は知る者だけが知ればいい。そんなところか」

「さつきも和典が面倒なこと言こにきたしな」

「三ノ峰の親父が？」

そう言った鷹櫻の声に棘が混じる。

「俺がちゃんとしないとお前らに示しがつかないってわ」

千歳は笑つて自分もチヨコを口に放り投げた。

「あの親父、苦手なんだよな。三ノ峰の役割をそのまま人間にしたような親父だよな」

「まあそつ言つてやるな。あいつはそれが仕事だ」

鷹櫻は嫌そうに顔をしかめた。

「この家のそういう面倒くさいところが嫌いだ」「ははっ」

「俺みたいな奴には特に」

「……なあ鷹櫻。お前は義将を恨んでいるか？」

鷹櫻は軽く肩を竦めた。

「はつ。恨むなら義将じいさんじゃねえだろ。実の親なら死ぬほど恨んだけどわすがにもうこー。どうせもう死んでるしな」

「そうか」

「千歳は？ 千歳はこの家を恨んだことねえの？」

鷹櫻の切れ長の瞳がまっすぐに千歳を射る。

「この家のせいで千歳はこの家に捕らわれてる。今までだけでなく、この先も」

「鷹櫻」

「何で千歳はこの家の言いなりなんだよ？」

千歳は頭を伏せ、噛みしめるよつて答えた。

「こゝは俺の家だから」

「……わっかんねえ」

「それでいいんだよ。お前まで俺みたいになる」とはない
言いながら千歳はテーブルの上のチョコの包み紙をまとめて「」み
箱に放つた。そしてふいに笑う。

それを見た鷹櫻は訝しげに眉根を寄せた。

「何だよ？」

「いや。昔、義将にも同じ」と言われたなあつて

「へえ？　あの人も同じこと思ったのか」

「はつきり物を言つ奴だったから。結恵はあいつに比べればかわい
いもんだ」

千歳はソファの背もたれに身を預けて苦笑する。
その様子を見ながら、鷹櫻は呟くように言つた。

「あの人も当たりだつたんだよな」

「ん？　ああ。当たりも当たり。大当たり」

おどけたように千歳は言つ。

「よくこの家を出したな。お前はともかく他の連中がよく見逃した
よな」

「俺が見逃せつて言つたから、それでおしまこ」

無邪気に言つてみせる千歳に鷹櫻は額に手を置いた。

「さつすが綾峰本家は違つ。鶴の一聲か」

「桂子も俺と同意見だつたからなあ」

「でも他には？」

「他つて？」

千歳は知りながらとぼける。彼はこの話題を好まない。

鷹櫻がいつ口にしてもいつだってのらつくりつとはぐらかしてき
た。

そしてその奥にあるであろう真意を読みとることは今なお不可能
だ。

今日もやはり無駄だつたかと思いながらも鷹櫻は口にさる。

綾峰一族の、本家の、綾峰千歳の禁忌を。

「鶴でなく、鶴の一聲」

鷹櫻の言葉に千歳は失笑するよつとして言つた。

「くくっ。お前も大概ロマンチストだなあ。半魚の次は鶴か」
不自然なほど穩やかに千歳は笑う。

子供に見せる大人の顔で笑う。

そんな千歳に鷹櫻は軽く苛立ちながら、半ば自棄になつて口を開いた。

「鶴で悪ければ、この家に呪いをかけた奴だ」

その言葉は痛いほどの静寂を呼んだ。

目の前に座る千歳は笑いを納め、あらゆる表情を失くし鷹櫻を見た。

「鷹櫻」

静かな声なのに恐怖を感じずにはいられない。

鷹櫻は小さく身震いし、目を伏せた。

「……悪い」

「口は禍の門だ。俺だからよかつたけど、次からは気をつけろよ?」

千歳はこりと笑つて立ち上がつた。

こういう時、思つ。

千歳の笑みは時として、威嚇でもあるのだと

「さーて。俺は結恵を部屋に届けてくるよ。朝起きて部屋にいなかつたら桂子が心配するだろ」

「……お前が? 上に行くのかよ?」

鷹櫻は心底驚いて目を見開いた。

千歳ですら初めて見るレベルかもしけないほどあからさまに驚いている。

「ま、たまにはなー。屋敷内だけだしいいだろ。桂子には連絡入れて行くよ」

「桂子ばあさん、お前が結恵と会つてたこと知つてるのか?」

「さあ？ でもこれで分かるだろうしどっちでもいいだろ。ついでに『正式』に本家の結恵を俺の前に連れて来てくれって催促してくるよ」

「お前、結恵をどうするんだ？」

戸惑うような鷹櫻の言葉に千歳は笑顔で答える。

「どうもしないさ。けど結恵が当たりである以上、いつまでも先延ばしにできそうもないし」

「……そうだな」

「大丈夫。悪いようにはしないから安心しろ」「わかつてる」「わかつてる」

千歳が自分たちに不利になるような事をしないことくらい。それくらいは鷹櫻だってわかつている。

「じゃあ俺も今日のところは帰る」

「ああ。悪いな、大して構つてやれなくて」

「別に。寝れなくてヒマだつただけだし」

「寝れない暇つぶしに人を使うなよ。俺が安眠中だつたらどうするんだよ」

不満げに口を尖らせる千歳を背に、鷹櫻は隠し扉に手をかけた。

「その時は叩き起こして茶でも淹れさせるよ」

「こーのクソガキが

「ガキじゃねえし。じゃ

「気をつけてな

「だからガキじゃねえって」

鷹櫻は振り返ることなく部屋を後にした。

千歳は小さく笑い、結恵の眠る部屋のドアノブに手をかけた。

高い天井が視界に入った。

……ああ、ここは私の部屋だ。

ベッドサイドにある時計を手に取ると七時半だった。

欠伸をしてベッドを抜け出し、カーテンを開けると朝日が射し込んだ。

「眩し」

暗がりにいた日には強烈な光が半分寝ぼけていた頭を覚醒させる。

「あれ……私、いつベッドに入った？」

千歳の部屋へ行つたのに、なぜ私は自分の部屋にいるんだ？

あれは夢？

チエストの上の鏡を覗き込むとそこには瞼が腫れ上がつた自分の顔が映る。

そうだ。千歳の部屋で大泣きして疲れて寝てしまったんだ。

やはりあれは夢じやない。じゃなぜ私は自分の部屋にいる？

自分で帰つてきた記憶は全くないのに。

さつと冷たいものが背筋を伝い、慌てて部屋を飛び出した。

この時間なら大叔母は起きているはずだ。いつも通りなら既に食堂にいるはず。

「あら、お嬢様。おはようございます」

部屋を飛び出してすぐ、ちよづき三波さんが私を起こしにきてくれたところだつた。

「あ、おはようございます。あの、おばあ様はどうぞ？」

「奥様でしたら先程食堂に降りていらっしゃいましたが」

「ありがとうございます」

すぐさま食堂へ降りようとした私の肩を三波さんが笑顔で掴んだ。

「あの……？」

振り返ると三波さんはにっこりと笑つた。

「そのよつなお姿ではお風邪をひかれますよ。」

「言われて自分がパジャマ姿だったと気付く。

「い」「ごめんなさい」

「いいえ。それより何か羽織るものを取りて参りましょうか?」

「大丈夫です。着替えてから私もすぐに食堂に行きます。……あの、

三波さん

「はい」

三波さんは笑顔を崩さずに答えた。

「私を着替えてくれたのは三波さんですか?」

千歳の部屋へ行つた時、確かに私は部屋着だつた。パジャマに着替えた覚えはない。だとしたら誰かが着替えてくれたのだろう。

三波さんは曇りない笑顔で答えてくれた。

「はい。勝手ながらあのお姿では寝辛いのではと思いまして。お召しになつていた服は今洗濯しております」

「そう、ですか」

「はい。千歳様が結恵様を送つてくださつたんですよ」

私の聞きたかった一番のことを三波さんは躊躇いなく口にした。

思わず顔を上げて詰め寄る。

「三波さん……千歳のこと?」

「もちろん存じております。私も長く本家にお仕えさせて頂いておりますから。さ、お話はこれくらいにして先にお召し変えなさつて下さいな。今朝は少し冷えますからね」

三波さんに言われるがまま私は部屋に戻つて顔を洗い服を着替えた。それから食堂へと降りると、大叔母がダイニングテーブルで新聞に目を通していた。

「お、お早うございます。おばあ様」

大叔母は私の姿を認めると新聞を置いてについつと微笑んだ。

「お早う。結恵さん」

その様子に普段との違いは見られない。

「さあ、朝食にしましょつ」

「はい」

促されるがままに大叔母の向かいの椅子に座る。まだ慣れないが座れば次々とオムレツやサラダが皿の前に用意されていき、朝食は始まる。

昨日までと同じ平和な朝食。

壁際に控えた使用人も、大叔母も、誰も千歳のことは口にしない。自分から口にするべきなのか考えているうち、皿の上の料理は綺麗になくなつた。そして食後に濃い味の紅茶を出され、片付けに控えていた使用人の多くが食堂を出た時。

「結恵さん」

大叔母が優しげに微笑んで私を見た。

「はい」

自然、背筋を伸ばす。

大叔母は私の目を真っ直ぐに見て、ゆっくりと言葉を紡いだ。

「近く正式に貴女を綾峰家の最奥、千歳のもとへと連れて参ります」それはいつもの大叔母よりも、ずっと無機質で義務的な言葉。

「……はい」

私の知らない大叔母の姿に不安を覚え俯いた私に、聞き慣れた優しい声がかかる。

「こう言ってから最奥へと連れて行くことが、代々の綾峰家の仕来たりなの」

顔を上げると大叔母は困ったように微笑んでいた。

そこに義務的で機械的な様子はどこにもない。目の前にいるのは祖母と呼んでくれと言つた、優しい大叔母だ。

「怖がらなくとも大丈夫ですよ。私も貴女のおじい様も皆、こうして最奥へ足を踏み入れてきたのですから」

「あの、申し訳ありません。おばあ様。勝手に千歳に会いに行つてしまつて……黙つていて、申し訳ありませんでした」

申し訳なさに深く深く頭を下げる。

『仕来たり』に『正式』な行き方。

そんな面倒な決め事があるほど、千歳のいるあの地下はこの家に
とつて重要なものだつたのだ。それを新参者の私は独断で侵して
いた。

「結恵さん、顔を上げて頂戴？ 黙つてらしたことはやはり悲しい
けれどこいつして一言、貴女は謝つてくれた……それでようじいじや
ありませんか」

顔を上げるとやはり大叔母は優しげに笑つていた。

「素直に自分の非を認め、謝罪することができる。それは貴女の誇
るべき長所ですね。兄もよくそつ言つていました」

「祖父が？」

「ええ。自らの非を認める」とはなかなかに難しいことです。ですが
それが出来る孫がいる、と兄は生前私に自慢げに話してくれまし
た

「おじいちゃんが……」

そんなことを言つていていたんだ。そつ思つと胸が熱くなる。

「それに正直、千歳さんについて黙つていたのは私も英断だつたと
思ひますし」

それは辺りを憚るような小さな声だった。

「え？」

「もつお氣づきでしようが、千歳さんはこの家において特殊な方で
す」

大叔母は頭を伏せ、薄く笑つた。

「出来るのなら貴女を千歳さんと会わせたくはありませんでした。
最奥へ行き、彼に会つて頂くということは、この家の最も暗い部分
を見せるといつともなりますから」

「……」

「全では『正式』に千歳さんのもとへ行く際にお話します

「……はい」

「もしも全てを聞いて、貴女がこの家に留まることが嫌だと思った
ら遠慮なく仰いなさい。住居などは手を貸させて頂きます

「……はい」

「え？ そんなことあるわけ……」

反射的に答えると、大叔母は悲しげに息を吐いた。

「全てを知つたなら、考えが変わることはないとは言えませんから」

最奥へは七日後に。

そう言われてからはお互い千歳のことで、最奥のことについては触れなかつた。

それから私は何となく、千歳のもとへは行けずになつた。

夢だと思つた千歳の言葉を思ひ出す。

全ては正式な場で話す。

千歳もそう言つていた。

『正式』といふのがこの家の仕来たりに則つた形なら七日後、大叔母と共に彼を訪ねる時がそつなのだらう。

では『全て』は？

血のこと。それから千歳自身のことだらう。

奇妙に騒ぐ血の意味と、この家において特殊な千歳。それから。

生き神……否、千歳曰くの化け物について。

全て聞いた時、私はどんな選択をするんだろう。大叔母の言つとおりこの家を出たいと思うのだろうか。でも少しくらいのことでの家を離れようなんて思えない。最初にこの家へ来た動機はつまりいちっぽけなものだつたけれど今はそれだけじゃない。

千歳といつた。

私を撫でてくれる優しい手。まづすぐな言葉。不思議で優しい空気。

もつとたくさん話したい。もつともつと一緒にいたい。

この感情を何て呼ぶのか何となくわかる。わかるけれどそれが正しいのかは分からぬ。そんなもの自分とは無縁だと思つていたから。

恋だなんて甘くかわいらしき感情は、私には最も縁遠いものだと思つていたから。

ただ優しくされて勘違いされているだけかもしれない。私の汚い部分を受け入れてくれたからそう思うだけなのかもしない。

きつく瞼を閉じて浮かぶのは、整った顔で子供みたいに笑う千歳。これが恋がなんてわからない。この家のことだつて私はまだ何も知らない。千歳があんな場所にいる理由だつて知らない。

だけど。

「……会いたい」

それだけは確か。

会つてまた一緒にお茶をしたい。千歳のあの不思議なペースに乗せられるおしゃべりをしたい。出来るなら、また頭を撫でてくれたらしい。

今すぐ会いに行きたいと思う反面、何となく『正式』な時まで会いに行つてはいけない気がした。多分、会いに行つても千歳も会ってくれない。そんな気がする。

「七日……」

長い。

一週間はこんなにも長かつただろうか。

「早く七日経てばいいのに」

この家の闇を知つても何を知つても、また千歳に会いたい。

そうだ。その時は昨日の夜のお礼も言わなければいけない。あんなに泣き散らしたのに根気よくそばについていてくれた、そのお礼を。

七日。

長い長い七日。

家庭教師に勉強を教わり、大叔母とお茶をして、時折屋敷や敷地内を散策したりして過ごした。少しでも忙しくして千歳やあの地下の事を思い出さないようにしていた。

それでもふとした瞬間に千歳の空気が懐かしくなったり、敷地内を歩いていてもこの屋敷内の奥深くに隠された何かについて考えて

しまう。

そんな折、午前中の授業が全て終わってお茶を飲んで一息ついた時のこと。

「お嬢様。一ノ峰家の鷹久様、鷹槐様。四ノ峰家の標葉様、四葉様。四ノ峰分家の律様、令様。五ノ峰家の薰子様がお見えですが、お通ししてもよろしいでしょうか?」

「鷹槐達? 私は構いませんけど」

そしてメイドさんに案内されるままにサロンへと足を向けた。サロンへ足を踏み入れると、先日の半魚伝説のはぐれ者メンバーに更に知らない男の人があ菓子片手にくつろいでいた。

「それでは皆様。ごゆっくり」

扉が閉じられ、メイドさんが下がっていくと律が大仰に息を吐いた。

「あーかたつくるしいな、おい」

「本家は肩凝るなあ」

令も肩をぐるぐると回しながら言つ。

「やほー結恵つち

四葉がここにこと椅子から飛び降りて寄ってきた。

「遊びに来たよ!」

「お邪魔しているわ」

薰子が優雅に小首を傾げて微笑む。

「今日は学校が創立記念日でさ、急にどうかなーとは思つたんだけど遊びに来ちゃったよ」

そしてすっかり説明役が板についている鷹久が教えてくれる。鷹槐もその隣でもくもくと出されたスコーンを半分に割りながらこちらを見た。

「今日は標葉しばを連れてきたいって四葉が言つから連れてきた

「標歯?」

「聞いた気がするけど誰だつたか?」

「お兄、結恵つちに自己紹介」

四葉に引つ張られてきたのは典型的な中肉中背に眼鏡をかけた、いかにも人の好さそうな好青年、といった雰囲気の男性だった。ここにいる皆と比べると一番の年長者、多分二十代前半くらいだろう。鷹久や令と比べると地味な雰囲気はあるけれど穏やかな表情は安心感を与える。

「初めてまして。四ノ峰家戸主長男の標葉と申します。先日はうちの四葉達がお世話になりました」

標葉さんは優しげな笑みを湛え、右手を差し出してくれた。

「いらっしゃりこそ初めまして。綾峰結恵です。えつと四葉のお兄さん、ですよね？」

「はい」

ここにこと答えてくる標葉さんは「」の面子の中では信じ難いほどに真つ正直そうだ。

するとぴょこんと四葉が飛び出してきて楽しげに言った。

「でもひて一七歳年下の薫子ちゃんと付き合つてるんだよー。このロリコン～」

四葉の明るい声に、標葉さんの顔が真っ赤に染まる。更に薫子がむせ込む。

「ロ、ロリコンはないだろ、四葉」

標葉さんは慌てふためきながら妹に言い聞かせるよつと言つた。薫子もそれに便乗する。

「そうよー。標葉さんはロリコンなんかじゃないわよー。だいたい七歳くらいの差なんて」

「年なんて関係ない。そう言つてお人好しな標葉を言つぐめたんだよな？」

意地悪く笑うのはやはり律。薫子は耳まで真っ赤にして一触即発の雰囲気。これはまたあの演武もどきが見れるかと密に期待しているものの、今日はなぜか薫子は黙つて顔を歪める程度に留めている。したりとばかりに律は更にわざとらしく言つ。

「あーあー。うちの標葉が薫子の毒牙にかかった時はどうしようか

と令と額をつき合わせて考えたもんだね

「毒牙ですって……？」

「薰子の声が不穏なものを帶びて行く。

「こら。律くん、そんな言い方は……」

標葉さんが少し強めの口調で律を咎めるが、律はふいっと顔を背けただけだ。

「標葉さんが話しているのだから無視するんじゃないわっ」

ついに怒髪天を突いた薰子の右ストレートが律の顔面めがけて放たれるが、律は余裕でそれをかわす。

「そんな怒り狂つて当たるかよ」

「何ですつて！？」

「薰子さん、暴力は駄目だよ」

標葉さんの落ち着いた声に、薰子は更に振り上げた手を降ろした。この人、あの薰子を黙らせた。つい感動してしまう。

「律くんも。女性に失礼なことを言つちや駄目だよ」

「……へーい」

あの律が、素直をとは言い難いけれど従つてている。実はこの人、地味に見えて最強か。

標葉さんは困ったような笑顔で私を見た。

「先日もこの調子だつたって聞いたんですけど、根はいい子達なんで仲良くしてあげて下さい」

「いえ、こちらこそ！」

慌てて言うと標葉さんは嬉しそうに微笑んだ。

「ありがとうございます」

本当にいい人だ。

薰子が好きになるのはどんな人間なのかと思つたが、いい人だ。格別変わったところがない、普通という美德を持つたいい人だ。良くも悪くもクセのある綾峰の中では貴重なタイプの気がする。

そんなことを考えていると、クセのある妹が標葉さんを見上げた。「ねえねえお兄、結恵つちは敬語はやなんだよ？ 言つたじやない

「え、いやでも……」

「いいじゃないですか、標葉さん。俺達にもタメ口なんだから結恵ちゃんもタメ口で。ねえ？ 結恵ちゃん」「

鷹久に聞かれ、大きく頷く。

「あまり敬語を使われるのとか慣れてなくて……差し支えなければ私も他の皆と同じように扱つてくださると嬉しいです」「でも、いいのかな？」

恐縮しきった様子で標葉さんが尋ねてくる。

「はい。私は所詮しがない居候ですから、そんなに気を遣わないで下さい」「

標葉さんは困ったように頬をかいたが、すぐに穏やかに笑った。「それじゃあ妹達共々、よろしくね。結恵さん」

「はい。どうぞよろしくお願ひします」

「僕のほうも敬語はいいけれど……」

「いえ。慣れないでので敬語使わせて下さい」「

そう言つて張ると標葉さんは渋々とだが了承してくれた。

和んだところで四葉がにこにこと話しかけてきた。

「あのね、結恵つち。こないだは律が気色悪い怪談したでしょ？」

「怪談じやなくて伝説だつづーの」

「それでね。お兄がもつとちゃんとしたお話を知ってるって言つから
今日はそっちを話してもらひに来たの」

律の抗議を綺麗に無視して四葉はにこにこと笑う。

「ちゃんとした話？」

標葉さんを見ると、標葉さんは少し困ったよつて言つた。

「ちゃんとしたと言つたか、あの半魚伝説の元になつた言い伝えがあ
るんだ。僕は子供の頃にたまたま祖母に聞いたことがあつて

「元になつた話つて、やつぱりあるんですか？」

「うん。あの半魚伝説はそれをかなり脚色したものだと思つよ」

「標葉、今までそんな話してくれなかつたじやんよ」

律が不満そうに声を上げながら椅子に座り直す。

「いや、何だか四葉も律くんも令くんもえらく盛り上がり上がつていたか
ら水を差しちや悪いかなと思つて」

「標葉は変なところで几帳面だよなあ」

まだ不機嫌な律の隣で令は楽しげに笑う。

ずり下がつた眼鏡を直しながら標葉さんは眉を下げて笑つた。

「この間の昼食会の時にその半魚伝説で皆随分気分が悪くなつてい
たつて四葉から聞いて、だからもういにだらうと思つてその話は嘘
だつて言つたんだ」

「結恵つちと薰子ちゃん、半泣きだつたつて言つたらあたしと律が
怒られたんだよー」

「そう言えば半泣きしたつけ」

いくら氣色悪い話だからといって、十五にもなつて半泣きになつ
たと人に言われると恥ずかしいものがある。薰子を見てみると、彼

女も顔を赤くして椅子の上で小さくなっていた。

「で、その話の元を知っているって言つたら四葉が皆の前で話してくれつて言つて、今日押しかけちゃつたんだ」

「そうだったんですか」

「せつかくの本家の半魚伝説の真実の言い伝えだし、皆で聞いたほうが楽しいと思って。実際はそんなにグロくないんだって」

「それは俺も聞いてみたいな。でもガキの俺達が聞いちやつていいんすか？」

鷹久の言葉に、確かに、と鷹櫻と薰子から同意の声が上がる。けど標葉さんは柔らかに笑つて言った。

「それは構わないと思うよ。僕も聞いたのは小学生の頃だつたから「へえ。じゃあ標葉さん、早速話して下せーよ。ほり、結恵ちゃんも座つて座つて」

鷹久に促され、私も上座下座などは関係ないらしい空いた椅子に座る。隣は丁度鷹櫻だった。

「あ、おはよー」

「……どうも」

田線だけをこじらに寄こして、鷹櫻はそれだけ答えまたそっぽを向いてしまつた。

本当に愛想のない奴だ。別に悪い奴ではないし、少し慣れたてきただが。

「お兄。ほり皆揃つたから話して」

「えーと……せつかく皆で集まつたのに、本当にそんな話でいいのかな？」

標葉さんがぐるりとテーブルに集まつた顔ぶれを見渡すとそれぞれが頷いた。

「僕が亡くなつた曾祖母から聞いた言い伝えはそんなに詳しくはないんだけど。とりあえあず始まりは同じ。この家の先祖が行方不明になつたところから始まる。当時は綾峰という姓ではなく、みね峯といふ姓で商いをしていたそうだよ。その時代の当主の次男、草次郎そうじろうと

「いつ子供がある日突然姿を消したんだそうだ」

じきに七つを数えようかという頃、隠れ鬼をしたまま草次郎は姿を消した。それを人は山の天狗によつて攫われたのだと噂したと言つ。

「隠れ鬼っていうのはかくれんぼのことだね。昔は夕暮れ時にかくれんぼをすると神隠しに遭うって言われていたそうだよ。それから神隠しつて言うのは別名天狗隠しとも言つて、天狗に攫われてしまつたという考え方もあつたんだ」

そう言つて標葉さんは更に話を続けた。

七日七晩山狩りをしても草次郎は見つからず、誰もが草次郎はもう帰つて来ない、そう思った。

だが八日目の朝、草次郎は村へ帰ってきた。そして村が戦によつて焼かれる、と予言した。

「その後は半魚伝説と同じで草次郎という人の予言は当たり、その後もいくつもの予言でこの家を助けたそうだよ」

「え？ まさかそれで終わり？」

令がまさか、という顔で標葉さんを見ると、標葉さんは首を縦に振つた。

「一応僕が曾祖母に確かに聞いた話はここまで」

「本当に詳しくないなー。神隠しにあつた先祖の名前が分かつだけかよ」

令はつまらなそうにテーブルに突つ伏した。

「神隠しなんて、本当にあつたのか？ それに予言つてのも。ガキに先祖を敬わせるための『デマじやねえの？』

律が訝しげに尋ねると標葉さんは苦笑した。

「神隠し自体は昭和初期くらいまで本当にあつたんだよ。ただその原因はヒステリーや精神疾患、人為的な誘拐、事故なんかが主らしけれど」

「なーんだ。口マンないー」

四葉も令の真似をしてテーブルに突つ伏する。

「神隠しはわかつた。けど予言は？ やっぱテマか？」

「うーん……ここから先は僕の推測なんだけれど」

「ここから先、という言葉にすっかりやる気をなくしたかに見えた四葉と令が起き上がった。

「何？ この先って何？ お兄、何に気づいたやつたの？」

「標葉の推測つて？」

四葉と令に詰め寄られて標葉さんは後ずさりした。

「そ、そんな期待した顔されると……本当にこの先はあくまで根拠のない推測だから」

「いいよーそれで！ だから教えてよー！」

「そうそう！ 標葉、かわいい妹と従兄弟がこんなに頼んでるんだからさ」

標葉さんという人は見た目に反せず押しに弱いらしい。

本当に根拠はないけど、と前置きをして話し始めた。

「天狗小僧を聞いたことがある？」

聞き馴染みのない言葉に田を見張ると、標葉さん以外の全員が似たような反応をしていた。

それで理解したらしく標葉さんは続けた。

「文政年間ぶんせい：1800年代に天狗に攫われて、異界を見たり不思議な術こうそうを覚えて数年後に帰つてきたっていう子供のことだよ。天狗てんぐ小僧・寅吉といきちっていう」

「天狗小僧、寅吉……」

いかにも昔の響きを持った名前だ。

「彼は元から予知能力を持つていたとも言われるけれど、神隠しから帰つてくるとますます不思議な術を覚えていたそうなんだ。もともと天狗の中には人に剣術を教えたり、超能力を与えたりすることが好きな大天狗という話もあるから、もしかするとうちのご先祖様も天狗に不思議な力を授かって帰つてきたって一族は考えたんじやないかなと思つて」

「……帳尻合わせには良さそうだな」

「当時の国学者の平田篤胤ひらたあつたねという人の『仙境異聞』という著書に、彼の異界で見聞きしたことが書かれているらしいよ。読んだことはないから詳しい事はしらないんだけど」

「つまりうちのご先祖は天狗に攫われて予知能力みたいなものをもらって、それで帰ってきたんじゃないかと」

頬杖をついて、鷹久は標葉さんを見た。

「あくまで推測だけね。天狗から予知能力をもらいました、なんてさすがに大真面目には考えられないし。でも昔の人ならそういう意識があつてもおかしくないと思つて」

「本気でそんなこと言つたらドン引きだよな」

「やつぱりウソだ。大ウソ」

令と律が互いに顎を合つ。

「あの」

私が小さく声を上げると、部屋中の視線が集まつた。

「あの……その神隠しに遭つたご先祖はその後どうしたんですか？」
小さな疑問に皆がそう言えば、という顔をして標葉さんを見た。
「えーと……そこまでは聞いてな」

「半魚になつたんじやねえの？」

言い淀む標葉さんの代わりに律が言つた。

「いやさ、よく考えたら神隠しに遭つて魚になるつて辻褄合わなくね？」

令も腕を組んで首を九十度近く傾げながら言つ。

「そもそもどこから半魚なんて持つてきたんだよ。誰だよ、そういう無責任なこと言つたの。律令。お前らは知らないのか？」
「だからひとまとめ呼ぶな。誰だつたか……確か新年会か何かの時に大人達が言つてたんだよな」

「私も確かにそう。お酒が入つて随分楽しそうに話されたわ」
「何だよ、それって单なる酒の席でのノリじやねえの？」

大げさに溜め息を吐いて、令がこの話題に終止符を打つた。

そう思つた時、標葉さんが至極冷静な口調で言つた。

「半魚の話は僕も四葉から聞いたんだけど、それってもしかして人魚の話から来てるんじゃないかな？」

「人魚お？」

標葉さんの言葉に揃つて声を上げた。

「人魚姫？」

「アンデルセンの？」

「いやジユゴンだろ？」

四葉、令、律が順に言つて行く。

ああ、この間の私と全く同じことを言つている。案の定、標葉さんも千歳のように少し困った様子だ。

「えーと。アンデルセンの人魚姫じゃなくて、日本に伝わる人魚のほうなんだけど……」

標葉さんも千歳と同じことを言つている？

「それって首から下が魚で、化け物的外見でどう見ても人魚姫のイメージはなくて、外見はいかつくても一目見ると災難を逃れたり長生きしたりしちゃうっていう奴ですか？」

一息で千歳に聞かされた話を覚えている限り口にすると、標葉さんは驚いたように目を見張つた。

「よく知つてたね。あんまり日本人の人魚つて有名じゃないのに」

「あ、えつと。偶然妖怪図鑑っぽいものを見たことがあります……」

…

千歳から聞いた、とも言えず適当に誤魔化す。

「妖怪図鑑つて……お前いくつ？」

律が呆れ顔で聞いてくる。当然と言えば当然の疑問だ。

「いいでしょ、ほつといて！」

「えつと。とにかく結恵さんが今言つたような日本人の人魚が関係してるんじゃないかなって僕は思う。半魚伝説ではご先祖様はまだ生きていて、生き神としてこの家に祀られてるんだよね？」

「うん」

四葉が力いっぱい頷く。

「その内容の真偽は正直嘘つぽいなと思うんだけど、それならその半魚は人魚の話をかけ合わせたんじゃないかな」

「人魚って他にも何かあるんですか？」

鷹久が不思議そうな顔をして標葉さんを見た。

標葉さんは、気分のいい話ではないと思つけどと断つてから続けた。

「人魚の肉は食べると不老長寿を得られるって言うんだよ」

「不老長寿……？ その化け物つぽい人魚とやらの肉が？ とんでもないゲテモノ食いだな」

「うん、まあ、勇気あるなとは僕も思う。八百比丘尼やおびくにという女性がいてね、その人は若い頃に人魚の肉を食べてしまって、以来ずっと若くて美しい姿のまま八百年経つても死ぬ事はなかつたそつだよ」「へえ。それでそのビクニさんはどうしたんだ？」

「確かにどこかの洞窟に住むようになったんじゃなかつたかな。そしてそのまま亡くなつたって聞いたと思うけど。話によつては八百比丘尼と言う人は不老不死になつたという話もあるそつだよ」

「肉を食べて不老長寿、あるいは不死。首から下が魚。……確かに半魚伝説に似てるつちや似てるな」

鷹久がぱつりと言い、甘い香りのする紅茶をひと口飲んだ。

「つまり結局伝説は伝説つてことか

「だな」

律と今は顔を見合せて頷き合つた。

「それつてーーー」

四葉が無邪気に口を開いた。

「暗にその草次郎つて人が人魚の肉を食べて不老不死になつて、今もこの敷地内で生きてるつてことじやないのかな？」

「え？」

その場の全員が四葉を見た。

四葉はここにことその視線を受け止め、高すぎる椅子で床につかない足を揺らした。

「半魚伝説ではその神隠しに遭つた人は半魚になつて今も生きてるでしょ？ それも子孫の肉を食べて。それつて、半魚になつたんじやなくて半魚に似た生き物の肉を食べて今も生きてるつて意味なんじゃないの？」

「いや、だつて不老長寿だ不死だなんてありえないだろ？ そもそもそんな奴が実際にいたとしたら、綾峰の医療・製薬業はもっと劇的に進歩したろうし」

鷹久が頭をかきながら困惑うように言つたが、四葉は笑顔を崩さずに言つた。

「進歩のためには解剖とか投薬とか、色々試さなきゃいけないよね？ そんなことして万が一死んじゃつたら、せつかく予言なんてありがたいものをしてくれる人がいなくなつちゃうんだよ？ 医療関係の事業の進歩と予知能力による綾峰家全体の利益を秤にかけたのなら、予知を取ると思うな」

子供のような無邪気な笑顔。

だけどその断定的な物言いは子供のものとは到底思えない。外見にそぐわない、この場の誰をも圧倒する強さがある。

「……するつてーと」

最初に口を開いたのは令だつた。

「この家にいる生き神様とやらは、半魚じゃなくて人間の姿をしてるつてことか」

「だと思うよ。もし本当ならの話だけどね。でも半魚の話よりは現実味があると思うな」

「そ、そうか？」

一番常識的に物を考えるらしい鷹久は疑問を隠すことなく顔に出している。確かに常識的に考えれば不老不死も予知能力も荒唐無稽もいいところだ。まして五百年前の先祖が人魚の肉を食べて今も生きているなど。

……それに、まだ噛み合わない部分がある。いるのは、人の血をする化け物だけ。

無機質な声が、そう教えてくれた。

人の姿をした、忌むべき化け物がいるだけ。

一切の感情を消した声で、表情で。

千歳はそう言つた。思い出すと背筋が凍るほど、冷たく別人のように。

……人の姿をした、化け物。

それは草次郎という人のこと？

まさか本当に今も？

でも人の血と言つてた。人魚の肉でなく人の血と。私やおじいちゃんは当たりだと。

当たりの意味はわからないけれど、私とおじいちゃんが人魚だなんて氣色悪い考えは思いつかない。

少なくとも私は人魚じゃないことは確かだ。体に鱗が生えていいのはもちろんだが、水泳の授業では可もなく不可もなく。特別泳ぎが上手ではなく、泳ぐことも好きというほどではない。そういうことで人魚かどうかを量れるのかは知らないが。

千歳が人魚の話をしてくれて、その人魚と不老長寿に関する話と繋がるからと言つて、本当に人魚が存在するなんて考えにくいが。それにもう一つ。気になる事はある。

予知能力。

予め知る力。

あの時、なぜ彼は気づいたのか……。

「結婚？」

顔を上げると薰子が心配そうな顔でこちらを見ていた。

「大丈夫？ 急に黙つてしまふから」

「あ、ああ。大丈夫！ 本当にあんな気色悪い人魚なんていたら嫌だなあつて考えてただけ！」

心配してくれる薰子には申し訳ないが、まだ全部話せない。それが居候としても、この家に生きて行く上でのルールだろうから。「確かに嫌よね。そんな妖怪じみた生き物が本当にいて、それがう

ちの先祖だなんて言いつのない」

「んー確かに」

鷹久も同意する。

「よし！ 話を変えよ。そうだ結恵ちゃん、それぞれの家の役割とかもう知ってる？」

「役割？ ううん。それぞれの家って、二ノ峰とかのこと？」

「そうそう。この敷地内の家にはそれぞれ役割があるんだ」

そう言って鷹久は薰子からメモを借りて何かを書き始めた。

形作るもの

鷹久はまずメモ用紙の一一番上に「本家」と書いた。そしてその下に縦書きで、二ノ峰家、三ノ峰家、四ノ峰家、五ノ峰家、と左から右へと書いていった。

「これが綾峰の主な形なんだ。本家は多分結恵ちゃんもこの間の昼食会の時なんかで気付いたと思うけど、綾峰全体の中でも別格の存在。その下にこの敷地内の分家の俺達がいる」

「もつともその分家の私達も同等ではないけれど」

そう言つたのは薫子。その表情は暗い。四ノ峰の標葉さんと五ノ峰の薫子では立場が違う、以前そんな風に言つていたことと関係するのか。標葉さんも複雑な表情で薫子を見て俯いた。

「ここでは数字の小さい家ほど強い地位を持つんだ」

鷹久は一度目を伏せてから言つた。

「序列がある。それは多分、各家の役割が関係するんだと思つ」「役割?」

「うん。例えばうち、二ノ峰は本家直轄として一族を取り仕切ることになつていて。チトセグループの重要事業は大概うちがトップに立つ。それから敷地内外に住む一族を取りまとめたり」

「基本、二ノ峰は本家の代行みたいな感じだな。本家の次の権力者は二ノ峰って意識がここにはある」

律が窓の外を見ながらさほど興味もなさそうに言つ。

「三ノ峰は敷地内の法の番人とでも言つか。あの家のことは俺もよく知らねえけど確かにそんな話を聞いたことがある。四ノ峰、うちや四葉の家は綾峰とよとのパイプ役。企業関連だつたり友好関係にある家とかと敷地内を繋ぐ。そして五ノ峰は敷地内の警備員みたいなんだ。不審者が敷地に入り込んだり、客人が妙な動きをしないように見張つたりとか。だいたいこんな感じだな」

「何かわかつたようなわからないような」

鷹櫻と千歳が以前にこの家は國家だと言つた。確かにそれらしくこの家を守るいくつもの役割があるということは分かつたが、こう一度に言わるとさっぱりだ。またバカにされるかと構えていると予想外に律は眞面目な顔をして言つた。

「言つてる俺もよくわかんねえもん。この家。つーか完全にこの家理解してる奴なんてこの中にいねえよ」

「知らうと思つて手を突つ込んでも底なしなんだよ、ここは」

鷹櫻が小さく呟いた。

この家の事情にはこの中の誰より通じていそうな鷹櫻でもそうなのか。

重苦しくなつた空氣を払つようにながれが努めて軽い調子で言つた。「綾峰は秘密主義的なところがあつてさ。この敷地内に住む家と敷地外に住む家との差は大きいし」

「敷地外にもやつぱりいるの？ 親戚」

「いるね。ものすごく」

鷹久は先に書いた本家と二ノ峰から五ノ峰をまとめて丸で囲つた。「この丸が今俺達のいる敷地内。丸の外にも一応親族はいるよ。たとえばこの敷地内の家から嫁に行つたりとか」

「あ、なるほど」

婚姻関係によつて親戚が増えて行くと考えたら、これだけ大きな家ならそれこそ無限に増えて行きそうなものだ。昔から政略結婚は地位と財力を持つ者の常套手段だろう。

「それはとりあえず置いておいて、とにかくこの敷地内は一種独特なんだよな」

重苦しい溜め息を吐いて鷹久は言つ。

「ここにいる俺達が知つてる事なんて、大人達の一握りにもいかないだろうし」

「……そななの？」

「そーなんだよ」

律が忌々しげに顔を歪める。

「ガキは蚊帳の外。それがこの家。今でこそ俺らも」いつしつるんでられるけど、学生つづー身分がなくなつて綾峰の歯車のひとつになつたらそもそも言つてられなくなるだろうしな

「家の序列に関係なく過ごせるのもガキの特権」

令が続けた。

「綾峰の内部事情……企業とかじやなくて、家 자체のほうね、それに関しては俺達は何も知らないんだよ」

「各家の役割は知つてるけど、その役割の中心にあるものが分からないつて言えばいいのかな?」

四葉が今まで見たこともない大人びた表情をして言つた。

「綾峰家は統制されている。それは本家によつて。けど何故、本家がこれほど絶対的な力を持つのかまではあたし達には分からない。今時ありえないくらい封建的だと思わない? うちつて」

「思つ。もしかして、だから生き神の話とか考えたりするの?」

「うん。本家に予言する生き神でも何でもいるんならこの家の本家絶対主義つてのも頷けるかなーって。ねえ?」
律と令も四葉の言葉に頷き合つ。そして令は眞面目な表情で私を見た。

「結恵ちゃん、本家つてチトセグループ内でどういつ役職か知つてる?」

「えつと、おばあ様のご主人が前のチトセグループの会長だよね?」

「そうそう。桂子ばあちゃんの死んだ旦那、元会長はずーっと形だけ社長とか会長とかだけ。グループ全体に関わるようなデカイ仕事とかつてしまことないんだよ。言い方は悪いけど、どんな時でも絶対安全な場所にいた感じで」

「形だけ?」

令は頷いて続けた。

「代々本家はそちらしいんだ。代表取締役とか会長とか務めるんだけどそれはあくまで形だけで、いざという時責任を取るようなのは他の分家筋なんだよ。綾峰本家に生まれればたとえどんな災禍に見

舞われようと、生まれてから死ぬまで頂点に居続けることが約束されるようなもんなんだよ」

「グループ内でも一族の中でも、本家の権威は絶対。……綾峰について絶対的な『何か』が本家にはあるから？」

「口から衝いて出た言葉に四葉が強く頷いた。

「少なくともあたしはそう思つてる」

「綾峰、特にこの敷地内の人間つてのはプライドの塊みたいな奴らが「ゴロゴロ」いる。選民思想とエリート意識がバカみたく強え自分大好きナルシストだらけだ」

鼻で笑いながら律は言つ。

「そういう奴らは他人を見下す傾向にある。そんな奴らが世襲制の形だけトップになんて大人しく従うかよ？ 特に五年前に死んだ先代当主、桂子ばあさんの旦那なんて事業家としても人間としても力の部類に入るぜ。そんな奴に従うようなかわいらしいタマはいやしねえ」

「律、あなた口を慎みなさい！」

さすがに薰子が律の毒舌を止めにかかるが、律はしらけた表情で彼女を見上げただけで平然として続けた。

「何、だかんだ言つたつてお前だつて同じこと思つてんだろ？ 先代はただの無能。そのくせ女癖は最悪、趣味は度を外れた浪費。絵にかいたような駄目な逆玉の輿つてな」

「おばあ様のご主人が？」

その存在自体は知つていたが人となりまでは知らなかつた。

「本来なら本家で言つようなことじやねえけどな」

「ぼそりと律は私から視線を逸らして言つた。

「でも悪いがあいつは最低だぜ。歴代最低の当主だつて評判だ。もともと三ノ峰からの婿養子だつたんだけどな。桂子ばあさんと結婚して本家人間になり、絶対安泰な地位に胡坐ををかいていた野郎だよ。ろくでもねえよ」

吐き捨てるような言葉にその場にいた皆が目を伏せ押し黙る。そ

の空氣から律の言葉が全て事実なのだと知つた。

「……そんなわけで先代はとてもじゃないが、人が下につくような器じやなかつた」

場の空氣を経ち切るよつに、律は強い口調で言つた。

「だけどそんな男が自分たちのトップだつてことに表立つて不満を漏らす奴はいなかつた。不思議な話だとは思わねえか？」

「……確か、に」

義理の大叔父にあたるその人が実際にどんな人だったかは知らないけれど、鷹久や標葉さんすら律の雑言を止めないような人。自分の目で見たわけじゃないが、少なくともこの家のの人からあまり良くは思われていなかつたことだけはわかる。

思案し俯く私に律は言つた。

「けど本家には最奥がある」

最奥という言葉に思わず顔を上げた。そこにある律の表情は厳しい。

「『最奥』って大人達はそう呼んでいる。それがどういう意味なんか俺達は知らねえ。けどそれが本家にある『何か』で、何より綾峰全体にとって最も重要なものだつてことだけはわかる。それがあるから本家は未だに一族内で絶対的権威を持ち、この古臭え封建制度がまかり通つてるんだつてな」

「律。何も今結恵ちゃんにそんな話をしなくてもいいだらう？」

鷹久が少し語気を強めて咎めるが、律は鷹久を睨んだ。

「今だからこそ言つんだろ？　こいつとは一応協力関係にあるんだからな。何も言わずにこそするなんてフェアじゃねえだらうが」

口の悪さはともかく、律の意外に公平な性格に軽く驚く。

「おい、結恵！」

「なつ、何！？」

初めて律に名前を呼ばれた。驚きでつい声が上ずつてしまふ。それに気付いた律は苛々とした様子で眉を吊り上げたが、一度息を吐いて言った。

「胡散臭え大人に取り込まれるんじゃねえぞ」「え？」

「本家の人はある程度分別のつく年頃になつたら最奥へ連れて行かれる。そこで何を見て知ることになるかは知らないが、最奥にはこの家最大の秘密があることだけは確かだ。それがこの家を呪つてゐる」

「呪つてゐるって……」

「一体何を言い出すんだ。そんな非現実的なけれど律は尚も言う。

「この家は呪われてる。俺達の知らない何かに。その呪いによってこの家は永遠に栄え続ける。そう、この家の立場の強い人間達が話しているのを昔聞いたことがある」

「呪われてるのに栄える？ それって矛盾してない？」

「してるな」

「そう言つたのは今まで黙つていた鷹櫻だった。相変わらず淡々と、抑揚少なに。

「けどそれが事実。この家は呪われたことによつて栄え続ける。この先もずっと。……その分の犠牲を支払い続けて」

「犠牲……」

それが呪いという言葉にリアリティを持たせる。

「人柱つて言い換えてもいい」

鷹櫻はその鋭い目を私に向かた。

「本家の選ばれた人間だけが綾峰のための人柱になる。呪いが消えたらこの家の永遠は保障されなくなる。だから本来は、呪いにすがりうとするこの家の人の間達こそが『呪い』なんだろうが」

そう言つて鷹櫻はまた私から視線を外した。

その横顔は怖いほどに綺麗で、今にも消えてしまうんじゃないかなと思う程に儂げだった。

「た……」

「あーもう暗いつ！ 話題変更ー！ 何で俺らをつきからこんな暗

くなる話ばっかしてんだあ？」

パンパンと手を叩いて立ち上がった令の声に、私の声はかき消された。

けどそのまま鷹榎の名前を呼んだとして私は彼に何を言つつもりだつたのだろう。

何も知らない私は何も出来ない。下手なことを言つて、鷹榎を傷つけるような真似はしたくない。善意のはずの言葉は時として逆に人を傷つける。何も知らないのに知つたような口を聞いて傷口をえぐることがある。

時には何も聞かず、触れないことがある。少なくとも鷹榎に関しては生半可な気持ちで近づいてはいけないような、そんな雰囲気がある。

思えば鷹榎も謎が多い。

この中で一番綾峰という家のことに詳しいだろう鷹榎。

だけど皆がその事を知っている様子はない。千歳や千歳の部屋への隠し通路について、誰も触れない血の『当たり』についても彼は知っている。

この中で鷹榎以外に千歳の存在を知っている人はいないようだし千歳自身、鷹榎以外には会つたことがないというようなことを言っていた。

鷹榎はなぜこんなにもこの家の事情に詳しいんだろう。

好奇心で調べるタイプには見えないし、もし仮に好奇心で調べて知つたことならここにいる皆さんも話すと思う。

二ノ峰という本家に次ぐ地位の家の子供だから?

でもそれならば、鷹久のほうがもっと詳しいはずだ。

鷹久は鷹榎の兄だ。それも長男と言つていたのだから彼が二ノ峰家の跡取りだろうし、二ノ峰家という家に生まれたことで鷹榎が人よりも多く知つているのなら鷹久もそうであるはずだし、あるいは鷹榎以上に知つておられるはずだらう。

盛り上げようとしてくれている令の話もあまり頭に入らず、そん

なことを考えていた。

「せっかく遊びに来たのに辛氣臭い話ばつかの上などじめが令の滑つてばつかの話でごめんね」

本家屋敷の玄関ホール。

見送りに出た私に四葉はしゅんと頃垂れながらも、その『滑つてばつかの話』をしていた令を見た。

「す、滑つたつて言うなよ！」

「滑つてたる。痛くて寒くて滑りまくり。聞いてて俺は涙が出そうになつたぜ」

更に律が追い打ちをかける。

「律を泣かせそうになるなんて令も成長したなー。ガキの頃はいつも律に泣かされてたのに」

香氣に鷹久が笑う。

「そう言えばそうだつたね。律くんに新技を試されそุดからかくまつてくれつてよく僕のところにも来てたつけ

「標葉まで人の恥ずかしい過去を暴くなよつ」

「大丈夫よ。あなたの人生は九割が恥で構成されているから。その枯れたサヤインゲンで外を出歩ける時点で」

ブリザードが吹き荒れそくなぐらい冷たく薰子が言い放ち、一瞬令が固まった。

枯れたサヤインゲンといつの単語と令の髪を対比させ、思わず吹き出してしまつ。

すると令は乾いた笑顔を向けてきた。

「結恵ちゃん……」

「ごつ、ごめん。つい……」

「笑え笑え。それだけ変な頭だつてことだ。お前もいつまでその枯れサヤの頭でいる気だ？ 兄の俺が恥ずかしいから早く何とかしろよ

「枯れサヤじやねえつつの」

「そうだよ。枯れたサヤインゲンだつてこんな変な色合いじやなかつたもん！ 皆して酷いこと言わないで！」

「四葉……お前だよ、一番酷えのは」

「だつて、あたしが育てたサヤインゲンを皆でこんな変なのと一緒にするなんて酷すぎる！ あたしだつて一生懸命育てたけど枯れちゃつただけなのにっ」

四葉は俯いて肩を震わし、傍から見ると今にも泣き出しそうな子供だ。

だがやはり付き合いも長ければ分かるものらしく、鷹久が苦笑しながら四葉の肩に手を置いた。

「はいはい。嘘泣きやめような」

「嘘泣きしたくなるくらい心外だつて気持ち伝わった？」

顔を上げた四葉の顔には涙一滴ついていない。

「うん、まずは嘘泣きしたくなるくらい心外つていつわけのわからぬい気持ちが理解できない」

爽やかな笑顔でさらりと鷹久は言つてのける。

「鷹久は理解力が足りないね。感受性も乏しいんだね」

可愛らしい笑顔で四葉はそれに応じる。鷹久は鷹久で笑顔一つ崩さない。

「だつてほら。カテゴリーの違う生物の思考を理解しようつて言ったつてなかなか簡単にはいかないだろ？ 例えるならクジラと火星人が理解し合おうつてくらい」

さらつと毒を吐いた……。

やはり鷹久もこの面子の中に組み込まれているだけあつた……それにも関わらず、クジラと火星人というたとえは一体どこから来たのか。

四葉の笑顔は可愛らしいのにどこか寒気を誘う。

「そうだね。あたしも変なこと言つちやつた。土星人に地球人の思考を理解してもらおうなんて」

毒には毒で、か……でも土星人つて何だ？

「やだなあ四葉。土星人はまだその存在は確認されていないし、その姿形に共通の認識も広まってないよ？」

「存在を確認されていないのなら火星人もだよね？ タコみたいな宇宙人なんて、実際に見た人は誰もないもん。 鷹久知ってる？ 火星つて昔は微生物が住んでいたらしいよ？ タコじゃなくて残念だね」

「この二人、笑顔で毒を吐き合っている……。

「気にしなくていいわ」

溜め息がちに薰子が言った。

「口論になるといつもこうだから。気が済むまでやらせてあげて。仲が悪いわけではないから。本人たちも楽しんでいるのよ」

「あ、そう？」

仲がいいのか悪いのかよく分からぬ。いや、ケンカするほど仲がいいとは昔から言つたものだし、ある意味とでも仲がいいんだろう。ケンカしてもまた元通りの関係になれるのは根底に互いの信頼関係があつてこそだろうし。

「ごめんね、結恵さん。四葉達が迷惑をかけて」

標葉さんが軽く頭を下げてきて、逆にこちらが恐縮してしまう。

「いえ。別に迷惑はかけられてませんから。見ている分には楽しいですし」

人のケンカを見て楽しむという言い方もどつかとは思うのだけれど事実だ。

「そう？ ならないんだけど」

「傍で見てているだけなら下手なコントより俺は面白い」

ぱつりと鷹槻が漏らす。

「鷹槻は本当に見てているだけだからな」

令がけらけらと笑いながら鷹槻の背を叩いた。

「そう言えば鷹槻だけはまだ誰ともケンカしてるの見てないや」

初めて会った夜は千歳に子供のようにあしらわれていたけれど、昼間この面子で会った時は鷹槻は基本的に無関心に近い無言。千歳

の部屋で会つていなかつたら未だに何を考えているのか全くわからない近寄りがたい人という印象しかなかつただろう。

「たまに律なんかに吹つ掛けられてケンカ買つたりはしてるんだよ、こいつも。な？」

「まあたまには」

楽しげに言う令に対し、鷹槐はあくまで気の抜けた返事。

それを見ていた薫子が小さく言つ。

「……もう少し鷹槐は思う事を口にしてもらいたいと思つわ」

「面倒だからこれでいい」

心底どうでもいい、と言わんばかりに鷹槐は目を伏せて答えた。

「あなたって人は……」

まだ何か言いたげな薫子の肩に標葉さんが手を置いて抑えた。

標葉さんを見上げた薫子の表情は不満そうだったが、すぐに俯いて唇を噛み締めた。そばで令も軽口ひとつ叩かず困ったように笑みを歪めた。

……何だろ、この空氣。

何か言つべきなのか迷つていると、使用人が車の準備が出来たと声をかけてきた。

「それじゃあ結婚、また。今度はよければうちに遊びにいらしてちょうだい」

「うん。ぜひ」

「あーズルイ薫子ちゃん！ うちも来てね。皆の小さい頃の写真とかもあるよ」

鷹久との笑顔の毒吐き合戦は終わつたらじく、四葉が小さな体で目いっぱい拳手してくる。

「うちもここからなら一番近いし、落ち着いたら遊びに来てよ、」

「ひとつと笑つて鷹久も言つ。

「うん。ありがとう」

こうして普通の友達関係を築けるのはやはり嬉しい。またこんな友達関係を築ける日がくるなんて思つてもいなかつたから余計に嬉

し。

「皆もまた遊びに来て」

「お。本家令嬢からお招き受けたぜ、律。俺らも出世したよなあ」

「令が茶化すように言つ。

「だな。親父たちが聞いたら腰抜かすぜ」

「はいはいっ！ あたしました桂子様のお手製ケーキ食べたいっ」

「四葉、そんな子供じゃないんだから……」

「そうよ」

「だあつて桂子様のケーキつてそこいらへんで売つてるケーキようつ
っぽど美味しいんだもん」

田を輝かせる四葉は本気で言つてゐるらしい。

「おばあ様にお伝えしておくよ。きっとすぐ喜ばれるから」

「ほりお前たち。いつまで車待たせる氣だ？」

鷹久の声に、皆一家に一台用意された車にそれぞれ乗り込もうと
する。

「じゃあ結恵ちゃん。桂子様にもよろしくお伝え願える？」

「ん、わかった。今は手を離せないけど、おばあ様も同じよろしく
つて」

そうして皆が車に乗り込んだ時、鷹楓が声を上げた。

「……そう言えば俺、本を見せてもらおうと思つてたんだ」「
本？」

鷹久と私の声が被る。

「本家の図書室は貴重な蔵書が多いから。発表演習があるからどう
せならより詳しく調べたいと思って。そういうわけで図書室を少し
だけ見たいんだけど駄目か？」

鷹楓は無表情に私を見た。

「いいと思うけど。おばあ様も特に何も言つてなかつたし

「なら俺はもう少しだけ邪魔する。鷹久。悪いけど先に帰つてくれ

「付き合おうか？」

鷹久が車から降りかけたのを鷹槐が制する。

「いや、せっかく車用意してもらつたし。俺は歩いて帰るから」「わかつた。じゃあ結恵ちゃん、じいつがもう少しお邪魔します」

鷹久が車窓越しに頭を下げる。

「あ、はい。それじゃあ皆、今日は来てくれてありがとうございます。す、ぐく楽しかった」

そうして軽く言葉を交わし合ひ、車はポーチを離れて行く。

後には私と鷹槐と使用人數名が残された。

「……えーっと。すみません、図書室つて一階でしたよね？」

「はい。」案内致します。どうぞこちらです」

笑顔で老齢の執事は答え、私達は一階の東棟の外れにある一室へと案内された。古めかしい時代を感じさせる扉の前で執事は一礼した。

「いらっしゃりでござります」

「ありがとうございます。えつと、中つて私も入つていいいんでしょうか？」

「もちろんでござります。や、どうぞ」
にこやかに執事は扉を開け、私と鷹槐を中心と入れてくれた。
部屋の明かりが一斉に点くと、天井近くまである書架で埋め尽くされた広い室内があらわになる。

「それでは何かありましたら内線でお呼び下さい」

「はい、ありがとうございます」

「……ありがとうございます」

鷹槐と小さく会釈してお礼を言つと、老執事は軽く微笑んで退室した。

そうして図書室に一人取り残されると意外にも先に口を開いたのは鷹槐だった。

「千歳は何だつて？」

日が暮れ始めて少し暗い室内が、元から黒に近い色の鷹槐の虹彩をより一層黒に近づける。

「んーよく覚えてないんだけど、正式な場で話すつて言われた気がする……」

「じゃあ桂子ばあさんも知つて?」

やつぱり図書室というのは口実で、本当の目的はこの話か。

「うん。私がうつかり千歳のといひで寝つけつて、千歳が部屋まで運んでくれたらしくてさ」

あんなに人前で泣き喚いて、思い出すだけでも恥ずかしい。思わず顔を伏せた私に鷹槻の淡々とした声がかかる。

「どのくらい聞いた?」

『何を』どのくらい、なんかなんて聞かなくとも分かる。

「化け物がいるつてことくらい」

「まだ全然つてことか」

「だから正式な場で話すつて言われたつて言つたじやない」

全然知らない、と人から言われると何だか面白くない。特に知っている人間から言われると。

「……そう言えば、鷹槻は全部知つてるの?」

今日のメンバーの中で最もこの家に通じていそうな鷹槻。けどそれがどの程度のものかまでは知らない。全てを知つているのか、それに近いところまで知つているのか。

「そもそも鷹槻は何でそんなにこの家のことに詳しいの? 二ノ峰だからなんて言われても信じないからね。鷹槻は明らかに鷹久よりも多くの事を知つている」

まくしたてるようにいつに私のことを、鷹槻はどこか呆れたような目で見下ろしてきた。

「そんな一度に聞くなよ」

「う」「ごめん」

思わず謝ると、鷹槻は息を吐いて私から視線を外した。

「俺は多分、全部知つてる」

私の隣で鷹槻は正面の窓を見ながら低い声で言った。

「これからお前が正式な場で聞くだろうことは全部」

「……何で、鷹櫻は知ってるの？」

兄である鷹久も知らないのに。他の誰も、鷹櫻がそれを知っているということも知らないのに。

それに対する鷹櫻の答えは簡潔だった。

「俺も本家の関係者だから」

言葉の意味を理解しかねる私を置いて鷹櫻は言葉を続けた。

「俺と鷹久、実の兄弟じゃないから。鷹久は正真正銘二ノ峰戸主の子供だけど俺は違う。養子つてヤツ」

「養子……」

「俺の母親は鷹久の父親の妹なんだ。だから俺と鷹久の本当の関係は従兄弟ってことだな」

決して軽い話ではないのにどうでもいいことのように鷹櫻は話す。まるで他人事のように。

「俺の実の父親は綾峰先代当主。桂子ばあさんの死んだ旦那」

淡々と告げられた事実に言葉を失う。

「……それって」

「俺を産んだ女と浮気してたんだよ。先代は婿養子だけど、それでも当主つて立場だったから不義の子供とはいえ俺も微妙に本家に近い所にいるんだよ。まあ分家も本家ももとは一つだったからこそその一族だけだな」

綺麗な顔を微かにしかめ、鷹櫻は心底忌々しげに呟いた。

世界屈指の資産家。

そここの主が正妻以外の女性と関係を持つていたとしても不思議はない。その女性との間に子供がいたとしても驚くことでもないのだろう。

鷹櫻の告げた彼の身の上は、決して珍しいことじやない。あくまで他人事として聞いている分には。

「そんな顔するなよ、俺は別に気にしてねえし。ムカつく事実ではあるけどな。けどそれだけ。桂子ばあさんには申し訳ねえなって思つてたこともあるけど、ばあさんが俺がそれを気に病むことはない

つて言つてくれたし。正直なところもつ引け目とか負い目とか全くないから」

鷹櫻は遠慮がちに小さく笑つた。

「話、戻すな。先代も何世代か前の本家の血縁だとかで一応俺も本家人間みたいに扱われるところがあつて、三年前に俺も仕来たりに則つて正式に最奥へ行つたんだよ」

「それ、他の皆は……？」

「誰も知らない。基本的に俺達は慣れ合いみたいな付き合いつつしてねえし。けど黙つてるつて、薄情だと思うか？」

鷹櫻は色味のない目を私に向けてきた。

混乱する頭の中から、その言葉への答えを引つ張り出して言葉にするのに少し時間がかかった。

「薄情だとは思わない。……私はまだよく知らないけど、こここの皆はそれぞれ独立してるつて思うし。何て言つうか、大人の付き合いつて言つうか」

お互いに秘密を持たないことが良い関係のようにも言つけれど、鷹櫻達は違う。まず自分の考えを貫いて、それを理解し合つた上でお互い繋がつているように感じる。それは決して繋がりが弱いわけではなく、自分とは違う個人である相手を尊敬するからこそ出来る関係なのだと思う。

「よくわかつてない私が知つた風な口叩くものじゃないつてわかるけど、鷹櫻が誰かに強要されたんでなく自分の意志で話さないならそれでいい氣がする」

「……まあ、話すなとは年寄り連中に言われはしたけど、言わないでいるのは俺が決めたことだな」

鷹櫻は真顔で言つた。

まっすぐな迷いない瞳で。

「この家のムカつく呪いをぶつ壊してやりたい。この家の未来永劫変わることない体制。犠牲の上の不自然な繁栄。理由はそれぞれだがそれが気に食わないのでとこで俺達は一致してる。薰子は標

葉のこと。俺なんかはガキの頃の名残……先代への反抗心みたいなものだ。だから本来なら俺が知るもの全てを話したほうが話は早いかもしねない」

「でも、話さないでいるの？」

私の言葉に鷹榎は書架にもたれかかって目を伏せた。

「この家の体制が気に入らないなら、この家を出るっていう手段もあるだろ？」

「……そのほうが手っ取り早いとは思う」

「そうだ。四葉に律令あたりは『逃げ』だつて嫌がるだろ？ が、俺はこの家を出るのが一番早い道だと思ってる。本気で嫌がるなら、本家人間でなく、それもまだこの家の間に片足も突っ込んでいいあいつらなら出ることもできる。誰が文句を言っても千歳や桂子ばあさんが一声言えばいい。あの一人は俺達の意思を尊重してくれる」

「やつぱり……千歳も強い立場なんだ？」

鷹榎はやや間を置いてから頷いた。

「あいつは桂子ばあさんよりも強い立場にいる」

絶対王制国家と称される家の当主である、大叔母よりも。

「現在、この家に千歳の言葉より重いものはない」

日が傾いてきて、より濃い影が鷹榎を覆う。

「本家が今も王である理由は、千歳にとつて本家が必要不可欠なものだからに他ならない」

鷹榎の顔は影に遮られてほとんど表情が窺えない。

「千歳なしに、こう浮き沈みの激しい国際社会は生き残れない」

それはこの家が千歳なしにはやっていけないと言つ事。

それはまるで……。

「それじゃあ」

考えたくない。考えたくないけれど思いついてしまった。酷く嫌なことを思いついてしまった。

「それじゃあまるで、千歳が鷹榎達の言うこの家の『呪い』みたい

じゃない」

影の向こう、鷹楓は今どんな表情をしているのだろう。

「千歳が犠牲の上に立っているみたいじゃない」

暗がりでも鷹楓が目を逸らしたのが分かつた。

「……鷹楓は犠牲を人柱って言つたよね？ その言い方じやまるで

千歳が他人を犠牲にして生きているみたいじゃない」

少しずつ少しずつ。私の中でピースが嵌っていく。

「千歳が……この家の呪い？」

鷹楓は何も言わない。

否定もしない。

肯定もしない。

「バカなこと言つてるつて笑つてよ。私、千歳が予知することができるとかそんなことまで思つてる」

昼食会の日の晩、千歳のもとへ行つた時。

三ノ峰の誰かが千歳のもとを訪れる事を、彼は事前に察知した。

それは彼が予め知つたから。

そんな風に考へてゐる。

「荒唐無稽だつて、笑うなり怒るなりしてよ」

すがるような私の言葉にも、鷹楓は何も言わなかつた。

「一階中央階段から西、北側七部屋。南側八部屋」

「あ？ 北と南で部屋数違うじゃん」

令が訝しげにモニターから顔を上げる。

「北側は扉が七つしかなかつたよ。間違いない。メイドさんが西端の扉に出入りしてたから、多分物置として一部屋分広くなつてるんじゃないかな」

「四葉がそう言つならそつなんだろ。一階西は外れか。あの屋敷はシンメトリーが売りだから、東も同じだろうな」

律は机に手をついてモニターを覗き込んだ。

そこにはどうじうじうとう空白の田立つ製作途中の図面が表示されている。

「中央階段の下にも部屋が左右それぞれ三つずつ」

四葉はモニターを指差し、令はその指示通りに図面を新たに埋めて行く。

規則的な音を立てながら令はキーボードを打つていき、そうしてその音が止まると空白が多少残るが建築物の図面が出来あがつた。

「こんなもんか。本家屋敷図面」

「知つちゃいたが、だだつ広いな」

令と律が感嘆とも呆れともつく声を上げると、四葉が鋭い声音で言った。

「狭かつたら今まであたし達から生き神様を隠すなんて出来るわけないよ」

「確かに。レトロな造りのくせしてあの屋敷、セキュリティも並みじゃない。図面ひとつ閲覧出来なこようになつてるしな」

「図面自体は本家と二ノ峰のコンピューターにあるっぽいけど、ガードが異様に固いんだよな。下手うつたら俺ら自体がやべえよ。つかこの部屋の中身だって偽装がばれたらいづつなるか」

令は大きく伸びをして、三人の会議室と化している四ノ峰邸の一室を占拠したコンピューターに古い資料の山を見渡した。

それらは少し見た限りではＩＴ系統に興味ある令、古文書学に興味ある律と四葉の趣味としかとれないが、その偽装がはがれれば現れるのは本家に関するあらゆる情報だ。

「知られなければいいんだよ」

そう言い切るのはこの部屋をつまいこと両親を言いくるめて手に入れた張本人、四葉だ。

「ただそれだけ」

短く言って二人を見る四葉の表情は常の幼い様子も無邪気さも欠片もない。

年齢より遥かに大人びた冷めた表情を浮かべる。実年齢よりずっと幼く見える容姿をした彼女には不釣り合いな表情を。

知らない人間にはさぞや奇妙に映る事だろう。だが律も令も驚きなどしない。生まれた時からの付き合いであり、同じ目的を持つて行動する彼らにとっては今さらの事だ。綾峰四葉が幼い外見と幼い言動を隠れ蓑に、異様に切れる頭脳と冷徹なまでの行動力を持つことなど。

冷めた表情のまま、四葉は苛立ち混じりに呟く。

「生き神がこの家の封建体制の要だつてことは確かなのに。分かつていて手が出せないつて苛立つな」

「そう簡単に手出し出来るもんなら、俺らよりずっと前の世代がこの家の制度ぶつ壊してたろうよ」

「そーそ。下剋上狙いが無駄に長い綾峰の歴史上に俺らだけなわけねーもん」

薄い笑いを浮かべて令は呟く。

そんな弟を見ながら、ぽつりと律は零した。

「鷹櫻は最奥を見たんだろうな」

四葉と令の視線が律に向けられた。

「一応鷹櫻も本家だからね。言わないけど多分そうだろうね」

「あいつ、何を見たんだろうな」

独白めいた呟き。

「あたし達に言わないんだから、言つべきでない何かに決まつてゐよ」

軽い調子で四葉は言つた。

「鷹槻が俺らを裏切つたとは考へないんだ?」

からかうような令の言葉に、律と四葉の鋭い視線が向けられる。

「当たり前じやん。何言つてるの?」

「お前、バカだバカだつて思つてたけど、本氣で大バカだよな」

間髪入れずに返つてきた一人の刺々しい言葉に、今は軽く肩を竦めた。

「言つてみただけだあつて」

「言わぬいなら言わぬいなりの理由があるに決まつてるでしょ」

四葉は頬杖をついて令を睨んだ。

「あたしはこの家の中、無条件で信頼できるのは鷹久と鷹槻。 薫子ちゃん、あんた達。それに結恵つちもかな、だけだと思つてゐる」

「あとは標葉な」

律が補足するように言つと、四葉は頷いた。

「そーいう事。うちのぼーっとしたお兄のためにもあたしは呪いを解く。理由は違つたつてそれを願つてるのは皆一緒。だからこそあたしはあんた達も皆も信じてる」

「ついでに薰子のため、か」

「二人には幸せになつてほしつて妹ながらに思うからね」

四葉は胸を張つて言つた。

「そのためにはこの家の呪いも、封建体制も邪魔でしかない。だからあたしはこの家の呪いを解いてやる」

「標葉には俺らも世話になつてゐるしな」

律と令が顎を合つ。

「幸い呪いを解くのは俺らも利害が一致してゐるわけだし。俺らはこの家で四ノ峰分家なんつー中途半端な地位から一番上を目指す。そ

れにはやつぱりこの家の体制は「やつぱり」といの上ない」

「四ノ峰で、それもその分家筋が上に登りつつも限界あるもんな」

令はパソコンを閉じて呟いた。

「鷹久や鷹櫻なら我慢してやるけど、一ノ峰分家や三ノ峰なんかにでかいツラさせるくらいなら俺らが上に行く。誰にも邪魔なんかさせよ」

赤いタバコを窓の外に見ながら、律は強い口調で言った。

「俺は親父みたいにならねえ」

「……だな」

令は厳しい表情をした律を見て頷いた。

「律つて面倒くさがりっぽいのに熱血だよね」

四葉が意外そうに呟つ。

「熱血じゃねえよ。ただ単に俺はつざこ連中に自分の上に立たれるのが嫌なだけだ」

「四葉こそ意外に兄ちゃん思いで薰子思いだよなあ」「にやにやと呟つてくる令に、四葉は胸を張つて答えた。

「大事なたつたひとりの兄弟と、大事な親友だもの。当たり前ですよ。あたしがどうでもいい人間に情なんかかけない。そんな余分な情けがあるなら、その分をどうでもよくない人間にかける」

「結婚、今のお前見たら驚くだろうな」

「ムービー撮つとけばよかつたな。そしたら見せてあげれたのに」

双子は笑いあって四葉を見る。

そんな二人に四葉は目を据わらせた。

「つるさいな。必要があれば見せるよ。普段の性格だつて別にあたしじゃないわけじゃないもん」

そう言つたところで、部屋の外から声がかかる。

「四葉？ 律くんと令くんもいる？」

「標葉だ。いるー！」

律が声を上げると、扉が開かれて標葉が姿を現した。

「夕食と一緒にどうかって母さんが言つてゐるんだけど、ビリ?」

「ああ、もうつてくれ」

「わかつた。じゃあそつ伝えてくるね。あんまり根を詰めすぎないようにね」

緩やかな笑顔でそう言つて、標葉は部屋を後にした。

「今日の夕飯何だ?」

「んーとビーフシチューって言つてたかな」

「やりいっ! 僕、ビーフシチュー好きなんだよな」

「んじや連絡入れとかないとな」

嬉しそうに声を上げる令の隣で律は自宅へと電話をかけた。

「帰つたのか、鷹久」

自宅に帰り着くなり出迎えたのは使用人ではなく実の父親だった。あまりに珍しい光景に鷹久は軽く目を見張つた。

「帰つてらしたんですか、お父さん」

「さつき戻つたところだ。またすぐ出なければならないがな」

そう言つた父親は相変わらず厳しい表情を浮かべていた。

「本家に行つていたと聞いたが鷹楓はどうした?」

「何でも本をお借りしたいとかで、僕だけ先に帰つてきました」「そつか」

父親は何を考えているのかわからないままに相槌を打つた。

鷹久は昔からそんな父親が苦手だった。何しろ実の父とはいえ自宅にいることは稀で、顔を合わせ会話することなどもつと稀なものとして育つたためどう接していいのかわからない。

「それでは俺は部屋に戻ります」

父親の横をすり抜けようとすると低い声がそれを妨げた。

「義将様の孫はどうだ?」

鷹久は顔を逸らしたまま答えた。

「……普通の可愛らしいお嬢さんですよ

「鷹櫻はあちらとうまくやつていけそうか？」

「図書室に案内頂くようでしたからそうじゃないでしょうか」

あくまでも当たり障りなく鷹久は答える。

「そうか。お前もしつかり見ていてやれ。あれは我が家の切り札であると同時にアキレス腱もある。風向きが悪くなるような気配があれば逃亡者の血には退いてもらうようお前が計らえ」

それだけ言い父親……一ノ峰家戸主は鷹久には一瞥もくれず隣をすり抜けて行つた。

結恵に対しても、義理の息子である鷹櫻に対してもさらも情の欠片もないような物言い。

鷹久はその場に立つたまま、両手を握り締めた。

「だからあんたは……この家は嫌いなんだ」

吐き捨てるようにそう呟く。

叔母と先代当主との不義の子である鷹櫻は生まれてすぐに一ノ峰家に引き取られた。

先代の妻であり、本家直系の桂子の不興を買う事を恐れて叔母から鷹櫻を取り上げ、本家とは何の関係もない我が子として育てるため。本当は本家との繋がりを持つために引き取つたことなど、周囲の誰もが知つていたが。

そんな鷹櫻に媚売る者、露骨に侮蔑の眼差しを向けてくる者、腫れものに触るように接してくる者と大人たちの対応は様々だつたが、それに対して幼い鷹櫻が傷ついていたことだけは今もよく覚えている。

だから自分は兄として鷹櫻を守るつと決めた。泣いている弟に守つてやると約束した。それは自分たちが実の兄弟じゃないと知つてからも変わらない。

実際の血縁がどうであろうと鷹櫻は大事な弟だ。自分以上にこの家の柵しがりまに捕らわれた弟。

いつも鷹久の実の母親であり、鷹櫻の義母に邪険にされて泣いていた。

「泣かなくていいんだ、鷹楓」

人前では決して涙を見せなかつたが、いつも一人で泣いていた二つ年下の弟。

「お母さんはお父さんとケンカしてるから機嫌が悪いだけだよ。だから鷹楓は何にも悪くないんだよ」

綾峰とは血縁のない名家から嫁いできた神経質な母親。父とはいつも衝突していた。

「お父さんは僕を他の家への『せりふだ』にするためにうちに置いてくれてるんだって」

小さくうずくまつて、幼い弟は言った。

「本当なら僕みたいな子、ここにいちゃいけないって。お母さんだけじゃなくて家の皆が言つてた」

「そんなことないよ」

「僕の本当のお父さんとお母さんは最低な人間なんだって。だからその子供の僕も最低なんだよ」

まだ小学生になるかならないかという子供が、そう言った。

「ごめんね鷹久。僕みたいなのが弟だって言わなくちゃいけなくて、ごめんなさい。ごめんなさい」

何度も何度も謝つてくる鷹楓の姿が痛々しくて、血の繋がりなど関係なく大事な弟を守らなきやいけないって強く思った。

「鷹久。あまりあの子に構うのはおやめなさい。貴方にまで悪影響があつては家の名が下がります」

ヒステリックな母親の声。

「お母さん。鷹楓は僕の弟です。そんな言い方はやめて下さい。鷹楓は僕よりずっと優しくていい子です」

「鷹久。貴方もあるの子の出自は知つていいでしょ? 本家の子だからなど、この家の中でしか通用しません」

「そんなこと知りません。鷹楓は僕の弟です。血の繋がりなんて関係ない。鷹楓は僕のたつた一人の大切な弟です」

物心ついた時からそんな言葉に鷹楓はさらされてきた。

母親の露骨な態度に、使用人の陰口に。

父親は何も言ってくれない。

だから兄である自分が守らなきゃいけない。

周囲の人間からも、鷹櫻を追い詰めるこんな体制の家からも。

「……呪いなんてものがあるとしたら、それはこの家だ」

自室に戻り、薫子は机の上に飾られた写真立てを手に取った。そこには小さな子供達に囲まれ、穏やかに笑っている標葉。その彼の周りにいるのは四葉と律令。それに自分。

確かにこの時も律令はくだらないケンカをして律が力技で令を制し、令が大泣きして標葉がそれをなぐさめ、四葉は横でそれを見て笑っていたのだった。

「……変わらないわね」

口にしてみて笑みが零れる。

もう九年も前だというのに彼らは今と全く同じ行動を取っている。自分もそうだ。

標葉の隣で彼の制服の裾を引き、少し俯いていてうまく笑みを作れない自分。

あの頃の薫子は標葉を実の兄のように慕っていて、本を読んでもらつたり遊んでもらうことが何よりも好きだった。

標葉も標葉で、嫌な顔一つ見せずによく付き合ってくれた。

薫子の家、五ノ峰家はこの敷地内では最も地位の低い家でどこか他の家に遠慮する気風がある。それは幼い薫子もそうで、例え自分がより年少の者であろうとも他家の子供には一步退いて接することが常だった。

そのせいか薫子は人見知りが激しく、近しい人間にも甘えることできない子供だった。

寂しくても寂しいと言えない。

構つてほしくてもそう言えない。

そんな薰子に、標葉は家の序列など気にせず妹や従兄弟たちと同様に接してくれた。集団の中でひとりになりがちな薰子をいつも気にかけ、いつも手を引いてくれた。

薰子さんもおいで。

そう言つて差し伸べられた手がどれほど嬉しかつただろう。
どれほど心強く、安心できただろう。

標葉が大好きだつた。

幼い頃からの安心感は年を重ねるにつれて次第に恋心へと形を変えていく。

標葉さんが好きです。

そう告げたのは去年の末。

四ノ峰の跡取りである標葉に、七つも年上の彼に受け入れてもらえるなんて思いもしなかつた。そう思つていたのに、膨らんみきつた想いは爆発するように薰子の口から言葉となつて発せられた。

それを受け入れてもらえた。優しい顔を真つ赤にして受け入れてもらえた。

そしてもつと彼を好きになつた。

何を気にすることなく、彼といたい。

「……だから私は、呪いを壊す」

決意を込めて、今一度そう呟いた。

夕暮れ時の図書室は赤く染まり、濃い影を落とす。

「千歳は間違いなく、呪いの一端を担つてると思つていい」

鷹櫻の抑揚の少ない声が図書室に響く。

「一端、てことは他にもまだあるの？」

鷹櫻は小さく頷いた。

黒く強い瞳がまっすぐに見てくる。

「お前は呪いやこの家の奇妙な繁栄云々より、千歳がどうかつてこのほうが大事みたいだな」

改めて鷹櫻に指摘され自分で驚く。

自分が何故この家に来たのかを考えれば不思議なことだ。

呪いなんていう得体のしれない何かを信じ、会ったばかりの誰かがそんな不得体のしれない物かもしないと不安になるなんて。

だけど私は確かに綾峰の権威より呪いの真偽より、千歳の無事を祈るように願つてゐる。

「……何度か顔を合わせたら情が移つたんだよ」

「ああ、まああいつはそういう奴だよな」

言い訳のように言つた私に被せるように鷹櫻も頷いた。

見上げた鷹櫻の顔に表情はない。けれどその目の鋭さは変わらず、その口から発せられる言葉に嘘や冗談がないと理解させられる。

「俺はこの家なんかどうでもいい。嫌いだから」

「嫌い……なんだ」

「ああ。面倒だしな」

その言い方はどこか投げ遣りなもの。

「だから呪われてたつてザマーミロつて感じだし、俺がそれをどうこうしようなんて間違つても思わない」

鷹櫻の言葉はどこか自分の考えと似てゐる。やはり少なからず血の繋がりがあるからなのか。

そんなことを思いながら彼の言葉に耳を傾けていた。

「けど俺は、千歳の呪いだけは解きたい」

「千歳の、呪い？」

その言い方だと彼自身が呪いその物であると言つより、千歳にかかる呪いと聞こえる。

そしてその考えは間違つていらないらしい。

「千歳はこの家の呪いの一環だけど、けど思つんだよ。本当はあいつが一番呪わてるつて

「どうこいつこと？」

「そのままの意味だ」

淡々と鷹櫻は答える。

「あいつに比べりや俺の生まれなんて大したことじゃねえって思える。千歳は……俺にとつて数少ない、大事な人間の一人だから、どうしてもお節介したいって思う。あいつの呪いを解いてやりたいって思う」

あくまでも淡々と、けれど強い決意を滲ませた声がそう告げる。

「……私も」

知らず呟いていた。そしてさらに言葉を続けていた。

「私も千歳のこと、大事だ」

マイペースで、何考えているのかわからなくて不思議で、そして優しくて温かい千歳が。

一緒に過ごした時間なんて関係なく私は千歳が大事で、恋愛感情かどうかはわからぬけれどとても好きだ。

「千歳にとつてその呪いがよくないものなら、私も千歳の呪いを解きたい」

鷹櫻をまっすぐに見据えて、そう言葉にする。

「千歳にはたくさん優しくしてもらつた。身勝手で汚い私にも優しくしてくれた、身内扱いしてくれた。私はこの家の呪いなんて何も知らないけど、それが千歳を苦しめるものだったらどんなことをしてもそれを失くしたい」

それは結局、私の自己満足でしかないのだけれど。この家の事情も何も知らない身が軽々しく口にしていいようなことではないのかもしれないけれど。

それでも自分の思いに嘘を吐きたくない。そのためにはこの家に来たんだ。

鷹櫻は黙つて私を見ていたかと思うと、静かに口を開いた。

「正式に最奥へ行つたら全て教えられる。千歳本人から

「……うん」

「それでもお前がこの家に留まつて思つようやくの変人だつたら、その時はよろしく」

「変人?」

どういう意味だ、と鷹櫻を見るが彼は最早私と視線を合わす気すらないらしい。

けれど小さく、本当に小さな言葉を口にした。

「お前が変人だつたらいいと思うよ」

「……よくわかんないけど、私はそう易々とこの家から出て行こうなんて思わないだろうから今から言つておく。今後ともよろしく」胸を張つてそう言つと、鷹櫻は見逃しそうなほど小さく口元を弛めた。

「ああ、よろしく。変人」

「変人で言うな」

「変人は変人だろ。事実を認めろよ」

「確かに私は一般的じゃないのは認める。でも事実だからこそ尚更オブラーートに包んで言つてよ」

「悪いな。俺にそういう気遣いを求めても無駄だ」

まるで悪びれずに鷹櫻はそう言つた。悪びれるどころか楽しげに。

正式な場での昔語り

月が綺麗だ。

雲に隠されることはなく輝く望月。その柔らかい光はいつも見慣れた月より力強く、妙に胸が騒いだ。

それは月のせいではなくこれから先への不安からだろうか。

遮光カーテンを閉め、私は部屋を出た。これから大叔母の部屋へと行き、そしてそれから改めてこの屋敷の地下へと向かう。

正式に、綾峰家最奥へと。

三つ紋の蘇芳色の色無地を纏った大叔母があの道を、この屋敷の地下への道を先導するように歩く。朱鷺色ときの訪問着を着た私もその後に続く。

初めて正式に最奥へと足を踏み入れる場合、準礼装で行くことが代々の習わしだと言う事でつい先ほど着付けてもらつたものだ。

少し窮屈な和装と歩き慣れない草履。それすら忘れそうになるほどの、全身の血がざわめく感覚。

二人分の足音だけが石造りの廊下に響く。

大叔母は何も言わずまっすぐに地下への道を辿る。私もその後を黙つて歩く。

私が知る限り、いつも朗らかでおしゃべりな大叔母がこんなにも喋らずにいるところを見るのは初めてだ。それが余計にこの沈黙を重く息苦しいものへとする。

この奥には千歳がいる。一週間ぶりに会つ、あの不思議な雰囲気の人。

会いたい、と何度も思った。けどそう思つ反面、鷹櫻も知る全てを知ることが怖いとも思った。鷹櫻の言葉を聞く限り、最奥で聞くこの家の秘密は決して優しいものではないようだから。

「……体調は」

前を歩く大叔母が前を向いたまま、歩みを止めぬまま口を開いた。

「体調はいかがですか？」

「あ……大丈夫です」

多分過呼吸の事を言つてゐるのだろうと思い、敢えて力を込めて答える。

「そうですか」

大叔母は歩みを止めて振り返つた。その顔には子供を心配する親のような優げな笑み。

「もし、体調がよろしくないようならすぐに仰つて下さいね。無理はなさらなくて良いのですからね」

心底勞わるような言葉に胸が熱くなる。

「ありがとうございます」

心から笑つて深く頭を下げた。

そうして千歳の部屋の扉の前へと出た。大叔母が扉を二回、軽く叩く。

「綾峰家二十八代当主、桂子です。綾峰結恵を連れて参りました」
凛とした声が扉へ吸い込まれていく。鳴り響く心臓を抑え込むようにして扉の向こうの反応を待つていた。重々しい儀式めいた仕来たり。

いくらこの向こうにいるのが千歳だと分かつていても緊張せずにはいられない。

「入れ」

少し高めの千歳の声が中からして、大叔母がそつと扉を開いた。

「失礼致します」

「……失礼致します」

大叔母に続いて室内に足を踏み入れると千歳はソファに座つてこちらを見ていた。

その服装はレイヤードのTシャツにジーンズと私達に比べるとカジュアルすぎるくらいカジュアルで、私が初めて彼に会った時と大差はない。

ただしその顔に表情らしい表情はなかつた。

「こつち来て座れ」

素つ氣ないくらいの口調でそつ言つて、私は扉を閉めて大叔母と共にソファに腰を降ろした。

大叔母はぴんと背筋を伸ばしてから深くおじぎした。

「御無沙汰致して居ります、千歳様」

千歳『様』か。

「うん、久しぶり。この間は直接は会えなかつたからな。元気だつたか？」桂子

「はい。お陰様で日々つがなく過ぐしております」

「そつか。それは何より」

そう言つてようやく千歳の顔に笑みが浮かぶ。ただ私が知つてゐるような無邪気なものではなく、どこか控え目なものが。

ここに来てはつきりした。

明らかに千歳のほうが大叔母より立場は上だ。この敷地内で最も地位ある人間であるはずの大叔母より、どう見ても十代そこそこの千歳のほうが。

「結惠も一週間ぶり」

私にも笑顔が向けられ、反射的に頭を下げてしまつ。

「はい」

すると千歳は怪訝そうに眉を顰めた。

「何で敬語？ キモイ」

キモイと言われた……。

「んじや桂子。せつかく来てくれたところをもてなしてもやれなくて悪いけどここで」

「はい」

「え？」

「ひとりでつてのが一応決まり事なんだよ」

疑問が顔に出たらしく千歳が説明してくれる。

「それじゃあ桂子。息災で。時間が出来たら遊びに來い。義将ほど

美味くはないが紅茶を淹れてやるよ。それとも毬つきのほうがいいか？」

「私ももうそんなに幼くはありませんよ」

大叔母は苦笑して答え、私を見た。

「結恵さん。ここからはおひとりでになりますが、何も心配はいりません。貴女は貴女の思つようになさい」

「はい」

「それでは千歳さん」

「大丈夫だ、悪いようにはしないから。何と言つても義将の孫だしな。全力で守るよ」

「ええ。どうぞよろしくお願ひしますね」

大叔母は立ち上がり深く頭を下げ、そして静かに部屋を出て行つた。

私は黙つてそれを見送り、千歳は呑気に手を振つていた。

再び扉が閉ざされ室内には私と千歳の二人になる。

「この間までと同じ。同じはずなのに違つと感じるのはこの着物のせいが、それとも……。

「いい色だな」

優しい声がかかり、そちらへ顔を向けると千歳がにっこりと微笑んでいた。

「朱鷺色か。よく似合つてる」

「ここにこと、この世のものじやないくらい透き通つた綺麗な笑顔でそんなことを言つてくる。

さつきまでとは違つた緊張で軽く俯いてしまつ。

「ピンクっぽくて可愛いから、私には似合わないんじやないかつて思つたんだけど、準礼装じやないといけないって言われたから……」「似合つてゐるつて。俺は似合わなかつたら素直にそう言つから安心しそう?」

確かに千歳ならばつきり言つやうだ。そう思つてこの色の着物で良かつたと今さら思えてくる。

「紅葉の刺繡に、地は銀で紅葉の西陣帯か。即席で用意させたんだろ？になかなかいい物だな」

「千歳、着物詳しいの？」

「詳しくはないけど、んーでも現代人よりは詳しいか？」

「首を傾げながら千歳は言う。けどすぐに飽きたように顔を上げた。「それよりここに来て二週間足らず。それなのに早速こんな面倒なところまで来たこと、とりあえず御愁傷様」

「……嫌味？」

「いや、本気で同情

「やっぱり嫌味だ」

軽く睨むと、千歳は声を上げて笑つた。

それは私の知る千歳の表情。そのことに妙に安堵している自分がいた。

「正式にここに来るつてことは」

千歳は笑いを納め、私を見た。

「この家の一番暗い部分を知るつてこと。面白おかしさなんて欠片もない、シマラナイト話に付き合わされるつてことだ」

「昔話がこの家の秘密？」

「そう、秘密。敷地内でもごく限られた人間しか知らない秘密」

千歳は薄く笑い、ソファにもたれかかった。

「これから昔話をひとつ聞かせる。聞く聞かないの選択権はない。けどその後の選択権はあるつてことを覚えておけな

「わかった」

千歳の強い瞳に気圧されないよう膝の上に置いた両手に力を入れて答えると、千歳は軽く目を伏せ静かに口を開いた。

「始まりは……俺が六歳の頃」

坦々と、淡淡と。

「西暦で言つと1500年代初期。 今から五百年近く前の話だ」

静かに、唐突に。

言葉の意味を見失つてしまいそうな、そんな言葉を千歳は口にし

た。

呼吸の仕方すら忘れそうになるものの、心のどこかでその言葉を納得して受け入れている自分がいた。

「迷つてはいるけど信じてないわけじゃないみたいだな？」

千歳はじつと私の目を見て軽く笑つた。

「悪いな。最初に会つた時、俺は嘘を吐いた。俺は確かにこんなナリをしてるけど、実際は五百年ばかり生きてる」

嘘、と口を衝いて出そうになる。けどその言葉を飲み込んで千歳の言葉を待つた。

だつて本当はそう思つていた。

千歳がこの家の生き神様とやらなんじやないかと、そう思つてた。大叔母より強い地位にあつて、予知するようなところがあつて。あり得ないと、そう思いながらも確信していた。

千歳は私の想像を超えた存在だと。

「この間、四ノ峰分家のガキ共がしたつていう怪談があるだろ？」

「……うん」

「あれで神隠しになつた先祖の話。そこから始めようか」

「う、ん」

「あれは俺が数えで六歳の夏だつた」

高めの千歳の声が低く静かに研がれる。

そしてその声が紡ぐ。

綾峰家の昔話。

この家の呪いの始まりを。

「その時既に大きな家だつたこの家のクソガキが黄昏時に隠れ鬼たそがねじき：

：かくれんぼをしようと言つたんだ。黄昏時は人とそうでないものが混じる時間帯。そう言われてだから大人達は絶対に隠れ鬼はしちゃいけないってよく言つたのに、それを面白がつて」

千歳は膝の上で両手を組み、無感情な声で続けた。

「大人们の懸念を裏切らず、そのクソガキを含め数名が行方不明になつたよ。そこは山に囲まれた土地でな。天狗に攫われたんだつ

て、家の連中や村では大騒ぎになつたらしい」

自嘲氣味に千歳は笑い、子供に昔話を聞かせるかのように話しか始めた。

村の有力者だつた綾峰家の先祖、峯家は村人たちを含め、必死に子供達の搜索をした。けれど七日七晩、山狩りをしてあちこちを探し回つたにも関わらず子供達は誰一人見つからない。

もう駄目だろうと誰もが思つた時、峯家の子供を含む数名の子供達がぼんやりとした様子で帰つてきた。

他の行方不明の子供達はどうした？ と聞いても要領を得ない。

よほど怖い目に遭つたのだろうと大人達が帰つてきた子供達を休ませようとした時、峯家の子供が言つた。

明後日、戦が起こる。

村は焼かれるから逃げよ。

最初は誰もそんな事は信じなかつた。

だがそのあまりに懸命な様子と天狗隠しから帰つてきた子供の不思議な雰囲気に半ば気圧される形で、峯家のの人間といくらかの村人達は一時的に村を出た。それを笑い飛ばす村人達の声を聞きながら。そして明後日、戦は起つた。

誰も予想し得なかつた戦が起つて子供の予言通り、村は隣国の兵に焼かれて子供の予言を笑い飛ばした者達のほとんどが命を落とし、家や田畠を失つた。

明後日、隣国との同盟がなる。

今年は飢饉になる。

あちらの国が戦で負け、國主様が自害なさる。

そんな子供の戯言であつてほしい言葉の数々は決して外れることなく、現実となつて起つた。

けれど皮肉にもその言葉によつて、商家としての峯家は繁栄の一途を辿つた。明日の見えない戦国乱世において、子供の言葉はなくてはならない物となつていた。

だが子供とて人間。

いかに不思議な力を持ち合わせていようと、その命は永遠ではない。

そして当主らは考えた。この不思議な力を永遠のものと出来ないだろうか、と。

いくつもの予言をしてきた子供は妻を娶り子もなしたが、その子にまでは予知の力は授かれなかつた。

家人達は永遠ではない予知の力を何としても繋ぎとめようと必死になつた。

大陸に伝わる不老長寿の食物。

不死をもたらすという伝説の靈薬。

そんなものを大商家らしく、金錢を惜しまず与えた。

ただしそのどれもが眉唾もので、真に不老も不死も与えられはしなかつたが。

子供……峯家の次男、草次郎はその頃にそんな家人らの願いを込めたトキワと名を改めた。永久に変わらないもの、常磐ときわと。

だが名に込められた意味も虚しく、常磐は年を重ねて行つた。彼から子供らしさが抜けて行くにつれ家人らの焦燥は募る。

そんなある日、旅の呪術師の親子が村へとやつてきた。旅籠はたごも嘗んでいた峯家は親子を屋敷へと招き、人を不老不死とする術はないものかと詰め寄つた。

呪術師の父親は旅の途中で聞いたという話をした。人魚という人の顔と魚の体を持つ化け物の肉を食べれば永遠に年を取らず、いつまでも生きることが出来るらしいと。

その言葉に家人達は湧き立つた。すぐに峯家は各地に人魚の肉を探すよう手を尽くさせ、呪術師の父親はまた旅立たねばならないと言つのを強引に押し留めていた。

それを見かねた呪術師の娘が言つた。

それならば、修業中の身ではありますが私が残りましょう。

私も呪術師の端くれ。西様の流れを汲む術師の名に懸けて、必ずや常磐様に不老不死を。峯家に永久の繁栄を。

まだ娘と呼んでいい年頃らしからぬ、大人びた笑みを浮かべてそう言つた。

西行とは後の世に歌人として伝わる平安時代の僧侶、西行法師のことであり、彼には様々な逸話が伝わつていた。

そのうちの一つが反魂はんごんの秘術を施し、骨を集め人を作りだしたといふもの。結果は確かに骨を人にとしたものの心が伴つていなかつたという。

そうして術は失敗したもの、後に西行法師は正しい法を教えられたといつ。

その後西行が再び反魂の術を行つたという話は聞かないが、その逸話は様々な『命』に関する話を集めていた峯家の者達も当然その逸話については知つていた。

訪れた呪術師の親子はその西行法師の流れを汲む者であると言つ。当然峯家は喜び、家に残つた娘を手厚く遇した。

それが後の綾峰家、峯家の呪いの始まりだなど、誰ひとり思ひもせず。

或いは先を知りたいときだけ知ることが出来る……常磐が十年の時を経て予知能力の扱い方を学んだことが徒となつたのか。

娘の存在が何をもたらすことになるのか見ようとなかつた、知ろうとなかつたことが過ちだつたのか。

ただ家人達が喜ぶことに安堵した自身がいけなかつたのか、それは分からぬ。

ひとつ確かな事は彼女が峯家に留まることになる呪いの始まりだつたとけようとしたこと。

それが後々まで峯家の血を縛ることになる呪いの始まりだつたと云ふことだ。

「呪術師……」

あまりにもファンタジーじみた単語に思わず眉をひそめると、千

歳は零すように笑つた。

「今じや信じられないだろ？ けどあの時代は武将同士が呪い合つたりするのなんて当然。別におかしくも何ともなかつたんだぞ」

「呪いが市民権を得ていたんだ？」

呪いと言われても、藁人形に五寸釘くらいしか思い浮かばない私には呪いを扱う職種だの、それを当り前として受け入れる当時の人間が理解できないが。

「それに常磐つて人は本当に予知能力なんてあつたの？ つてことは、天狗に会つたつて言うのも本当なわけ？」

天狗から予知能力をもらいました、など到底信じ難い話だが。だがそれを言つたら瓦版に人魚が捕まつたなどと載るのも随分荒唐無稽な話だ。

千歳は軽く息を吐いて言つた。

「神隠しに遭つて行方知れずだつた間の記憶は一切なし。ガキだつたつて言えばそれまでだけど。……確かなのは村に帰つてきた時はそれまではなかつた予知能力つてやつを身につけてたつてことだけで」

「……」

「予知能力も本当にあつたから皆躍起になつて常磐をこの家に留めようとしたんだよ。老いからも死からも解放させようと馬鹿みたいに騒いで、本人も不老不死つて言葉にすっかり酔つていてな。頭は悪くなかったんだが妙に単純なところがあつたからな」

乾いた声で千歳は呴いた。その瞳に浮かぶ色は呆れにも諦めにも似たもの。

「本気で不老不死なんて望んだんだ。本人もその周りの人間も。どうかしてたとしか思えない。終わりのないものなんて、そんなものあるわけがないのにな」

静かな部屋に千歳の高くも低くもない声が吸い込まれる。

「……千歳が、『草次郎』なんだと思ってた」

千歳の瞳がまっすぐに私に向けられる。

思わず目を逸らしたくなるくらい、綺麗な瞳でまっすぐに。

「千歳に予知能力があつてここにいるんだと思つてた。今まで聞いた話の感じからそういうじゃないかなって思つてたんだけど、でも何か違う」

「何か？」

「千歳は常磐じやない」

千歳は目を瞠つた。

「最初は名前を変えただけなのかと思つた。でも違う。千歳が常磐つて人の事を話す時の感じは、自分のことを話している感じじやない。」

じつと千歳が私を見てくる。

「千歳の話し方はどこか第三者目線っぽい。千歳に近しい、親しいけど千歳でない誰かのことみたいに聞こえる。だから常磐は千歳とは別人だと思つ」

「勘？」

「勘」

「じゃあ

千歳は悪戯を企む子供のような笑みを浮かべて言った。

「俺は誰？」

千歳の笑顔から逃れるように俯いて、頭の中に浮かぶ幾つもの言葉を何とか形にしようとしてみる。そして浮かんだ考えをひとつ、口にした。

「……神隠しに遭つて、帰つてきた子供はひとりじゃないんだよね」「数人の子供が行方不明になつて、そのうちの数人だけが帰つて来れたと言つた。

「常磐……草次郎以外の複数人が神隠しから帰つて来たのなら、千歳はそのうちの一人じゃないの？」

何の根拠もない私の勝手な憶測。

けれどそれなら何となく、私の中で辻褄が合つ。

「神隠しから帰つてきた他の子供がどうなつたのか話してくれなかつたよね？ 複数帰つてきたのなら、草次郎以外にも予知能力を持つて帰つてきた子がいたつておかしくない。それが千歳じゃないの？」

強い強い、千歳のまっすぐな瞳が私を射る。今すぐに逃げ出したくなる程に強い目が。

張りつめた空氣の中で千歳の口元が緩い弧を描き、そして開かれ る。

「ちゃんと人の話を聞いてたんだな」

そう言って明るく笑う。それと同時に空氣が緩んだ気がした。

「……バカにしないでよ」

それだけ言うのが精一杯だつた。

「バカになんてしてないつて。うん、大当たり。俺は草次郎のバカと一緒に隠れ鬼をして神隠しに遭つた子供の一人。ついでにどういうわけか草次郎と共に先を見る力を、予知能力を持って帰つてきた」やつぱり。そう思つたけれど言葉にはならない。

「別に答えられなくても取つて食つたりしないのに」

「うるさいなあ」

取つて食われなくともあそこで答えないのは何となく嫌だつたのだ。

そんな私の心情を察してか千歳は苦笑して続けた。

「その時の俺の名前は照三^{しょうぞう}。峯昭三」

「峯？ それじゃあ

思わず出たその言葉の続きを、千歳本人の口から発せられた。

「俺は草次郎の弟。峯家で大事に大事に育てられた草次郎とは対照的に、汚らわしい存在つて絶賛嫌われ中だつた双子の弟」

その口元に自嘲めいた笑みが浮かべられた。

かつては獸のように一度に複数の子が生まれることは畜生腹と忌み嫌われた。当時の峯家の長男は病がちだつたため、次男として生まれた草次郎は歓迎すべき存在だつたのだろう。だが草次郎がいるのなら昭三はいらない。

「よく殺されなかつたものだと未だに思うつよ」

まるで他人事のように千歳は言つ。

「まあ長男がいつ死んでもおかしくないような病弱だつたし、あの時代つて成人するまで生きられる確率も低かつたからさ。万が一の保険つてことで一応俺も生かしておくかつて話になつたらしい」

「……本当にそれは親なの？ 千歳のお父さんとお母さんなの？」

千歳が嘘を吐いていると思うわけじゃない。だがそれを事実として受け入れるのはあまりに辛い。

千歳は苦笑して答えた。

「そういう時代のそういう家だつたんだ。そう珍しい話じやなかつたさ」

そう言つて千歳は話を続けた。

草次郎は健やかで利発な子として家族中に愛され、昭三は草次郎と全く同じ容姿をしながら別人という不気味な存在として隠すように育てられた。

その昭三の境遇が変わる日は、彼らが数えで六歳の夏の日に訪れ

た。

ある日、常に屋敷の離れで暮らす昭三の元に草次郎がやつてきた。
「おい、昭三。これから村の奴らと隠れ鬼をするからお前も来いよ」
「は？ だつてもう黄昏時だろ？ 黄昏時に隠れ鬼は駄目だつて」「知つたことか。これは度胸試しだ！ それともお前は怖くてこの薄汚れた離れを出ることもできないか？」

「そんなわけないだろ？」「

昭三が声を荒げると草次郎はにつと笑つた。

「じゃあ決まりだな」

それから草次郎と昭三、それに村の数人の子供達はこいつそりと山の近くで隠れ鬼をすることになった。

そして、そこで一度彼らの消息が途絶える。

一番の年長者だつた草次郎と昭三をはじめ、まだ幼い子供達のこどだから山で迷つているのかもしれない。村一番の権力者である峯家の子供がいなくなつたことにより大規模な山狩りが行われ、七日七晩捜索は続けられたが、村人達は彼らの痕跡すら見つけることは出来なかつた。

それが八日目の早朝、草次郎と昭三、それに数人の子供達が村の外れで発見された。

そして草次郎は戦を予言する。

そして昭三がどこまで逃げればよいかを告げる。

それが峯家の双子の最初の予知。

双子の予言はその後も峯家を助ける。それによつて峯家は栄えてゆく。

隠されるようにされていた昭三も相変わらず離れに置かれることは変わらなかつたが、以前のようになからさまに家族に避けられたり、下男下女にまで軽んじられることはなくなつた。

やがて草次郎は隣村の庄屋の娘を娶り子を成す。病弱な長男は子を成すことが出来ないためその子が峯家を継ぐことになつた。

そして草次郎が常磐と名を改め、昭三は千年の時という意味を込

めて千歳と名を改める。

それから程なくして千歳が幼馴染みでもある村の娘を妻として迎え、双子の子供達が数えで十七になつた年、あの呪術師の娘が屋敷に迎えられた。

庭に面した座敷には優しい日差しが降り注ぎ、いぐさ藺草の青い匂いが心地いい。心地よいまどろみの向こうで、優しい声が響く。

「千歳様」

そう呼ぶ声は愛しいもの。

「千歳様」

けれどもう一度呼びかけてきた声に、狸寝入りを決め込む。それから少しして、傍らで大きく溜め息が吐かれた。

「……昭ちゃん」

その声に満足して、千歳は満面の笑みで身を起こした。

「何だ？ 里久」

声の主は眉を下げて困ったように千歳を見ていた。

「起きてたんなら返事して下さい」

「だつて呼び方が気に入らなかつたから。いつも言つてるだろ？ 昔のままがいって」

彼女、里久は同じ年で、あまり外へ出ることが許されない千歳の数少ない友達でもあつた。

幼い頃から不吉な子と呼ばれ、村でも厭われた頃から彼女は普通に接してくれ、異界帰りと更に忌避されるようになつてからも変わることなく付き合つてくれた。

嫁を取れと両親に言われた時、自分が近隣の村でまで氣味悪がられていることを知つていた千歳は自分は一生独り身でいると言つた。家の力を使えば強引にどこぞの娘を嫁にする事は出来ただろうが、そんな歪な形で他人と生涯を共にする気にはなれなかつた。だが峯家は千歳を独りにはさせてくれなかつた。

名家の出ではないが、せめて千歳とうまくやつていける相手をと

して連れてこられたのが里久だった。

『ごめんな、里久』

『何で謝るの？』

『お前だつて嫌だろ？ 不吉で不気味な男の嫁なんて』
けれど里久は言った。

『あたしは小さい頃から昭ちゃんのこと大好きだつたんだよ？ だからあたしは嬉しいの。本当だつたら昭ちゃんとはとても釣り合つ生まれじゃないのにこいつして昭ちゃんのお嫁さんになれて、本当に嬉しいの』

そしてためらいがちに言つた。

『昭ちゃんはあたしなんかじや嫌かもしけないけど。でも、でもあたし頑張るから！ 昭ちゃんのお嫁さんにふさわしくなるように頑張るから！』

必死になつて言つてくる彼女の存在がどれほど嬉しかつただろう。独りに慣れていた。

一生独りで生きて、そして独りで死んでいくんだとずつと思つていた自分にとつてどれだけ嬉しい言葉だつただろう。誰かが想つてくれること、想つことが出来ること、それがこんなに嬉しいなんて知らなかつた。

彼女が好きだつて気持ちは幼い頃からあつたんだと思つ。けれどそれを口にしてはいけないと、何となく思つていた。

不吉で不気味な自分などが彼女を好いてしまつたら、彼女が損なわれてしまつ気がして怖かつた。

だから彼女に対して感じる好意は氣のせい。

ただ単に良い人間だと感じているだけ。

それだけだと、そう思つてきた。

『……里久』

『なあに？』

明るい声で聞き返してくる彼女は、こんなにも綺麗だつただろうか。

『有難い』

『やだ、何ー？ 昭ちゃんつてば』

里久は顔を赤くして落ち着かない様子で両手を振り回した。

『俺も好きだよ、里久のこと。子供の頃から、ずっと』

里久の顔が真っ赤に染まる。真っ赤になつてそのまま後ろにバタンと倒れた時はどうしようかと思つた。

まだ一年も経たない昔を思い出し、千歳はひとり笑いをかみ殺した。

「何？ どうしたんですか？」

里久が訝しげに顔を覗き込んでくる。

「んー单なる思い出し笑い。それより里久。その話し方も嫌だつて言つてるだろー？」

「え、だ、だつて。昭ちゃんは旦那様で、昭ちゃんは峯家の人口で、とっても立派なお家の人口で、だからちゃんとしなきやつて……」

「俺の前でまで立派になんてしないでいいよ。いつもの通りじやないと嫌だ」

拗ねるよつに言つて、千歳は里久の肩にあいを置いた。

「で、でも」

「どうせこんな離れにはほとんど人だつて来ないんだからいいだろ」「だつて普段から気を付けてないと、必要な時までついいつもの口調に……」

ふいに里久の言葉が途切れた。

彼女の肩にあいを置いた千歳が、小さな子供のような心細いよつな目でじつと見上げてきていた。

「……昭ちゃん、ずるい」

彼は自分の整つた容姿には全く頓着がない。なのに必要な時は最大限利用してくるから性質が悪い。言つ事を聞かせたい時はこいつじつと子供のような目で見上げてくる。

「の目に逆らえる人間なんていないだろ」と里久は常々思つている。少なくとも、自分は一生逆らえないだろと確信している。

「するい？ 何で？」

田をきらきらさせて里久の平凡な顔立ちを覗き込んでくるのは、子供のようにも大人のようにも見える整った綺麗な顔立ち。

里久は顔が熱くなるのを感じながら、ふいと顔を背けた。

「もういいつ。それよりお義父上様と義兄上様が母屋の座敷へ来るようになります」

「父上と兄上が？」

長い睫毛を何度も瞬かせながら、千歳は不思議そうに聞き直してくる。

「何で？」

「さあ？ ただ使いの人人がそう言つてたから。昭ちゃんだけじゃなく、草ちゃん……じゃなくて常磐様もお呼びになつたつて」

「常磐も？ 何だろ。あいつも呼ばれたつてことは何か変なモノでも見たかな」

「昭ちゃんは何も見てないの？」

「見てないって言つたか、見る気がないと言つたか……まあいや。行けばわかるか」

千歳はそう言つて立ち上がり、猫のように大きく伸びをした。

「それじゃあ俺は行つてくるけどあまり動き回つたりしたら駄目だからな？ 用事は全て人にやらせる。それから何かあつたらすぐに俺に……」

「昭ちゃん。あたしは大丈夫だから」

里久が呆れ顔で言い切る。

その腹は緩やかに膨らんでいる。あと三月もすれば子が産まれるのだ。千歳と里久の子が。

千歳はその腹に手を当て頬を弛ませた。

「いいから大人しくしてくれ。でないと俺はここから一歩も動かないからな。誰に呼ばれようと天変地異があろうと動かないからな」

子供のような物言いに、里久は諦めた風に溜め息を吐いた。

「わかりました、大人しくします。だから早くお義父上様達のと

ころへ行つて差し上げて。そうしないとわしきの使いの人が怒られ
ちやう

「わーかつた。けど本当にくれぐれも大人しく……」

「昭ちゃん!」「

千歳は肩を竦ませて笑つた。

「それじゃあ行つてくるよ」

「行つてらっしゃい。お義父上様達によろしくね
「ん。里久も腹の子が動いたらすぐ知らせろよ?」
「はいはい」

里久は呆れながらも笑つて手を振つた。

それを見ながら千歳は座敷を後にする。

「千歳様」

座敷を出でじばりくすると母屋に仕える若い下男が今にも泣きそ
うな顔で現れた。

「大旦那様がお早くお越しになるよつこと仰つてているので、後生で
ごぞこますのでどうぞお越し下さ」

どうやら先程使いにやつて来たといふのはこの男のことらしい。
この様子だとなかなか姿を現さない千歳に業を煮やした父の叱責を
くらつてきたのだろう。

「今行くよ。悪いな、俺が勝手に遅れたんだって父上には説明する
からさ」

さほど年の変わらない下男に軽く詫びて、千歳は母屋へと向かつ
た。

母屋と離れとは父の意向で細い板張りの廊下で繋がつてゐるもの
のそれなりの距離がある。

「父上達は何の用だつて?」

千歳が下男を振り返ると彼は首を傾げた。

「私もお客人がいらしているとしか」

「客?」

千歳は眉をひそめた。

「また長寿の食い物とか、秘薬とかを持つてくる胡散臭い連中
じゃないだろうな」

今まで千歳はそういう出所も分からぬ奇妙なものを散々試されてきた。特に効能がないまでならまだしも、時には腹を下したりもしたのだから冗談ではない。

千歳の待遇は変わった。

変わったが所詮自分は常磐の次なのだ。

それは永遠を意味する兄の名前と、千年である自分の名前からも明らかだ。

峯家は常磐の子が継ぎ、常磐は峯家のために予言し続ける。そして自分は常磐を少しでも長くこの家に留めるためにあらゆる長寿、不死の法を試す。

自分はあくまでも常磐の次。

よくても代替品。

そんなことを考えているといつの間にか座敷の前に着いていた。下男が声をかけ、中から父の声がすると襖が開かれる。促されるままに千歳が座敷内に足を踏み入れると襖は閉じられた。

「人払いをしてある」

老いても尚、強い威厳を持つた父の声がそう告げた。

「お前も座りなさい」

「はい」

有無を言わせず父は千歳を常磐の隣へ座らせる。

そこで気付いた。この座敷にいるのは自分と常磐、それに父と長兄の他にもう一人いたのだと。

一番の下座に楚々として座し、緋色の小袖の頭を垂れた女。顔は見えないが若い女だろう。

「面を上げなさい」

父の声に女が顔を上げる。

隣で常磐が息を呑むのが伝わってきた。

艶やかな黒髪が肩にかかり、細面の顔には形の良い赤い唇。千歳

と常磐とそつ歳は変わらないだろうが稀に見る美人だ。

だが、常磐が息を呑んだのは彼女の見目が良いからだけではないのは千歳も分かる。彼女は顔の右半分近くが怪我でもしたかのように白布で巻かれていた。その隙間からは僅かに火傷跡のようなものが覗く。

女は小さな赤い口を開いた。

「リクと申します」

「この者にはこれから当家で呪術師として働いてもらうことになった」

父の言葉に千歳と常磐は思わず顔を見合せた。

「呪術師、ですか？」

ある程度の発言権がある常磐がさすがに聞き返す。
不審を隠す気もない常磐の顔も見ずに、父は言った。

「彼女にはお前達に長寿、或いは不死を与えるために働いてもらひうる言葉に千歳も常磐も得心がいった。

今までにも散々にそういう呪いだと受けてきたが、どうとう父はお抱えの呪術師まで雇う気になったのか。

「話とはそれだけですか？」

「そうだ」

愚問だと言わんばかりに父は一言で片付ける。

千歳は見えないよう息を吐き、立ち上がった。

「わかりました。ではまた御用の際は人を遣わして下さい」

「千歳」

「不老不死の妙薬でも大陸伝来の呪いでも、私が必要であればその都度言いにいらして下さい。拒むつもりはありません。では失礼します」

父の渋い顔を見ずに千歳は座敷を後にした。

常磐と兄の声を背に聞き、細い渡り廊下へと向かう。そして渡り廊下に一步足をかけたところで大きく息を吐いた。

「……また面倒な」

先を知る力といつもののが、この明日の知れぬ乱世において重要なのはよく分かる。

分かるが、それを少しでも長くこの家に留め置くためにと奇妙な食物、呪い、薬。そんなものを試すほつの身にもなつてほしい。千歳も常磐の次であるとは言え、三日にも一度は先を見てそれを報告する。

その結果が常磐と違つたことはない。千歳と常磐は全く同じ未来を見ることが出来る。

同じなら、より望まれるのは最初から愛されてきた常磐のほうで当然だ。それに関してはもういい。

血の繋がつた親兄弟より自分を一番に想つてくれる者は別にいる。彼女がいればそれでいい。

そして峯家にいれば彼女に何不自由ない暮らしをさせてやれる。予言をして、そして多少の面倒……長い生を得るために法を試しさえすれば。ただそれだけの代償で大切なものを守れる。それならば安いものだ。

「 千歳様」

鈴を転がすような声。

いつの間にか、千歳のすぐ後ろに先程のあの呪術師だという女が立つていた。

緋色の小袖に白い肌が映え、柔らかな風に長くまつすぐな髪が揺れる。

そうしている分には「ごく普通の娘にしか見えない。とてもではないが、呪術師などという大層なものには見えない。

「もう何か用か？」

笑顔の面を張り付けて、千歳は尋ねた。
すると彼女はためらうように手を伏せた。

「あの、先程は私が何かご気分を害するようなことを致したかと思
い……」
「は？」

何の事だかさっぱりわからず、千歳は大きく目を見開いた。すると彼女は小さな声で言った。

「急に席を立たれましたから……常磐様も私の顔をご覧になつた際に随分驚かれたようでしたし、やはり千歳様にも御不快な思いをさせてしまつたかと」

「は？ 待つた。席を立つたのは別にあんたのせいじゃなくて俺があれ以上あの場にいる必要がないって思つたからで、別に不快に思つたわけじゃない」

彼女は顔を上げ千歳を見た。

顔の右上半分、目も頬も白布に覆われているが、左は切れ長の黒目がちの瞳、磁器のような頬も隠すものは何もない。見上げてくる左目は不安に揺れている。

それはかつての自分のようだと、そう思った。

いつも隠されていた頃。人の顔色を窺っていた幼少期。

彼女はあの頃の自分と同じ目で、千歳を見上げてくる。
「ですが私の顔は人を不快にさせますから……その。この布の下は火傷の痕があつて常は布で隠すようにしているのですが、ふとした弾みに布から覗くことがあります。もしこの顔がお目に留まることが不愉快だと思われましたら仰つて下さい。面を被るなりして、お目に触れぬように致しますから」

何かを諦めたようにそう言つてくる姿に既視感を覚える。

ああ、やはり似ている。

目の前のこの少女は昔の自分と似ている。

「あのね」

「はい」

「俺は別に不快だとか思わないから、気にしなくていい」
彼女は目を瞠つた。

「常磐が驚いたのはせっかくの美人が布で隠されてたから。だからあんたが気にする事じゃない」

「私は醜いです」

千歳の言葉の一切を拒絶するように彼女は言いきった。

「美しいなど私ではなく、千歳様や常盤様のような御方のためにある言葉です」

「あなたの審美眼が歪んでるだけなんじゃ？」

対して千歳は無礼としか取れないような言葉を、真顔で吐く。

「まあ好みなんて人によつて違うし、俺が口を出すようなことでもないけど。でもあなたが自分を醜いって思つても、別の誰かは綺麗だつて感じるよ。この国だけでなく大陸に住む人たち含めたらどれだけ人がいると思うよ？ そいつら全部が同じ価値観しかないわけない。中には真逆の奴もいるだろ？」

千歳にとつてはただの事実。

事実でしかない言葉を聞いた彼女の左目から涙が一筋零れる。これにはさすがの千歳もたじろいだ。女を泣かせたなど里久に知られたら盛大に叱られる。

「あ、その……何も知らない俺が勝手を言つて悪かった。だから気にするな！」

「……違います」

涙を零したまま彼女は赤い唇を弛めた。

「そんなことを仰つてくださる方がいるなんて、思いもしませんでした」

涙に濡れた目で彼女は千歳を見上げてくる。

「有難うござります。千歳様」

「……いや。俺は言いたいことを言つただけだから」

「その言いたいことのおかげで、私は今、とても晴れ晴れとした気持ちです」

その言葉を示すように、彼女はまだ涙が残る目を細めて柔らかな笑みを浮かべていた。

千歳は居心地悪く頭を搔いた。

「えーと……呪術師なんて言うからどんな怖い女かと思つたら、意外と普通だな」

「私は呪術師と申しましても修業中の身ですから」

「修行が終わると怖くなるのか？」

「さあ？ 私はまだ女の呪術師には会ったことがないので存じませんが……」

彼女は真剣そのものの表情で首を傾げた。

自分にとつて面倒をもたらす存在以外の何物でもないと思つていた娘は、意外に面白い。

「なあ。お前、名前何だつけ？」 確かさつき名乗つてたよな。悪い。

眠くてちやんと聞いてなかつた

千歳のどこまでも無礼な発言にも、彼女は氣を悪くした風もなく素直に答えてくれる。

「リクです」

「リク。字は？」

「里に、数の玖と書いて里玖です」

「それは奇遇だな」

リクの言葉に千歳はにこやかに声を上げた。

「俺の妻もリクと言うんだ。字も近い。うちのリクは里に久しいと書く」

「そうでしたか」

「年の頃も近いと思うし、気が向いたら話相手にでもなつてやってくれると嬉しい。今あいつは身重であまり動けないんだ」

「私などでよろしければ奥方様のお相手を務めさせて頂きたく存じます」

リクははにかむように笑つて言つた。

つられるようにして千歳も笑う。

「人に奥方と呼ばれると何だかこそばゆいな。奥方か。うん、あいつは俺の奥方なんだよな」

「千歳様は奥方様を大事にされているのですね」

「当たり前だろ？ あいつと腹の子は俺の一番の宝なんだ。あいつと俺の子ならきっと三国一の良い子が生まれる」

臆面もない千歳の言葉にもリクは笑顔で頷く。

「千歳様とその宝である御方の御子でしたら、必ずや良い御子でしょう」

呪術師の少女、リクが峯家の食客となつた葉桜の季節。

各地で戦が絶えない世。

そんな中でも、彼らにとって一番幸福な時だつた。

すべては泡沫

「本当に、幸せな時だったよ」

懐かしむように、囁みしめるように千歳は言った。

本当に大切な記憶なのだろう。彼にとつて五百年経つた今も、里久という女性と過ごした日々は。

だけど私はそんな千歳を見ていると何だかとても胸が痛い。泣きたくなるような、そんな胸の痛みを覚えた。

……私の知らない千歳。

私の知らない誰かを愛した、優しい田をして彼女の名前を語る千歳。

何でこんなに胸が痛むんだろう。

千歳にとつてとても幸せな過去だったのだから、つられて和つあいも幸せな気分になつたつていよいに何でこんなにも焼けつくような痛みがあるんだろう……。

「結婚?」

思いもよらず名前を呼ばれ、弾かれたように顔を上げた。

「な、何?」

千歳は少し瞳を陰らせた。

「どうした? 具合悪いか?」

本氣で千歳が心配してくれているのが伝わってきて、私は慌てて首を横に振った。

「大丈夫。ただ、生の戦国時代の体験談を聞いてるなんて不思議だなって思つてただけ!」

そう言つと千歳は苦笑した。

「そうだな。なかなかできない経験だよな」

「うん。本当だつたら色んな人に自慢したいくらい出来るだけ明るくそう言つと千歳は目を細めた。

「自慢できるようなネタがあればよかつたんだけどな。織田信長と

か上杉謙信には残念ながら会つたことがないんだ

「なーんだ。つまんない。当時の文書とかあつたらネットオークションにでも出したのに」

「うん、今になると俺も会つておいでサインでももらつておけばよかつたつて思つてる」

そんな軽口を叩き合つて笑い合つた。

そうして千歳は一呼吸置いてから再び話し始めた。

私の知らない、千歳の過いした時を。

空の色が少し薄くなり、入道雲はいつの間にかいわし雲になつていた。

千歳は座敷の中央の寝床ですやすやと眠る赤子をただ見下ろしていた。

「興太郎」

父の呼び声に気づく」ともなく、赤子はよく眠つてゐる。

「いひたるー」

「昭ちゃん、せっかく寝たんだから起こさないでよ」

座敷に入ってきた里久が頬を膨らませて言つ。

「だつて可愛いすぎるだろ？ こんな可愛い子供は史上初、この先だつてないに決まってる。そんな可愛い子供が目の前で可愛い顔で寝ているつて言うのに構わずにいられる奴なんているもんか」「早くも親バカぶりを發揮して、真顔でそんなことを言つてくる彼までもが子供のようだ。

千歳は興太郎が生まれてからひと月、初めての我が子に構いたがつて仕方がない。朝から晩まで飽きることなく興太郎のそばに居座つてゐる。

元から子供が好きで常磐の子供が生まれた時は随分喜んでいたが、それが我が子ともなるとまた格別らしい。

「里久もまだ産後ひと月しか経つてないんだから、あまり動くなよ

「あたしはもう大丈夫よ。元から健康だけが取り柄だもん」

里久は乳母をつけるよう言つてきた父達の言葉を断り自分の手で興太郎を育てたいと言い、常磐の妻がふた月は床でゆっくりしていのに対し、彼女はすぐに床から起きてまた以前のように活発に動き始めた。そんな彼女の活動的なところも、まるで存在そのものが太陽のようなところも千歳は好きだがやはり心配にはなる。

「里久は働き過ぎだろ。何のために人を雇つてるんだよ?」

「だつてあたし、動いてないと落ち着かないんだもの」「けどなあ」

渋い顔をする千歳の隣に里久は腰を降ろした。

「昭ちゃんんだつて、あたしが何もしないで黙つて座つてるだけだつたら気持ち悪くない?」

「……気持ち悪いと言つより、具合が悪いんじやないかって疑う」つわりの酷かつた時期、常は強靭な里久が珍しく床についていたことがある。

いつも明るく笑顔で動き回っている彼女しか知らなかつた千歳は随分と戸惑い、里久以上に動搖した。

「昭ちゃんて意外と心配症だよね」

「心配症つて言うか、普通心配するだろ?」

千歳にとつては至極当然のことなのが里久は明るく笑い飛ばす。「そんなことないない。うちのお父なんて、お母が弟を産んで産後の肥立ちがよくなかった時だつて寝てれば治る! つて言つて全然心配してなかつたし」

「んー里久の父上は昔から豪快だからな。けど別に心配してなかつたわけじゃないと思うぞ。俺、その頃に村外れの社に里久の父上が毎日詣でてるの見たし」

「お父が? 本当に?」

里久は丸い目をますます丸くして千歳に詰め寄つた。

「本当に。何を祈つてたのかは知らないけど、時期的にも里久の母上の回復祈願だろ」

「お父がねえ……」

信じられない、とばかりに眉を寄せて考え込む里久を眺めていると座敷の外から声がかかつた。

「失礼致します。千歳様、奥方様。いらっしゃいますか？」

「お、リクだ。入れー」

千歳が声をかけると、控え目な声がして襖が開かかる。

「失礼致します」

長い黒髪の先を結い、萌黄色もえきいろの小袖姿こそでのリクは楚々とした様子で盆に乗つた器と紙包みを運んできた。

「奥方様。お薬の時間でござります」

「うー……ねえリクちゃん。それってまだ飲まなきゃダメ?」

里久が上目づかいに尋ねると、リクは笑顔で言った。

「駄目です。まだまだ本来なら安静にして頂きたいところをこうしてお動きにならされているのですから、せめてお薬くらいはお飲みになつて下さいませ」

「そうだぞ。リクの言う通りだ、里久」

便乗して千歳が言うと、里久は世にも情けない顔をした。

「そうは言つけど本当に苦いんだよ、この薬。確かに回復が早いのは認めるけど。すーつごく苦いんだよ?」

「良薬は口に苦しと申します。その分効果もありますので、千歳様と興太郎様のためとお思いになつてどうぞお飲み下さいませ」

リクの真剣な眼差しに負け、里久は渋々と碗を手に取つて丸薬を数個、口に放り込んだ。更にこの場でリクが調合している薬湯を飲むのだが、これがどうしようもなく苦いらしい。

リクは千歳が頼んだ通り、出産を控え歩くこともままならなくなつた里久のもとへ通い話相手を務めてくれた。そのお陰で初産で緊張していた里久の気も晴れたらしく、今では長年の友人のように接している。

リクは少しばかり他人と接するのが不得手なところがあるが、里久の生まれつきの明るい気性と物怖じしない性格から親しくなるの

に時間はからなかつた。峯家に嫁に来て以来、同年代の友人と気軽に話すことが出来なくなつた里久にとつてもリクの存在はよいものだつたのだろう。

「さ、奥方様。出来ました」

碗に注がれた濁つた液体を見て、里久は眉を下げた。

毎日飲んでいるのに慣れる様子が一向にないところを見ると、リク特製のこの薬湯はよほど不味いのか。

呪術師は薬も扱う。それ故リクは峯家の専属の薬師くすしでもあつた。その薬の効果は確かだが、苦さもその効果に比例するところがあるらしい。

里久は覚悟を決めたように両手をつぶり、一気に薬湯を飲み干した。

「えらいぞー里久」

飲み終えて肩で息をしている里久の頭を撫でながら千歳は笑う。

「お見事でございました。水を飲れますか？」

「の、飲む……口直し……」

「はい。ただ今」

くすくすと笑つてリクは水を別の碗に注いで里久に手渡した。それを受け取るなり、里久は勢いよく碗を煽つた。そして碗を置の上に置いて、大きく息を吐いた。

「はあ……生き返つたあ」

「うん。よしよし。ちゃんと飲んでえらいぞ。なあ興太郎？　お前のかか様は働き者で器量よしでとても偉いんだぞ」

「そうですよ。興太郎様の母上様はとてもご立派なんです」

千歳の親バカ夫バカに便乗するリクに、里久は呆れ半分に笑う。

「リクちゃんまでやめてよ。昭ちゃんてばすぐつけ上がるんだから

……つて、リクちゃん？」

里久は驚いたようにリクの細い腕を取つた。

「やだ……また痩せたんじゃない？　それに何だか顔色も良くないし……またお薬を試していったの？」

心配そうに覗きこんでくる里久の手をやんわりと離して、リクは微笑んだ。

「それが私が峯家にお世話になつてている理由ですから。当然です」

不老不死。

長寿。

そのためリクは様々な呪い、薬を彼女の今までの経験、書物などから日々試行錯誤していた。千歳を常磐のために使うくらいなら自分がと言い、リクは自らの体で様々な呪いや薬を試していた。

当然誰も成し得ないことを完成させるには、今まで誰も行ったことがないような事も行わなければならぬ。そのためリクは自らの薬の作用によつて寝込むことも度々あつた。

「……リク。薬や呪いの完成は確かにお前への依頼の範疇だろうが、それを試すのはお前じゃなくていいんだ。むしろそれは俺の役目だろ？」「うう

日々やつれしていく彼女を見かね、何度も千歳はそう言つた。だがリクは断固として首を縦に振らなかつた。

『千歳様にそのようなこと、これ以上させられません』

千歳が今まで何度も常磐のために奇妙な植物や薬、その他諸々を口にしてきたことを聞いたリクははつきりとした口調で言つた。

『千歳様と常磐様。お一人に優劣などありません。ですから千歳様が犠牲になどなられる必要はありません』

(……俺ごとにそこまでする必要なんてないんだけどな)
だがリクは笑みさえ浮かべて言つのだ。

『初めて私を厭わずに下さった千歳様のために何でもいいのです。何か、私に出来る事があるのならさせて頂きたいのです』

不死を得る前に、そのための手段を得る過程で死ぬかも知れない。リクがこの家に来る前からそんな漠然とした意識があつた。
昔はそれでもよかつた。

けど今は

……。

「昭ちやんに辛い思いさせるのも嫌だけど、リクちゃんまでそんな

にならなきやなんないの……？」

まだ幼さが残っている横顔は興太郎が生まれてからどこか母らしさを感じさせるようになった。ひとつ下だつたはずの里久が、時折自分よりずっと年長にすら思える。

里久が妻として母として自分のそばにいてくれるのなら自分は夫として父として、里久と興太郎を守る。そのためには、本当に得られるかもわからない不死なぞのために自分を犠牲にするわけにはいかない。

（俺は卑怯だな）

リクの申し出を、本当は心のどこか有難いものだと思っている。里久と興太郎を守つて平穏な暮らしを望むのなら、峯家を出ればいいのに。

近隣の村に自分の存在が知れ渡つているのなら、それよりもっと遠くへ行けばいいのに。

……けど、逃げられない。

間違ひなく、他国へ逃げても峯家に連れ戻される。この異形の目を以て先を見なくとも分かる。

峯家はどんな手段を使ってでも千歳を逃がさない。

峯家の人脈、財力、それに何よりも常磐。常磐が見ようとしたのなら千歳の行動など筒抜けだ。

例え千歳が彼と同じものを見てそれに抗あうとも、常磐はその先を見る。

……イタチ二つこだ。

この身は峯家と常磐のために在るもの。千歳をこの家に繋ぎとめるためならば、里久や興太郎を人質とすることも辞さないだろ？

「昭ちゃん？」

気付けば里久が心配そうに顔を覗き込んでいた。

「どうしたの？ 難しい顔をして」

「……何でもないよ。それより里久の額は今日も可愛いな」

里久の少し広い額に触ると、彼女は眉を吊り上げて手を払つて

きた。

「あたしがおでこのこと言われるの嫌つて知つてるでしょ？」

「可愛いんだしいじやないか」

「いー やー なー のー」

両手で額を隠すようにして、里久は口を尖らせた。
千歳はつまらなそうに小さく呟いた。

「可愛いのに」

「まだ言うか？」

「あ、あの……」

控え目な声に、千歳と里久の視線が向けられる。

碗や薬を脇に置き、背筋を伸ばしてリクは控え目ながらも凛とした表情で告げた。

「千歳様。母屋までお越し下さいますよつ大旦那様より託つて参りました」

「……それは火急の用か？」

「はい。奥方様がお薬を飲まれたらなれば、すぐに奥のお座敷へお出でになるようにと」

見えない。

見ようとしなければ、先は見えない。

それをこの十年で学んだ。

だけどこの時ばかりは、見るまでもなく気付いた。
その時が、来た。

リクの声や表情が、それを伝えてくる。
リクがこの家にいる理由が果たされたのだ。
不死か長寿。

そのどちらかが現実のものになるのだといつ」と。

「……わかつた。すぐに行く」

そう答えるとリクは深く頭を垂れた。

日が傾き始め、外からは秋らしい虫の声が聞こえ始める。

空は橙に染まり、影が濃くなり夜が近づいてくる。

渡り廊下を踏みしめる千歳トリク、二人分の足音が今日に限つては妙に大きく響いた。

リクは無言で千歳の後に付き、千歳もまた口を開さしたまま、暗がりに沈みゆく母屋から目を逸らしながら重い足を進めた。

思えば、こんな刻限だった。

自分と常磐の人生を大きく変えたに違いない、神隠しに遭つたのは。

黄昏時。

人とそうでないものが混じる刻限。

あの日。

神隠しに遭つたと言われ所在の知れなくなつた数日間。自分たちは一体どこにいて、誰と何をしていたのだろう。

今更思い出せるはずもないのに、何故かそんなことを思った。

奥の座敷には既に父と長兄、それに常磐が集まっていた。
 一步座敷へ足を踏み入れれば、表の世界と分離されたような奇妙な緊張感に支配されていた。

薄闇に溶け始めた座敷内はふたつの灯りがゆらゆらと揺れる。背後で閉められた障子の音が今までの日常との別離の証のように感じられた。

柄にもなく緊張している。

いざ不死だの長寿だのを目前にして。

今まで現実味のなかつたその言葉が実現するかもしないことに畏怖している。

「里玖」

父の重々しい声にリクが一步前へと進み出た。

「はい。大旦那様」

リクは下座に就き、袖から竹筒を取り出した。

千歳と常磐はそれを黙つて見ていた。

リクは竹筒から黒い丸薬を取り出し、かいし懐紙に乗せた。その外観は普通の薬と大差ない。

「先日、人の頭に魚の身を持つ異形が國の外れで捕獲されたそうです。それを旦那様の指示によりこちらまで運んで頂き調合したのがこの薬になります」

「兄上、本当に人魚などが？」

常磐は訝しげに長兄を見上げた。

今や峯家の当主となつたものの、病がちで細面の兄は小さく頷いた。

「使いの者をやつて調べさせたが確かにそのような物だつたと言つ。こちらへは解体して運ばせ、私もそれを実際に見たのだが……」

そう言つた兄の顔色が薄闇と灯りのせいではなく実際に陰る。

「私も確認致しましたが」

兄の言葉を継いでリクが続けた。

「頭はまさに人の女の物。しかし大きさは一尺（約六十センチ）ほど。通常の人物ではありません」

リクの言葉に生来神経質で潔癖な氣のある兄の顔色はますます陰る。

確かにそんな氣色悪い物体を生で見たと言つなら、この兄には刺激が強すぎただろう。

さすがの常磐も口を開けて言葉もないらしい。

「それ故、運ばれてきた物はほぼ間違いなく人魚の肉。ですが実際に不老不死をもたらすかは不明でしたのでこのふた用ほど、様々な法を試して参りました」

淡々と薬師、或いは呪術師としての義務を果たす時のリクは常よりずつと年長の者に見える。

年長の者……と言うより、まるで別の者のよう。これが呪に携わる道の者なのだろうか。

「この丸薬は人魚の肉、それに加え私が呪術師として学んできた知識から様々な物を調合したものです」

「様々な、つて……」

常磐が顔を引きつらせてリクを見る。

「それは食える物なのか？ 毒とか妙な物とか入っていいないよな？」

リクは常磐から目を逸らさずに答えた。

「薬は用い方によつては毒にもなります。毒も同じように扱い方次第で薬にもなります。ですので常磐様の仰られる毒も調合されていることになります」

常磐の顔が一気に引きつった。

だがリクは気にする様子もなく続けた。

「作用はまず蝉で確かめました」

「蝉？」

「はい。蝉は通常、夏の「ごく限られた日数を生きるものです。です

がこの薬を服用させましたところ、水無月の終わりに飼育を始めた
蝉はつい先日まで生きておりました

水無月の終わりから、と言う事はふた月程度か。確かに蝉にして
は長い。それに暦の上では今はもう秋だ。外へ出たところで蝉の声
など聞こえてくるわけもない。

そこへ未だ顔色の悪い兄が口を挟んだ。

「だが不老不死ではないのか？ 生きていた、と言つ事はその蝉は
もう死んだのだろう？」

「仰る通りでございます。秋まで生きた蝉は人の手により、容易に
その命を摘み取ることが出来ました」

千歳と常磐、長兄が揃つて眉をひそめる。

「リク。悪いがもう少し分かりやすく言つてくれるか？」

千歳の言葉にリクは少しためらうように目を伏せてから、改めて
千歳、常磐を見て凜とした声音で告げた。

「では結果を申し上げます。私の調合した薬はおそらく生き物から
老いを奪い、寿命を延ばす事が可能です。ですが死を免除する事は
出来ません」

「それは」

千歳は声が震えぬように必死に抑え込んで言葉を発した。

「それは不老不死ではなく不老長寿と言つ事か」

「その通りでござります」

静かな声で、リクは答えた。

その声に、その言葉の告げる事実に背筋が冷たくなった。

果たしてこれは人が手出しをしていい領域なのか。人の命を、老
いていはずれは土に還るという道理を覆すなど、それは本当に人が行
つても良いものなのか。

まるで世界そのものと敵対したような、そんな得体の知れない恐
怖を覚えた。

だがそんな恐怖を覚えたのは千歳だけだったらしい。

「素晴らしいことだ！」

先程まで顔を引きつらせていた常磐が歓喜の声を上げた。

「それを飲めば、俺は永遠に老いることがないということだな？」里

玖

「はい」

リクの静かだが確かな答えに、常磐は満足げに笑う。

「人の身に毒となるか否か。それも私が身を以て試しましたが試行錯誤の結果、あらゆる害となるものを除くことにも成功致しました」「つまり、害なく不老長寿だけを得られるということだな？」

「はい」

その答えを聞いた常磐は尚一層、笑みを深めた。

「お聞きになられましたか？ 父上、兄上」

「うむ」

父は厳しい表情を崩しリクを見た。

「良くやつてくれた、里玖」

「勿体ないお言葉に存じます」

深々とリクは頭を垂れた。

「千歳、俺達は大陸の皇帝ですら得られなかつた不老長寿を得られるんだぞ」

常磐は力強い笑みで千歳を見た。

「あ、ああ……そうだな」

「何だ。その答えは。さては嬉しそぎて言葉にならないか？」

「そうじやない、とは口に出せなかつた。」

常磐も父も兄も手放しで喜んでいる。

だが千歳だけはどうしても喜ぶより先、得体の知れない恐怖があつた。

先を見たわけじゃない。見る気も起きない。

ただ漠然と、本能的な恐怖を感じる。

だが何に？

それをうまく言葉にすることは出来なかつた。

「それではこの丸薬を一粒お飲み下さい」

「それだけでいいのか？」

「はい。それで常磐様、千歳様の不老長寿は確かなものとなります。延いては峯家の繁栄を絶対の物とするでしょう」

「里玖。そなたも薬は飲んだのだったな？」

一枚の懐紙にそれぞれ丸薬を一粒ずつ乗せていたリクは、兄の言葉に手を休めて頷いた。

「はい」

「ではそなたも不老長寿を得たと言ひう事か？」

「そうなります」

そう頷いてから、リクは千歳と常磐の前にそれぞれの懐紙を置いた。

常磐は興味深そうに目の前に置かれた丸薬を眺めていたが、千歳はそんな気分にはなれず膝の上に置いた手を握りしめていた。リクが座敷の隅に用意されていた水を碗に注ぎ、薬の横にそれを置かれても固く握りしめた手を緩めることはできなかつた。

それどころか、逃げだしたいという気持ちすら起き始めていた。

「二人とも、飲みなさい」

父の声に常磐は高揚した様子で丸薬を一つ口に放り込み、水で流し込んだ。

「千歳」

兄の声に千歳も薬へと手を伸ばした。

横目で常磐を見ると、特に変わりないがその表情は満足げだ。

……常磐は何も感じていない。

ならばこの不安は、頭の隅で鳴る警鐘は気のせいだ。

自分と常磐は同じモノを見るのだから。

だからこれは気のせいだ。

その間も父と兄、常磐、そしてリクの目は千歳に向けられていた。

それは無言の圧力となり、千歳に早く薬を飲むように命じてくる。

千歳は薬を二つ手に取り、それらを口に放つてから碗の水と共に飲み込んだ。

丸い粒が一つ、喉を伝つて体の奥深くへ落ちてゆく。その感触を消し去るうと、碗の中の水を一滴残らず口の中へ注いだ。たつたこれだけ。

これだけで今まで誰ひとり得られなかつた不老が得られる……？俄かには信じ難いほど、呆気ない。

喉から薬の感触が消えると、もう後には引き返せないのだと言つ恐怖にも似た感情とそれに反して、こんなものかと安堵する自分がいた。

碗を置くと同時に、父と長兄の顔に笑みが広がつた。

「これで峯家は安泰ですね」

「私も安心して隠居出来るといつものだ。 里玖」

「はい。 大旦那様」

リクは居住まいを正して父と向き合つた。

「そなたには是非今後とも峯家を見守つてほしい。無論、衣食住の保障だけではない。最高の客人としてもなそう」

父が稀に見るほど上機嫌に言つ。

「私などでよろしければこの命の限り、峯家にお仕えしたく存じます」

「うむ。 しかし惜しい事をしたな」

独り頷く父は唐突に言つた。

その父の次の言葉に千歳は言葉を失つた。

「そなたがもう少し早く当家を訪れていてくれれば、千歳の嫁はそなたとしたものを」

目の前が真っ赤に染まるのと、鋭い音を立てて陶製の碗が割れたのはどちらが先だつただろう。

碗を拳で叩きつけた千歳の右手からは血が零れ落ちる。

「おい、千歳……」

「それはどういう意味ですか？ 父上」

常磐の声を遮り、千歳は父を睨み据えた。

父は不快げに眉をひそめた。

「何だ、その反抗的な態度は」「答えて下さい。どういう意味ですか？　里久が俺の妻では不都合でも？」

血を流す右手が熱い。

父はその様子を見て、深く息を吐いた。

「下らん。里玖、直ぐに手当をしてやれ」

「はい」

千歳の手を取ろうとしたリクの細い手は強い力で振り払われる。リクは呆然と千歳を見上げたが、当の千歳は彼女を見やることすらしない。

ただ真っ直ぐに父を睨み据える。

「答えを頂いていません」

父の鋭い眼光が千歳に向けられた。

「わざわざ口にしなければ分からぬか。そなたの良くない噂はただでさえ近隣の村々までも知れ渡っているというのに、そんな中でどんな娘を連れてきてもそなたがと妻としなかった中で唯一受け入れたのが里久だけだった。だが里久は貧しい百姓の娘。何の取り柄もない百姓の娘と峯家の男子であるお前、つり合いが取れるわけがなからう」

吐き捨てるような父の言葉を全て聞き終わる前に千歳は立ち上がり、足音も荒く父の前まで歩いて行つた。

「千歳つ！」

父の胸倉に手を伸ばした時、兄と常磐の声が座敷に響き渡った。それに一瞬躊躇し、そのまま千歳は常磐に羽交い締めにされた。

「離せ、常磐！」

「頭を冷やせ！　お前、自分が何をしようとしているかわかっているのか！？」

「分かつてゐに決まつてゐる！　自分の妻が侮辱されて黙つているれるか！？」

暴れる千歳とそれを抑え込むとする常磐。

父は渋面で千歳から離れ、兄とリクに一言一言告げて座敷を後にした。

「離せつ！」

「いい加減にしろ、千歳！　ここで父上に手を上げてみよ！　お前の立場だけではなく里久や興太郎も処罰されかねないのだぞ！」

初めて聞く長兄の怒声に千歳は暴れることをやめた。

兄の言う通りだ。

父は自分の思い通りにならないことを許さない人間だ。もし千歳が父に手を上げるなどということがあつたらなら千歳だけでなく、その原因となつた存在である里久、それにその子である興太郎をも罰したか、良くても離縁させられかねない。

改めて自分の浅薄さに気付かされ、千歳は俯いた。

「……有難う」」ございました、兄上。頭が冷えました

「お前の気持ちもわからなくはない。だが、正論をかざしてもどうにもならないこともある。守りたいものがあるのなら、時には己を殺すことも覚えよ」

「……はい」

離れに戻る頃には口はすっかり落ち、辺りは灯りを持たなくては歩くこともままならないほど暗くなつていた。その暗闇が暗がりに落ちたような千歳の胸の内をますます暗くさせる。

何度目かの溜め息を吐いて廊下を渡りきり、離れへと戻ると灯りと共に里久が出迎えてくれた。

「お帰りなさい。昭ちゃん」

「……ただいま

彼女の変わらない笑顔に無性に泣きたくなつた。
無邪気に見えて里久は鋭い。

千歳が母屋へ呼び出された理由など、とうに察しているだらう。それでも里久は自分から言つまで待つてくれる。自分で気持ちの整理がつくまで聞かないでくれる。

「……里久」

「うん？」

「リクの調合した薬は、本当に苦いんだな」

それしか言えない。

こんな遠まわしにしか言う事が出来ない自分が情けない。
里久は少し間を置いてから、笑った。

千歳のよく知る、温かい太陽のような笑顔で言った。
「でしょ？ 泣きたくなっちゃつくらい、苦いでしょ？」

「ああ、本当に」

泣きたくなるほどに舌も胸の内も苦い。

「今なら興太郎もよく寝てるから泣いてもいいよ？」

屈託のない笑顔で里久はそんなことを言つてくる。

「父親になつて泣けるかつて」

「気にしない、気にしない。どうせもう泣きそつた顔してんんだか

ら

里久の手が伸びてきて千歳の頭を抱えるようにして抱いた。

母親も乳母も、こんな風に抱いてくれた記憶はない。

甘えることなど誰ひとり許してくれなかつた。汚らわしい畜生腹の子供だった頃も、予言の子として峯家の一員として認められるようになつてからも。

「氣味が悪い。同じ顔が一人だなんて……。

峯家の男子として強く在りなさい。人の上に立つ者が弱みを
わらすなどあつてはなりません。

理由は違えど、突き放されてきたのは同じだつた。

唯一、そんな自分を抱きしめてくれたのが里久だつた。

「……里久」

里久の肩に顔をつづめて小さくその名を口にのせる。

「うん？」

幼子をあやすように里久は背をさすってくれながら答えてくれる。
両目が熱くなる。

すがるよつに、里久の細い体に両手を回す。

「薬、苦かった」

「うん。苦こよね」

「……どうじょもなく、苦かった」

強く強く、里久の体を抱きしめて呟く。

里久は千歳の右手にそっと手を重ねてきた。
碗を割った時に怪我をして、今は白布が巻かれている。

「怪我したの？ 痛くない？」

「……痛い」

体中が痛い。

苦しくて痛くて、逃げ出したい。

何から？

あの傲慢な父から？

永遠に老いないかもしねりない、ますます人間離れした自分から？
わからない。

わからないけれど、怖くて不安で仕様がない。

「里久」

「うん？」

「……俺を、独りにしないで」

何故そんな事を口にしたのか。

大の男が年下の女にすがるなんて、情けなくて愛想をつかされた
つておかしくないのに。

なのに、それでも里久は笑って答えてくれるんだ。

「大丈夫。あたしは昭ちゃんといふよ

そんな明るい声に、呆れるほどに涙が溢れた。

数え十七の秋、千歳と常磐の時は止まつた。それから何年経つても彼らは老いることなく十七のままだった。

それでも季節はめまぐるしく巡り、それでも各国情勢も安定は見られず。そんな世でも峯家は確実に勢力を広げて行つた。

その頃から峯家の人々は綾峯と姓を変える。綾は模様を織り出した上等の薄い絹のこと。そんなきらきらしい字すら今の峯家には相応しいと言われるほど綾峯家は隆盛を極めた。

隆盛の中、千歳と常磐の父が逝き、長兄も隠居してその跡を常磐の唯一人の子が継ぎ、千歳の子供四人が綾峯分家を興した。その四人の興した家が二ノ峰から五ノ峰と呼ばれるようになるのだが、それはまだ先の話である。

そうして千歳と常磐の周囲も大きく変わつていった。
自分たちは老いすとも周囲の者は老いて、そして土に還つて行く。
それは千歳の妻とて例外ではなかつた。

末の娘が他家に嫁いだ春、里久は床に就いた。

いつの間にか髪は白く、細い手は枯れ木のようになつてゐた。人の身の老いを、千歳はその時初めて実感した。そして自分が異形の者であるという事に否応なく気付かされた。

予言をする以外は幼い時分から何一つ変わらぬ生活を送つてきた千歳は、片時も彼女の側を離れようとしなかつた。今にも自分の手の中から離れてしまいそうな妻を、必死で繋ぎとめようとするよ

うに。

「そんなにずっとついていてくれなくても大丈夫なのに」

痩せた頬で、里久は床の中から微笑む。

千歳は書物から顔を上げて彼女を見た。

「もともと俺は先を見て何かしら言葉を言う以外はこの家で望まれてないんだよ。むしろ何もするなってね。ならせめて妻の看病をす

る

看病と言つても本当にすることは何もないのだが。せいぜい食事の時に体を起こすのを手伝い、薬を飲ませ、話相手になることくらいしかできない。

もうどう手を焼くしても里久はそう長くもたない。

千歳と常磐と同じく、時を止めたままのリクがそう告げた時は目の前が真っ暗になつた。誰よりも千歳が動搖した。

どうにかならないのか。

呪術でも外法でも何でもいい。

自分から老いを消し去つたように、彼女からも消し去つてくれと恥も外聞もなくリクにすがりついた。

だが、リクの答えは無情なものであり当然のものであった。

無理です、と。

人魚の肉はない。

薬ももうない。

何より、もしそんなことを千歳が言い出しても聞き入れないでくれと、里久に以前から言われていたと言つ。

かつて感じた不老への不安。それはこれだったのかと絶望の片隅で思つた。

老いないといふことは、里久と同じ時を生きられないといつ事。

里久だけじゃない、子供達とも。

里久や子供達が老いていっても、自分は変わらない。

ずっとずつと、大事な者を見送り続けなくてはいけない。ずっと、置いて行かれ続ける。

そして独りになる。

それがこの世の摂理に反して不老を得た代償。

「昭ちゃん」

里久の穏やかな声が、暗闇に落ちた思考を拾い上げてくれる。

「ん、何だ?」

何とか平静を装つた千歳に、里久は母のような優しい声で言つた。

「リクちゃんを困らせちゃ駄目だからね」

それは里久に不老をと言つたことか。平静の仮面は一瞬で崩れ去る。

里久はそんな千歳を見て目元を和らげた。

「あたしが死んだ後、生き返らせようなんてことも考えちゃ駄目だからね」

「やめろよ！ 死んだ後なんて……」

千歳の怒声に里久は一瞬驚いたような顔をしたが、すぐに落ち着いた表情に戻った。

里久にはもう長くないということは知らせていない。

知らせてはいないうが自分の体のことだ。分かるのだ。別離の時は近いという事が。

リクは彼女の身体を診る者として知っている。

常磐は先を見て、近い将来起ころう出来事として知っている。

千歳は医学の心得などないから彼女の寿命を知るすべはない。わざと里久の未来を見ないようにしているから、先に起ころうとも知らない。

そうして千歳以外は皆、現実を受け入れた。

「昭ちゃん」

里久は窘めるような声で千歳を呼んだ。

その先を拒絶するように千歳は立ち上がりうつとした。だが里久の細すぎる指先が衣を弱々しい力で握ってきた。

「昭ちゃん。あたしね、昭ちゃんのお嫁さんになれて本当に幸せ。有難う。たくさんあたしを大切してくれて、幸せにしてくれて」優しい声が今は突き刺さるようになつて痛い。

千歳はきつく目を閉じて、その別れのような言葉を否定するようにな首を振つた。

「……昭ちゃんを置いて行くのはちょっと心配だけど、昭ちゃんは父様になつてしまつかりしたから大丈夫だよ」

しつかりなどしていない。いつまで経つても自分は幼いまだ。

変わらないのは外見だけじゃない。中身もだ。

「死んだらあたしの心は昭ちゃんにあげる。だから寂しがらないで。あたしはちゃんと昭ちゃんと一緒にいるから」

唇を強く噛みしめ、もう何を言う事も出来ない。

言葉が出てこない。

言葉にならない。

「それでいつか、昭ちゃんがあたしじゃない別の誰かに寂しくない場所を見つけたらあたしを捨てて、過去の人にして。忘れてしまってもいい」

「……そんな奴、現れるもんか」

やつと出たそんな言葉に、里久は小さく笑う。

「あたしは昭ちゃんの幸せを祈ってる。寂しくないように、幸せな気持ちで過ごせるように祈ってる。だからきっといつか、昭ちゃんが寂しくないって思える人と出会えるよ。それまでしつこく祈つてるから」

そんな人間、いらない。

里久さえいればいい。

それ以外なんていらない……誰も何も、いらない。

「昭ちゃんには今だつてあたしだけじゃないでしょ? あたしと昭ちゃんの子供達だつている」

その言葉に千歳は顔を上げた。

里久はゆっくりと衣を掴んでいた手を千歳の髪に伸ばした。

「あの子達はあたしと昭ちゃんが一緒にいられた証。大事な大事なあたし達の子供。皆体は大きくなつてもまだまだ子供だから、父様の昭ちゃんが側にいてあげて。あたしが叶わない分、見守つてあげて」

「……わか、つてる」

そうだ。

自分の世界には里久だけじゃない。

里久と自分の血を、面差しや性質を少しづつ受け継いだ子供達。

大事な宝物。

千歳は里久の手を取り、両手で包み込むように握った。

「あいつらの前ではちゃんと立派に父親をするよ。だから安心していい」

「そう？　じゃあ安心する」

「こりと里久は笑つた。

「昭ちやんと子供達がいてくれて、あたしは幸せ。大好きよ、昭ちやん」

「……ああ。俺も大好きだよ」

それからひと月も経たないうち、里久は眠るように静かに逝った。別離の痛みで気が狂つてしまつたほうが楽だうと何度も思ったが、子供達を前では意地を貫き通して父親ぶつた。

そうして葬儀も埋葬も終えてから独りで泣いた。人の前に出る時は笑顔を貼りつけて。

そして独りになつてから里久の死を悼んだ。

不变の存在であるはずの常磐の身に変化が現れたのはそれからしばらくしてだつた。

最初は誰も気付かなかつたが、着物の着丈が短くなつていった。気のせいだと思い誰も口にはしなかつたが、気付いた時には常磐は千歳より背丈が伸びていた。かつては全く同じ背丈だったはずの、共に十七で時を止めたはずの弟よりも。

常磐は酷く動搖してリクに詰め寄つた。

リクは涼しい顔で答えた。

『薬効が薄れてきたのでしょうか』

何故千歳とリクは変わらない？

その問いかにも簡潔に答えた。

『千歳様は不老となる以前にも、常磐に代わつて様々なものを口にしておられますからその影響でしょう。薬が完成するまでに私も様々なものを口にしましたので私もそのようなものかと』

不老が失われつつある身を前にして、常磐は半狂乱になつて取り乱した。

だがリクは言った。

『策は講じてあります』

そしてリクは語り始めた。

千歳と常磐が不老となつた後、リクと亡き父は万が一薬効が切れた際のことを話し合つたという。

人魚の肉などそういう手に入るものではない。何か他の手段はないものか。

千歳も常磐も預かり知れぬところで、そんな会話が交わされたのだという。

そうしてリクが辿りついた答え。

人魚の肉に代わるものがあればいい。

リクの呪術と残つた人魚の肉。これを以て、人魚の肉に代わるものをお遠に峯家に置くことが出来るとリクは父に言った。

それは人魚の肉とリクの受け継いできた呪術、そして人の身があればよいのだという。

父は、どんなものでもいい。予言の子たちを峯家に留め置いてくれと言つた。

リクはその呪法について説明した。

以前使い、残しておいた人魚の肉を峯家の血の者に食べさせる。そしてその後リクが呪いを施す。

それだけのものだつた。

それだけで、人魚の肉の代替品が出来上がる。

リクの呪術を受けた人間の血は、千歳と常磐にとって人魚の肉と同じように不老長寿をもたらす。

そして呪術を受けた人間の血を受け継ぐ子々孫々は、全てではないが同じように入魚の肉と同じ効果を持った血を流し生まれてくると。

同じ血族の血を口にしても不老を望むか。

そうリクは父に尋ねた。

父はためらうことなく頷いた。

そして本家当主……常磐の子がその呪術の対象に選ばれた。本家ならば何においてもその血が耐えることはないはずだ、として。

当初は自分の子に自分のあずかり知らぬところで奇妙な呪いを施したリクに掴みかからんばかりの勢いだつた常磐も、次第にそれによつて自分の不老が保たれるならと大人しくなつていつた。

常磐は子の血を口にし、再び老いることのない身となつた。千歳が自らのために子の血をすするのかと非難すると常磐は言った。

何も死ぬほど血を奪うわけではない。

答えた常磐の笑顔は、千歳の知る常磐のものではなかつた。

その顔は狂気に満ちていた。

それから千歳も血を口にするよつことリクと常磐が勧めてきた。だが千歳はそれを拒んだ。

これ以上異形となるのは御免だ、身内の血をすすつてまで生きながらえるつもりはない、と言つて。

そうして拒否し続けた千歳の説得にあたつたのが、彼の子供達だった。

父上。どうか血を口にして下せ。

父上と伯父上なくして、綾峯家は成り立ちません。

後生です。父上。

『見守つてあげて』

リクの言葉が耳に蘇つた。

そういう意味じやない。

歪んだ存在となつてまで、生きるといつ意味じやない。

それは分かつていた。けれど、今や自分にとつて子供達以上に大切なものなどない。

やがて千歳は頷き、甥の血を口にした。

それから時折生まれる人魚の肉と同じ効果のある血の者は『当たり』と呼ばれるようになり、代々千歳と常磐にその血を捧げ、大切に育てられた。

当たりと知る手段はあるのかと当初不満げだった常磐の心配は杞憂に終わり、当たりの者は千歳と常磐の側にいると、自分がそうであると血が騒ぐのだと本人達が言つた。

そしてその血は受け継がれていった。

綾峰家の繁栄と共にその血も呪いも延々と。

時代が変わり綾峰と字を変え、どれだけの人間が変わつていってもそれだけは変わることなく。

「…………これが、綾峰本家の呪い」

静かに厳かに、千歳は告げた。

「五百年、続いてきた呪い。子孫の血をすすつて俺はこの家で生きてきた。…………俺がこの家の呪いだよ」

そう言って千歳は小さく笑つた。

今にも壊れてしまいそうな、そんな不安定な笑みで。

何か言わないとと思うのに言葉が出てこない。言葉を探す私の前で千歳は言った。

「結婚の血が『当たり』って意味はもうわかつただろ?」

「…………私の血は、千歳の老化を止める」

やつと出た言葉に千歳は頷いた。

「そう。だから『当たり』の子供は綾峰家最奥に永遠に縛られる。逃げられないように、俺を生かすためだけに、その自由を奪われこの家に縛り付けられる」

「じゃあ、私も…………?」

千歳は足を投げ出し、軽く息を吐いた。

「当たりだって他の奴らに報告すれば、逃げることは難しいだろうな。最後に当たりの血を飲んだの、けつこう前だから」

いい加減新しい血が必要なのがもな。

そう、他人事のように呟いた。自分のことなのにまるでどうでもいいように。

それがとても不安で胸をかきむしられるようで、そして『今』生きている自分自身に頓着がない千歳が哀しくて仕方なかつた。

この人のために何かしたい。そんな傲慢を思いながらも、その何かを思いつくこともない自分が心底虚しくて苛立たしかつた。

真実は黒の子

一度氣を落ち着けようと思つたが、色々な事がめまぐるしく頭を巡るばかりだ。

千歳が神隠しにあつた先祖一人のうちの一人で。

本当に予知し、予言してきて、不老長寿で。その不老を長引かせるのに私の血が必要で、そのくせ私は千歳のために出来ることなんて何もなくて……。

そして多分、本家が絶対的な権威を持つのは人魚の肉と同じ『当たり』の血の人間が産まれるからだろうと、混乱する頭の片隅でいやに冷静に考える自分がいた。

「わけわかんない……」

額に手を当て俯き、思わず口から零れた言葉に千歳は笑う。「だよな。神隠しに予知に人魚に不老長寿。普通驚くよな」「驚いたって言うか……」

顔を上げると千歳と田が合つた。今にも泣き出しそうに見えるその田と。

「……千歳は五百年くらい生きてきたんだよね?」

「うん。実はギネスに載れるくらいご長寿なんだよ、俺

戸籍はないけど、と言つて千歳はまた小さく笑みを零した。
「だからさ、もう俺自身が何かを犠牲にしてまで生きようなんて思わないんだ」

「え?」

千歳の陰るような笑顔が胸に刺さる。

「子供達は、里久が遺してくれた子達は俺を望んでくれた。その子供達もそのまた子供達も。望んでくれるなら俺は生きたいつて思う。けどそうでないならいつ死んだつていいと思うんだ」

「千歳……」

「結恵が『当たり』だつて広まれば、もう結恵は永遠にこの家から

逃げられなくなる。死ぬまで綾峰に縛られる事になる。それを嫌だと思つならそつ言つていいんだ。結恵は選べる。自分でこの家の

『当たり』になるかどうかを

それはこの家に縛られるか、それとも何事もなかつたかのように戸常に返るかを選べるといつ」と。

そこでふいに気付いた。

「おじいちゃんは選んだの？ 私と同じように当たりだつたおじいちゃんは……」

私と同じように当たりだつたという祖父。けどその祖父はかけおかして家を出て、死んでもこの家に帰る事はなかつた。

本当に『当たり』だつたのなら、千歳が言つ通りならそんなこと出来なかつただろうに。

「義将が当たりってのはけつこつ知られてた。あいつは生れた時からこの家にいたから。……だから選ばせた。この家に縛られるか、この家を捨てるか」

「どういう意味？」

千歳は目を閉じて笑つた。

「義将が好きな女ができたつて言つてきたんだ。それでその人と結婚したいって

「それって、私のおばあちゃん？」

「そう。けど当たりの人間は綾峰本家の中でも特に大事にされるから、一族の中から結婚相手を選ぶことになつてゐる。でもそれじゃあ義将は自分の好きな相手と一緒にになることもできない。だから選べつて言つた」

「それでおじいちゃんは選んだの？」 いの家を、千歳を捨てる道を

私の言葉に千歳は苦笑する。

「捨てたつて言つてやるなよ。俺はあいつの所有物じゃないんだからさ」

「！」、「めさん」

「別に謝らなくてもいいけど、うん、とにかくそういうことだな。あいつは結婚のばあちゃんと結婚するためにこの家を出た。当然色々うるさく言う連中はいたけど、あいつを追つたら俺が舌噛んで死ぬって大騒ぎして納まつた。不老って言つても死はないわけじゃないからな。ま、あの頃はまだ桂子も結婚してなかつたからそっちの子供に期待が持てるつて状況だったつてのもあるんだけど」「明るく言つけれど、実際はとんでもない騒ぎになつたんじゃないのか。

この家が今まで一度として没落して来なかつたのは千歳とその双子の兄が先を見てそれを予言してきたからで、もしそれがなくなるたらこの先の保証なんてなくなるのだから。

千歳の緩やかな寿命を待つか、それともその場で自害させるか。当時の綾峰の人々に大問題だつただろう。

……あれ。

「ここでようやく、つい忘れていたことがあつたことに気付いた。「ねえ、そう言えば草次郎つて人は？ 常磐つていう人はどうなつたの？ あの人だつて血を必要としてたんでしょう。おじいちゃんがこの家を捨てて逃げた時、その人は何も言わなかつたわけ？」

話を聞いていただけではとてもそうは思えないが。

けれどその言葉がきつかけになつて、次々と疑問が浮かぶ。

「そうだよ。常磐つて人だけじゃない。リクつて人。千歳と常磐を不老にした人は？ 本家に呪いをかけた人は……」

そこまで言つて思い至る。

「ごめん。話がぽんぽん飛んで悪いんだけど、先に言わなきゃいけないことがあつた」

顔を上げてまつすぐに千歳を見る。

「ん？」

「千歳は自分をこの家の呪いだつて言つたけど、違うよ。千歳は呪いなんかじゃない」

反論なんて許さない強い声で、一寸の迷いなくそう口にする。

だつて事実だ。千歳は呪いなんておどろおどろしいものじゃない。だから自分で自分を傷つけるように、そんなことを言わなくていいんだ。

「千歳は友達で、私の遠い『先祖の兄弟で、ちょっと長生きなだけで、寂しくて、ありえないくらいマイペースで、信じられないくらい優しくって……私の大事な、大好きな人だよ』

千歳から視線を逸らしそうになるのを、両手に力を入れて堪える。そうでもしないと逃げ出してしまいそうだから。

告白と言うには足りない言葉。

けど私にとつては告白にも相当する言葉。

出来るなら自分の中の誰にも侵されない場所で静かに眠らせておきたい気持ち。

自分にとつてもまだまだ曖昧な、千歳に対する『好き』って気持ち。

家族が好きって気持ち。

友達が好きって気持ち。

かわいい物や楽しい物が好きって気持ち。

……あるいは、これ以外の好きって気持ち。

千歳に対して抱く『好き』はこの中のどれだろう？

それともこれ以外の好きなんだろうか？

それはまだわからないけれど、確かに私は千歳が大事だということ。傷ついてほしくないということ。

そんな、自分が無価値みたいに思わないでほしいということ。

「千歳は他に代え難い、大事な人だよ」

千歳は黙つたまま大きく目を見張った。

「呪いなんかじゃない。具体的に呪いが何かなて知らないけど、多分人を不幸にするものでしょ？ だったら千歳は呪いなんかじゃない。絶対に」

千歳は理解不能な出来事が起こったかのような顔で私を見ていた。

「……千歳が人を不幸にするようなものなら、私のおじいちゃんは

この家を出れなかつた。おばあちゃんと結婚できなくて、お父さんも生まれなくて、つまりは私もここにいなかつた

「ああ、まあ……そつか」

千歳の曖昧な相槌に胸を張つて答える。

「そうだよ。千歳のおかげでおじいちゃんはおばあちゃんと結婚できた。私も……しんどいこともいっぱいあるけど、でも生まれてこれて良かつたつて思う。苦しい事も嫌な事もいっぱいある世界だけ、それ以上に嬉しい事も幸せな事もたくさんあるこの世界に生まれてこれで本当に良かつたつて、そう思う。それは全部、千歳のおかげだよ」

「そんな大袈裟な」

軽く笑う千歳の顔面に手近なクツショソを投げつけた。

「大袈裟なんかじやない！」

千歳はもろに顔面で受けたクツショソを拾い上げながら、呆けたように私を見てきた。

前にも確かこんな会話をしたな。

今さらになつて気づく。千歳は自身に対して過小評価だ。五百年も生きていれば達観したようになつても無理はないとは思つけれど、それにしたつて自分をそんなに卑下することないのに。

「千歳は自分のことどうでもいいみたく言つけど、私にとつてはどうでもよくないの！ 家族とか友達とか、大事な人間が自分をどうでもいいつて思つて嬉しい奴なんているもんか！ だからそんな風に言わないで！」

私には大事と思える人間なんて数少ないからこそ思つ。

呆けたような顔のまま、千歳の口が何か言おうと開きかけた時。

「結恵の言つとおりだ」

唐突に割り込んできたその声に、私と千歳は揃つて息が止まりかける。反射的に声のほうを見ると、少し離れた場所に無表情なのにどこから怒りを滲ませた鷹櫻が立つていた。

「鷹櫻！？ エ、何でここにいるの！？」

「どうから入ってきたんだよ……？ うわ。全然気付かなかつた」
鷹櫻は私と千歳の疑問には答えず、偉そうにやつてきて私の隣に
どつかりと腰を降ろした。そして腕を組んで、ビリの王様だといふ
くらい偉そうに言い放つた。

「普通にいつもの入口から」

「いつものつて……」

私が初めてここに来た時、鷹櫻と出て行つた隠し扉のほうを見る
がそこは壁と一体化して全くわからない。

一体いつ開いて、いつ鷹櫻はこの部屋に入つてきたのか。全く気
配がなかつたのだが。

千歳は呆れ半分驚き半分に鷹櫻を見た。

「今日は隠し扉だけでなく、本家屋敷全体の警備がいつもより厳し
いはずなんだけど?」

「知つてる」

ふんぞりかえつて鷹櫻は言つ。

「だからわざわざその警備を搔い潜つてきたんだろうが。警備に抜
け道ができる時間帯とか調べさせてだな」

「調べさせてつて……誰に?」

話についていけないながらも尋ねると、鷹櫻はしれつとした顔で
言った。

「あいつら」

「あいつら?」

その言い方は私も知つてゐる相手、といつことだらう。と言つと、

四葉達?

目を白黒させて鷹櫻を見ると、彼は黙つてゐるといつて元に
人差し指を当てる。
そして千歳に視線を向けた。

「さつき結恵の言つたとおりだからな。お前、もう少し自分のこと
大事にしろよ」

それは鷹櫻とは思えないほどに強い口調で。

いつもの淡々とした、抑揚少なで無表情な彼なんてビリにいつたのかといふくらい、強い意志を持つた声でそう言つ。

「お前はお前の事どうでもいいって思つてもな、俺らはそうじゃねえんだよ。お前がいなくなつたら俺はこれから誰に茶を淹れさせればいい？ 寝れない夜に誰のところに暇つぶしにくればいい？」早口にけつこう勝手な事をまくしたてる鷹櫻に啞然としてしまつ。鷹櫻つてこいつ勝手な奴だったのか……。

だけど鷹櫻も千歳が大事なんだつてことは伝わつてくる。大事に思つてるからこそ怒つている。

「家が居心地悪くてどうしようもない時ここに置いてくれたこと、俺は感謝してる。こんな呪われた家、大嫌いだけどお前のおかげで今日までやつて来れたんだからな。俺が珍しく他人に感謝なんてしてるんだ。素直に受け取つておけよ」

鷹櫻の言い方は一方的で、ともすれば傲慢もいいといひ方だ。

それでも鷹櫻なりに千歳に伝えようとしてる。

私達は千歳が大事で、大好きなんだつてこと。

千歳は呪いなんかじやないつてこと。

「お前らは……」

千歳は固まつていた相好を崩した。

そして両手を私と鷹櫻に伸ばってきて抱き寄せた。

「んつとにいい子に育つたよ。お前らは」

「ガキ扱いかよ。クソジジイ」

「子供扱いやめてよ」

私と鷹櫻の抗議もどこ吹く風。

千歳は私達を抱き寄せたまま俯いた。

「……お前らみたのにこいつして直で会えて、五百年生きてきて良かったたつて思うよ」

咳きにも似た言葉に、私と鷹櫻は顔を見合わせた。千歳には見えないよつに鷹櫻は小さく笑つた。つられるよつにして私も笑つた。

「だろ？ その上俺達は千歳が今思つてはいる以上にいい奴らだぜ？」

鷹櫻の自信に満ちた言葉に千歳は顔を上げた。

その顔と目が合うなり、鷹櫻ははつきりとした聲音で言い放つた。

「俺達がお前の呪いを解いてやる」

「……お前、何を？」

千歳の端麗な顔が驚き一色に染まる。

だが鷹櫻は一切動じない。

そしてそれは私もだ。

「私はまだ詳しい話は知らないけど、千歳はどう考へてもこの家の犠牲者じゃんか。だから、私達が千歳の呪いを解く。もう一度と自分なんかどうでもいいみたいな考へ持たせないから、覚悟しとけ」

「結恵まで」

鷹櫻は千歳の腕から離れ、ぐるりと部屋を見回した。

「俺がこの家の歴史を聞いた時は『あいつ』には会えなかつた。けど、この家のどこかにいるんだろ？」

「あいつ？」

鷹櫻は小さく頷く。

その目はまさに鷹のようすに鋭く千歳に向けられた。

「この家に呪いをかけた張本人、里玖」

「鷹櫻……リクは」

千歳の咎めるような聲音にも鷹櫻は怯まない。

「俺をなめるなよ、千歳。この家のあらゆる文書は全て田を通じてある。それこそ千歳が生まれた直後のものから近代のものまで」

千歳は黙つて鷹櫻の言葉の先を待つた。私もただその言葉が発せられるのを待つしかできない。

そして鷹櫻は口を開いた。

「千歳と常磐を不老にし、本家の血に呪いをかけた張本人、里玖はただの殺人者だ」

「……え」

鷹櫻はまっすぐに千歳を見据えていた。

千歳は目を伏せ、重い息を吐いた。

「千歳？ 何、どういうこと？ 殺人者って……鷹櫻も説明してよ」

千歳は目を伏せたまま私から手を離し、ソファに深く腰掛けた。

黒に呪み墮ちる

黙り込んだ千歳の代わりに鷹櫻が口を開いた。

「そのままの意味だ。この家の裏歴史みたいなもの……たとえば千歳達が不老を得た事とか、稀にあつたお家騒動みたいなもの。そういうのがごく一部の人間しか見れない記録として残ってるんだよ。どんなものでもこの家を作ってきた歴史には違いないからって。そういうのには全てが書かれていた」

更に鷹櫻は続けた。

「三年かかった。ただでさえガキの手の届くところなんかには置いてない文書だった上、古文書だ。更には暗号じみた部分もあった。けどそれを全て読んだ。読んで、知った」

鷹櫻の声が低く鋭く砾がれる。

「五百年前にこの家に雇われた呪術師、里玖について
千歳は顔を上げず黙つたままだった。

室内を支配する空気が重苦しい。

それから逃れたくて、私は鷹櫻の袖を引いて先を促した。

鷹櫻は一度頷きそして口にした。

「第三者目線の記録だった。そこに書かれていたのは、年老いない綾峰家お抱えの薬師、里玖がその薬によつて綾峰一族を助け、そして殺してきた記録」

その低い声に、最後の短い言葉に息を呑む。

声を出そうとする私を鷹櫻は目で制して続けた。

「里玖は確かにある意味では綾峰に忠実な奴だ。綾峰にとつて不必要な、あるいは不穏分子になりかねない人間を次々とその薬だの呪いだので殺して行つたんだからな」

「……お前の歳でそこまで調べた奴は初めてだよ」

千歳は俯いたまま深く息を吐いた。

「千歳は知つてたの？ 千歳が今まで生きてきたのは里久さんが遺

した子供達に望まれたから、子供達を守りたいって思つたからなん
でしょ？なのに何で黙つて……」

「……いつは意外に鈍いんだよ。妙なところで他人を信じすぎるのは
言い募る私を抑えるように鷹櫻は言つた。

「え？」

鷹櫻は千歳へ視線を向けて言つた。

「里玖つて女の本性に気づけなかつた。そうじゃねえの？」

千歳は答えない。

答えないとこ事がその問いに肯定している。

「でも、もう知つてるんだろ？ 里玖つて奴は、お前の……」

「鷹櫻……！」

その淡々とした声は千歳の怒声によつてかき消された。

今しがたの声がとても千歳から発せられたものとは思えなくて、
言葉を失う。それは私だけでなく鷹櫻もだ。

いつだつて温厚な千歳がこんな風に激昂するなんて、想像もつか
なかつた。

たつた今日前にしたといふのに、それすら幻だったのではないか
とすら思つてしまつ。

「……悪い」

千歳は肩で息を整えながら、ソファに座り直した。

鷹櫻はそれを見てから小さく言つた。

「俺も……悪かった」

鷹櫻の謝罪に千歳は首を振つた。

「いや。お前の言つとおりだから。本当の事だつてわかつてゐるから
自分を抑えられなかつた。……全く。いい年して俺もガキかつての」

乾いた笑い声をあげてから千歳は私を見た。

今にも崩れてしまいそうなその表情が痛々しくて、観ていら
らのほうが泣きたくなつた。

「結婚に至つては何が何だかわかんないよな？ 悪かつた」

「……ううん」

「千歳」

鷹榎の静かな呼びかけに千歳はそちらに視線を向けた。

「言葉にしたくないなら俺が言つ。千歳には悪いと思うけど、でもこのまま結恵をあいつに会わせる気はねえ。結恵自身が何と言おうと、全部教えてからじゃなきゃ行かせない。結恵はもう俺にひとつも『身内』だ」

淡々としているのに強い声音。

その強い目と口調を見定めるようにしてから千歳は眉根を寄せ、重たい口を開いた。

「……リクは、俺の妻の里久を殺したんだ。今となつては証拠はないけど」

「え」

「あの当時の綾峰一族の命はリクが握っていたと言つてもいい。ちよつとした不調や怪我にも腕のいい薬師だつたりクが全て任されていたから。……そんなだったから」

「毎日ちよつとした不調の薬の代わりに緩やかに至らしめる毒を混ぜる事くらい、造作もない」

辛そうな千歳の言葉を引き継ぐように、鷹榎が言った。

「つそ」

思わずそんな言葉が口から転げ落ちる。

「だつて千歳、幸せだつたつて……三人で」

たつた今、三人で幸せに過ごしてたつて聞いたばかりなのに。そんなことつて……。

だけど千歳は唇を噛みしめ、俯いてしまった。膝の上で組んだ手が微かに震えている。

それが全て真実なんだと教えてくれる。

「何で、何でリクが……千歳の奥さんを……？」

私は顔を上げて鷹榎を見た。

「何で、千歳の口からこんなこと言わせるの？」「こんなの……」

「人の口から言われるほうが嫌なことだつてある」

鷹櫻はまっすぐに私の目を見て言った。

あまりにまっすぐに見つめられるものだから私のほうが悪いような気がすらしてきて、つい田を背けてしまつ。

「でも……でも、何で今言う必要があったのー?」「どうしても話さなきゃいけないことなら、千歳のいないところで教えてくれればよかつたのに。」

それでも千歳が話さなきゃいけないことなら、せめて前もつて話してくれつて言つておけばよかつたのに。

鷹櫻が言つたようにどんなに辛い事でも他人の口から話されたくない気持ちも分かる。

鷹櫻だつて千歳を気遣つて分かつてる。

でも私は……千歳にこんな辛い顔してほしくない。

「結恵。鷹櫻を責めてやるな」

氣付けば千歳は疲れた顔で微かに笑つていた。

「千歳……」

「そいつもお前の『』とを思つてやつてるんだから」「え

鷹櫻を見ると、今度は鷹櫻が田を逸らした。

千歳は小さく笑つてからその表情から笑みを消し、まっすぐに私を見据えた。

「結恵がもし、自分を『当たり』だと言つなら、結恵はこれからクのもとへ行くことになるから」

「……いるの? リクが」

田を見開いて千歳を凝視してしまつ。

千歳は無言で頷いた。

「一応これも代々の慣例なんだ。『当たり』はリクの元へ挨拶に行く。リクは綾峰に多大な恩恵をもたらした人間として、生き神のように扱われているから」

「生き神……」

その言葉をいつか聞いた。

そう、律の怪談だ。

半魚になつた綾峰の祖先。

実際は祖先ではなく、その祖先に仕えた人間だったわけだが。

「けど」

千歳は言つた。

「当たりはずれを見極めることは他人には出来ない。その血を口にするまでは。だから基本的には自己申告になるんだ。つまり、結恵が『当たり』だと言うなら結恵は当たりの子。外れだと言うのなら、外れになる」

「……選べってそういうこと?」

震えるよつに発せられた言葉に千歳は一度だけ頷いた。
脳裏を以前聞いた言葉が過る。

逃亡者の血。

以前、三ノ峰だという大人は祖父を『逃亡者』と呼んだ。
祖父はこの家に縛られることよりも祖母と生きることを選んだ。
それがこの家の絶対を搖るがすことになるとしても、この家を出た。本人が逃げたつもりはなくともこの家からすれば立派な逃亡だつただろう。

祖父は私とは違つて『当たり』だと多くの人間に知られていたといつのだから。

「……私はまだ、逃げられる。

この家から。

血の呪いから。

私はまだ、正々堂々とこの家から出ることが出来る。

そう思いながらきつく手を閉じ、両手を握りしめた。

逃げることは悪い事じやない。時には必要な選択。

どんなに悔しくて不本意で、他人に後ろ指さされることがあらつとも。

責任を捨て去り逃げる」と。無謀を知りながら敢えて逃げないと。

前者は自身の矜持への裏切り。
後者は自身を軽んじる行為。

時として選択は非情な物だ。以前、祖父にそう言われた。
選ぶことは同時に何かを捨てるという事でもある。だからこそ自分
の信念を持て。捨てた痛みを引きずることがあっても、その選択
を後悔することのないように確かな意志を持ちなさい。自分の決め
た事は、最後まで貫き通しなさい。自分の選択に、生き方に誇りを
持ちなさい。

優しい手はそう言つて私を撫でてくれた。

強く優しい人だった祖父。

あの人ならどうするだろう？

優しくて、怒ると怖くて、頭がよくて、時々大人げなかつた自慢
の祖父は。

……ああ、きっとこう言つ。

私の言うかもしれないことを想像している暇があつたら自分
のすべきことを考えなさい。私と結恵は別の人間なのだから、いつ
までも私のことばかり気にして自分を疎かにするんじゃない。
そんな風に怒られる想像がリアルに出来てしまい、つい身が竦む。
いつだって確固たる自分を持つおじいちゃんに強く憧れていた。
憧れて、あになりたいと思つていた。

だからおじいちゃんの行動をなぞろうと努力した。

けどそれでは結局、私の憧れのおじいちゃんの行動から外れて行
つているのだから笑い話だ。私は他人の行動の猿真似しかできない
自分になりたいわけじゃないのだから。

私はゆっくりと瞼を持ち上げ、千歳を見据えた。

「決めたよ」

千歳と鷹櫻の視線が向けられた。

ひと呼吸して、私は私の選択を口にする。

「私は『当たり』だ」

千歳の目が大きく見開かれ、鷹櫻は全くと言つていいくほど反応が

ない。

そんな対照的な二人の反応を見ながらひとつひとつ、私の思いを言葉にして行く。

「私は綾峰を利用するつもりでここに来た。この家の地位と権力を以て、私が私でいるために。ここに縛られようが何だろうが、私の当初の目的は果たす。むしろ、それだけ深く綾峰に関係すれば私の地位は絶対安泰でしょ！ そういうわけで、私は『当たり』！ さあ敬え！」

そう言い放ち、呆然と私を見やる一人に胸を逸らす。

言葉がないとはまさにこのことか。千歳は軽く口を開けてそれこそいつかの私のように瞳孔が開きっぱなしになりそうだ。

鷹櫻は軽く眉を顰め、無表情に近い顔に軽く困惑の色を滲ませている。

私はその空気に耐えきれず、軽く一人を睨んだ。

「……何さ」

「…………お前、バカだよな」

そう言つたのは鷹櫻。

眉を顰めたまま、まっすぐに私を見てくる。

「バカじやないつつの」

「バカだろ？ いや、変人か」

鷹櫻は意地悪げに半眼になつて薄い唇を吊り上げた。

そう言えば言われた。この家の全てを聞いて、それでもこの家に残りたいと思うことが変人のようなことを。

滅多に表情を変えない鷹櫻の希少な笑顔に、私は挑むように噛みつくように言つ。

「変人上等。変人くらいのほうが大成するんだよ」

「まあ歴史を見てもだいたいそうだな。常識に捕らわれる人間はある程度までしか行けない。本当に上に行くなら型破りが過ぎるくらいのほうがいいだろ」

「そーいうこと！」

「……お前らは」

千歳が心底うんざりしたように額に手を当てて、低く呟いた。

「平穀無事に人生送つてほしいって親心を少しは察しきよ」

その言葉に私と鷹槻は顔を見合わせる。

「親心つて、何か千歳、急に老けこんだね」

「ひいひいひい……とにかく、大昔のじいさんだり？」

「あーそうはつきりじいさんとか言われると腹立つけどな、この際それは置いておこう。今はそれよりも結婚だ。短慮もほどほどにしておけよ?」

「短慮つて失礼な。私だってちゃんと物を考えています！ 考えに考え抜いて、それでちゃんと答えたのに何て失礼な言い草。頭から決めてかかる嫌な大人みたいなこと言わないでよ」

「ちゃんと考えた人間がこの家にわざわざ……」

「ここで全部忘れてこの家を出たら、私は一生後悔する

千歳の言葉を遮るように言い放つ。

「自分が選んだことを後悔なんでしたくない。痛みが残つて結果辛い事があつたとしても、自分の選択を失敗だつたと思うような生き方したくない。どんな結果になつたとしても、胸を張つて私はその時最善のことをしたつて言える生き方をしたい」

そんなこと、土台無理な話なのかもしれないけれど。自分自身に後悔せずに生きて行くなんて理想論でしかないのかもしれないけれど。

「でもそう思うんだ。

「今ここで何もなかつたことにしてこの家を出て行つたら、私は絶対後悔する！ まだこの家に来て日は浅いけど、おばあ様や千歳や鷹槻や皆が大事だつて思うんだよ。大事な人達放つて、自分ひとりが何事もなかつたフリして生きて行くなんてそんなの絶対嫌だ！」

千歳は渋い顔で私を見た。

「それでも……」

「俺達の意見を最大限に尊重してくれるんだろ？ 遠いご先祖の千

歳サマは

鷹櫻の堂々たる声が、千歳の言葉を遮った。

「義将じいさんがこの家を出た時も、お前の子供達が血を口にして永遠に生きるつて言った時だつてお前は止めなかつたんだろ？ 本人達の意見尊重つてことで。なのに何で結恵の意見は聞き入れてやんねえんだよ」

「……鷹櫻」

千歳が何か言おうとするが、鷹櫻は構わずに続けた。

「お前の個人の意見大事にするとは好きだよ。感謝もしてる。……でもだつたら、千歳も千歳のことを大事にしろよ。子孫が大事だつて言い訳にして、今のお前は自分の思いを隠してただけだろ！？」

怒鳴るような鷹櫻の言葉に、千歳の瞳から色味が失せる。

「五百年も血が繋がつてゐるつて理由だけで他人に生き方決められてんじやねえよ！ お前にだつて生きてるからには自分で考えて自分で生きる権利があるんだからな！」

鷹櫻がこんなにも感情的に怒つて、饒舌で。

千歳がこんなにも人間的でただの人を見る。

それはとても不思議な気分だった。

私が見てきた千歳はどこか浮世離れした不思議で掴みどころのない、人離れした人で。

鷹櫻は感情なんてないように無表情で言葉少なで、喋つても何を考えているのかなんてさっぱりわからなくて。

言葉も出づにそんな二人を見上げていると、千歳が深い溜め息と共に口を開いた。

「……俺にそんな口きいた奴は初めてだ」

「五百年間誰も言わなかつたつてことが不思議なくらいだ。……千歳。お前はこの家にとつちや呪いだけど、でもその呪いはいつだつてお前が望めば解けるはずだつた」

「そうだな。うん、そうだ」

千歳はひとりじりのようにつて言った。

「この家の呪いがいつまでも続いたのは鷹櫻の言う通り、俺の責任が大きい。俺が不老長寿を拒めば、人間として生きていればこの家はこんなにも歪む事はなかつたんだろうな」

ぱつりぱつりと一言一言を紡いでいく。

その姿に酷く胸が締め付けられる。

千歳ひとりが重い重い責任を負つてゐるようで、今まで生きてきた千歳を彼自身が否定しているようだ。

千歳と鷹櫻の言葉は正しいのかもしない。

けど正しいことが必ずしも良いことではない。その見極めはとても難しいことだけれど、少なくとも今までの自分を否定する千歳を見ることは辛い。

鷹櫻だって千歳を大事だと言つたのに。なのに何でそんなことを言つんだと声を上げようとした時、鷹櫻は言つた。

「じゃあ今から呪い解きに行こうぜ」

その言葉に千歳は目を丸くして鷹櫻を見上げた。

そんな千歳を見下ろしながら鷹櫻は強い調子で言つた。

「言つたら？　俺達がお前の忌々しいことこの上ない呪いを解いてやるつて。な？　結婚」

突然話を振られ、一瞬硬直する。

だがすぐに大きく首を縦に振つた。

「呪われた家なんて今時流行んない。そんな家で私の野望を果たせるもんか。つてわけで、解く！」

半ば自分に言い聞かせるようにそう言つた。

本当にそんなことが出来るのだろうか、と虚勢を張つた胸の内で思いながら。

五百年もの間、続いてきた人智を超えた非現実的な存在。その中心であるうりくに対する得体のしれない恐怖を感じながら。

室内を沈黙が重く覆う。

鷹櫻は強い目線で千歳を見下ろし、千歳は唇を噛みしめ俯いている。

そして私はそんな一人の動向を見つめるしかできない。

やがて、千歳は私へとそのアーモンド形の目を向けてきた。今までにない、畏怖すら抱かせるほどに強く真摯な瞳を。

「もう、後戻りはできないからな」

低く発せられた声に、一瞬躊躇いそうになる自分を抑え込んで強く頷く。

「わかつてる」

そう答えた私の反応を探るように千歳は私を見ていたが、じぶらしくして以前鷹榎が使っていた隠し扉である壁の前まで歩いて行った。壁に手をついてから千歳は顔だけで振り返った。

「ついて來い。これからお前をリクの元へ案内する」

歪んだ場所

感情の欠けた事務的な声がそう告げた。

「ここで本来一番偉いはずの千歳が案内役だなんて、そのリクつて人は随分お偉いんだね。雇われの身じゃなかつたっけ？」

先程のリクの話に対する反発心からつい皮肉めいた物言いをすると、千歳は静かに言った。

「俺は予知し予言する者。リクはその俺を永遠に綾峰に留め置く者。……俺達は一人揃う事で生き神のように扱われ、この本家の庇護の元で生きてきた」

だから俺達を置き、血を与える本家は綾峰の中で最高権力を握る。そう付け足して千歳は壁を押した。

軽やかに壁は回り、室内と石造りの廊下を繋げた。
「まだこの屋敷には隠し部屋があるのか？」

訝しげにそう訊ねたのは鷹榎だ。

「本家屋敷のだいたいの隠し扉、隠し部屋については把握していたつもりだったんだけどな」

「歴代当主と当たりの血。それに一ノ峰から五ノ峰の戸主だけが知らされる、この屋敷一番の秘密だからな」

千歳は言つて鷹榎を振り仰いだ。

「お前はここまでだ。鷹榎」

「『当たり』じゃない俺はリクに会う資格がないってことかよ？」「千歳はそれを無言と言つ形で肯定する。

鷹榎は小さく舌打ちして苛立ちを隠すことなく顔を歪めた。

「これから呪いを解くつってんだろ？ その呪いの元凶とその周りの連中が定めた決めごとなんて知つたことかよ」

「そうだな」

刺々しい鷹榎の言葉にも千歳は軽い調子で肯定した。

その顔には出会つたばかりの頃のような、綺麗だけれど食えない

笑み。

「『『』』」『』はこの家に約束された永遠を生きる奴だけが従わなければならぬルール。つまり逆に言つなら

「それに従わないならそのルールに従う必要はないってことか」

鷹櫻の言葉に千歳は満足そうに唇を歪めた。

そんなやり取りを見ていて、どこか安心している自分がいた。

今日ここに来て、この家の歴史を話し出した時から千歳の表情は私が知るものと違つた。どこか陰が潜んでいて、笑つた時ですらそれは辛そうな印象を与えた。

それがさつきの鷹櫻の啖呵を聞いてからいつもの千歳のペースに戻ってきた。

私や鷹櫻を子供扱いし、十のつか三くらいしか敢えて言葉にせず、その反応を楽しむようどこか意地の悪さを發揮して。

……これでこそ、千歳だ。

そう思つと何だか嬉しくなつてきて、この先何があつても大丈夫だなんて思つてくるからおかしい。

千歳は千歳で、鷹櫻は意外とキレやすいけど頭がよくて行動力がある。

頼もしい限りの一人がいれば、私にも無茶が通せるような気がしてくる。不思議な高揚感と共に、力が湧いてくる。

「千歳、何でもいいから早く案内！」

「何だ？ 急に元気に」

千歳が不思議そうに首を傾げる。

「て言つたか、何でもいいって何だ。何でもいいって

鷹櫻が不満そうに口にするがかまわない。どうせ私が何を言わなくたつて、鷹櫻は自分でどうこうする力を持っている。

「ま、いいや。……じゃあ、行くか」

そして石造りの廊下へと一步踏み出した。

にっこり笑つた千歳の顔が一瞬だけ陰つて見えたのは気のせいじゃないとと思う。すぐにまた笑顔を張り付けたけれど、千歳にとつてリ

クという人は複雑な存在なのだろう。

ひと口で彼女に抱く感情を現すなんて到底無理だろうと、千歳自身の口から聞いた言葉、鷹櫻との会話を思い出しながら考える。

五百年。

言葉にするのは簡単だけれど、途方もなく長い時間だ。

私には想像もつかないような気が遠くなるような長い時間を、千歳は何を思つて生きてきたんだろう。

リクという人の裏切りとも言える行為に気がついてから、どうせつて生きてきたんだろう。

薄暗い廊下を歩み出した千歳の背を負いながら、そんなことを思う。そのまま後ろから鷹櫻もついてくる。

黙つて一列になつて、私達は前へと足を進めた。

初めて千歳に出会つた時に一度だけ通つたこの隠し廊下。だからつい覚えではあるが、多少ここが丁度中間点といったところだろう。

そこで千歳は歩みを止めて足下のランプのひとつに手を伸ばした。その灯りが消えると、どこからか重い音がする。

「な、何？」

「隠し扉だろ」

全く動じずに鷹櫻が答える。

そう言えば彼はこの屋敷の隠し通路やら何やらまだいたい把握しているというようなことを言つていた。

「鷹櫻はここ……」

「知らなかつた」

「だよね」

知つていたらこんな回りくどいことをせずとも、もつと早くにリスクの元へ辿り着いていただろう。

そんな私達は気にも留めず、千歳は消えたランプの上方の壁を押した。それと共に千歳の部屋にあるあの隠し扉と同じよつて壁が回転し、壁の向こうに更に続いていた通路を暴き出した。

「また廊下？」

千歳の視線の先には人ひとりが通るのがやつとの、灯り一つない暗闇に覆われた通路。

今いる廊下の微かな光に照らされて、何とかそこがまっすぐな通路になつているのが見えるが、ほんの少し先は真っ暗で何も見えない。

「そんなに歩かないわ」

そう言つて千歳が先に進むと、それに反応するかのように足元から小さく灯りが灯つて行く。

「うわ」

「熱感知センサー式の灯りが足元を照らすようになつてるから、人が通る時だけ灯りが点くんだ」

「レトロな洋館が売りだと思つてたのに、妙なところハイテク……」

「レトロなのは外観と人間だけだ」

私の呟きに鷹櫻が皮肉っぽく言つ。

「どういふこと?」

背後を振り仰ぐと、鷹櫻は隠し扉を閉めながら答えた。

「この屋敷の扉は指紋と虹彩センサー式。この屋敷の庭も実は相当の防犯カメラやなんかに囲まれてる」

言われてみれば大富豪の居住地。それくらいの設備があつてもおかしくはない。外界と隔絶されたような異様な空間について防犯なんていう概念を失念していたが。

「あれ。じゃあ鷹櫻つてこの間とか今日とか、千歳のところまで来るの大変だつたんじやないの? この間の話を聞いてた限りじゃ割としそつちゅう隠し通路から来てるみたいなのに」

「あー見逃されてたんだろうな。ガキの頃は俺も監視カメラとかそこまで気にしてなかつたし、どつかしらで本家のセキュリティに引つかつてもおかしくない。けど今までお咎めがなかつたつてのは、やっぱりお前が口添えしてくれてたつてことだろ? 千歳」

「さあ? どうだろなー」

前を向いたままなのでその表情は読み取れない。けれどその口調はどこか楽しげで、鷹櫻の言葉は事実なのだとわかる。

それからまた黙つて私達は千歳の後に従つた。三つの足音が廊下に響き、それに反応するように前方に明かりが灯つて行く。やがて遠目に扉らしいものがうつすらと見えてきた。

……あの向こうにいるのか。

今千歳は、鷹櫻はどんな表情をしているのだ？

それでも足だけは前へと進んでいく。

この家に……千歳に呪いをかけた人物へと一歩一歩、近づいて行く。

そして扉の前まで来て、千歳は立ち止まって振り返つた。その顔に表情らしい表情はない。

「この先にリクがいる」

「……うん」

「リクに『当たり』だと告げたらもう戻れない」

「わかつてゐるよ」

千歳は観念したように息を吐いた。

「わかつた。この強情娘。……で、そこの反逆者まがいはどうある

？」

千歳の視線が私を通り越して背後の鷹櫻に向けられた。
「決まつてるだろ。わざわざ聞くなよ、過保護

「顔を見ずとも分かる。

この偉そうな口ぶりから、またあの偉そうな顔をしているんだどうと容易に想像がつく。

「あーわかつた、まったく可愛くないよなー」

そう言って千歳はくるりと背を向け、千歳の部屋のものとほとんどデザインの変わらない扉に手をかけた。扉は錆びたような、少し重い音を立てて開いていく。

中は薄暗いが、広い洋間だと一目で分かる。ルームランプのようないい匂いが、室内に灯っていて、部屋の中央に大きなベッド

が置かれている。天蓋つきの、まるで眠り姫が眠っているかのようなベッド。

心臓の音が主張し始める。

一步一歩、広い室内を千歳の後を追つて進む。

部屋の中央へ。

白い霧のようなレースがヴォールのようにベッドを覆ついて中の様子はよく見えない。ただぼんやりと、眠つてゐるような影が見えた。

今更だが、女性の部屋に声もかけずに無断で入つていいもののか。だがベッド上にいるらしい部屋の主が何も言わないからいいのか？

そう言えば勝手に室内にドカドカ踏み込んだというのに、何も言われない。眠つてゐるらしい影を見ても、微動だにしない。よほどよく眠つてゐるのか。

「リク」

千歳がその名を呼んだ。

そしてレースを退けて、ベッドの上の人物を覗き込む。

私と鷹櫻も千歳の後ろからその姿をそつと覗いた。

そこには墨のような黒い艶やかな髪が白いシーツの上に広がり、
白い単衣ひとえを着た、私とそう年の変わらない少女が固く瞼を閉じていた。

その右目から頬にかけては包帯で覆われているが、磁器のような白い肌と左目の長く濃い睫毛、小さな赤い唇はまるで極上の日本人形のようだった。

これが、リク。この家に呪いをかけた……。

だが今日の前にいるリクはぴくりとも動かず、寝息すら感じられない、それこそ本当の人形のようだ。

困惑混じりに千歳を見ると、千歳はリクにかけられた布団をまくりあげた。

「千歳？」

何を、と聞く間もなく千歳は躊躇いなくリクの単衣の襟を開いた。

「ちよつ、千歳！？」

実年齢は五百歳近くても、一応相手は女だ。同じ女として千歳の暴挙は見逃せない。そう思つて千歳の手を取ろうとしたが視界に入ってきたモノがその意識を奪つ。

「……何、これ？」

リクの白い素肌は左胸を中心に、墨で読めない文字のよつなものがぎつしりと書かれた包帯で巻かれている。

千歳はそれらをゆっくりと解きながら答えた。

「今、リクは生きてない」

「え？」

鷹櫻と揃つて声を上げた。

千歳はそれでもリクから目を逸らさず、しゅるりしゅるりと音を立ててどこか異様な包帯を解いて行く。

「この文字の書かれた布。これはリクの作った呪術らしくて、これが巻かれている間は仮死状態になるんだってさ」

「仮死状態？」

「そ。リクは『当たり』の人間との対面の時や当主や名家の主が挨拶に来る時にだけ目覚める。普段はこつして眠つて……いや、死んでるんだ」

道理で生きている気配がしないわけだと思ったと同時、何でそんな面倒をと思う。リクは千歳と常磐と同じく不老長寿なのに、と。

鷹櫻と目線を交わし合つと、千歳はその気配を感じ取つたように言った。

「俺達の呪いは不死じゃないから。今だつて俺は殺せば死ぬ。それに常磐のことで話したよな？ この呪いは放つておけば解けて普通の人間に戻れる。老化し始めていはずれは朽ちる。リクや綾峰の一族はそれを避けたいんだ」

「仮死状態の間に呪いが解けることはないの？」

「リクの話では生きている人間に有効なのが呪いなんだそうだ。だ

から最低限しかリクはこの世を生きない。綾峰の有事の時だと、『当たり』の人間の挨拶の時とか。……少しでも呪いが解ける日を遅らせるために

低く千歳は呴いた。

その言葉に疑問を覚えると同時に、鷹櫻がそれに疑問に対する解答となる声を上げた。

「その女は綾峰の血族じゃないから、『当たり』の人間の血が人魚の肉と同じ作用は働くのか？」

「そういうことだ。リクには人魚の肉に相当するものがない」

千歳は答えながらも包帯を巻き取っていく。

床に落ちた包帯には墨で模様のようにも見える文字が書かれ、どこか不気味で異様だ。

「なるほど。そうやってこの女は守らてきたってわけか……大層な身分だな」

苦々しげに鷹櫻は呴いた。

千歳は何も言わず黙々と包帯を解いていく。少しずつリクの白い肌と痩せた体が露わになっていく。

随分と細い。

鎖骨はくつきりと浮かび、腕など枝のようだ。軽々しく手を触れたら折れてしまいそうなくらいに。

そんなことを考えているとふいに千歳が口を開いた。

「この包帯が全部解けたらリクが目覚める」

その言葉に、弾かれたように私と鷹櫻はリクの体に残った包帯を見やる。もうその細く白い体を覆う包帯はほとんど残っていない。対峙の時は近い。

この部屋に入る直前の緊張が蘇ってきた。

これからどうする。

そればかりが頭を巡り、却つて焦るばかりで答えなど出るわけもない。

そして千歳は再びその名を口にした。

「リク」

私達は動きを止めてリクを見た。

包帯は全て床に落ち、単衣の襟元は千歳によつて正されている。隠されていない長い睫毛が微かに震えるのを見て、無意識に私達は身構えた。

ゆつくりとその瞼が開かれる。闇色の大きな瞳はまつすぐに千歳を捕らえ、小さな赤い唇が開かれる。

「千歳様」

硝子のように透き通つた声。衣擦れの音と共にリクは身を起こし、花のような笑みを浮かべてその手を千歳へと伸ばす。その長い黒髪が滝のようにベッドから零れる。

「千歳様。千歳様」

宝物のように、何度も千歳の名前を呼ぶ姿はただただ純粋無垢な少女のようで、とても彼女がこの家に呪いをかけ、まして里久を殺したなんて考えられない。

隣に立ち尽くす鷹櫻からも困惑が伝わってくる。

この場で唯一、リクに身を寄せられた千歳だけが異様なほどに平靜だった。

「……リク。今日は連れてきた」

リクは大きな目を瞬かせ、千歳から私達へと視線を向けた。大きな漆黒の瞳とまっすぐに私へと向けられてきた。

何故だろう。

とても綺麗なのにその瞬間、全身に何とも言えない悪寒が走った。隠された右半分など気にならないくらい、リクの顔立ちは可憐に整っている。

白い肌と、漆黒の瞳と髪。そして緋色の唇。

その時初めて、私は自分が震えていることに気が付いた。ああ、私は目の前の彼女に恐怖しているのだとようやく悟つた。

リクはにっこりと赤い唇で笑みを作つた。

綺麗なのになぜ彼女の笑みはこうも怖いと思えてしまうのだろう。

そんな心情を顔に出さないよう必死に体を抑え込んでいると、透き通った声が告げた。

「はじめて。貴女は千歳様のために選ばれた子。誇りなさい。千歳様のために生き、そして死ねる事を」

何故だろう。

怖い。

得体の知れない不気味さが。

リクの微笑みと言葉を前に、もう全身の震えも恐怖も隠すことは出来なかつた。

最後の意地で、睨みつけることしかできないなんてまるでケンカで負けた子供だ。それでも何か言葉をと思った時だつた。

「随分偉そうだな。陰湿な呪い女風情が神にでもなつたつもりか?」私のすぐ隣に立つ鷹槻が腕を組み、厳しい表情でリクを睨みつけていた。

ふとりクの大きな黒目がちの瞳がゆっくりと鷹槻へと向けられ、そしてまた千歳へと戻された。

「千歳様。当たりの子が一人生まれたのですか?」

愛らしく首を傾げ、リクは問つ。

だが千歳の真一文字に口を引き結んだまま答えず、代わりに鷹槻の絶対零度の響きを持つた声が告げる。

「俺は当たりじゃない」

「……当たりではないの?」

本来この家のルールでは、鷹槻にリクと対面できる資格はない。それを破つたことを明言したにも等しい鷹槻に、リクは一体どんな反応をするのかと心臓が縮む思いで事の成行きを見守つていると、彼女は軽く目を伏せてから鷹槻を見上げた。

そしてゆつくりと言つた。

「では何故貴方はここにいるの? 当たりの子でないのなら、貴方は千歳様のお役には立てない。ただ緩慢な人としての時を生きて死になさい」

当たり前のようにリクは人の生き死にを命ずる。

鷹櫻ではないがその傲慢ぶりにいい加減腹が立ってきた。そしてそれが恐怖を抑え込む。

「……あんた一体何様のつもり！？」

つい感情のままに怒鳴りつけると、他の三人の目が一斉に私に向かれた。

しまった、と思ははするがもう後には引けない。

「何が生きて死ねよ。私も鷹櫻も、あんたなんかに命令されて生き死に決めるほど安上がりな人間じやない。あなたの言動は言うならば人権侵害よ」

リクは大きな目を一層大きく見開いたかと思えば、不快げに眉を顰めた。

「貴女たちは千歳様のためだけに生まれてきたの。確かに貴女たちの生死を決める権利は私にはないわ。だってこの綾峰という家は全て、千歳様のためにあるのだから」

「全部を千歳に押しつけないでよ！ それはあんたの傲慢でしかない。あんた、千歳の意見とか聞いたことあるの？」

「聞かなくても分かるわ」

緋色の唇から発せられたのは、昏い昏い響きを孕んだ声。
冷たいものが背筋を這うような感覚がした。

真つ黒な瞳が深い深い底のない闇のように思えた。

「私には千歳様の全てが分かる。私は千歳様のためだけに生きているのだから」

闇そのもののような瞳が、今は奇怪にしか感じられない鮮やかな緋色の唇が千歳に向けて笑みを作る。

「……リク」

千歳は眉根を寄せ、きつく両手を握り締めた。

リクは笑う。

「私はいつだつて千歳様だけのことを想つております。ですから千歳様は何を憂う事もありません」
くすくすくす。

鈴を転がすような笑い声が室内に響く。

リクの目は千歳だけしか見ていない。少なくとも、リク本人はそう思っている。

だけど第三者の私や鷹櫻。そして当の千歳もリクが本当は何も見ていないことに嫌でも気付かれる。

リクは正気じやない。

彼女に感じる異様な恐怖。それはリクの内にある狂氣へのものだつた。

「……草次郎、いや常磐は」

鷹櫻は低く呟いた。

「常磐はどうした？」

鷹櫻の鋭い視線を受け、リクは首を傾げた。

「何故、そんなことを聞くの？」

「その言い方じや、まるで聞かれたら困るみたいに聞こえるな」「困らないわ。困らないけれど何故貴方が常磐を気にかけるの？ 貴方は綾峰の人間でしきょう？」

何か、変だ。

全身から嫌な汗が吹き出す。

「貴方は、千歳様のことだけを考えればいいの。常磐のことなど考えなくていいの」

「……お前に指図される覚えはねえ。答える」

その低い声にこちらの身が竦む。

「鷹櫻。常磐は……」

言いかけた千歳を鷹櫻が制する。

「千歳は黙つてろよ。俺はその女に聞いてるんだ」

「貴方、千歳様に向かつてなんて口の聞き方をするの？」

僅かにリクの声に怒りが滲む。

「躾が足りないわ。きちんと躾け直すよつとさせなくては……」

「俺の質問に先に答える」

ひしゃりと鷹櫻は言い放つ。

「常磐はどうした？」

リクは感情の起伏を一切なくした声で答えた。

「死んだわ」

綾峰本家が呪いを受けたのは、常磐を永遠に生かす人魚の肉の代わりとなるため。

常磐を生かすことによって常に先を見て綾峰家を守り、永遠に繁栄させるため。

なのにその常磐はもういない？

何故？

そう思つたのは一瞬。

鷹櫻とリクの会話で、薄々気付いていた。鷹櫻も察してはいただろ。それを敢えてリクから答えを引きずりだした。でも何のために……？

「常磐もお前が殺したのか？」

思わずリクから視線を外し、鷹櫻を見上げた。

鷹櫻はリクだけをまっすぐに睨み据えている。

「常磐についてこの家の一部の人間しか見ることができない記録にあつた。三百年前、常磐は死んだ。女癖、酒癖の悪かつた常磐は妾の一人に殺されたってな」

「殺され……？」

綾峰の生き神。

先見をする予言の子。

綾峰の宝。

その最期がそれ？

「……この家の記録は全部見たつて言つたら」

鷹櫻は私を見ずに小さく言つた。

「け、けど……！」

千歳達は不死ではない。それはさつきも言つていた。

だがその存在を何より珍重された常磐がそんな最期を遂げるなんてことがあるのか？

そんな私の困惑を読み取つたように、鷹櫻は言つた。

「お前がそう仕向けたんだ。妾を焚きつけて」

その言葉は刃のようにリクへと向けられた。

リクは無表情に鷹櫻を見ていた。

「それが何か問題なの？」

「悪びれないと言うレベルじゃない。心からの疑問とでも言ひよう
に、リクは尋ねてきた。

「だつていらないでしよう？ 綾峰には千歳様がいるのだから。常
磐なんていらない。だから死んでいいの」

ああ、もう本当に狂つてる。

千歳の握りしめられた両手は細かく震えていて、伏せられた顔は
髪に隠されて窺うことはできない。

リクはそんな千歳を心配そうに見上げた。

「千歳様？ どうなさつたの？ お体の具合でも悪いのですか？」

細い手がそつと伸ばされる。だがその手は、当の千歳によつて乾
いた音をたてて払われた。

千歳は自分の行動が信じられないかのようだつたが、一瞬泣きそ
うな顔をしたかと思うとそのまま俯いた。

リクは払われた手を見やつて、また千歳を見上げた。

「千歳様？ どうなさつたの？ 千歳様」

無垢。

リクを例えるならきっとそれ。

けれど色に例えるなら純白じゃない。

純黒。^{じゅんこく}全ての色を吸收してしまつ、実際にはありえない形^{けい}^{じょう}而上^{じょうじょう}の
黒色だ。

あり得ないほどに深くじこまでも純粹な黒。まるでリクそのもの
のよつた。

「……本来綾峰に必要とされたのは双子の兄の常磐のほうじやなか
つたのか？」

鷹櫻の問いかけにリクはこの世の道理を述べるよつに毅然と言つ

放つた。

「綾峰は愚かな家」

黒の瞳は千歳だけを見上げたまま、リクは続ける。

「千歳様が先に生まれてきたら常磐の立場であったのは千歳様。そうであればきっとともと綾峰は繁栄したわ。千歳様は常磐などとは比べ物にならないほどに素晴らしい御方。それに気づけなかつた綾峰はとても愚か」

「愚か、愚かつて……その家に雇われてたんだしょ？ あんたは」
キヤツチボールもままならない会話に苛立つて私は一歩踏み出して敵愾心も剥き出しに言つた。

そこでリクの底なしの闇のよつた瞳が私を映した。

「そうよ。この愚かな家から千歳様を守るために」

闇に染み入るような声がそう告げる。

「お前は千歳達の父親によつて雇われたつて聞いた」

鷹櫻の言葉にもリクは淀みなく答える。

「そつ。私は呪術師で薬師。依頼を受け、達成したら綾峰を去るつもりだつた。……けど、私は綾峰家で見つけたの。私が生まれてきた理由。生きる理由。呪術を学んできた理由を」

「それが、千歳か」

絞り出すような鷹櫻の言葉に、リクは綺麗過ぎるほどに綺麗な笑みを浮かべた。

「そう。私の千歳様。私の顔の火傷すら厭わない、美しくてお優しい御方。この世の何より尊い御方。この人に会えた。この方に出会いのために、この方の災いとなるものを全て取り除くために私は生まられて來たの」

夢見るよう、うつとりとした表情でリクは言つ。

「……くだらねえ」

低く唸るように鷹櫻は呟いた。その表情は険しい。

「それはてめえの妄想だ。夢見がちなんて言葉で済ませられると思うなよ。お前が今までしてきた事の重さはそんなものじや済まない」

今までで一番強い口調で声音でそう言へ。

まるで断罪者のように。

リクの柳眉がひそめられる。

「貴方の言つていることの意味がわからないわ

「わかつてもらおうなんて思つてないから安心しむ。さつき結恵も言つたけどな、お前のソレはただの独りよがり、自己満足だ。千歳を理由にして、お前は自分に降りかかる責任から逃げているだけだ。人を殺したこと、全て千歳のためだと言つてその責任を千歳に押しつけているだけだ」

「千歳様に負うべき責なんてないもの。千歳様の前には誰の命も塵芥あくたも同然。あつてもなくとも変わらない物。そんな物を駆除するのに責任もないでしょ？」

……一体私は彼女に何を言おつとしていたんだろう。

どこまでもまっすぐに、どこまでも深い闇にあるその田を見て、私は何を伝えようとしていたんだろう。

伝える？

そんなこと不可能だ。

私からリクには何も伝わらない。生きている時間の流れ、思考の存在する場所……そんなものが全く違つ。

彼女とはどう足搔いても相容れない。理解し合う事など出来ない。私の中でどれだけ大事な人間だろうと、それと比較して他人の命を無価値なものとして扱う事は出来ない。『誰かのため』と銘打つても、私には人は殺せない。出来たとしてもきっと罪悪感で自分が死ぬ。

私とりクはまるで違う場所を歩いていて、それは永遠に平行線を辿るんだ。

それくらい私達は違う。

一向にまともな会話が成り立たず、さすがに鷹観にも苛立ちが見え始める。

それはリクも同様のようだった。私の態度といい、当たりでもな

い鷹櫻の物言い、そんな状況を気に入るわけもないのだろうが。

とにかく今はこの状況を何とかしなければ。

ちらりと千歳に見ると、俯いたまま全く動かない。

千歳にとつてリクははずつと信頼してきた相手だ。その相手の本性を知つたら、さしもの千歳とてシヨックは大きいのだろう。

「……とにかく！ 私は『当たり』！ ここで宣言する。綾峰結恵は当たりの血。この家にとつてなくてはならない血！」

腹の底からの言葉にも、リクはさしたる関心も向けない。

「さつきも聞いたわ。貴女は本家の者ね？」

「そうだけど」

何だか不快な言い方だ。

リクは不愉快そうに眉をひそめ、白い袖で口元を覆つた。

「愚かな常磐の血の子供。……それに本家といふことは、桂子の娘の子かしら？ それともその子供？ あのふしだらな娘の血の者なんて、ろくでもないわ。当たりでなければ千歳様の視界になど入れさせないのに」

吐き捨てるような言葉に、頭に血が昇る。

「あんた、おばあ様を侮辱する気？」

「おばあ様……誰のこと？」

リクは軽く首を傾げた。

「綾峰の当主、桂子おばあ様。私の実の大叔母様のことよ！」

「大叔母？ 貴女、桂子の孫ではないの？」

「私は綾峰義将の孫。桂子おばあ様の兄にあたる人の孫よ！」

リクの目が一瞬見開かれたかと思うと、それは酷く険しいものへと変わった。

「義将の、孫。……千歳様を見捨てた男の孫。何故そんな輩がここにいるの？ 一度は千歳様を見捨てたくせに、厚かましい」

まるで呪いの言葉のように、低く違うような声。リクがどれほど祖父を恨んでいるか嫌と言つ程に思い知らされるような重い声。

「常磐の血を引く、身勝手なあの忌々しい子供の孫。何故貴女など

が」

憎悪に満ちた黒々とした瞳に射竦められる。本能的な恐怖を煽る
彼女に、思わず退き身震いしている自分がいた。

鷹櫻ですら強く睨みつけながらもそれ以上は動けないでいる。

リクは人間の本能に訴えかけてくる恐怖そのものよう。

それがその狂気故か、それとも生れついてのものかは知らない。

……そう。そんなことはどうでもいいんだ。

問題は、どうするか。

千歳の呪いを解くなんて言つておいて、一秒先にどうしたらい
のかすら分からぬ。

(考えたつてどうにもならなそうな状況が、更に悪化してるじゃな
い)

鷹櫻なら何か……一瞬そう思つて首を振る。

いつまで人に頼つてばかりいるつもりだ。綾峰に来る前、一人で
生きていけるようになるために、その力を得るためにこの家に来よ
うと決めたのに。なのにこの期に及んでまだ人任せにするのか、私
は。

リクなり常磐なりに会いさえすれば何とでもなると思つてた。
だがその常磐はいない。

リクひとりを前にして、逆にその不可能性を認識させられた。

……こんなんじや、千歳の呪いを解くなんて出来ないじゃないか。

「リク」

静かな、夜の海のように静かな声がその名前を呼んだ。

その声の主はずつと黙っていた千歳だつた。こんなにも静かな声
を発する千歳は見たことがない。静かすぎて怖いほどに、静かな彼
は。

黒い純粹

千歳は顔を上げてリクをまっすぐに見下ろした。

「どうされましたか？ 千歳様」

リクは別人のように穏やかな声で聞き返した。さつきまでのやり取りなどなかつたかのよつた豹変ぶりに呆れるよりも怖さが立つ。猫を被るとかそういうレベルじゃない。

多分私と鷹榎は、本当の意味ではリクの視界に入つていらないんだ。ただ成行きを見ているしかできない私の前で千歳は無表情に、まるで台本を読み上げるよつた調子で言つた。

「答えてくれ……リクは、里久も殺したのか？ 毒を飲ませて殺したのか？」

リクは落ち着いた笑顔でその言葉を聞いた。

問い合わせられた本人よりも、私と鷹榎のほうが動搖したくらいだ。

「随分率直に言つたな」

ぽつりと鷹榎が漏らし、私も無言でそれに同意する。リクにとつて絶対的存在である千歳に罪を暴かれる。それはただでさえ先の見えない今後をどう変えるのだろう。

千歳なら既に分かっているのだろうか？ 先見をして、今後どうなるかを既に知つているのだろうか？

冷たい緊張感が室内に張りつめる。

リクの大きな瞳がゆっくりと瞬いた。そして開かれた瞳はやはり千歳だけを映している。千歳以外の何も映していない。

そしてその小さな赤い唇が開かれる。

「はい。千歳様の仰るとおりです」

軽やかな鈴のような声で、柔らかに開いた花のよつた笑顔でリクはそう答えた。

言葉が出ない。

足元から崩れおちそうになるのを何とか堪える。

怖い。

今、心から思う。リクの内が怖い。もう何が正しいのか分からな
いほどに歪みきつた彼女が、怖い。

喉が異様に乾いて、思考が止まつたまま動かない。

「……んで」

そうして無意識に言葉を紡いでいた。

「何で」

そんな疑問がリクの耳に届くのかも疑わしい。だけど聞かずには
いられなかつた。

「何で、千歳の大事な人を殺したの……？」

それに対しリクの答えは簡潔なものだつた。

少しだけ首を傾けて、柔らかな笑顔で私を見て答えた。

「だつて彼女は千歳様に相応しくなかつたのよ」

思わず息を呑む。

「ふさわし、くなかつたつて……そん、なの……」

声が震え、その震えは全身にまで及ぶ。床に崩れかけたところを
鷹観が支えてくれたが、まだ震えは止まらない。肩を支えてくれる
鷹観も信じられないという顔をしていた。

それすら見えていいかのように、リクは慈悲深い聖女のような
笑みで続けた。

「見目も平凡、何に抜きん出たわけでもない凡庸きわまりない女。
千歳様の素晴らしいさを一も理解できない無知でうるさく騒ぐしかで
きない女……そんな女が、千歳様にふさわしいわけないでしょ？」

千歳から五百年前の話を聞かされた時、里久とリクは仲が良かつ
たのだと感じた。

千歳もそれを好ましく思つていたのだと感じた。

幸せな時だつた、と千歳は話してくれた。

その真実が、これ。

やりきれない。色々なものが零れおちていくような錯覚に陥る。
もう何もかもが嫌になる。

「何故泣くの？」

リクは笑顔のまま私に尋ねた。

「……っ」

リクの言葉には答えず、私は俯いた。

目からは勝手に涙が溢れ頬を伝い落ちていく。ぐちやぐちやになつた感情に全身を支配されて、言葉が出ない。

ただ、嫌だ。

胸が痛くて、息が詰まつて、悲しいのか何なのか自分でもわからぬ。ぽたぽたと涙が床に落ちるのを見ているしか出来ない。

肩を抱いてくれている鷹櫻の両手に力がこもる。

けどお互ひ、何も言えない。何も出来ない。

「結恵」

静かで優しい声に、涙でぐちやぐちやになつてゐるであろう顔を上げた。

千歳は笑っていた。

少しだけ泣きそうに、けれどとも優しく笑っていた。

「ありがとな、結恵。泣いてくれて」

そんなことを言われて反射的に首を横に振る。お礼を言われるようなことなんてない。何もできずにみつともなく泣いているだけなのに。

「鷹櫻もありがとな。お前は昔からマジで怒ると無言になるんだよ

な

「……うるせえな。氣色悪いよ、お前のそんな殊勝な態度

鷹櫻は顔を歪ませてそっぽを向いた。

そんな様子を優しく笑いながら見ていた千歳の顔から一切の表情感情が消えたのは、本当に一瞬のことだった。

全ては一瞬のこと。

まるで時が止まったように。

千歳の両手がリクの細い首にかけられたのも、リクが驚愕の表情を浮かべたままベッドに倒れ込んだのも。

憎悪も何もない千歳の綺麗に整つた、今は無機質なばかりの造形が一切の揺らぎなくリクの首を締めるのを、私達は息を呑む間もなく見ていた。

それは整つた二つの造形が、舞台上で何かを演じてゐるよつで。私達はその場に縛り付けられたかのように、ただ目で追つしか出来ず。目の前で何が起こつているのかも理解できないままに。苦しげに吐き出されたリクの声に、よつやく目の前の出来事を理解させられた。締め上げる両手の意味を、やつと理解した。

「千歳っ！」

悲鳴とも怒声ともつかない声を上げて、鷹槻とほぼ同時に千歳の元へと走つた。

だけど千歳はベッドに仰向けに倒れ込んだリクの首を締める手を離そとはしない。必死にその手を引き剥がそうとするが、どこにこんな力があるのかといつほどに千歳の腕はびくともしない。

リクは抵抗しようとしているのか、迷つているのか千歳の両腕のあたりに手をさまよわせてくる。けれどその口からは苦しげな声があたりに聞こえてくる。

「やめてっ、やめて千歳！－！」

「バカやつてんじゃねえよ！－！」

鷹槻が叫び、千歳の頬をリクから引き剥がすように殴りつけた。

その瞬間、リクの首は千歳の手から解放され、千歳は殴られた衝撃でよろめいたまま鷹槻に両肩を掴まれていた。

「何やつてんだよ！　てめえは！－！」

「ゴホゴホと苦しそうにリクが咳き込んでる。その白い首には千歳の手の痕がうつすらと残つていた。それがつい先ほどの千歳の行動は本気だったのだと思い知らせ、薄ら寒いものを感じると共に、また涙が溢ってきた。

……何でこんなことになつたんだろう？

呪い？

誰が？

何が？

「……鷹櫻。邪魔をするな」

「ふざけんなつ！　お前、自分が何しようとしたのか分かつてのかよ！？」

鷹櫻の怒声に顔を上げた千歳の顔からはすっかり生気が抜けたようで、まるで知らない人のようだつた。

「呪いは俺から始まつた」

千歳が小さく言つた。

「俺がいたことで、この家は歪んだ道を辿ることになつた。……俺が、リクを狂わせた」

千歳はゆつくりとその田線をベッドの上で呆然としているリクに向けた。哀れみでも憎しみでもない、けれど見ていて酷く胸が痛くなるような目でリクを見て言つた。

「本当は考えたことはあつたんだ。もしかしたら常磐も、それにうちから不自然に死んでいった人間達も……唐突なまでに老いていつた里久の死も、リクが何かしら関わっているんじゃないかなって」感情の抜け切つたような声がそう告げる。

「けど俺はそれを確かめなかつた。リクの中の何かが狂い出したことにも気付くことなく。そして里久も常磐も死んでいった。俺が何もしなかつたから。俺のせいであいつらは死んでいった」

「……そ、それは千歳のせいじゃない！」

「俺のせいだよ」

千歳は私を見ずに言つた。

「リクも俺がいたことで狂い出した。いつからかは知らないけれど、でも俺がいたからこんな風になつてしまつて多くの人間が死んで行つて、そして綾峰は歪んだ。……この家の呪いの始まりには確かに俺がいるんだ」

自分に言い聞かせるように千歳は咳き、肩に置かれた鷹櫻の手を外した。そして僅かに声を低くした。

「本当はもつと早く、何とかしなきゃいけなかつたんだ」

「……何とかつてのは、この女を殺す」とか?」「

鷹榎は外された手で千歳の腕を押さえつけるように掴んだ。

千歳はやんわりと、今にも壊れそうな微笑みを浮かべて言った。

「リクも俺も。本当はこの時代に存在しちゃいけないだろ? 歪みは正さなきやな。それが呪いの原因になつた俺のやるべきことだと思つし」

何となく、その言葉の意味を察した。

「……それは、リクを殺して自分も死ぬ、みたいに聞こえる」

千歳は私を見て、本当に本当に綺麗な笑みを浮かべた。声を上げて泣きたくなるくらいに。このまま消えてなくなつてしまつんじゃないかといつぶらに。

「結恵は優しくて聰い」

柔らかな声がそう言ひ。

「俺の自慢の子供

嫌だ。

やめて。

「鷹榎も、器用なのに不器用で、でも優しい人間に育つた」

そしてふつと笑う。

「歪みの元が消える」とで、お前たちが少しでも優しい時間を過ごせるように祈るよ

「やめて……やだ。遺言みたいなこと、言わないでよ」

震える口から何とか言葉を絞り出す。

鷹榎も一層厳しい表情で千歳を睨んだ。

「全くだ。変なこと言つなよ、クソジジイ。お前までどうかしたのかよ! ? この女を殺して自分も死ぬだなんてふざけたこと言つてんじやねえよ! ! !

耳が痛いほど声で鷹榎は怒鳴り、千歳の胸倉を掴み上げた。

「そんな真似、絶対させねえからな! 」

怒りで熱くなっている鷹榎とは対照的に、千歳は残酷なほど静かに落ち着き払つていた。

「俺がいたからリクは『俺のために』ってこれだけのことをしてきてた」

「そんなのはその女が勝手にしたことだ。お前には一切関係ねえ」
きつぱりと言い切る鷹櫻に、千歳は首を横に振った。

「それでも俺はリクかもしれないってことを疑いはしたんだ。疑える土台があつたのにそれを怠つた。その結果がこれだ。俺は自分が気付かないふりをしたことで里久が死んだって考えたくなかつた……だから今まで考えないようにしてきた。けど、その勝手でこんなにも長い間この家は呪われてきた。歪んだ家にしてしまつた」

「疑わしきは罰せずとか言うだろ。……里久についてはある種の事故だ。全部てめえでかぶろうとするな。この家の連中が歪んでるのだつてお前のせいじゃない。勝手にお前を生き神だと祀り上げて、勝手に歪んでいつたんだ。お前は悪くねえ！」

千歳の胸倉を強く掴んで鷹櫻は俯いてしまつた。

「悪くなんかねえ……だから、頼むからそんなこと言つなよ……」

千歳は微苦笑して鷹櫻の背をあやすように軽く叩いた。

そして顔を上げた千歳と私の目が合つた。けれどどんな顔をしていいのかわからなくて、思わず目を逸らしてしまつ。どうしていいのかわからない。

まだまだこの家のことわかつてない私には、千歳のことを全部否定することが出来ない。
けど千歳にそんなことをしてほしくない。

それをどうしたらうまく伝えられる?
どうしたら千歳を止められる?

そんな埒の明かないことを考えた時だった。擦れた声が割つて入つた。

「……千歳、様」

そこにはベッドの上で首元を押さえながら苦しげに荒い呼吸を繰り返し、赤く潤んだ瞳で千歳を見上げるリクの姿があつた。

「千歳様は私の死を、お望みですか?」

千歳は答えない。

それでも構わずにリクは続ける。

「貴方の望みを全て叶えて差し上げる……それがあの日、貴方様に初めて出会った日。私を不快だと思わないと言つて下さった日から、それだけが私の望み。生き甲斐」

彼女の狂気を目の当たりにしたばかりだといつのに、そう言つて儂げに笑うリクが綺麗だと思った。

黒い無垢。

きつと彼女は無垢すぎでこいつなつた。

誰が悪い、何が悪いとか、もつ思えなくなつていた。

思うのは、どうしてこんなことになつたのかという痛みを伴う疑問。

多分リクは本当に千歳が好きで。その方向はねじれてしまつたけれど、本当にただ純粹に千歳が好きだったんだ。

千歳は……里久さんが好きだった。

その子供達が大事だった。

二人それぞれ、ただ大切なものを想つていだけのはずなのに。想う事は悪いことなんかじゃないはずなのに、どうしてこんな風になつてしまうんだろう？

「……おい」

鷹櫻が低く、私だけに聞こえるくらい小さく言つた。

「ほだされるなよ。どんな経緯だろうと、物を言つるのは全て結果なんだからな」

まるで私の迷いを全て見透かしたようにそう言つ。

「どんな理由があれ、この女がしてきたことは許されることはじゃねえんだ」

「わかってる。わかってるけど……！」

リクがこれまでどれだけの人間を葬ってきたのかは知らない。それがどんな人達だったのかも知れない。

けど、リクがこの五百年に人の命を奪つてきたのは確かなんだ

。

「千歳様」

リクは薄らと笑みを浮かべて千歳を見上げる。

「貴方が望むのなら、私は喜んで死にましょ！」

「……おいつ、舌噛ませるな！！」

鷹榎がリクへ手を伸ばそうとした時、千歳の腕がそれを制止した。

「最後の責任くらいは俺も果たすよ」

「千歳……お前、何言ってやがる」

身動きすることすら忘れた私と鷹榎の前で、千歳はまたリクの首へと手を伸ばした。

「『めんな

千歳のそれが誰に向けた、何への言葉なのかはわからない。けどその時、私の中で何かが切れた。

「いい加減にしろっ！！」

真っ赤になつた頭で、喉が痛むほどに叫ぶ。ビリビリと空気を震わすほどの声に、鷹櫻も、千歳もリクも、自分すら驚いた。

怒声の余韻がまだ残る中、私はまっすぐに千歳に向つて歩いて行つた。そして驚いて顔を上げた千歳とまっすぐに対峙する。

「……結恵？」

驚いたような声音が何だか妙に癪に障つた。

その苛立ちのままに、私はさつき鷹櫻がしたように千歳の頬を引つ叩いた。もちろん鷹櫻ほどの威力なんてなくて乾いた音だけがして、千歳は叩かれても呆然と私を見ていたけれど。

「悪かつたから、死んでなかつたことにしてめでたしめでたし、なんて本氣で思つてるの！？ バツカじやない！ 今時そんな辛氣臭いの流行んじゃないんだよ！」

力いっぱい叫んで千歳を指差す。

「て言うか、そんな後味悪い思いさせられてたまるもんか！ 千歳がどう思つてようと私も鷹櫻も千歳が大事なんだよ！だから呪いなんてバカげたものを解いて、それで大団円のハッピーエンドにしたいんだよ！ それをこんな何百年も前に使い古された悲劇みたいな終わらせ方なんて勝手にしないでよー！」

そして千歳の胸倉を掴んだ。

「絶対死なせない！ 千歳もリクも。そんな気分悪い終わらせ方、絶対させない！ 歪んでようが、呪われてようが、正しくなからうが、千歳に人殺しなんかさせない！ これ以上の痛みなんか背負わせない！！」

千歳もリクも、目をまん丸にして私を見ていた。

私以外の誰も口を開こうとしなくて、居心地悪くなつてつい睨むよつに鷹櫻を見た。

「……鷹櫻だつてそう思つでしょ！？ 千歳の呪いとか何とか解くんだつたら、こんな夢見の悪そつな不愉快極まりない終わらせ方なんてさせたくないでしょ！？」

「お、おつ……当然だ」

鷹櫻は氣圧されたように答えたかと思えば、私のすぐ隣まで歩いてきて千歳に言った。

「つづーわけだ。俺だつてそんな後味悪いのは」めんだ。俺らはお前の呪いを解くつて言つただろ。それはこんな後味悪いやり方じゃねえよ。俺だつてお前に人殺しなんてさせねえ。」の女は……ムカつくけど、でも殺させねえ」

鷹櫻は少し顔を赤くして舌打ちしたかと思えば、ベッドに座り込んだリクを見下ろした。

「だからお前も死なせねえ。千歳のために生きるとか言つなら、これ以上千歳に重苦しい思いさせんじゃねえよ。全部千歳に押しつけんじやねえ。自分のしたことくらい自分で責任もつて生きやがれ」リクは迷い子のように頼りない目で千歳を見上げた。

「け、ど……わた、私は……」

「千歳も！」

私はリクの声を遮るようにして、呆然としている千歳の胸倉を引つ張つた。

「もういいじやん。自分の意思を犠牲にして綾峰のために生きるとか……あんたの奥さんが望んだのつてそんなことじやないでしょ？ ただあんたに幸せになつてほしかつただけでしょ？」

そう簡単に長い間胸の底に燻つっていた気持ちが割り切れるとは思わない。頭で分かつていたつてそう簡単に気持ちがついていかないことくらい、私だつて知つている。

だけじ思つ。

里久さんが千歳に望んだように、私も千歳に幸せになつてほしい。
難しいことでも、幸せな時を過ごしてほしいって思う。

「……私があんたの奥さんだったら、今のあんたを見るのは辛いよ。
私はあんたが好きだから、幸せになつてほしい」

まつすぐに見下ろしてくる千歳の視線を受け止めて、一番に思つ
事を言葉にする。

胸倉を掴んだ手はそのままに。

千歳は泣き喚く子供を見るように私を見下ろしていたかと思えば、
急にその手を頭に乗せてきた。

「千歳？」

「ガキの前で、やくでもないことじょうとしたな。俺」
苦笑して千歳は頭を撫でてきた。そして手を引いたかと思つと、
そつと抱き寄せられた。

「ちっ、千歳っ！？」

「ごめんな。俺、どうかしてた。『ごめんな』
厚く着込んだ着物越しに、千歳の体温を感じる。生きてるつて、
伝わってくる。

「バカなこと言つて『ごめん。もう言わない』

優しく抱きしめられながら、その言葉を聞いた。

「ほ、本当に？」

「本当に。大人げなくて『ごめんな』。だから鷹槻もそんなに睨むのや
めてくれよ」

微かな笑いを含んだ声に、私は千歳の胸から顔を上げて鷹槻を見
た。そこには眉根を寄せて撫然とした表情でこちらを睨んでいる鷹
槻の姿があった。

「勝手なことばっか言いやがつて。どこまで手がかかるんだよ、大

馬鹿クソジジイ」

「悪かつた。本当に悪かつた」

千歳は私を離して深く頭を下げた。

それから顔を上げてリクを見やつた。

「リク」

「千歳、様……私は……」

リクの両目からは涙が溢れ、声は哀れなくらい震えている。

「わたくし私は……貴方のために出来る事はないのですか……？ 生きることも死ぬことも、貴方のためには出来ないのですか……？」

カタカタと身を震わせて、呆然とリクは咳く。

千歳は薄く口を開きかけ、一度隙んでから改めて口を開いた。

「リクが……俺を大事に思つてくれるのはありがたい。けど、もういいんだ。リクもリクのためだけに生きていいんだ……多分、お前が里久にしたことは簡単には許せないだらうけど。けどお互にもう、この家に縛られることはない」

「でも私は……これからどうすればいいのですか？ 私は貴方のために生きるしかわからない……貴方に必要とされない私は、どうしたらいいのですか？」

人形のように綺麗な顔が歪んで、止め処なく涙は溢れてくる。「貴方が必要としてくれないのなら、生きてなどいたくない……けれどそれも許されないのなら、私はもう何もない」

「勝手なことを……！」

声を荒げかけた鷹櫻を手で制して、千歳は言った。

「俺もこの家のためつて名目で生きてきたからこれからどうしていいかわからない。もう長いこと屋敷の外へは出でていない。そんな状態で外へ出るのは不安だし、怖い。けど、何もないから新しいことは何だって出来る。そうする。……そのために綾峰の力は存分に使う。長くこの家に忍んでくれたお前にも惜しませない」

そう言つて千歳は軽く目を伏せた。

「もういいだらう。俺もお前も。余生つてやつに漫つても。第一の人生つてやつを生きても」

リクは嗚咽を漏らしながら俯き、それ以上何も言おうとはしなかつた。

否定も反論もせず、ただ泣いていた。

けれど鉛のようだつた空氣は少しだけ軽くなつた気がした。これで一応の決着はついたのだと、私は甘い考へを持っていたから。

重苦しい扉が再び開かれるその瞬間まで。

「我々に何の相談もなく、勝手な事を申されでは困りますね」低い声と幾つもの足音が、再び室内の空氣を重く息苦しいものとした。

室内に入ってきた人々を見た鷹櫻が目を見張る。それから低く低いような声を発した。

「……こんな所まで何しに来たんだよ。二ノ峰、三ノ峰戸主が分家まで連れてぞろぞろと」

挑むように、だけど驚きを隠せないままに鷹櫻は彼らに向かつてそう言つた。

「戸主……つてことは」

鷹櫻の鋭い視線の先にいる一人の人物。

四人いる五十代半ばほどの男性達の先頭に立つ、仕立ての良いスーツに眼鏡の奥の鷹のような鋭い眼光の男性。その顔立ちにはどこか鷹櫻と鷹久、それぞれに通じるところがある。

「……もしかして」

「お初にお目にかかります。結恵様」

その男性が一步進み出て慇懃に礼をした。

「私は二ノ峰家戸主、綾峰義鷹よしたかと申します。愚息共がお世話になつております」

「愚、息……」

と言つことはやはり。

「あんたのお父さん？」

鷹櫻は無言で頷いた。

「義理のだけどな。鷹久にとつては間違ひなく父親だけど、俺にとっては正確には伯父にあたる」

「鷹櫻。千歳様、里玖様、そして本家令嬢の御前だ。口を慎みなさい」

義鷹の一睨みに、鷹櫻は軽く舌打ちして口を閉ざした。

「義鷹に和典か」

千歳はさほど驚いた様子もなく呟いた。

その声に応じるように、義鷹の背後から彼より少し若く少し背は低いが、強い威圧感を持った男性が姿を現す。

「先日はお世話になりました。千歳様」

その声に聞き覚えがある。

千歳の部屋に訪ねてきて私が隠れた時のことだ。確かに人の人も三ノ峰って言っていた。

……そうだ。祖父を歪みと言った人物。

「特に世話なんてしてやつてないし、社交辞令はいいさ。後ろの二人が二ノ峰分家と三ノ峰分家か。顔を合わせるのは初めてだな」

千歳はあくまで軽い調子で口元だけで笑うと、後ろに控えていた二人が深く頭を垂れた。その様子を見ながら千歳はあくまで軽い調子で言う。

「シキタリリクの部屋まで来るのは各家戸主だけで、それも当たりの子の披露日の時だけじゃなかつたか？」

「はい。ですが非常時ですので幾らかの例外は田をお瞑り下さい」

そうして三ノ峰戸主の視線が私に向けられる。

「初めてお目にかかります。三ノ峰戸主、綾峰和典と申します。義将様の直系であらせられる結恵様におかれましては本家にお戻り頂き恐悦至極に存じます」

人の実の祖父のことを逃亡者だの歪みだの言つていたくせに、白々しい……。

思い切りなじつてやりたい衝動に駆られたが、これから綾峰で生きていくならそれは得策じやない。何も知らない顔で、ありきたりに返しておけばいいんだ。

「……綾峰結恵です。初めまして。不慣れなことも多いのでご迷惑をおかけすることも多々あるかと思いますが、今後ともよろしくお願い致します」

一礼して顔を上げると、四人の二ノ峰・三ノ峰の関係者達のガラス玉のような無機質で感情のない視線が不躾なまでに私に注がっていた。

「値踏み」とまではいかないが、ここもじぶん見られては気分のいいものではない。そんなに『逃亡者』の孫が珍しいのかと内心苛立つていると鷹櫻の義父・義鷹が口を開いた。

つていると鷹櫻の義父・義鷹が口を開いた。

「ええ。今後、結恵様には千歳様のお側で過ごされるにあたって不自由ないよう綾峰一族一同、尽力致しますのでござ心配には及びません」

- 1 -

私が声を上げると、鷹樹が一步進み出て囁き(くよ)うな勢いで義鷹に言った。

「……」とだよ。義将じいさんの代わりに「」を纏つける
気か？ ただ孫つてだけでじいさんの身代りになれなんて随分な話
じゃねえの？」

そうだ。まだ私が『当たり』だってことを知っているのは私自身と千歳と鷹櫻、そしてリクだけだ。

確かに私は自分で『当たり』として生きることを選んだけれど、この人達にはまだ知られていなはずだ。

「結婚は『当たり』なのだろう? — けれど義鷹は冷え冷えと鷹机に——

瞬間、私と鷹機、千歳も身を強張らせた。

「監視カメラに盗聴器……そんなことはない。俺の部屋か、それとも

といひの上にないな

「監視力メラつて……」

義鷹も和典も、他の一人もまるで動じない。そして鷹櫻は予想の範疇だつたのか、驚いたのは私だけだ。リクも眉ひとつ動かさない。「内密にしておりました無礼はお許し下さい。ですが、監視カメラ

等を設置しましたのはこの部屋のみ。千歳様のお部屋には最低限のプライバシーを守れるよう取り計らわせて頂いております」

「最低限、か」

千歳は唇を歪めて笑った。

「ま、俺も隠され養われの身で贅沢は言えないか。リクのほうも様子を見なおないと、万一知らないところでリクに何かあつたりしたら大変だもんな?」

おどけた様子で千歳は首を傾げる。

「その通りでござります。これも里玖様の御身の大事を思つてのことで。どうか御容赦を」

リクは色味のない目で義鷹達を見ていたが、状況についていけないのか興味がないのか分からぬが、ただ黙つていた。

「盗撮とは随分いい趣味だな。ご立派な地位の人間が揃いも揃つて『鷹櫻は侮蔑を隠す様子もなく吐き捨てる』ように言う。

「この女の大事? 違うだろ。義将じいさんに逃げられて次こそは確実に『当たり』のガキを逃がさないために見張つてたんだろ。この部屋に来るのは『当たり』の奴だからな」

「鷹櫻。言葉を慎めと言つたはずだ」

「……俺は元当主も現当主も認めた本家の関係者だ。そんな口をきいていいのか。二ノ峰家戸主」

とても義理とはいえ親子の会話とは思えないような口ぶりで鷹櫻は言つた。

その言葉に義鷹は眉をひそめる。

「そう言えば、俺は極力桂子ばあさんに近づくなつてガキの頃から散々言われてたっけか。悪いな。たつた今まで忘れてたから、だいぶ前から桂子ばあさんとは個人的に色々と話してるんだ。その上で俺は先代当主の子として認められている。本家の関係者として」

この家で最大に物を言つるのは本家。

千歳と里玖を庇護し、綾峰の繁栄になくてはならない存在である千歳の身を保証する血筋。

鷹櫻は婿養子である先代当主の子だから正確には本家の血筋とは言えないが、それでも名目上は立派にこの家最大の権力者の一人だ。

義鷹が苦々しげに顔を歪ませると、和典が冷静に割って入った。

「一ノ峰。口論はまたの機会に。今は先にすべき事があるでしょう

「……ああ。その通りだ」

咳払いをし、義鷹は仕切り直すように私を見た。

「お見苦しい所をお見せしましたが、そういう事情もあって我々は既に貴女が綾峰家にとつてなくてはならない御方であると存じ上げております」

ああ、そういうことか。

ちらりとこの部屋唯一の扉を見る。

一ノ峰と三ノ峰の分家だつていう男が一人。強行突破は無理だ。鷹櫻と私、それに千歳も数に入れたとしても、あちらは年はいっているとは言え大の男が四人。

それに強引にこの部屋を抜けたとしても意味はない。

綾峰の当主である大叔母に次ぐ権力者の二人が既にここにいる以上、どうせもうこの敷地から逃げられたとしても、この国……いや、この世界から逃げることはできないだろう。

それを鷹櫻も感じているのだろう。義鷹を強く睨みつけたまま何かを思案するように黙っている。

……逃げる、か。

そつと一度瞼を伏せてから、義鷹と和典を見上げる。

一人の私を見る目は、あくまでこの家に必要な道具。それ以上でもそれ以下でもない。

これが、綾峰の呪い。歪み。

この家は呪われていると言つた律達。

歪ませたと言つた千歳。

一番呪われているのは千歳だと言つた鷹櫻。

その言葉の意味が、今ならよく分かる。

目の前のこの大人達が考えているのは衰えることない綾峰。

そのための犠牲など路傍の石も同然。

命あるものだろうが、意志あるものであつたが、絶対的存在である強い綾峰という家のためならば。

呪いはこの家、この家人間。

「結恵」

静かで深みのある声が私を呼ぶ。

その声のように静かな目をした千歳が私を見て言った。

「逃げていいいんだ。お前は綾峰であつて綾峰じゃない、外から来た義将の孫。お前までこの家に縛られる事はない。歪みに捕らわれることはないんだ」

「千歳様」

千歳を窘めようとする義鷹に、千歳は静かだけれども強い威圧感を持った視線を向けた。

「本家の者はこの家の絶対王、だろ？ それに結恵の意思に反して彼女をこの家に捕えようなんてつまらないことをするのなら、それこそ俺はこの場で舌を噛み切つて死のう」

「義将様の時のような脅しはおやめ下さい」

「五十年前と違つて脅しじゃない。今度は予言だよ」

薄い三日月のように口を弛めて千歳は笑う。

「……そんな予言はいらぬよ、千歳」

私の口からは自分で驚くほど落ち着いた声が出た。もつと震えたり、感情的になつたりすると思つていたのに。だけど今の私は妙に凧いだ心地だ。思ひはもう決まつている。

義鷹たち綾峰の大人達を見つめ、口を開く。

「さつきまでの会話を聞いていたのなら話は早いです。私は『当たり』だから

一瞬、空気が冷たく張り詰める。

「結恵」

千歳の明らかに納得のいっていない声に、私は視線だけを向けて答えた。

「言つたじやん。絶対死なせないつて。千歳の呪いは解くつて
そう言つて笑う。

自分でもわかるほど、可愛げのない笑みで。

「貴方達がお偉方なら丁度いい。この家の方々にお伝えを。綾峰結
恵は『当たり』。この家にとつてなくてはならない人間。綾峰本家
の人間」

「承知致しました。皆喜ぶことでしそう」

うやうやしく義鷹を筆頭として頭を下げてくる。

こうして形だけでもへりくだつてくる相手に、私はさらに追い打ちをかけるんだ。

「それから、いずれ私がこの家の王となつた暁にはこの家の呪いと
やらばぶつ壊してやりますので、何卒ご留意を、と」

「……は？」

驚きに満ちた顔を上げてくる義鷹に、より一層意地悪く笑つて言
う。

「たつた今の言葉の通りです。私はこの家の……と言つか千歳の呪
いを解く気満々です。他でもない、この綾峰家の絶対的な力を以て。
千歳ではないんですけど、予言します」

啞然とした様子で義鷹も和典も、他の大人達も私を凝視してくる。
困惑が伝わってくるが、それでもこの発言を撤回する気なんてない。
どうせこの抜け目なさそうな大人達のことだ。私が素直に家に縛ら
れるなんて思つてもいいだろう。

だつたら先手を打つて、こちらから宣戦布告しておいてやるうじ
やないか。

につこりと、私の得意な『大人受けのいい笑顔』を作つて言ひ。

「そういうわけですので、どうぞよろしくお願ひ致します。綾峰の
歪みの皆々様」

隣で鷹櫻が呆れ混じりに笑みを零し、千歳が疲れたように息を吐
くのを感じながら、もう一度私は大人達へとにつこりと笑つてやつ
た。

夜明け前の暗がりの道を、迷うことなく慣れた様子で一つの影が抜けていく。

「よろしかつたので？　あのよつなことを言つ者を本家に置くなど」

義鷹の後を歩く和典は未だ表情に困惑を残しながら尋ねる。義鷹は振り返らずに答えた。

「……構わないだろう。所詮はまだ子供。いづれはこの『呪い』の重要性が分かるだろう。最早綾峰の呪いの影響は当家だけの問題ではないのだ」

世界的企業と化した綾峰が万が一にも瓦解することがあれば、大規模な経済的混乱は避けられない。

綾峰家が零落することがあつたとして、被害が及ぶのは綾峰一族だけじゃない。傘下の企業、関連企業、今や世界的企業となつた綾峰家が終わることがあれば、世界経済にも大きな影響を与えることは避けられない。

それがどれほどのことか。あの本家の子供はその重みをまだ分かっていない。

まだまだ視野の狭い、経験浅い、世間知らずの子供。

「それに、万が一にも千歳様の呪いが解けたとしても問題はないだろう」

義鷹は足を止め、綾峰家敷地内の外れにある林の奥の崩れかけた小さな木の祠の前で足を止めた。

それは敷地内の人間には綾峰家の氏神を祀つてていると言われる祠だ。

「先人達も、ひとつしか手札を用意せず、五百年もこの家を守ってきたわけではないのだ」

今にも崩れそうな祠の中には格子越しに石碑を覗くことが出来る。

その石碑に崩し文字で書かれている文字は、常磐。

常磐塚と呼ばれる石碑の更に奥に守られるものを知る者は、千歳と里玖の存在を知るものよりもさらに少ない。

千歳と里玖ですら知らない、その存在。

「万が一の際には、起きて頂けばよいだけだ」

その石碑が三百年、守ってきた者に。

「常磐様に」

そこに眠る屍と呼ぶこともためらわれる屍に。

「必要ならば、常磐様にお言葉を賜ればいい」

それがどれだけ人の道から、世の理から外れたことだとしても。

歪んだ形で生き続ける千歳。

歪んだ術で死ながらに生きる常磐。

何がこの家を歪ませたのか。

何が真の歪みなのか。

今となつては誰にも知れない綾峰家の、呪いといふ名の秘密。

綾峰家最奥へと赴いて一週間後に一族への正式な披露目があつた。その席で改めて私は綾峰本家人間として紹介された。

最奥から地上へと帰つて全てを大叔母に報告すると、大叔母は複雑な顔をしたがそれでも私を家族として迎え入れてくれた。

それから今現在、私の数少ない友達と言える律達。

私自身もいまいち把握しきれていないあの夜の出来事をどう話したものかと迷つていると、あの場にいた鷹櫻が「気持ちが落ち着いて、それで話す必要があれば話したい事を話せばいい」と言つてくれたのでそうすることにした。だから年が明けた今も、実はまだ話せていない。あの晩、鷹櫻が千歳の部屋へとやつて来れたのは彼らの協力の元だつたようだから何かあつたのだということは気づいているだろうが、私が話さない以上話すまで待つてくれるらしい。

そして年末年始は両親も一時帰国して綾峰家で過ごした。

何があつたかまでは流石に話せなかつたが綾峰の跡取り候補になつた、と話した時は二人して固まって、とりあえずささやかに反対された。私が一般家庭、一般育ちだと言う事を一番よく知っているは何と言つても両親だから無理もないが。それを絶対に今更退かない！と大騒ぎして、両親も「まあどうせ他の親族が今さら認めないだろう」くらいの意識で認めてくれた。

それでも久々に会つたお父さんとお母さんは、ここに来るまでより私がずっと生き生きしていると喜んでもくれた。確かに以前の私は復讐心にも似た感情ばかりに突き動かされる、今になつて思えば根暗で性格がねじ曲がつていて、両親も心配だつたのだろう。

ちなみにお父さんはもしかしたら『当たり』なんじゃないかと思つたりもしたが、当人にはそんな素振りは全く見られず、私の猫かぶりはこの人から遺伝したに違いないという見事な猫を被つて大富豪邸宅暮らしを満喫していた。根からの庶民派だと自負するお母

さんは委縮しきつっていたが。

それから私に一応友達（薰子や四葉達）が出来たと知るところもとても喜んでくれた。嬉しそうに皆に私をよろしく頬むと頭を下げていたから、本当に私は心配をかけ通しだつたんだなと少しばかり罪悪感を覚えた。

そして三箇日を過ぎた頃に両親は帰国。何かあつたらいつでも連絡しなさい、と言つて大叔母のご厚意でファーストクラスで帰つて行つた。久しぶりに家族に会うとやっぱり私みたいな人間でも別れは寂しくて、少しだけ泣きそうになつた。素直に家族の存在が嬉しい、愛してくれているのだと分かつただけ、少しは私も進歩したのだろうか。

それからは猛勉強の日々。

鷹櫻達と同じエスカレーター式私立高にコネで入れるとは言つても、「ネだからこそプライドこそ大叔母の面子をつぶすような真似出来るわけがないし、いざ入学しても全然授業についていけないようじゃ困る。ただでえ私立と公立じゃ授業の進度も違うというのに、一年以上も学校に行つておらず、内申点はゼロだ。ちょっとやそつとの勉強じや駄目だらう」とそれこそ普通の受験生以上に勉強していた氣がする。

そしてあつといつ間に時は過ぎて入試を終え、それなりの手応えを感じたところで無事に春から鷹櫻達と同じ高校に通うことが決まつた。

「どうか。入学決まつたかあ」

合格を報告して一番、千歳は笑つて喜んでくれた。

「がんばってたもんな。新年に入つてからは全然遊びに来なかつたし退屈だつたんだぞ」

「俺が来てたろうが」

鷹櫻が呆れがちに振る舞われた紅茶にたっぷり砂糖を突っ込んで口にする。

千歳の部屋での優しいひと時。ローテーブルに美味しそうなケーキやスコーン、チョコレート、サンドウイッチなどが夜も遅いといふのに並べられている。

「だつてお前、かわいくなことばつか言ひじやんか」

「千歳が拗ねたように口を尖らせる。

「俺がかわいいこと言つたら不気味だろ？」「

「うん。それはそれですっげー不気味」

千歳は真顔で答えて、それからまた楽しげに声を上げて笑いだした。

あんなことがあった後、千歳との関係はどうなるんだろうって心配もしたけれど、千歳自身は何事もなかつたように接してくれる。鷹櫻もそう。全ては最初に会つた日と変わらないように、楽しくてわけがわからなくて、でも大好きな時間に還つて行く。

「……そうだ！」

アフタヌーンティーの「とくテーブル」っぽいのお菓子を見て思ひ出した。

「今日つてバレンタインじゃない？だからチョコ渡そうと思つてたんだけど、こんなにあるんだつたら邪魔になるかな」「チョコ？」

千歳が目を輝かせる。子供みたいだ。

そんな顔をされると何だか本当にコレを渡していくのが困つてしまつ。

「や。作ったんだけど、ベルギー産でもブランド物でもない、て言つとか私が作つた「」へりありきたりでかつ美味しいかも微妙な…」

…

「けつこう美味かつたぞ」

しぶりもどろな私に、鷹櫻は田の前のサンドウイッチを選びながら言つた。

「え、何だよ。鷹櫻はもうもらつたのか！？」

千歳が軽く不満そうに私を見る。

すると鷹櫻はどうでもよむかうにサンドウイッチから皿を逸らさずに言つた。

「昼間、薰子と四葉と一緒に俺ら全員にくれたんだよ。女同士で交換もしてた揚句、その上俺達はチョコを用意してないのかとか聞いてきやがつた」

「昨今は男性も女性に渡すものでしょ？」

「だからって堂々と『チョコくれ』はないだろ」

鷹櫻は呆れがちに溜め息を吐いた。

「だって鷹久と標葉さんと令はくれたよ。くれなかつたのは鷹櫻と律だけ」

「バレンタインは女がくれる日でいいだろ？が。だいたいあれだろ？ どうせ今日チョコをくれてやつたつて、お前らホワイトデーにも何かよこせとか言つてくる気だろ？」

「当然」

にこおつと笑つと鷹櫻は冗談じゃない、と私から日を逸らしてサンドウイッチを頬張り始めた。

「そつかそつか。じゃあ俺も結恵に何かあげないとな」

千歳はにこにこと笑つと部屋の隅の簡易キッチンに向かつて、しばらくしてカップをふたつ持つて帰つてきた。

「ほら。結恵だけじゃかわいそうだからな。鷹櫻にもくれてやるつ」笑顔で千歳は私達にカップを手渡してきた。カップからは甘い濃厚な香りが。

「ホットチョコ？」

「そ。この間ロイズの通販で買つたんだ。なかなか美味しいぞ？」

にこにこと笑つて千歳は自分の分のカップを取りに行つた。

千歳は何気に通販好きだ。まあこんな地下にずっといるのだから無理もないが。

特に各地の美味しい食べ物が気になるらしく、何かとお取り寄せしては私たちが遊びに来た時に振る舞つてくれる。

「男からのチョコなんて氣色悪い」

「別に無理して飲まなくてもいいぞー」

「もらえるものはもらつとく」

鷹槻は何だかんだ言いながら嬉しそうにカツプに口をつけた。彼も美味しいものが好きだから、よっぽど嫌いな人間からとかでない限り断つたりはしないだろう。

ちなみに学校ではバレンタイン、鷹槻はあちらこちらの女子からチョコを渡そうとされるらしいが、よほど親しい人間以外からはもらわないのが彼の流儀らしいと薫子から聞いた。最初それを聞いた時、私がチョコをあげても突っ返されるのではと思ったが、一応受け取ってくれたのでひと安心した。

さすがに私だつて、それなりに仲良くなつたと思つた相手に突き返されたら傷つくし。

そんなことを考えながら私もホットチョコに口をつけた。

「おいしい」

甘くて美味しくて体が温まる。思わず頬も弛む。

「だろー？」

千歳が嬉しそうな顔で戻つてきて私の前に座つた。

「こんな美味しいものもらつた後にチョコ渡すの悪い気がしてきた

……

「何で？」

「だつて本当にそんな大したものじゃないんだつて。手作りとかしないで買つてくれれば良かつたー！」

一応ここに来てからお世話になりっぱなしなんだから感謝の気持ちをとつたのだけど、舌の肥えてそうな綾峰家の人々相手にとんでもない無謀を働いたかもしれない。そして突つ伏する私に、鷹槻が至極冷静な口調で言つた。

「だからお前のも美味かつたつて

「……お世辞でもありがとう」

「俺がお世辞とか言う出来た人間に見えるか？」

顔を上げると、真顔で鷹槻が偉そうにふんぞり返つていた。本当

に王様め。

「思いません」

よし、と言つよう人に鷹櫻は頷くとカツプ片手に息を吐いた。

「だいたいな。俺達は毎年四葉の作る、こしあんとチョコと味噌をブレンドした恐ろしい食い物といつていいのかも微妙なものを見食してるんだぞ？」

「味噌……」

果たしてそれはチョコに入れていよい物なのだろうか。
こしあんも微妙な氣はするが……。

「あいつは驚異的に料理センスがないんだ」

そう言わると今日チョコをあげた時、とってもいい笑顔の四葉とは対照的に、皆の顔が曇つていったのを思い出す。それでもその場で「食べてねえ」と言つた妙に威圧感ある四葉の笑顔に圧されたのか皆無言でチョコを食べていた。

令の涙は嬉し涙じやなかつたのか。四葉からのチョコ、まだ食べてないのにどうしよ。

「そんなわけだから、とつととの誰からもチョコもりえず、拳句の果てに自分でチョコ貰つてるかわいそつなジジイに早いとこ渡してやれよ」

「お前、本當かわいくないな」

鷹櫻の毒舌に、千歳は乾いた笑いを浮かべる。

そんな一人を眺めながら私は持つてきた紙袋からリボンでラッピングした箱を二つ、ローテーブルの上に置く。

「二つ？」

千歳と鷹櫻が同時に聞いてくる。

「ホワイトチョコと普通のチョコのなの。ちょっと多く出来たからどうかと思つたんだけど。……よかつたら鷹櫻も食べて」

昼間食べさせて、今は軽食を食べていて、その上さらにもチョコを食べろつていうのもどうかと思つんだけど。

鷹櫻はじつと二つの箱を見ていたかと思つて、そのつかのひとつ

の箱を手に取つた。

「どつちがホワイトチョコ?」

「え、そつちだけど」

片方を指さすと鷹櫻はその箱を手に取つた。

「じゃあ俺はこっちもらう。昼間もらつたのにはホワイトチョコなかつたからいいだろ?」

「おい、俺もホワイトチョコも食いたいんだけど」

千歳が鷹櫻に手を伸ばすと、鷹櫻はさつと立ち上がってそれをかわした。無表情に、けどしつかりとチョコの箱を持つて。

「じゃあ俺はそろそろ帰る。ホワイトティーにはちゃんと何かしらくれてやるからありがたく思え?」

「ありがたくつて……何でんたそんなに偉そうなのよ」

私の軽いツッコミをスルーして、鷹櫻は慣れた調子で千歳の部屋の隠し扉の前に立つた。

「じゃあな」

そう言つてさつと鷹櫻は部屋を後にした。まるで風のよう。

「な、何だつたんだろ? 鷹櫻」

何だか今日はいつにも増して変だつた気がする。

すると千歳が笑いながらチョコの包みを開けていた。

「嬉しいんだろうな」

「チョコが? だつて鷹櫻、くれる人いっぱいいるって薫子が言つてたよ」

「嬉しいんだよ」

更に笑つて千歳は言つた。

「バレンタインだから」

「何それ。もうちょっとわかりやすく言つてよ」

「これ以上分かりやすくなつたらあいつがかわいそつだろー?」

「あいつつて鷹櫻? 何で?」

「……不憫だなあ、鷹櫻」

だから何が不憫なんだろ?」

疑問だらけの私を置いて、くつくつと笑いながら千歳は包み紙をとった箱を開けた。

「トリュフ?」

箱の中にはココアパウダーのついた丸いチョコが八個。

「トリュフ……ではないと思つ。前にお母さんに教えてもらつたやつで」

「あ、中がスポンジ」

人の説明を聞かずに千歳はひとつ齧りしたチョコを見てぱあっと顔を輝かせた。

千歳のマイペースは健在だ。

「そう。スポンジケーキをちぎつて丸めてチョコでコーティングして、それでココアをふるつたやつなの」

「へえ。本当に美味しい。初めて食つたー」

にこにこと千歳はひとつめのチョコを食べ終え、既に二個皿に手を付けていた。

「……ケーキ固いけど、平氣?」

スポンジを丸めて入れるのはいいけど、ケーキだった時の柔らかさはチョコに根こそぎ奪われてしまい、けつこう固くなっているのだけど。

「ん、平氣。新触感って言つか美味いよ。マジで。結婚も食つ?」

「んーじゃあひとつ」

「よし。じゃあ口」

「……口つて何?」

千歳はきらきらしい笑顔で私の前にチョコをひとつ差し出した。

「何つて、「あーん」つてやつ?」

その言葉に、顔が一気に沸騰したかのよつて熱くなる。触つてもいないのに、耳まで熱い。

「ななななな何言つてるの!?」

「何つて食わしてやろうつて言つてんじやん。ほら、口」

千歳はどこまでも平然と、でもその笑顔を崩すことなくチョコを

持つたまま言つてくる。

脳みそまで沸騰しているに違いないと思いながら、私が口を開けると千歳はにつこりと笑つて口の中にチョコを放り込んできた。もうぐもぐと必死に口を動かしていると楽しげに聞いてきた。

「俺と鷹楓の言つたとおり、美味しいだろ？」

正直味なんてとてもわからない。わからないけれど必死に首を縦に振った。

千歳はそんな私の様子を見てまた笑いながら新しいチョコを口に入れた。

そんな風に一人で真夜中のお茶会をしながら他愛ない話をしていると、あつという間に時間は過ぎていく。

本当はもう堂々と千歳の部屋に来てもいいのだけど鷹楓は微妙なところからしく、やはり夜こつそり来ることが多いので自然と私も夜に足を運ぶようになっていた。

あの日、リクの部屋へと行つた日以来、千歳はどこか元気がなかつたから鷹楓も私も口には出さなかつたけど千歳が心配で出来るだけ顔を出すようにしていた。

あれからリクはどうなつたか。

リクはまた深い眠りについた。

今度は呪いによる仮死状態でも何でもなく、純粹な眠り。

私が鷹楓の父親たちの前で宣言してしばらく、リクは糸が切れたようになその場に倒れ込んだ。

すぐさま秘密裏に綾峰お抱えの医師が呼ばれちょっとした騒動になりかけたが、ただ眠つているだけだと分かり私と鷹楓、千歳は『もう遅いから』と大人の子供を追い払う常套句でリクの部屋から追い出された。

それからリクはあの部屋でまだ眠つてゐる。一度として目を覚まさないまま深い深い眠りについている。

詳しい原因は現代の医療技術を以てしてもわからなかつたらしいが千歳が言つには、長く自身に呪いをかけ続け、気力体力が削がれ

たからだらうとのことだつた。呪いのことなんて私は何一つ分からないけど、千歳は千歳で大昔から不老になつてから自分なりに色々調べていたらしい。

とにかくリクは現在も綾峰の監視下で昏睡状態だ。
彼女の目が覚めた時どうなるのかなど想像もつかないけれど、少しでも千歳の心が安らかであればいいって思つ。

「はー甘いものって癒されるなー」

香気な笑顔で持ってきたチョコやら元からテーブルの上に置かれていた軽食やらを完食した千歳を見ながら、そう思つ。
その笑顔が唐突に私に向けられる。

「結恵？ 何だよ、ぼーっとして」

「あ、えーと……」

別にぼーっとしてたつもりはないけれど、千歳の目にはそう映つたらしい。

「もしかして眠いのか？ あーもうこんな時間だもんな」
ひとりで納得したように、千歳は地球儀型の時計を見た。
午前四時半。深夜と言うより既に早朝だ。いつの間にそんなに時間が経つてたのか。

チョコのラッピングに思つたより時間がかかつて、ここに来た時間自体がいつもよりも遅かつたんだけれど。実はリボンだと包装紙だと相手にかなり四苦八苦したのは千歳達には秘密だ。
雑誌の特集見て練習していたのに慣れないことはするものじゃない。つぐづく自分は女の子らしいことに向いていないという事実に直面せざるをえなくて何だか軽くへこんだ。やればやるほどぐちやぐちやになつていつたりボンと包装紙を思い出し、知らず溜め息も漏れる。

「結恵ー？ 眠いならもう部屋に戻つたりびつだ？」

千歳が気遣うように言つてくれる。

「いや……眠いわけじゃないんだけどさ」

千歳の気遣いが嬉しい半分、自分の不器用さが情けない半分でま

すます息が重くなる。

「何て言つか、私つて本当に普通の女の子ってカテゴリから外れちやつたよなーと思つて」

すると千歳は目を瞬かせて言つた。

「……何を今さら」

その言葉がやつくり突き刺さる。確かに今さらだけど、今さらだけど……。

普通の女の子は人魚の肉だの呪われた金持ち一族だの、そんなものに自分から足を踏み込んだりはしないだろう。顔のいい同世代の親戚達と初対面から火花散らして協力関係になつたりする十五歳もそうそういうだろ。さらに親世代の学校の先生なんかよりやら威厳溢れる親戚相手に啖呵切つたりもしないだろう。

こうしてひとつひとつ冷静に考えると自分は十五歳女子としてこれでいいのかと軽く疑問が湧いてくる。

「結一恵一？ 何だよ、へこんでる？」

「べーつにー……」

「そんな人生悲観したみたいな顔でそう言われてもなあ

呆れがちに千歳は言つ。それから俯き加減な私の頭に手を置いて撫でてきた。

「『普通』つてのが全国でも全世界平均でも何でもいいけど、それって言うなら没個性的つてことでもあるだろ？ それを望む人間も多いんだろうけど、俺は他人と違つた自分の道を選ぶ人間のが好きだぞ？」

優しい手に嬉しさと安堵を覚え、目頭が熱くなる。

顔を上げられずにいると、小さく笑う気配がした。

「ま、結恵くらいの年は悩むだけ悩め。そのほうが面白い大人になる」

「面白いって」

お笑い芸人じゃないんだから、という気持ちで千歳を見上げる。

すると千歳はにこにこと屈託なく笑っていた。その笑顔を見てい

ると反論する気も失せる。

「……じゃあせいぜい面白い大人になれるように頑張るよ」

「うん。楽しみだなー」

言つて千歳はまた笑う。それからふと、思いついたように言った。

「面白いと言えばさ」

「ん?」

「ずっとここに籠り切りつてのも退屈なんだよな

「? うん」

千歳が何を言おうとしているのかわからず、つい曖昧に返してしまつ。

「最後に屋敷の外に出たのって、義将がガキの頃なんだよ」

祖父が子供の頃。祖父はこの間八十歳で亡くなつたのだから、子供の頃を十歳と考えて……。

「それつて七十年は前つてこと! ?」

「多分それくらいだな。第一次大戦前だつたと思ひつ

軽い調子で言う千歳に言葉を失う。

これはもう箱入り息子とか大事にされてとかそういうレベルじゃない。監禁レベルじやないか。

「よく今まで無理矢理外に出なかつたね! ? 出させてもらえなかつたとは言え」

「んー出せつて言えば出れたんだろうけど、俺自身がけつこうどうでもよかつたんだよな」

急に冷めた声で千歳は言つた。

「何か自分が生きてるつて意識も薄かつたし、あんまり興味なかつたんだよ。自分がどうするとか。だから外に出たいとか、どうしたいとか考えなかつたからさ」

それは私が今まで見てきた千歳からは想像もつかない。私が見た千歳はマイペースで、よく笑つて、楽しいことが好きで、明るい性格で。少なくともあの正式な夜の一件がなければ、信じられなかつたと思う。

奇しくも千歳の別の一面を知ることになった、リクの部屋へ行つた夜がなければ。

「……でも今は……違う?」

恐る恐る尋ねると、千歳はにっこりと笑つた。
「違うからこうして言えるんだよ」

「……」

だからこいつにいることを退屈つて感じるんだりつ。そんなことを考えてみると、千歳が子供のように無邪気な笑みで言つた。
「だからさ、これから少し外に出てその辺歩いて来ようと思つんだ」

「」の日の夜明け

「外に……つて、屋敷の外！？」

「うん、そう」

「ど、どのくらい！？ 少し歩いてつてどのくらい少し！？」

「思いもよらない千歳の言葉に、頭が混乱して言葉がおかしい。けれど混乱しきった私とは対照的に千歳は冷静。

「んーとりあえず冬の朝じゃ寒いし、庭をちょっと歩いてくるくらいだな。回廊歩くくらいしかしないから俺ちゃんとした防寒具持つてないし。冬の空は星が綺麗だよなー。空気が澄んでてさ。あ、でもあれから七十年も経つてたら昔ほど星は見えないかな」

楽しげに千歳はひとりごちる。

「明日は晴れだつて言つてたから、朝焼けは多分見れないよな。あ、結恵知つてるか？ 朝焼けだとその日は雨になるつての。昔はそう言われてな、あとは不吉だとかも……」

私を見た、千歳の言葉が途切れた。

「……どうした？ おもしろい顔になつてゐる」

「その暴言はさておくとして……それつてうるさい大人に知られたらえらい騒ぎになるんじゃないの？」

たとえば鷹槻のお父さんだとか三ノ峰戸主だとか。いかにも頭が堅そうで、綾峰の歪みにはまつてそれを正しいものとして生きる人達が知つたら。

そんな私の心配を打ち払つように、千歳は太陽みたいに明るい笑顔で言つた。

「だから誰にも言わずに。いつも鷹槻が来る隠し通路、あれ使えば直接外に出れるし」

それでも不安が顔から消えない私に、千歳は事もなげに聞いてきた。

「結恵も来るか？」

「え？」

「朝日を拝みに」

そしてにっこりと笑う。

「朝日を見るのは百……何十年振りだっけか。楽しみだなー」

「本当にいくの？ 寒いし見つかったら絶対面倒なことになるし…

…」

「うん。だからいつして結恵も巻き込んで、共犯者になつてもらおうと思つて」

しれつと笑顔でそんなことを言ひてのける。

巻き込んで共犯者……。

いい様に使うと本人を前に明言するかと思ひながらも、それも悪くないと思つている自分がいる。前の私だったら殴つて暴言吐いてそれでおしまいだつただろ、うに、千歳に対してはそれが出来ない。本気で大人を利用しようとしてんじやないとわかつていいというのもあるけど、多分それだけじゃない。

「……コート、私のでよかつたら貸すけど。少し大きめのがあるから

「お。一緒に行くか」

そんな嬉しそうな顔をされるともう何も言えない。

「桂子達にも秘密だぞ？ 誰にも見つかれないようにな。今から俺と結恵は共犯者なんだからな」

共犯者だなんて、少し物騒な響きすら嬉しいと思つてる私は重傷だ。

「……じゃあコート取つてくる」

「おう。頼む。くれぐれも人に見つかるなよー」

「はいはい」

けび千歳はすげ楽しそうで、それだけで今まで樂しくなつてくれる。

笑いたくなつてくる。

ううん、考える前に笑つてる。

。

「「」うちの回廊使うのは久々だなー」

私のロングダウンコートを着た千歳は、遠足に向かつ子供のよつな笑顔で回廊の先を歩く。

私には少し大きめサイズだったおかげで、細身の千歳には難なく着ることが出来た。よかつたと言えばよかつたのだが、ダイエットしたほうがいいのかと考えたり乙女心は複雑だけど。

「いつもは結恵がいつも使ってくるほう……屋敷内に直結した回廊をうろうろしてるんだよな」

「そんなに頻繁に出歩いてたの？」

外から流れてくる冷気から逃れるように、今年買ったばかりのコートに顔をうずめて尋ねる。

千歳は私の前を歩いたまま楽しげに答えた。

「だつてずっと部屋にひきこもつてたら健康によくないだろー？
たまには歩かなきやな。変わり映えはしない回廊でも、季節によつて空気が違つなーとか考えながら歩くのも俺の趣味」

「へえ」

「」、「」、「」、やつぱり千歳は少しばかりお年寄り臭い。

「初めて結恵と会つた日もそうだつたんだよ。鷹楓が来るつて言つてた時間までヒマだつたから、じゃあ歩いてきて時間つぶすか一つて」

「ああ、それあんな所にいたんだ」

「そう、それで結恵に会つて、見かけない奴だし使用人でもなさそうだつたから声かけたらぶん投げられた」

「……スミマセン」

そう言えば投げた。無我夢中で投げ飛ばしたんだつた。こう、心靈現象の類だと思って。

……思い出すだけで顔から火が出そつだ。

「ははっ。あればだいぶ痛かった」

「「」「めんつて」

申し訳ないと恥ずかしいのとで声がどんどん小さくなっていく。
「本つ当にスミマセンでしたー。て言つか、千歳は予知とかできちゃうんだからそれくらい防いでくれればいいのに」
そう口にしてから気付いた。

「そう言えば千歳、あの時私に会つて知らなかつたよね？ 最初のことわからなかつたし」

「うん、わからなかつた」

千歳は顔だけ振り返つてにつこり笑つた。

「何で？ 千歳つて未来のことが分かるんだよね。それくらい分かりそうなものなのに」

「んー前に少し話したけど、俺は予知をある程度コントロールできるんだよな。視たい時に見て、知りたいことを知るつて。だから普段は可能な限り予知はしないようにしてる」

「え、何で？」

純粹な疑問に目が丸くなる。

すると千歳は苦笑した。

「予知つて便利っぽいけどさ、けつこう怖いんだぞ？ 僕と常磐が最初に見た未来は、生まれ育つた村が火に巻かれて人が焼け死ぬ場面。今も目に焼き付いてる」

静かに話しながら、千歳はまた前を向いて歩き始めた。

「そんな光景をいくつも見てるうちに、俺は怖くなつた。ふとした拍子に近い将来現実になる出来事が俺の意志とは無関係にわかってしまうんだ」

それは……とても怖いことなのかもしねない。

嬉しいことだけじゃない。

近い将来起こる避け得ない悲しい出来事、恐ろしい出来事がわかつてしまつということは。

知ることで回避できるのならそれも良かつたと思えるかもしねない。けど、それがどう足搔いても変わらない未来だつたら……。

「だから自然と視ないよう視ないようにしていいって、気付いたら自分の意志で先を知ること知らないことができるようになった。それが逆に常磐を増長させた。綾峰の未来は俺たちの機嫌次第ってね」

千歳は軽く息を吐いた。

そしてほんの少し、後悔を滲ませる聲音で言った。

「まあ俺も似たようなモンだけど。俺達の機嫌を損ねられないのを知つて随分ワガママ通してきたよ」

「おじいちゃんのこととか？」

間髪入れずに口にした言葉に、千歳はもう一度振り返った。少しだけ目を丸くして。

「おじいちゃんがこの家を出れたのは千歳のおかげでしょ」

「んーまあ、少し、は？」

居心地悪そうに千歳は田を逸らし、また前を向いて少し早足で歩き始めた。

私も離されないように歩調を速めてついて行つた。

「ありがとう。おじいちゃんを助けてくれて」

「助けてつて言うか」

「おじいちゃんとおばあちゃん、すごく仲が良かつたんだって。おばあちゃんは私が生まれる前に亡くなつてたから話に聞いただけなんだけど。でもすぐ仲良かつたつてお父さんたちから聞いてる。そのおばあちゃんとおじいちゃんが一緒になれたのは千歳のおかげだから。だからおじいちゃん達の分までありがとう」

「……あいつが幸せに過ぎ」せたのなら……良かつた

微かに笑う気配がして、そして千歳は黙つた。

静かな回廊に一人分の足音。

冷たく切るような冬の空気が頬を撫ぜる。

外が近いんだ。

腕時計を見てみると、日の出時刻が近い。この調子なら夜明けを見れるだろう。

「結恵は」

前を向いたまま、唐突に千歳が口を開いた。

「結恵はいいのか?」

「何が?」

「義将はこの家を出たがっていた。今さらだけど、結恵もこの家に留まること、後悔していないのかと思つて」

前を歩く千歳がどんな顔をしてそう言つているのかはわからない。でも明るい顔で、楽しい気分で聞いてきたんじゃなにってことだけはわかる。

「……私はおじいちゃんの血の繋がった孫だけど、おじいちゃんとは別の人間だよ」

「うん」

「だからおじいちゃんがこの家を出たいって思つてたんだつたとしても、私もそつ思つとは限らない」

「うん」

「実際私は今もまだ、この家を出てやる気なんてさらさらないし。当たりかどつか選べつて言われた時から変わらない。あのまま中途半端に退いたら、今私は絶対にものすしく後悔してた」

「……そっか」

柔らかな声が相槌を打つ。

「そうだよ。それにね、おじいちゃんに言われた。自分で決めたことなら貫き通せって。私の座右の銘なの。だから、貫き通す」力を中心めてそう言つと、千歳は少しだけ振り返つて微笑んだ。

「そっか」

「うん」

強く頷くと、千歳はまた笑つて前を向いた。

冷たい風が前から流れ込んでくる。行き止まりのように立ちはだかつた回廊の終着点でもある壁を前に、千歳は立ち止まって壁に手をかけて押した。すると庭に繋がつて隠し扉が開かれる。今まで以上に冷たくて強い風が吹きこんできた。

そして薄い藍色に染まつた夜明け前の空が、視界に広がる。澄んだ空気が肺いっぱいに満ちる。

「……外」

ぽつりと漏らしたのは私。

そんな声に後押しされたかのように、千歳はゆっくりと右の廊下から芝生の地面へと一步踏み出した。

枯れた芝生を踏みしめて千歳は空を見上げ、大きく息を吐いた。

「変わらないなーこの家の庭は。俺が最後に見た時のまんま！」

振り返つて千歳は歯を見せて笑つた。

「あの外灯とかもそうだし。屋敷の外観も大きくは変わつてないのな」

「明治時代に建てられて以来、出来るだけ外観を損なわないように補修しながらやってきたって聞いてるよ。庭もそうみたい。古い写真を見たら大きくは変わつてなかつたから」

「ふーん。なんか変な感じだな。俺が最後に外に出たのって生物的に言つとけつこうな時間が経つてるはずなのに、ついこの間のことみたいだ」

いつも千歳は基本的に笑顔だけど、今日は特に楽しそうだ。遊園地に来た子供みたい。

「あーせつかくだしこのままコンビニとか行つてみたい！ 一日中空いて何でも売つてるんだろ！？ 人類の進化すごいよな。俺の時はまだ楽市楽座だったのに！」

「え、コンビニって人類の進化？」

それはちょっと違つた気がするが。そして千歳は戦国時代初期の生まれただけあって楽市楽座経験者か。

「あとな、ほらあのデカイ耳のネズミがいる遊園地行きたい！ 上に東京つてつくから東京にあるもんだと最近まで信じてたんだよな。それからー……いつそ京都とか行つて変わつてない物探しとか、でもそれならついでに海外とか」

本当に本当に、楽しそうに嬉しそうにそんなことを言つ。

「俺、飛行機つて乗つたことないんだ。あんなでっかい鉄が空飛ぶなんて理論説明されてもさっぱりだし。結恵は乗つたことがあるか？」

「何回かはあるよ」

「マジで？ どんな感じだつた？」

「最初は耳鳴りしたりするけどあとはフツーだつたよ？ 憩の下に雲が見えてようやく空にいるんだなって思つたくらい」

「へーっ！ いいなあ本当に空飛べるのか！ 不思議だなー空飛ぶつていつたら鳥か妖怪くらいのものなのだったのにな！」

飛行機なんて今を生きる私達からしたら珍しいものでもなんでもない。こんなに目を輝かせて、珍しがつて樂しがるほどるものじゃない。

改めて千歳が遠い昔に生まれて、本当に長いこと隠されて生きてきたんだということを思い知る。

少なくとも屋敷の地下のあの部屋に七十年。きっと屋敷が建てる前から似たような状況ではあつたのだろうけれど。

「……」

小ちく両手を握り締める。

白み始めた空を背にはしゃぐ千歳を見て、今まで何度も何度もした決意を改めて口にする。

「千歳」

「んー？」

空に浮かんだ星を数えていた千歳が振り返る。

「絶対にこの家の呪いなんて全部ぶつ壊すから」

千歳はこの家で最も大切にされている。大切に大切に……そういう名目で綾峰の小さな檻に閉じ込められたままである事は変わらない。綾峰内部の人間ですら未だにほとんどが千歳の存在すら知らないことがそれを示している。

それが先々代当主の取り決めだつたらしい。危険な世になつてきだから、千歳の存在はごく一部の間の者達以外には知らせではないと。出来る限り千歳をこの屋敷から、あの部屋から出さないこ

と。

祖父と大叔母様の父親……私の曾祖父のその言葉は今も生きている。

本人はもうとっくの昔に死んでいるのに他の綾峰の人間にまでその言葉は浸透し、今もそれが法となっている。

娘である大叔母様よりも重く扱われる、近代における綾峰の繁栄に一役買つたという先々代の言葉。

いつまでもいつまでも、千歳を縛る言葉。

「私がひいじいさんの言葉なんて絶対撤回させてやるから！ そうしたらコンビニでも遊園地でも海外旅行でも好きに行くといこう。絶対に近い将来、そうさせるから！」

一族が何も言えないくらいこの家の当主にふさわしくなって、先々代を凌ぐくらいに強くなつて、そうして私が綾峰の王になる。そうしたら今度こそこの家の呪いなんて解けるんだ。

ずつとはしゃいでいた千歳はいつの間にか落ち着いた大人びた笑顔になつていた。

「頼もしいな」

「……もしかして、余計なお世話？」

「この息巻いていても所詮それは私の勝手で、千歳がそれを望んでいるのかはわからない。

けど千歳は笑つて首を横に振つた。

「いや。そうなつたら嬉しいよ。異界帰りでもなく、予言の子でもなく、隠された存在でもなく、ただの人として生きられたらそれはどうでも幸せなことだ。けど」

声のトーンが微かに落とされ、千歳の瞳が幾分鋭くなる。

「この家の呪いはきっとまだ他にもあるから」「……リクのこと？」

「さあ」

千歳はポケットに両手を突っ込んで、肩を竦めた。

「何、どういう意味？ はぐらかさないでちゃんと教えてよ

「俺もわかんないから」

「え？」

自分でも声が刺々しくなるのがわかつた。

鼓動が早まり、冷氣のせいだけじゃなく体温が下がる。

「あの時、義鷹達の引き際が随分あつたりしてたろ？ 結恵が呪いをぶつ壊すって言った時」

「……まあ、そう……なのかな」

千歳は小さく笑いを零して続けた。

「まだ何かあるんだろうな。例えば俺がいなくなつても平氣な保険とか」

「何か、つて何？ 千歳に代わるものなんてないでしょ！？ だからこの家はずつと千歳を閉じ込めて……」

「うん。そーなんだよな。けどさ、この数百年で何度もそういう感じがしたことはあるんだ。俺の代わりになる『何か』を一族は隠し持つてるんじゃないかーっていう感じ」

強い風が高い庭木を揺らし、轟音と共に突き抜けて行つた。

その後に残るのは冷たい空気。

「この家の呪いはひとつ、ふたつじゃないのかもしねない」

「そんな……」

この家は底無し。

以前鷹榎が言つた言葉が蘇る。

もし千歳の言葉が本当だとしたら……だつたら、本当だつたとしてもまた壊せばいい。

「いくつ呪いがあろうと関係ない。この家の呪いという呪いは全部私が跡形もなく壊す！ 千歳が大手を振つて出歩けるように、そんな辛氣臭いものは全部片付けて焼却処理してやる！」

「焼却……」

啞然と千歳は咳く。

私は頷いて、自分にも言い聞かせるように声を張り上げた。

「私は千歳の呪いを解くつて言つたんだから解く！ でもつて、千

歳は幸せすぎて涙が出るまで幸せにしてあげる！」

千歳の目が大きく見開かれた。かと思えばにやりと意地悪げに笑つて私を見てきた。

「それ、プロポーズつてやつ？」

そんな風に冗談めかした言葉を口にした。

途端、顔中に熱が集まつてくるのがわかつた。

「わっ、私は本気で言つてるの！」

人が眞面目に行つているのにこの本来ならギネス記録、」長寿は！

「うんうん。嬉しい話だ。いい子だなあ結恵は」

「子供扱いすんなあつ！」

「してないしてない……あ」

にこにこと頷いていた千歳の視線が上へ向く。

つられるようにして私もそちらへ視線を向けると、いつの間にか

薄い藍色だつた空に光が漏れ始めている。

「夜明けだ」

遠くに見える縁と点在する家々の間から眩しいほどの光が昇り始めている。

「……こんなに、太陽の光つて強かつたか」

千歳はごく薄い藍色から明るい色に変化を始めた空を、夜闇を切り裂くような強い朝日に目を細め、深い感慨を込めた声を出した。

彼が今何を思つているのかは分からぬ。

想像もつかないくらい久しぶりの夜明けを前に、何を感じているのかなんて分からぬ。

けどその横顔がとても綺麗で、とてもとても綺麗で胸が締め付けられた。

「……ねえ千歳」

「んー？」

お互い朝日からは目を離さない。

「私、千歳好きだよ」

空氣に溶けてしまいそうなほど、自分でも不思議なくらい自然に

その言葉は口から出た。

千歳は一度私を見てから、また相好を崩した。

「俺も結恵が好きだよ。大事な大事な俺の子供。おんなんじ血の、大切な子」

そう言つて頭を撫でられた。

「遠い遠い、子孫。我が子も同然の」

そんな意味で言つたんじゃないのに、ものすごくいい笑顔で言つてくれる。

……本当にちゃんと伝わってるのだろうか。私がどういう意味で言つたか。

小さくため息をついて、ただ自棄になつてもう一度口にする。

「大好きだよ」

「うん。俺も」

頭を撫でる手が強くなつて、いい様にあしらわれる子供みたいだ。やつぱり千歳の中では私は子孫で子供か。予想はしていたが悔しいというか、悲しいというか。

そんなことを考えていたから、遠くで轟々と鳴る風の音に紛れた千歳の言葉は聞こえなかつた。

「鷹櫻に恨まれるな」

苦笑混じりに落とされたその言葉は耳に届かない。

「今、何か言つた？」

「んー特に何も？」

胡散臭いまでの笑顔で言われるとそれ以上聞く気も失せる。

「朝日、綺麗だなー。まさかまた太陽挾める日が来るとは思わなかつた！」

「良かつたねえ」

「人間わからないものだなー」

「そうだねえ」

千歳の楽しそうな顔を見ていたら何だか気が抜けてきた。

「時間が動きだしたつて感じだな」

「は。時間？」

あまりに唐突な言葉に、つい眉をひそめる。
けど千歳は気に入った様子もなく笑顔のままだ。

「俺にとつて未来はずーっと同じようなもので興味なんてなかつたけど、外に出たからかな。あー明日はまた違うんだろうなとか、今そんな風に思つてる」

「それは……前向きになつたよつでよかつたよ」「うん」

満面の笑みで千歳は頷いた。それから少し意地悪く笑つて言つ。「だから明日、明後日、一年後は今とは違うかもなつて。もしかしたら鷹櫻と火花散らす日も来るかもしれないし」
その言葉の意味は、まだまだ自分のことで精いっぱいの私には理解できなくて。

「何それ？ 鷹櫻と火花散らすって……ケンカでもする気？」

「ケンカってほど可愛らしいものだといいなー。泥沼になりたくないよな。あいつだって俺の子だもん」

「わけわかんない」

「うん。わからなくていいよ」

「何それ」

千歳のマイペースな喋りつぶりに和むと同時に笑いが零れる。
本当にこの不思議な空氣、嫌いじゃないんだよな。

「そろそろ戻るか。けつこう冷えるな」

「まだ二月だからね。冬真つ只中」

「あーそりや寒いよな」

言いながら千歳は隠し扉を開けて、私の手を取つた。

「じゃあ帰るか」

「うん」

その手を握り返して頷いた。

明日、明後日、一年後、五年後、十年後……先がどうなるかは分からぬ。閉ざされた扉は開かれて、新たな時を刻み始め、少しず

つ、少しずつ変わっていく。

呪われた予言の子も、盤石を誇った絶対王制の家も。

この先がどうなるかなんて知らないし知る気もないけど、出来るなら少しでも楽しくて優しい未来を。

分からぬからこそ、私は祈る。

好きな人達が幸せな時を過ごせるように、少しでも多く笑って過ごせるように。

了

「」の日の夜明け（後書き）

不可侵区域、これにて完結です。ここまでおつきあい下さった読者の方には心からお礼申し上げます。

以前携帯小説として書いたものを気休め程度に手直ししてこちらで公開させていただいたのですが、こちらでも自分で思つていた以上の方に読んでいただけたようで作者冥利につきます。

数年前、少年マンガの打ち切りエンドみたいに「俺達の冒険はこれからだ！」みたいなノリの終わり方をさせたいと何となく思い、絶対的なハッピーエンドではない、今後にまだ何かありそうな雰囲気を残した終わらせ方をしようと不可侵区域を書き始めました。

そんな自分本位で始めた話ではありますが続編をと言つて下さる方もいらして、書けないかとも考えたのですが当時も今現在も私の技量では到底納得のいく終わらせ方はできないと、この曖昧な終わり方で不可侵区域は完結しています。

本編とは関係のない番外編のような短編はいくつか書きましたし、今もこの不可侵区域のキャラクター達には愛着があるのでいずれこちらでも公開させていただくかもしれません。もしその機会がありましたらまたお目にかかりればと思います。

それでは最後にもう一度、読者の方に心からのお礼を。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4031p/>

不可侵区域

2011年9月5日03時13分発行